

こおり もと おお みや
市原市郡本大宮遺跡

1 9 9 1

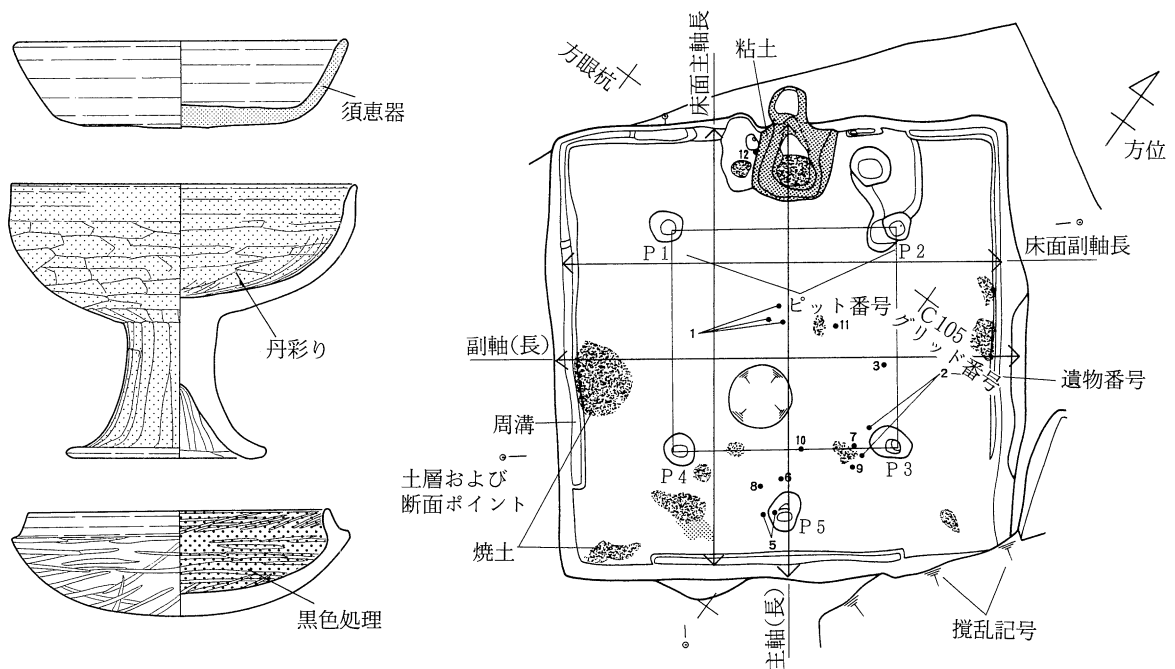
東 横 不 動 産 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市藤井3丁目119-1他の地先に所在する郡本大宮遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、民間事業の宅地開発に伴い実施したものである。
3. 発掘調査は、東横不動産株式会社の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 発掘調査および整理作業は以下のとおり行った。
（遺跡コード セ87） 確認調査 昭和63年10月12日～11月10日
本調査 昭和63年12月1日～平成元年3月31日
整理作業 平成元年4月1日～3年3月31日
5. 本書の原稿執筆は、浅利幸一が行った。
6. 本書に使用した方位は、座標北である。
7. 本書に使用した遺跡位置図（第1図）は、国土地理院発行の1：25,000（五井・蘇我・姉崎・海士有木）を2分の1に縮小したものである。
8. 発掘調査から整理作業の過程で、東横不動産株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の諸機関より、ご協力、ご指導を賜り厚くお礼申し上げます。

凡 例

1. 遺構、遺物の挿図の縮尺は、竪穴住居跡 1/80、掘立柱建物跡 1/80、土壌は 1/30～1/60、土器は 1/3 を基準とし、挿図中に縮尺を示した。
2. 方位は、座標北である。
3. 遺構断面図、水平線上の数字は、海拔高度を示す。
4. 遺構規模は、確認面の規模を示し、主軸長はカマド煙道部の長さを除いている。
5. 竪穴住居跡の主軸方位については、カマド位置を基準としたがカマド位置が不明なもの等については長軸・短軸を明記して方位を示した。
6. 遺構・遺物実測図および規模等については、下図による。



本文目次

序 文

例 言

凡 例

財団法人 市原市文化財センター

第1章 調査にいたる経緯と概要	1
1 調査にいたる経緯	1
2 遺跡の立地と歴史的環境	1
3 調査の概要と結果	6
第2章 遺構と遺物	9
1 竪穴住居跡	9
2 掘立柱遺構	86
3 土師器窯跡	89
4 その他の遺構と遺物	91
第3章 ま と め	96

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(1/50,000) ...	2	第24図 21・22号住居跡と出土遺物	31
第2図 遺跡周辺の地形(1/5,000)	4	第25図 23号住居跡	33
第3図 郡本大宮遺跡・千草山遺跡・ 稲荷台遺跡合成図(1/2,500)	5	第26図 23号住居跡出土遺物	34
第4図 グリットの設定	6	第27図 24号住居跡と出土遺物	35
第5図 遺跡全体図(1/500)	7	第28図 25A・25B号住居跡と出土遺物	36
第6図 1・2A・2B・3・4・ 5A・5B号住居跡	10	第29図 26号住居跡と出土遺物	38
第7図 1・2・3号住居跡と出土遺物	12	第30図 27号住居跡	39
第8図 3号住居跡出土遺物	13	第31図 28号住居跡と出土遺物	39
第9図 4・5A・5B号住居跡出土遺物	14	第32図 29号住居跡と出土遺物	40
第10図 6・7・8号住居跡と出土遺物	15	第33図 30・31号住居跡と出土遺物	42
第11図 9号住居跡	17	第34図 32号住居跡と出土遺物	43
第12図 10号住居跡	17	第35図 33号住居跡と出土遺物	44
第13図 10号住居跡出土遺物	18	第36図 34号住居跡	45
第14図 11号住居跡と出土遺物	19	第37図 34号住居跡出土遺物	46
第15図 12号住居跡	20	第37図 35号住居跡	47
第16図 13号住居跡と出土遺物	21	第39図 36号住居跡と出土遺物	47
第17図 14号住居跡と出土遺物	23	第40図 36号住居跡出土遺物	48
第18図 14号住居跡出土遺物	24	第41図 37・38・39号住居跡と出土遺物	50
第19図 12～20号住居跡	25	第42図 40A・40B号住居跡と出土遺物	52
第20図 15・16・17号住居跡と出土遺物	26	第43図 41号住居跡と出土遺物	52
第21図 18・19号住居跡	27	第44図 42号住居跡と出土遺物	53
第22図 18・19号住居跡出土遺物	28	第45図 43号住居跡と出土遺物	54
第23図 20号住居跡と出土遺物	29	第46図 43号住居跡出土遺物	55
		第47図 44号住居跡	57
		第48図 44号住居跡出土遺物	58

第49図	44号住居跡出土遺物	59	第67図	61号住居跡と出土遺物	77
第50図	45・46号住居跡と出土遺物	60	第68図	62号住居跡と出土遺物	78
第51図	45号住居跡出土遺物	61	第69図	63号住居跡と出土遺物	79
第52図	45号住居跡出土遺物	62	第70図	64号住居跡と出土遺物	80
第53図	46号住居跡出土遺物	63	第71図	65号住居跡と出土遺物	82
第54図	47号住居跡と出土遺物	64	第72図	66号住居跡	82
第55図	48号住居跡	65	第73図	67・68号住居跡と出土遺物	83
第56図	49号住居跡と出土遺物	65	第74図	69号住居跡	84
第57図	50・51号住居跡	67	第75図	70・71・72号住居跡と出土遺物	85
第58図	50・51号住居跡出土遺物	68	第76図	1・2号掘立柱建物跡	87
第59図	52号住居跡	68	第77図	3号掘立柱遺構	88
第60図	53・54・55号住居跡と出土遺物	70	第78図	1号土師窯跡	89
第61図	56号住居跡と出土遺物	71	第79図	2号土師窯跡	90
第62図	57号住居跡と出土遺物	72	第80図	78号遺構	92
第63図	58号住居跡と出土遺物	74	第81図	79・80・81号遺構	93
第64図	59・60・61号住居跡	75	第82図	82・83遺構	94
第65図	59・60号住居跡断面	76	第83図	郡本大宮遺跡Ⅰ～Ⅶ期変遷図	99
第66図	59・60号住居跡出土遺物	77			

表 目 次

第1表	竪穴住居跡一覧表	100	第2表	竪穴住居跡出土遺物観察表	103
-----	----------	-----	-----	--------------	-----

写 真 図 版

図版1	遺跡周辺の航空写真（昭和36年撮影）	図版24	3～40号住居跡と出土遺物
図版2	遺跡遠景航空写真	図版25	41～42号住居跡と出土遺物
図版3	確認調査状況	図版26	43～44号住居跡と出土遺物
図版4	1～3号住居跡と出土遺物	図版27	43号住居跡出土遺物
図版5	3～5号住居跡と出土遺物	図版28	43～44号住居跡と出土遺物
図版6	4～7号住居跡と出土遺物	図版29	44号住居跡出土遺物
図版7	8～9号住居跡と出土遺物	図版30	45～46号住居跡と出土遺物
図版8	10号住居跡と出土遺物	図版31	45号住居跡出土遺物
図版9	11～13号住居跡と出土遺物	図版32	46号住居跡出土遺物
図版10	13～14号住居跡と出土遺物	図版33	47号住居跡と出土遺物
図版11	14～17号住居跡と出土遺物	図版34	48～50号住居跡と出土遺物
図版12	18～19号住居跡と出土遺物	図版35	51号住居跡と出土遺物
図版13	18～20号住居跡と出土遺物	図版36	52～55号住居跡と出土遺物
図版14	20～22号住居跡と出土遺物	図版37	56～57号住居跡と出土遺物
図版15	22号住居跡と出土遺物	図版38	58～59号住居跡と出土遺物
図版16	23～24号住居跡と出土遺物	図版39	60～61号住居跡と出土遺物
図版17	25A～26号住居跡と出土遺物	図版40	62～63号住居跡と出土遺物
図版18	27～29号住居跡と出土遺物	図版41	64～66号住居跡と出土遺物
図版19	30～31号住居跡と出土遺物	図版42	67～71号住居跡と出土遺物
図版20	32～33号住居跡と出土遺物	図版43	1～3号掘立柱遺構
図版21	34～35号住居跡と出土遺物	図版44	1・2号土師器窯跡と出土遺物
図版22	36号住居跡と出土遺物	図版45	78号遺構と出土遺物
図版23	36号住居跡出土遺物	図版46	79～83号遺構

第1章 調査にいたる経緯と概要

1 調査にいたる経緯

市原市藤井地先において東横不動産株式会社の宅地造成が計画されたためそれに先がけて、昭和63年6月1日付けで東横不動産株式会社より、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛てに提出された。これを受けて現地踏査等を行ったところ、昭和63年8月11日付けで千葉県教育委員会教育長より、「古墳時代・奈良～平安時代遺物包蔵地1カ所」の回答がなされた。このことから、東横不動産株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の3者は埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、地区内に所在する埋蔵文化財のうち、造成工事によって影響をおよぼす範囲について記録保存の為発掘調査を実施することとなった。確認調査は昭和63年10月12日～11月10日まで行い、その結果に基づき本調査5,500㎡を同年12月1日から平成元年3月31日に実施した。

2 遺跡の立地と歴史的環境

郡本大宮遺跡は、千葉県市原市藤井3丁目119-1他の小字大宮に所在する。本来ならば藤井大宮遺跡と呼称されるべきところであるが、北西側一帯に隣接して分布する郡本遺跡群の一部と考えられることから、郡本大宮遺跡として調査を実施した。

房総半島の中央を北流して台地に行く手を阻まれ西流して東京湾に注ぐ養老川と嘗の上総と下総のほぼ国境を西流して東京湾に注ぐ村田川とに挟まれた地域の台地は、市原台地とも呼称されている。市原台地は、南北10km、東西8km程の広大な地域で、この地域の中には縄文時代～中近世に至数多くの遺跡が分布している。市原台地の主要遺跡は、最北端の村田川河口一帯を直接望む台地先端部に菊間国造代々の墓とされる菊間新皇塚古墳や菊間東関山古墳等の大形前方後円墳等を主体とする墓域が古墳群として形勢され、西端の養老川河口ならび東京湾を一望する地域には出現期古墳の神門古墳群や上総国分二寺を始めとする国分寺台遺跡群が所在している。郡本大宮遺跡はこの市原台地の西側のやや奥まった台地上に立地し、台地を挟む養老川・村田川の主要二河川の水系には属さず、東京湾に面する海岸平野に直接開く小谷のうちの新田川の支流に属している。

遺跡は、東京湾の旧海岸線より南東方向に直線距離にして約4km東に入った洪積台地上に位置し、東京湾を直接望む台地縁辺部からは、最短距離で約1.2kmを測る。遺跡の位置する台地は、標高26～27m、小谷からの比高差8～13m程を測り、北、東、南を小谷が囲み、西側で北から浅い谷が入り、基部を南西に有する舌状の台地を呈している。

遺跡周辺での本遺跡と同時期の古墳時代後期～終末期ならび奈良から平安時代の市原台地上の主要な遺跡は以下のとおりである。菊間遺跡は、市原台地最北端に位置し、主体は弥生中期の集落跡であるが国分期の住居5軒が調査され(註1)、一枚造りの瓦と共にロクロ土師器等が出土し、瓦は南南西500mに推定される菊間廃寺跡のものと考えられている。村田川中流域に位置する大厩遺跡では、弥生中期から後期の竪穴住居跡75軒、古墳時代の竪穴住居跡15軒のうち12軒が古墳時代後期から終末期の所産と考えられ調査されている(註2)。同じ中流域の村田側の開積した川岸段丘上に位置する潤井戸西山遺跡は、昭和59年に調査され、古墳時代後期から終末期の竪穴住居跡9軒と奈良時代前半の所



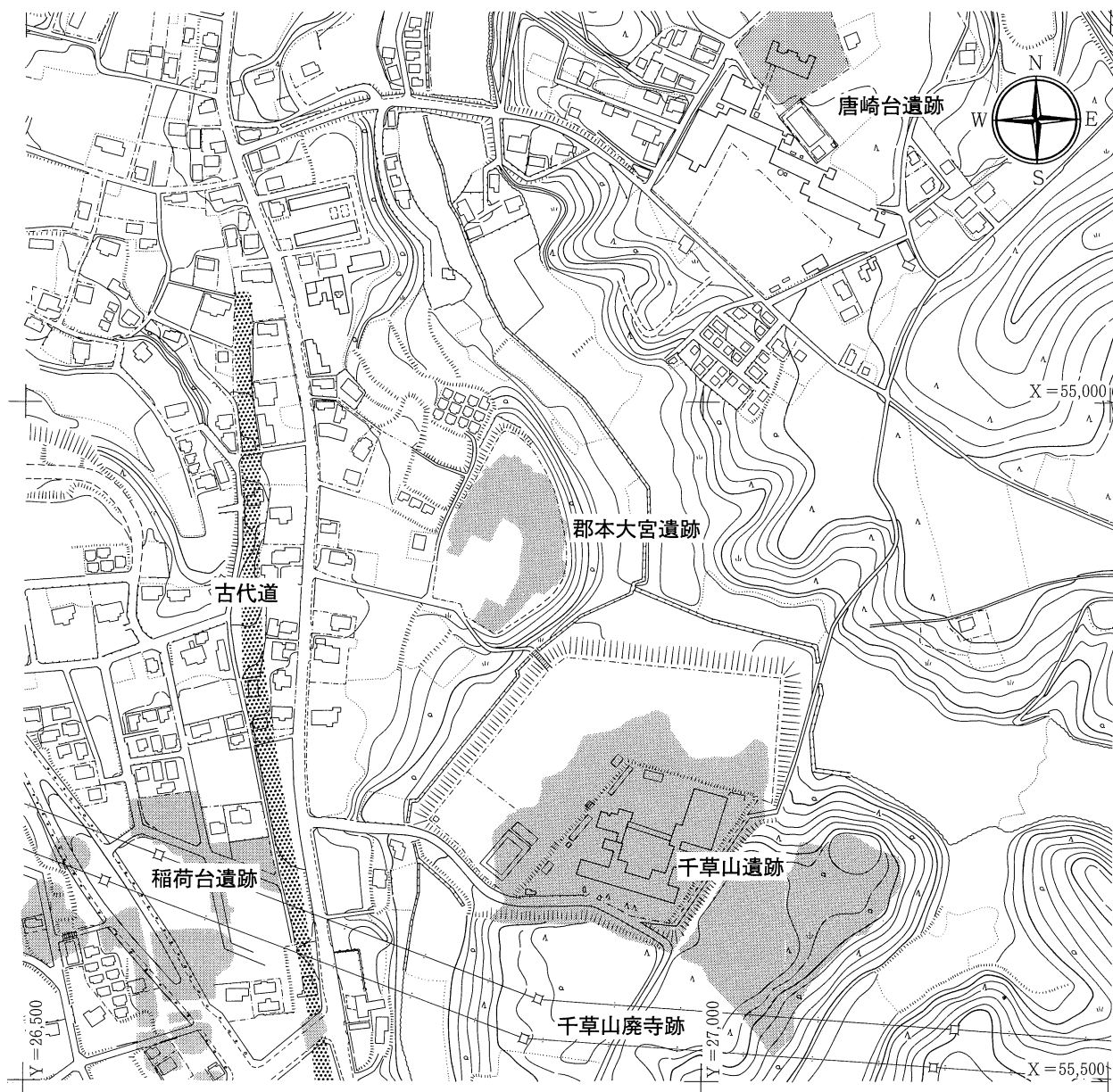
1. 郡本大宮遺跡 2. 菊間遺跡 3. 菊間手永貝塚 4. 大厩遺跡 5. 潤井戸西山遺跡 6. 若宮遺跡
 7. 光善廃寺跡 8. 南大広遺跡 9. 郡本古甲遺跡 10. 郡本遺跡 11. 能満上細工多遺跡 12. 小田部新地遺跡
 13. 千草山遺跡 14. 千草山廃寺跡 15. 山田橋表道遺跡 16. 福増古墳群 17. 山倉古宿古墳群
 18. 福増池ノ谷遺跡 19. 新堀叶台遺跡 20. 武士遺跡 21. 向原台遺跡 22. 加茂遺跡 23. 加茂台遺跡
 24. 根田代遺跡 25. 諏訪台古墳群 26. 山倉古墳群 27. 上総国分寺跡 28. 上総国分尼寺跡 29. 稻荷台遺跡
 30. 五所四反田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

産と考えられる竪穴住居跡1軒と共に掘立柱建物跡1棟・四脚門跡1基・L字形の柵列塀が調査され、官衙的色彩の濃い遺跡であると考えられていた(註3)。しかし、その後の平成2年に市道を挟んだ北西側隣接地の調査で掘立柱建物跡5棟と12軒の古墳時代後期の竪穴住居跡が検出され、当初奈良時代の所産と考えられていた四脚門跡や柵列塀が鬼高期直前から中頃までの五世紀から六世紀前半代の遺構で、周囲を柵列で囲んだ居館跡である可能性が高まっている(註4)。若宮遺跡は市原台地北側の東京湾を見下ろす台地上に立地し、昭和41年に調査が行われている。部分的な調査で遺跡の性格を必ずしも反映するとは思われないが、C地区のトレンチ調査で26軒の竪穴住居跡が調査され、うち1軒が七～八世紀の所産と考えられるものである(註5)。南大広遺跡は、村田川の河口域で枝別れした支流によって形勢された小谷に属し台地の奥に立地する。昭和42年に部分的な調査が実施され、八～九世紀代の竪穴住居跡2軒と共に製鉄跡が調査され、製鉄跡やその周辺から「寺」・「立」の墨書土器が出土し、遺跡が上総国府推定地域に含まれ(註6)重要な意味を持つものと指摘している。また、寺の墨書土器については、上総国分僧寺、尼寺、千草山廃寺を指すものと推論されている(註7)。郡本大宮遺跡は、北側から入り込んだ新田川と金杉川に挟まれた南北2km・東西0.4～0.8kmの細長い台地の南側に位置し、台地上には北から光善寺廃寺・古甲遺跡・郡本遺跡等で構成される郡本遺跡群が所在し、奈良～平安時代の遺跡が数多く分布する地域である。この地域は、上総国府推定地の有力な候補地であると同時に市原郡衙の推定地でもある。また、南東側1kmに所在する能満上細工多遺跡では、道路建設と言う限られた範囲での調査であったが溝と共に門や目隠し塀と推定される複数の掘立柱遺構が検出され、九世紀代を中心とするある種の官衙的な性格を有する遺跡の存在を推定できるものである(註8)。千草山遺跡は、本遺跡の南東側に小谷を挟んで隣接し、第1次昭和50～51年・第2次60年度・第3次61年度の3次におよぶ調査が実施されている。古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡が第1次調査では72軒(註9)、2次調査では52軒(註10)、3次調査は東千草山遺跡として調査が実施されL字状の溝などを検出している。本遺跡の小谷を隔てた南南東に隣接することからその動態には興味深いものがある。山田橋表道遺跡は、幅6mの八世紀代の古代道と九世紀前半の竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡4棟が調査されるものの古墳時代後期から終末期の遺構等は検出されていない(註11)。福増池ノ谷遺跡は、九世紀後半の井戸跡等が調査されている(註12)。

遺跡東側に隣接する国分寺台遺跡群中の古墳時代後期から終末期では、東京湾を一望する台地縁辺に向原台遺跡(註13)、加茂遺跡(註14・15)、台遺跡(註16)等の集落跡が、古墳群では山倉古墳群(註17)、南向原古墳群(註18)、東間部多古墳群(註19)、根田古墳群(註20)、稲荷台古墳群(註21)、西谷古墳群(註22)、向原台古墳群(註23)、諏訪台古墳群(註24～26)がそれぞれ調査されている。集落跡の分布が西側台地縁辺の海岸平野に面し立地するのに対して、古墳群は南側の養老川を見下ろす台地縁辺や台地の奥まった場所にも築かれ、集落跡が台地上では限られた地域に検出されることと対照的である。国分寺台遺跡群外の周辺地域の古墳時代後期から終末期の古墳群としては、南側に山倉古宿古墳群、福増古墳群(註27)が近接して存在する。

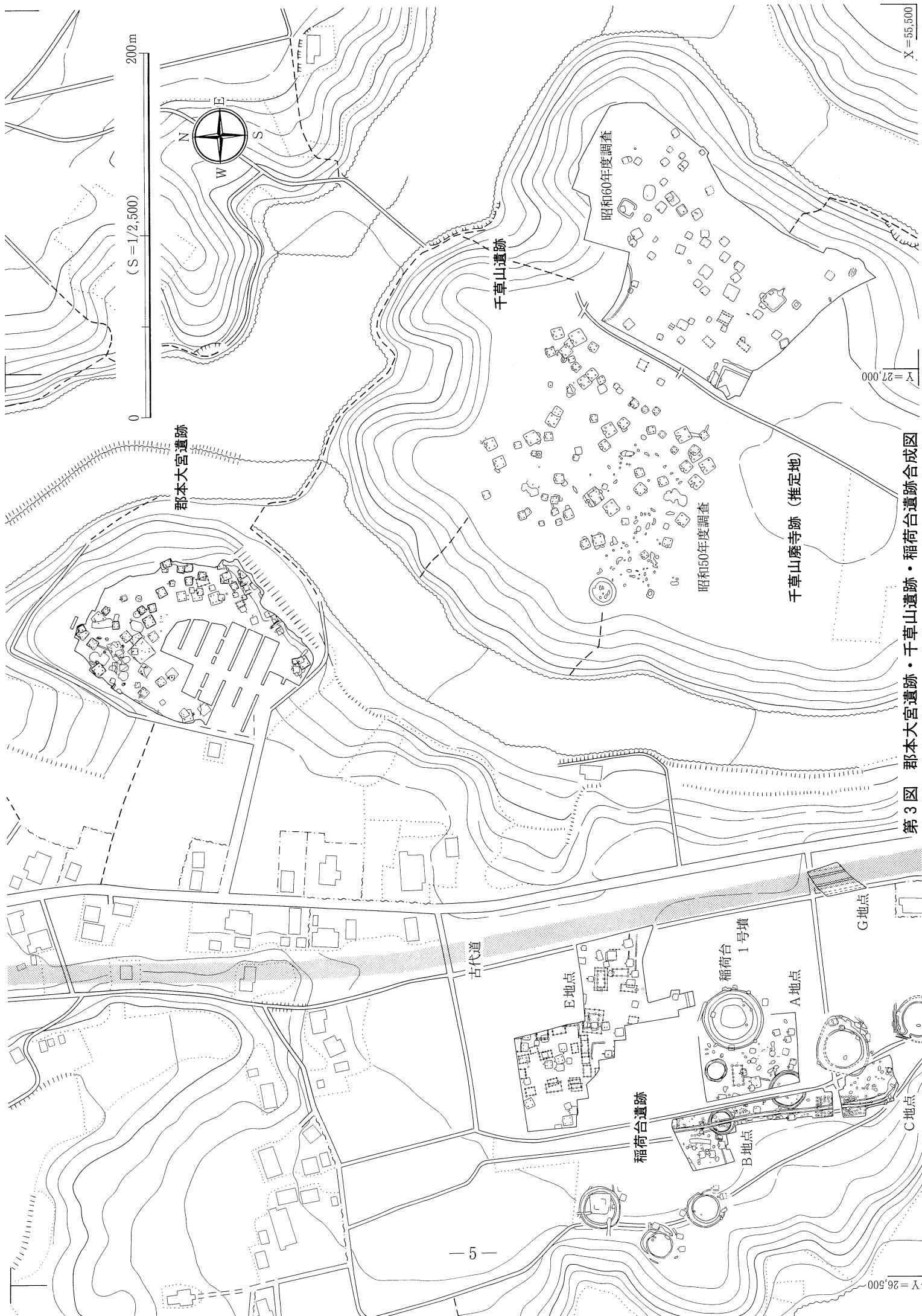
奈良～平安時代では、上総国分僧寺跡、尼寺跡と共に造寺や運営に関連する遺跡が広範囲に調査されている。上総国分僧寺跡は、南北475m、東西250～300mの寺域が確認され、大官大寺に似た伽藍様式と考えられ、寺域北辺部の調査で、僧坊相当の施設が調査されている(註28～33)。上総国分尼寺は、南北372m、東西285m以上の寺域が確認され全国最大規模の寺域を有している。中心伽藍と共に



第2図 遺跡周辺の地形 (S=1/5,000)

北側を中心として付属雑舎などの諸施設の全容が明確にされつつある(註34)。また、尼寺北側には坊作遺跡、僧寺東に荒久遺跡の造寺に関連する集落跡が調査され、神門・南田・祇園原の各瓦窯跡も国分二寺の重要な関連遺跡として重要視されている。西側150mに近接して立地する稲荷台遺跡では、2間×3間の四面廂付掘立柱建物跡やコの字状に配置された掘立柱建物跡群や竪穴住居跡の他、南北方向に延びる古代道、集積遺構、土器集積遺構、獣骨と土器を出土する祭祀遺構等が検出され、出土遺物では3,000片以上におよぶ緑釉陶器や「貞観十七年」銘墨書土器がある。古代の主要官道と思われる古代道の北には市原郡衙推定地の郡本八幡神社周辺や上総国府推定地の古甲遺跡の立地する郡本遺跡群の中心部が所在し、稲荷台遺跡には比較的規模の大きな掘立柱建物跡や多数の緑釉陶器の存在、また国分尼寺跡に近接して立地することから国分寺・国府に関連する官衙的な性格の遺跡であることが指摘できるものである。(註35・36)

郡本大宮遺跡の立地する台地上には、昭和53年まで市原中学校が開校していたが、昭和53年4月に小谷を隔てた南東台地上に新たに新校舎を新設し開校したため、昭和53年廃校となり建物も同年取り



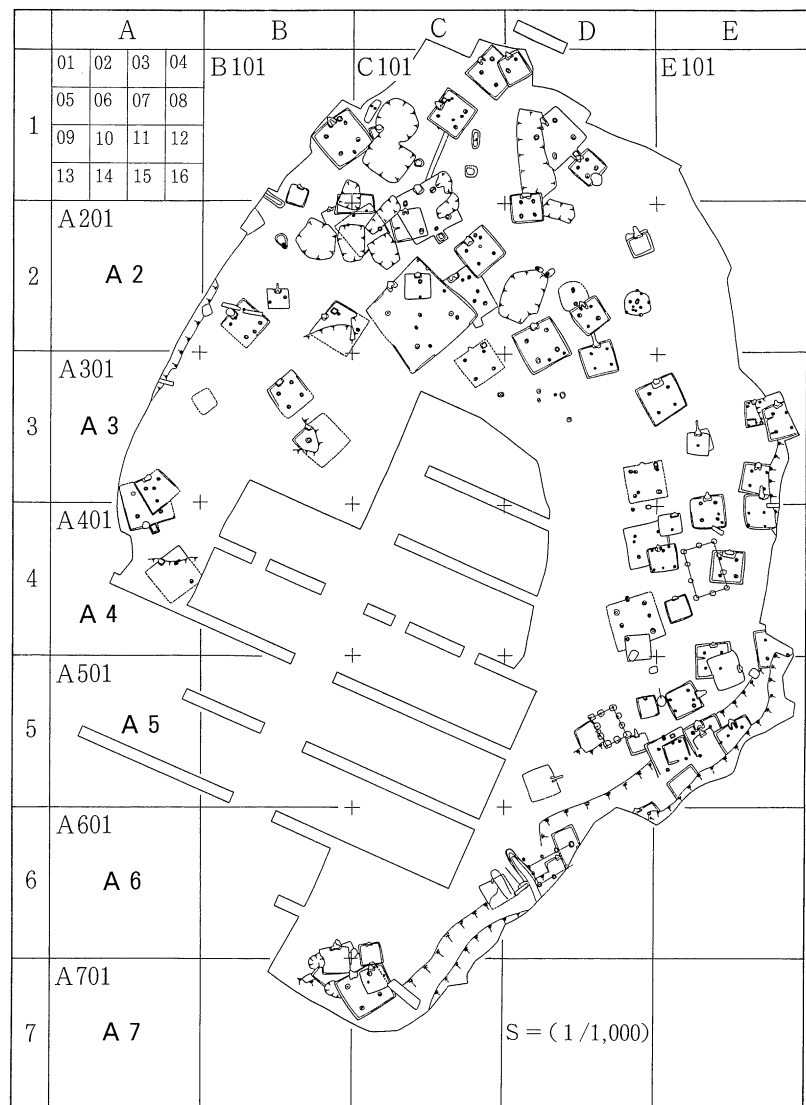
第3図 郡本大宮遺跡・千草山遺跡・千草山廃寺跡・稲荷台遺跡合成図

壊されグラウンドとして使用されていた。この旧校舎建設は昭和23年9月開校することから土地造成工事が行われ中央の高い場所が削平され、この時中央部の遺跡が旧来の地形とともに失われたものであろう。

3. 調査の概要と結果

発掘調査は、造成計画地に限られたものであるが、遺跡範囲は、北側平坦地や東側南斜面、西側南半分に連続するものと考えられる。

台地上は、旧市原中学校校舎の建設時の造成工事により平坦に削平され、南北150m、東西100m、平坦部の面積11,000㎡程であった。確認調査では、このうち宅地造成により影響を受ける9,000㎡を対象に実施した。調査の結果、台地の中央は、既に削平を受け遺構等は失われていたが、東、北、西の台地縁辺



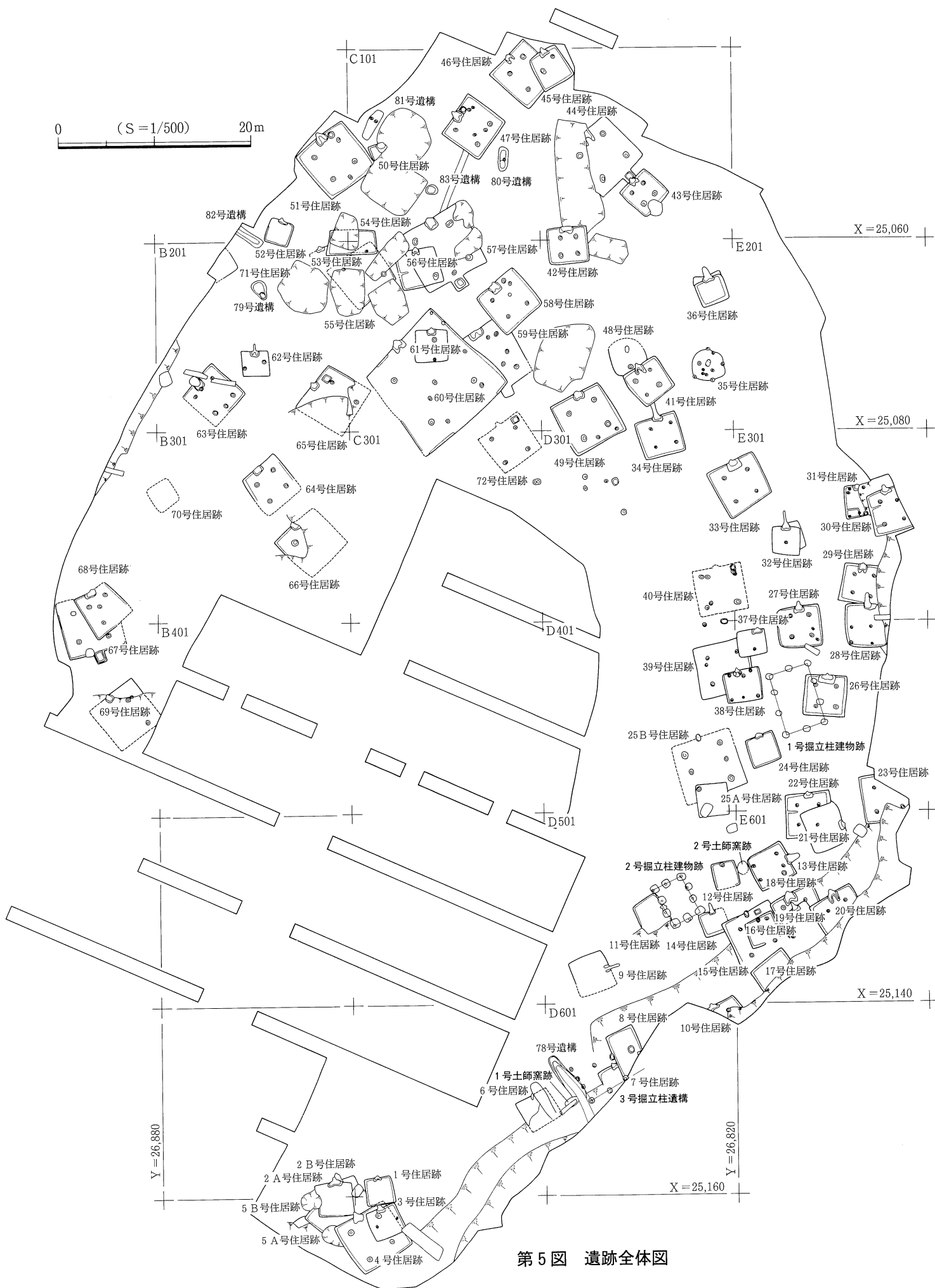
第4図 グリッドの設定

には上層を削平された遺構が数多く残存していることが認められ、遺構が残る5,500㎡について本調査を実施することとなった。

調査区は、公共座標を使用し、20×20mの方眼網を設定し、これを大グリッドとし、さらにこれを5m方眼網に細分し、小グリッドとした。グリッド番号は、北端より東西方向にアルファベットA・B・C……を付し、南北方向に算用数字で1・2・3……大グリッドとし、小グリッドは北隅より01・02・03～16までとし、グリッドの呼称は、A201のように挿図各北西位置の方眼杭に記し、その位置を示している。

遺跡は、旧市原中学校用地と言うこともあり、中央部は削平され失われていたが、台地縁辺部は遺構が客土下に遺存し、確認面までの層厚0.2～1.66mである。調査は、遺構確認面までの表土除去をバックホウを使用して行った。

今回の調査では、竪穴住居跡76軒、掘立柱建物跡2棟、掘立柱遺構1棟、土師器窯跡2基、土壇等を検出された。竪穴住居跡の帰属は、弥生時代後期末2軒、古墳時代後期から終末期31軒、奈良～平安時代31軒である。



第5図 遺跡全体図

註

- (1) 斎木 勝・種田齊吾・菊地真太郎他『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社 昭和49年
- (2) 三森俊彦・阪田正一他『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県都市公社 昭和49年
- (3) 鈴木英啓『潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター 昭和61年
- (4) 半田堅三『草刈尾梨遺跡』「第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨」財団法人市原市文化財センター 平成3年
- (5) 市毛 勲・滝山昌彦『若宮遺跡（C地区）』「市原市周辺地域の調査・市原市埋蔵文化財調査報告書第3冊」市原市教育委員会 1967年
- (6) 鶴田恵吉『上総国府の研究』市原市教育委員会 昭和43年
- (7) 坂井利明・市毛勲『南大広遺跡』「市原市埋蔵文化財調査報告書第4冊」市原市教育委員会 1968年
- (8) 宮本敬一『能満上細工多遺跡』「市原市文化財センター年報・昭和59年度」財団法人市原市文化財センター 昭和60年
- (9) 平野元三郎・對馬郁夫・谷島一馬・安藤鴻基・田中清美『千草山遺跡発掘調査報告書』千草山遺跡発掘調査団 昭和54年
- (10) 田中清美他『千草山遺跡・東千草山遺跡』財団法人市原市文化財センター 平成元年
- (11) 近藤 敏『山田橋表道遺跡』「市原市文化財センター年報・昭和60年度」財団法人市原市文化財センター 昭和61年
- (12) 田所 真『池ノ谷遺跡・福増遺跡』財団法人市原市文化財センター 昭和60年
- (13) 実見した。
- (14) 平野元三郎・谷島一馬『加茂遺跡A地点の調査』「上総国分寺台調査概報(1976)」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和51年
- (15) 平野元三郎・谷島一馬『加茂遺跡B地点の調査』「上総国分寺台調査概報(1976)」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和52年
- (16) 半田堅三『台遺跡A地点の調査・台遺跡B地点の調査』「上総国分寺台調査概報(1977)」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和52年
- (17) 米田耕之助『上総山倉1号墳の人物埴輪』「古代第59・60合併号」早稲田大学考古学会 昭和51年
- (18) 須田 勉・田中新史『南向原』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和51年
- (19) 須田 勉・田中新史・宮本敬一『東間部多古墳群』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和49年
- (20) 田中新史『根田古墳群の調査』「上総国分寺台調査概報(1980)」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和56年
- (21) 滝口宏監修『「王賜」銘鉄剣概報』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター 昭和56年
- (22) 田中新史『古墳時代終末期の地域色』「古代探叢Ⅱ」早稲田大学出版部 昭和60年
- (23) 大場磐雄・寺村光晴『上総市原古墳群の調査』「国学院雑誌」62-9 1961年
- (24) 須田 勉・田中新史『諏訪台古墳群調査概報』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和50年
- (25) 須田 勉・米田耕之助『諏訪台古墳群』「上総国分寺台調査概要Ⅻ」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和59年
- (26) 田所真他『諏訪台古墳群』「市原市文化財センター年報・昭和60年・61年度」財団法人市原市文化財センター 昭和60年・昭和61年
- (27) 中村恵次他『福増古墳群』「市原市埋蔵文化財調査報告書第3冊・市原市周辺地域の調査」市原市教育委員会 1967年
- (28) 滝口 宏『上総国分寺跡調査報告』上総国分寺跡調査団 昭和43年
- (29) 滝口 宏・須田勉『上総国分寺』千葉県教育委員会 昭和48年
- (30) 須田 勉『上総国分僧寺一寺域東南部における調査』「上総国分寺台発掘調査概要Ⅷ」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和56年
- (31) 須田 勉・浅利率一『上総国分僧寺一寺域北辺部における調査』「上総国分寺台発掘調査概要Ⅸ」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和57年
- (32) 須田 勉『上総国分僧寺一寺域東南部における調査』「上総国分寺台発掘調査概要Ⅹ」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和57年
- (33) 宮本敬一『上総国分尼寺跡の調査』「上総国分寺台発掘調査概要（昭和54年度）」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和55年
- (34) 宮本敬一『上総国分尼寺の伽藍と付属諸院』「月刊歴史教育」東京堂出版 昭和55年
- (35) 谷島一馬『稲荷台遺跡台2次調査』「上総国分寺台調査概報(1979)」市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 昭和55年
- (36) 浅利率一『市原市稲荷台遺跡』「房総における歴史時代土器の研究」房総歴史考古学研究会 昭和62年

第2章 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

1号住居跡（第6・7図）

調査区南端C6・C7区の1～5号竪穴住居跡が複雑に複合する地域の台地縁辺部に位置し、4号・5号住居跡のプランの一部を掘り込み検出する。プラン南西隅が4号住居跡覆土中に構築され、やや不明瞭な部分もあるがほぼ良好に遺存する。規模は、主軸長・副軸長共に2.9m程を測る。平面形は、均整を欠くもののほぼ正方形プランを呈する。主軸方位は、N-7°-Wを指向する。残存壁高28～31cm。Pitは南東側床面および壁面に接し5穴を検出し、深さP1-10cm・P2-7cm・P3-39cm・P4-18cm・P5-32cmを測り、いずれも支柱穴とは認められない。カマドは北壁の中央に設けられ、燃焼部は壁側に寄り、袖部は煙道部と共に壁よりやや張出し気味に造られ、張出長0.5mを測る。床面は、部分的に凹凸が有るもののほぼ平坦で固く、特に中央は固く踏み締められている。壁溝は北壁の一部を除き検出する。

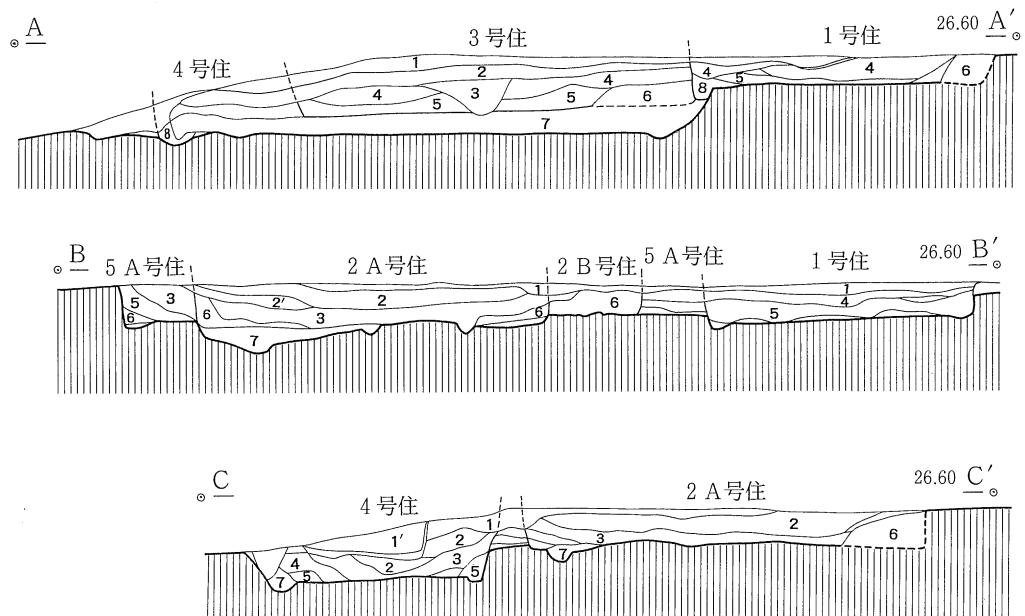
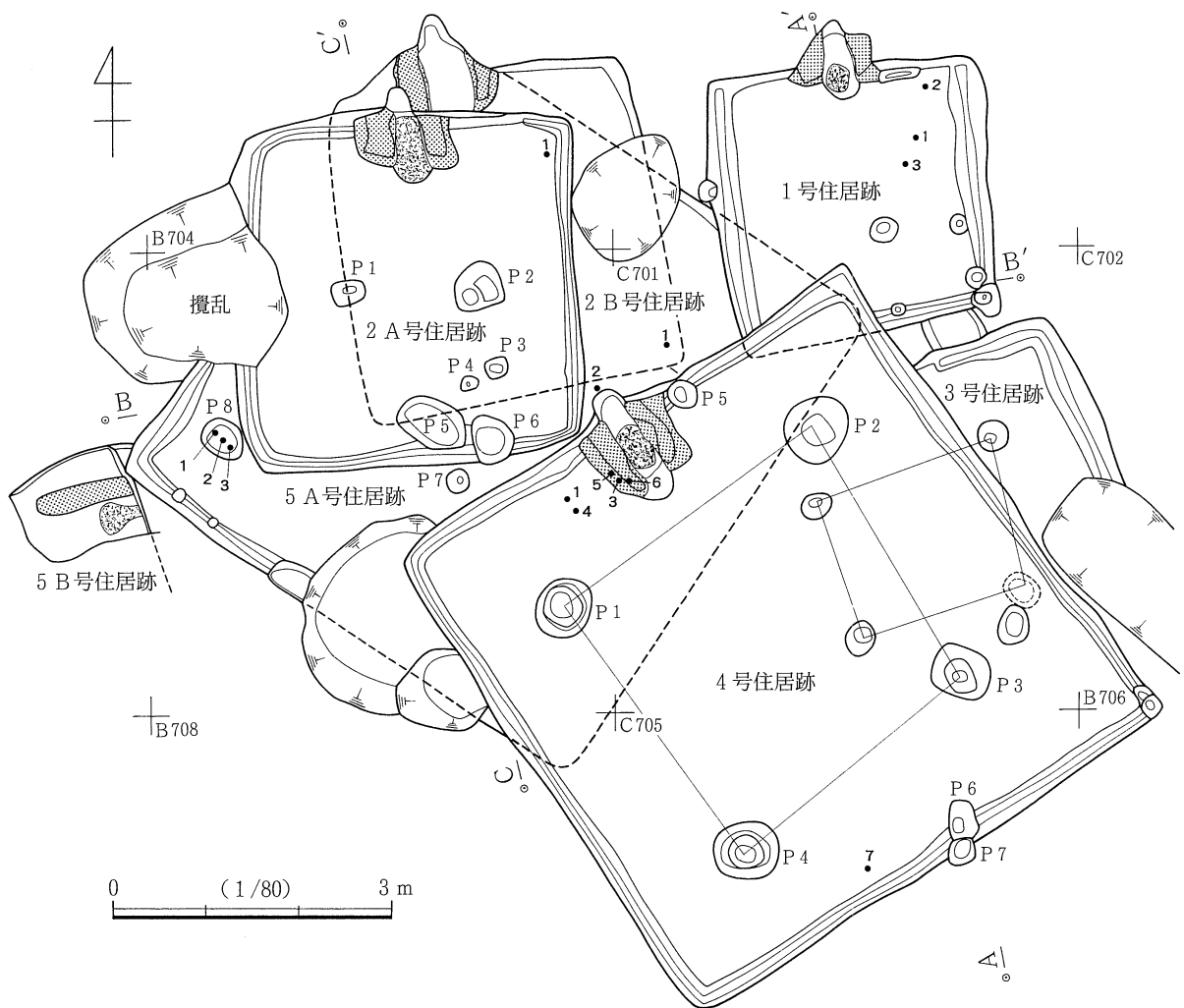
覆土土層（第6図）A-A' 1層、黒褐色土で表土直下の土層でよごれている。2層、黒褐色土で黒色土と褐色土をブロック状に含む。3層、暗黒褐色土で少量の褐色土をブロック状に含む。4層、暗黒褐色土で自然堆積状態を如実に示す黒色土層。5層、黒褐色で多量のローム粒を含む。6層、カマド構築土層の山砂および白色の下末吉層粘土を含む。7層、黒褐色と多量のローム粒およびロームブロックの混合土層。

遺物（第7図） 主な出土遺物は土師器甕1点、ロクロ土師器2点がある。いずれも床面直上より出土することから住居跡の帰属を示す資料である。2・3のロクロ土師器坏はいずれも口縁から底部の3分の1ほどの遺存で、2は内面黒色処理で体部下端および底部に手持ち筥ケズリを施し、底部に僅かに回転糸ケズリを残す。3は、底部回転糸切りを施す。

2A号住居跡（第6図）

調査区南端B6・B7区から2B号・5A号住居跡の床面および壁面を掘り込み検出する。プラン西壁の中央部および床面を大きく攪乱によって掘り込まれる。規模は、主軸長3.8m・副軸長3.7mを測る。平面形は、ほぼ正方形のプランを呈する。主軸方位は、N-7°-Wを指向する。残存壁高8～36cm。Pitの深さは、P1-35cm・P2-34cm・P3-13cm・P4-15cm・P5-15cm・P6-20cmを測り、支柱穴は明確ではないがP1・P2の2穴が予想される。カマドは北壁の中央に位置し、煙道部は壁より僅かに0.15mほど張出し、燃焼部は壁面に寄る。床面は、張り床されほぼ平坦で、中央は固く踏み締められている。壁溝は北壁の東側を除き検出する。

覆土土層（第6図）B-B' 1層、黒褐色土で表土直下土層でよごれている。2層、黒褐色土に多量の褐色土ブロックを含む。2'層、2層と3層の混合土層。3層、黒褐色土で多量のローム粒を含む。4層、黒色土。5層、黒褐色で多量のローム粒を含む。6層、黒褐色で多量のローム粒と褐色土を含む。7層、黒褐色土とロームブロック・ローム粒の混合土。C-C' 1層、黒褐色土で表土直下の土層でよごれている。2層、黒褐色土に多量の褐色土ブロックを含む。3層、黒褐色土で多量のローム粒を含む。4層、暗茶褐色土で多量のローム粒を含む。5層、黒褐色土にロームブロックを含む。



第6图 1·2A·2B·3·4·5A·5B号住居跡

6層、カマド構築土層の山砂および白色の下末粘土を含む。7層、ロームブロックと黒褐色土の混合土（2A号住居跡張り床面土層）。

遺物（第7図） 出土遺物はロクロ土師器坏1点がある。北東隅床面直上より出土することから本住居跡の帰属を示す資料である。口縁および体部の一部を欠き、体部下端および底部に回転篋ケズリを施す。小形のロクロ土師器で口径に比して底径が大きく、古いタイプで坊作Ⅱ期の所産である。

2B号住居跡（第6図）

調査区南端のB6・B7区から2A号住居跡に壁面および床面を大きく掘り込まれ、5A号住居跡とも複合し、カマドと北東隅を残すだけである。規模は推定で一辺3.6mを測り、ほぼ正方形プランを呈するものと思われる。主軸方位は、N-10°-Wを指向する。残存壁高0~25cm。Pitは、2A号住居跡のP2・P3・P4の存在が考えられるが不明。カマドは北壁中央よりやや西側に位置し、煙道部および袖部と共に壁よりやや張出し気味に造られ、張出長0.35mを測る。床面は、僅かに東側に残すだけで、ほぼ平坦である。壁溝は検出されない。

遺物（第7図） 主な出土遺物は土師器坏2点がある。1のロクロ土師器坏は体部および底部周縁まで丁寧なロクロ整形で底部に回転篋ケズリを施し、南東隅覆土上層より出土し、本住居跡に伴う遺物とは断定しかねるものの、カマド覆土中から出土する土師器坏片・甕片と様相を酷似し、2A号住居跡の帰属を示すロクロ土師器とほぼ同時期の土器と思われ、住居跡の時期を判断できる資料である。

2の土師器有段口縁坏は4号住居跡からの混入遺物であろうか。

3号住居跡（第7図）

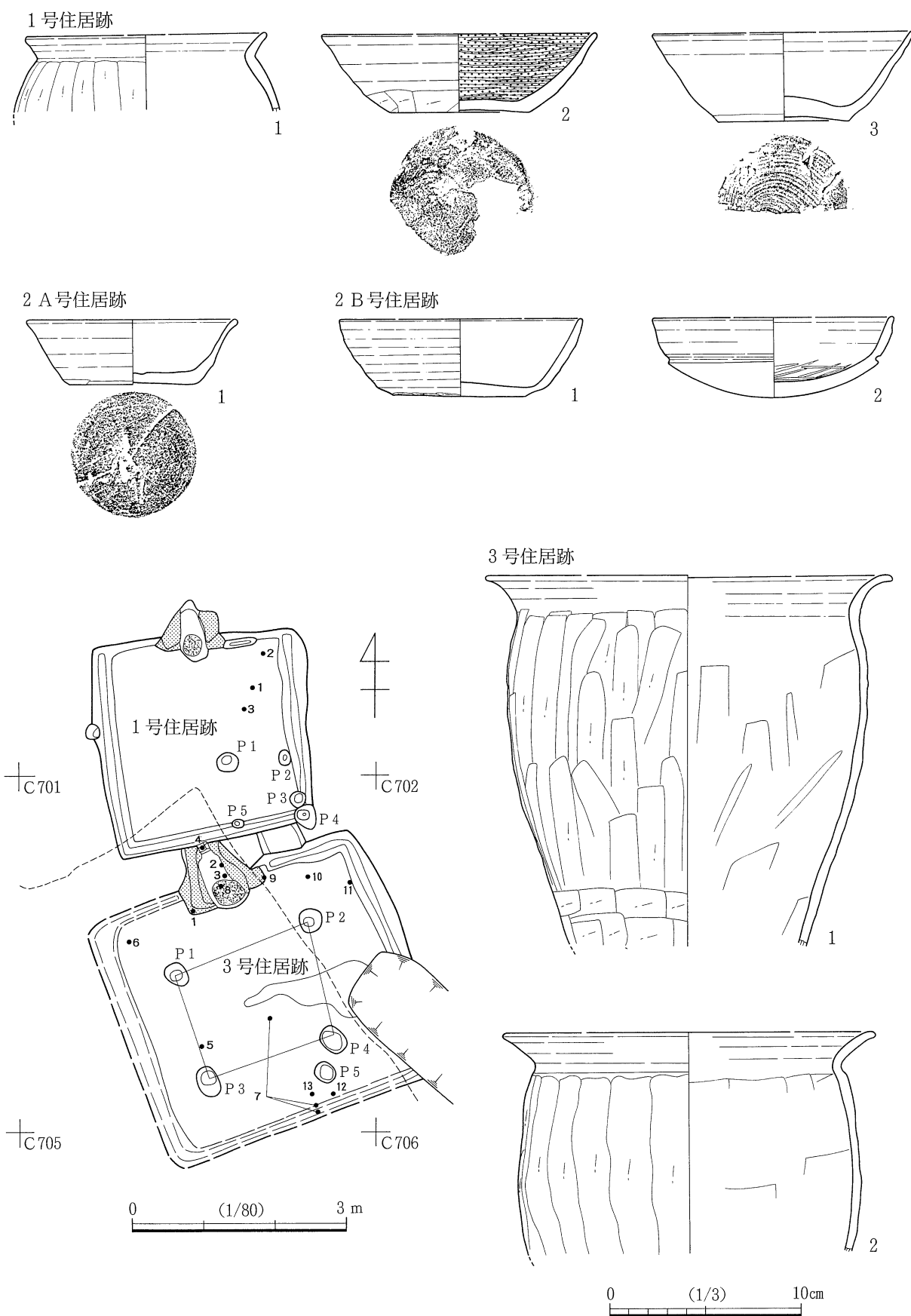
調査区南端C7区の竪穴住居跡が複雑に複合する地域に検出し、1号住居跡にカマド煙道部先端を掘り込まれ、4号住居跡の東壁を掘り込み、カマドおよびプランの西側を4号住居跡の覆土中に構築する。南東隅を攪乱によって大きく削平されるもののほぼ良好である。規模は、主軸長3.8m・副軸長3.65mを測る。平面形は、ほぼ正方形プランを呈する。主軸方位は、N-23°-Wを指向する。残存壁高0~33cm。Pitの深さは、P1-46cm・P2-30cm・P3-25cm・P4-36cm・P5-32cmを測り、支柱穴はP1~P4の4穴である。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部先端が1号住居跡によって掘り込まれるものの、残存張出長0.55mを測る。燃焼部は壁面に寄る。床面は、地形に沿って僅かに南側に傾斜し、凹凸がある。壁溝は4号住居跡の覆土中に構築されやや不明瞭な部分も存在するが四周するものと想定される。

覆土土層は、第6図A-A'による。

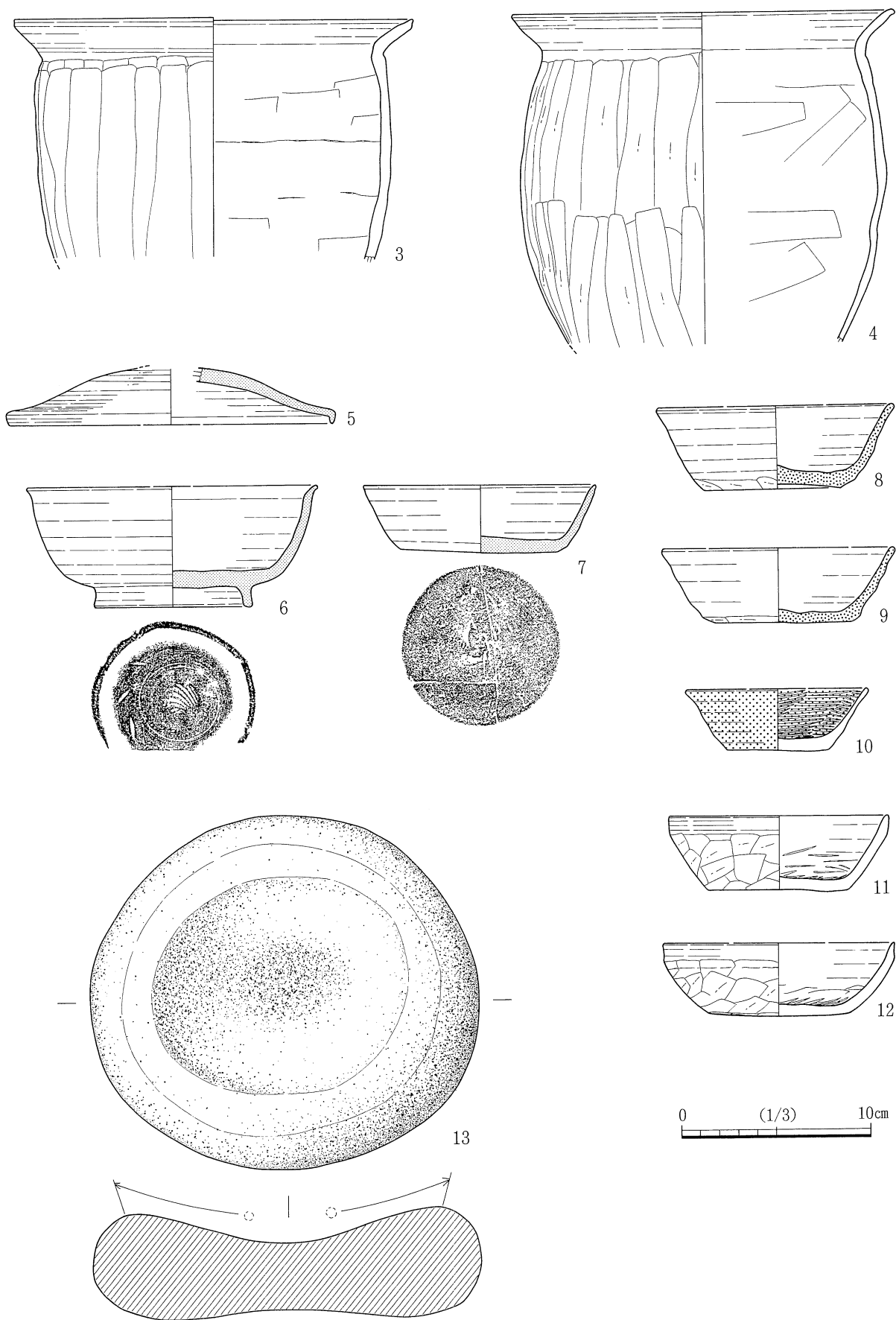
遺物（第7・8図） 主な出土遺物は土師器甕4点・須恵器蓋1点・須恵器口台付碗・須恵器坏3点・土師器坏3点・石皿1点である。6の須恵器高台付碗は北西隅の覆土中より出土し、それ以外はカマド燃焼部や床面からの出土で住居跡の帰属を示す明確な資料である。須恵器坏7は永田・不入窯跡産。須恵器坏8・9は、いわゆるくすべ焼成で千葉市域を中心とする古窯跡群の製品であろう。10は推定口縁径10cmでやや小形のロクロ土師器で内面黒色処理を施す。当地域のロクロ土師器坏では初現的なタイプと言える。11・12は外面手持ち篋ケズリの非ロクロ土師器坏。13は自然石を巧みに利用した石皿で、凹面および周縁には研磨痕跡は無く敲打痕を残すのみである。

4号住居跡（第6図）

調査区南端B7・C7区の竪穴住居跡が複雑に複合する地域に検出し、5A号住居跡を掘り込み、

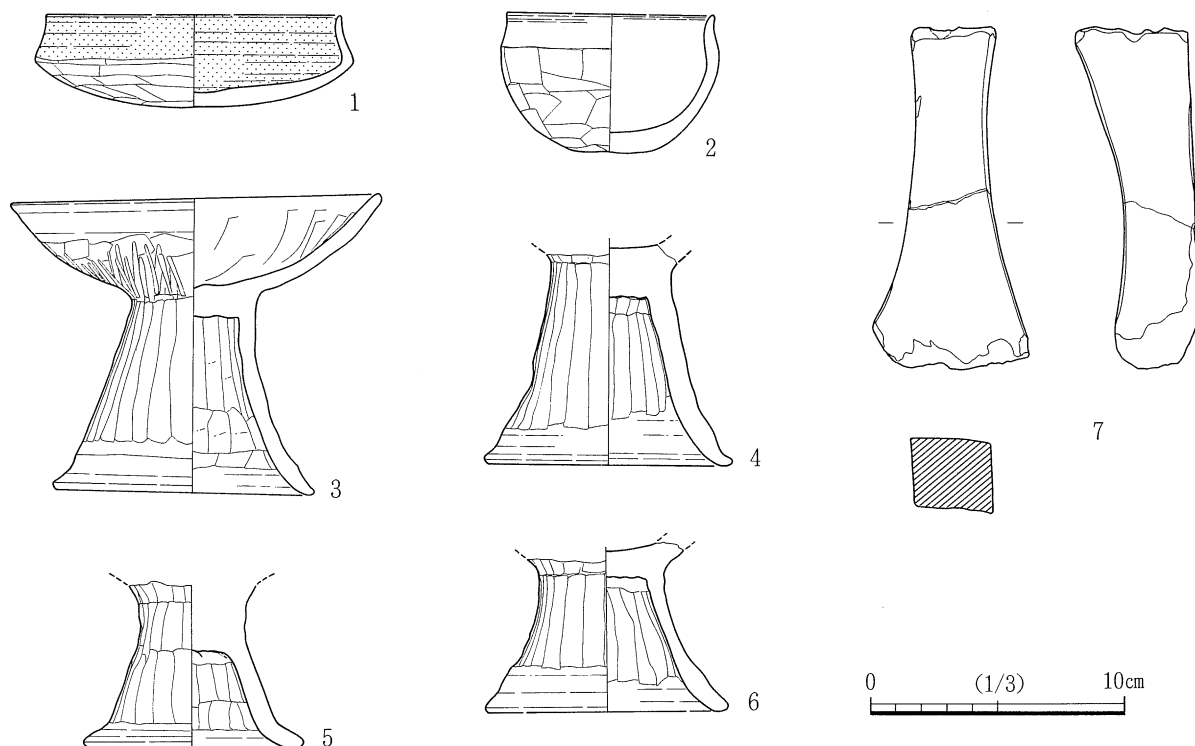


第7図 1・2・3号住居跡と出土遺物

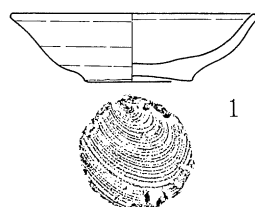


第8図 3号住居跡出土遺物

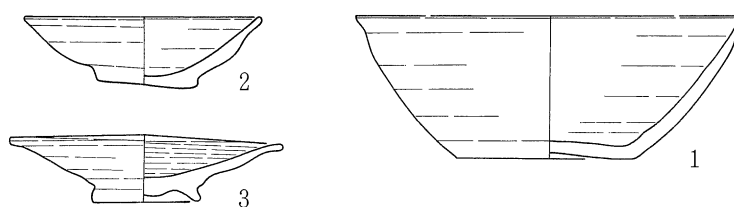
4号住居跡



5 A号住居跡



5 B号住居跡



第9図 4・5 A・5 B号住居跡出土遺物

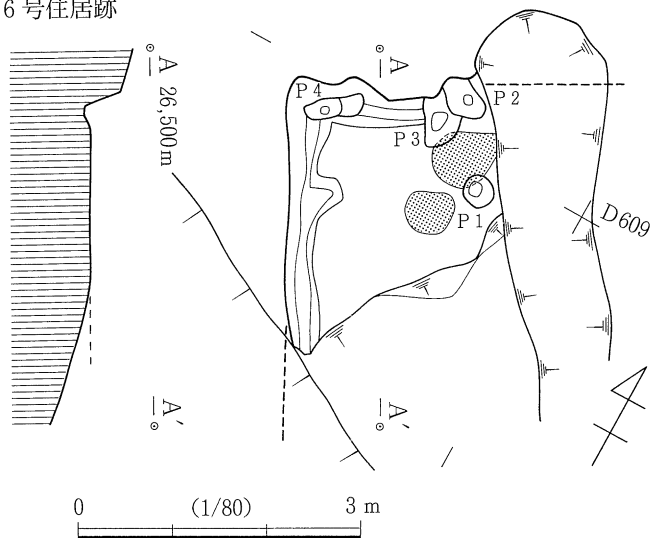
1号・3号住居跡に堀り込まれる。四辺の壁を後世の遺構や攪乱によって堀り込まれるものの掘方が深く平面プランは良好に遺存する。規模は、主軸長5.9m・副軸長5.85mを測る。平面形は、均整の取れた正方形を呈する。主軸方位は、N-35°-Wを指向する。残存壁高0~40cm。Pitの深さは、P1-58cm・P2-56cm・P3-69cm・P4-52cm・P5-19cm・P6-17cm・P7-7cmを測り、主柱穴はP1~P4の4穴である。カマドは、北壁の中央に位置し、煙道部および袖部と共に僅かに壁より張り出す。床面は、小さな凹凸はあるもののほぼ平坦で、固く踏み締められている。壁溝は四周し検出される。覆土土層は、第6図A-A'・C-C'による。

遺物(第9図) 主な出土遺物は土師器坏1点・土師器碗形坏1点・土師器高坏4点・砥石1点である。3・4・5・6の土師器高坏が床面やカマド燃焼部より出土し、2の土師器碗形坏とともに住居跡の帰属を示す資料である。1は、混入遺物か。

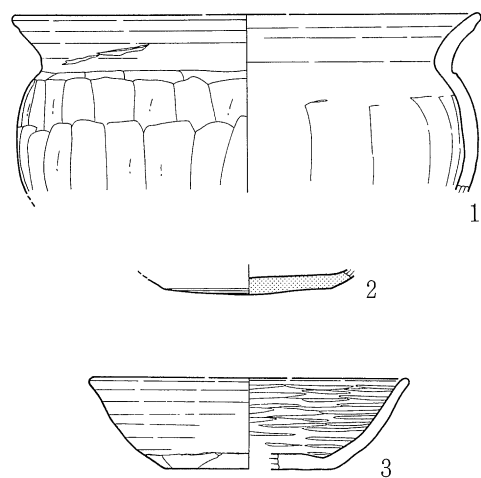
5 A号住居跡(第6図)

調査区南端のB7・C7区から2A・2B・4号住居跡によって堀り込まれ、西隅と北東辺壁と床面の部分的な検出である。推定規模は一辺6m程を測る、方形プランが想定できる。炉跡およびカマ

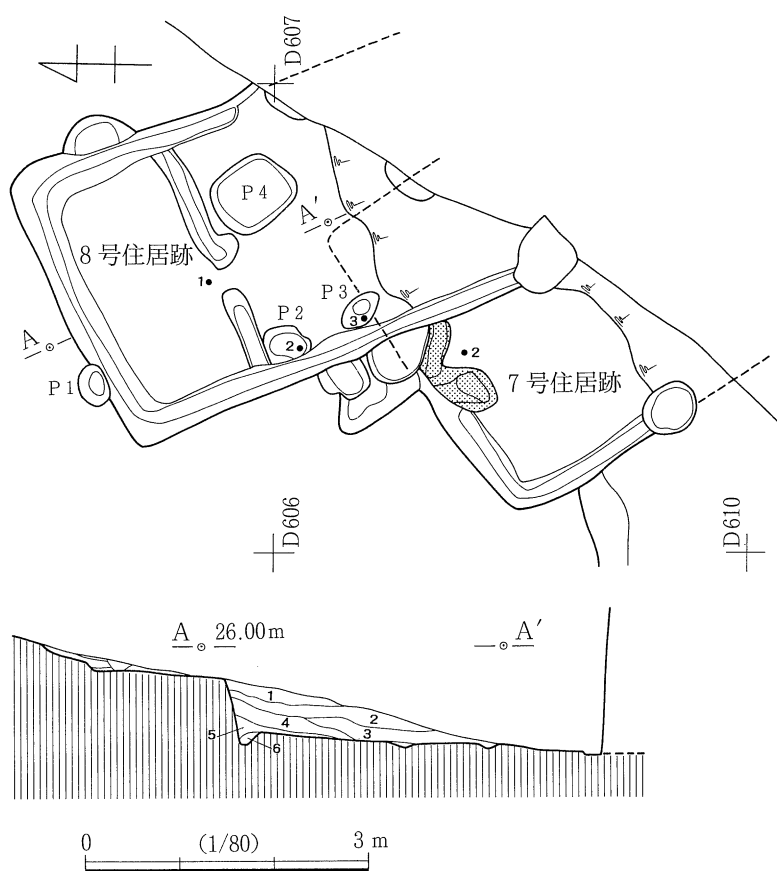
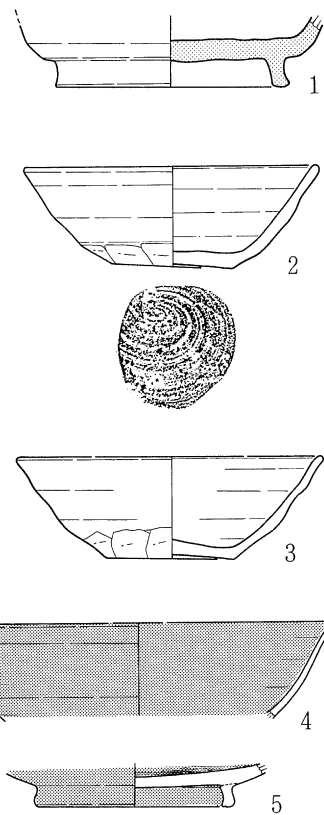
6号住居跡



7号住居跡



8号住居跡



第10図 6・7・8号住居跡と出土遺物

ドが検出されないため方位は不明であるが、西北壁辺にカマドが設けられたと仮定するとN-55°-Wを指向すると思われる。Pitの深さは、P 7-32cm・P 8-26cmの他2 B号住居跡内のP 1~P 5の存在も考えられるが、いずれも支柱穴とはなり得ない。壁溝は西隅付近で検出されることから本来

は四周すると考えられる。

覆土土層は、第6図B-B'による。

遺物(第9図) 主な出土遺物はP8より出土した土師器坏3点で、本住居跡が4号住居跡より先行する遺構で有ることを考慮すると、本住居跡の帰属を決定する資料とはなり得ないものである。

5号住居跡(第6図)

調査区南端のB7区より、プランを大きく削平され、カマドの一部と北西隅を検出するにとどまる。方形プランが想定できるが、規模は不明である。推定主軸方位は、N-71°-Eを指向する。残存壁高0~14cm。カマドは東壁の北に寄って設けられ、一方の袖と燃焼部を検出し、袖部長は1mを測る。床面は、ローム上に直接構築される。壁溝および支柱穴は、確認されない。

遺物(第9図) 出土遺物は覆土中より出土した底部回転糸切りのロクロ土師器1点がある。住居跡の帰属を決定する資料となり得るか断定できない。

6号住居跡(第10図)

調査区南側のC6区の台地縁辺部の斜面より、カマドの一部とプラン北西隅を検出する。他の遺構とは複合しないもののプランの4分の3ほどが後世に削平され、平面形および正確な規模の把握は困難であるが、カマドが北壁中央に設けられたとすると、一辺4.5m程の方形プランが想定される。推定主軸方位は、N-29°-Wを指向する。残存壁高0~50cm。カマドは明確に遺存しないもののその残存から北壁に設けられたものと推察される。Pitの深さは、P1-19cm・P2-53cm・P3-19cm・P4-34cmを測るものの支柱穴とはなり得ない。床面は、平坦であるが固く踏みしめられた状況は無い。壁溝は、検出部分では存在することから本来は四周するものと考えられる。

遺物 器形を復元できりる遺物がなく、所属時期を明確にできない。

7号住居跡(第10図)

調査区南側D6区の斜面下端より南半分を調査区域外に置き、また東半分を8号住居跡に掘り込まれ、カマドの一部と北西隅を検出する。規模は、北西隅の検出だけであることから推定は困難であるが、カマドが北壁中央に設けられたとするなら一辺3.6mの方形を呈するものと考えられる。主軸方位は、N-33°-Wを指向する。残存壁高0~50cm。Pitは、壁や床面に検出されるが皆後世の所産である。カマドは、北壁に設けられるが、燃焼部に僅かに焼土粒が検出されるだけである。床面は、壁寄り軟弱であるがカマドから床面中央が固く踏み締められている。壁溝は、検出部分では存在することから本来は四周するものと考えられる。

遺物(第10図) 主な出土遺物は土師器甕1点・須恵器坏1点・土師器坏1点である。2の須恵器坏はやや出尻ぎみの底部で永田・不入窯跡産、3のロクロ土師器坏は小片ながら底部回転篋ケズリで器高に比して底径が大きい。2は覆土中より出土しているものの、3点とも本住居跡の帰属を決定する資料となる。

8号住居跡(第10図)

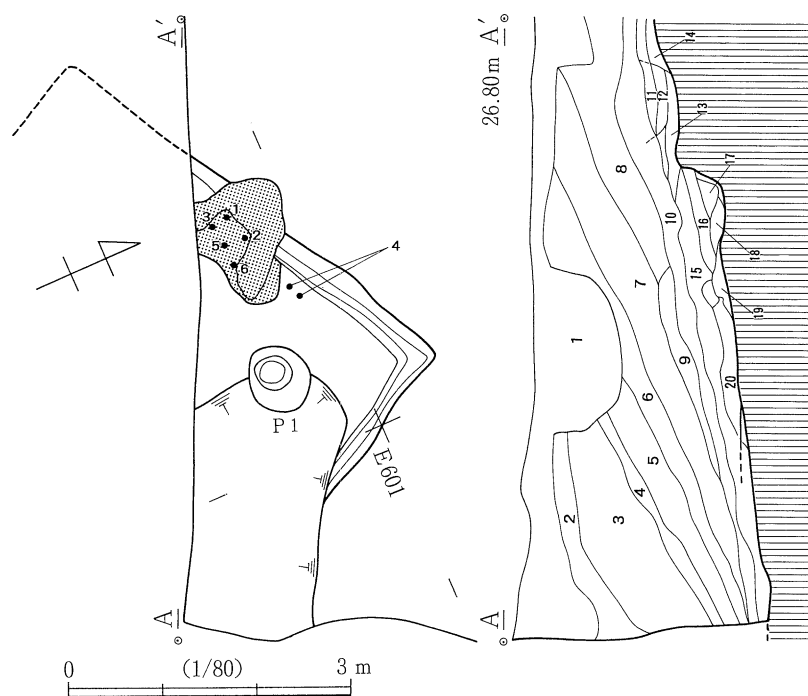
調査区南側D6区の斜面下方よりプラン南側の一部を調査区域外に置き、また西南辺で7号住居跡を掘り込み検出する。床面南側半分を削平により失う。調査区域外の東南にカマドの存在を想定させる白色粘土が土層断面に観察できる。推定規模は、主軸長3.1m・副軸長4.5mを測る。平面形は、横長の長方形プランを呈するものと思われる。主軸方位は、カマド位置を明確にできないが、短軸方位

でN-66°-Eを指向する。残存壁高0~50cm。Pitの深さは、P1-33cm・P2-15cm・P3-10cm・P4-68cmを測るが、いずれも支柱穴とはなり得ない。P4は後世のPitである。床面は、相対的に固く踏み締められ、北側に間仕切り施設の溝が中央で途切れ検出される。壁溝は調査区域ないで検出することから本来は四周するものであろう。

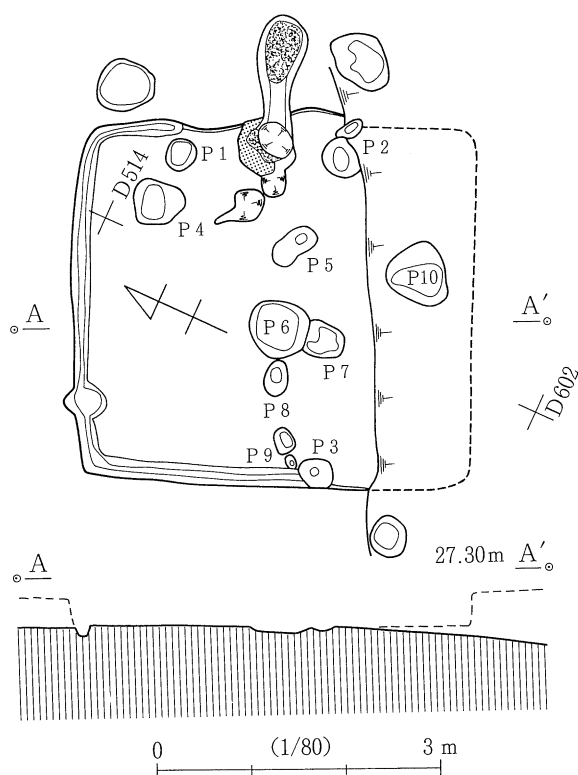
覆土土層(第10図) A-A' 1層、黒褐色土で多量のローム粒および小ロームブロックを含む。2層、暗黒褐色土で黒色土とローム粒を含む。3層、黒褐色土でローム粒と褐色土をブロック状に含む。4層、暗黒褐色土で多量のローム粒を含む。5層、黒褐色で多量のローム粒と茶褐色土をブロック状に含む。6層、茶褐色土でローム粒・ローム土・黒褐色土の混合土層。

遺物(第10図) 主な出土遺物は須恵器高台付埴1点・土師器坏1点・緑釉陶器埴2点である。1は床面よりやや浮いて出土することから混入遺物で。2・3は縮小化した体部下端手持ち篋

ケズリ底部回転糸切りのロクロ土師器でP2・P3から出土することから本住居跡の帰属を示す資料



第12図 10号住居跡

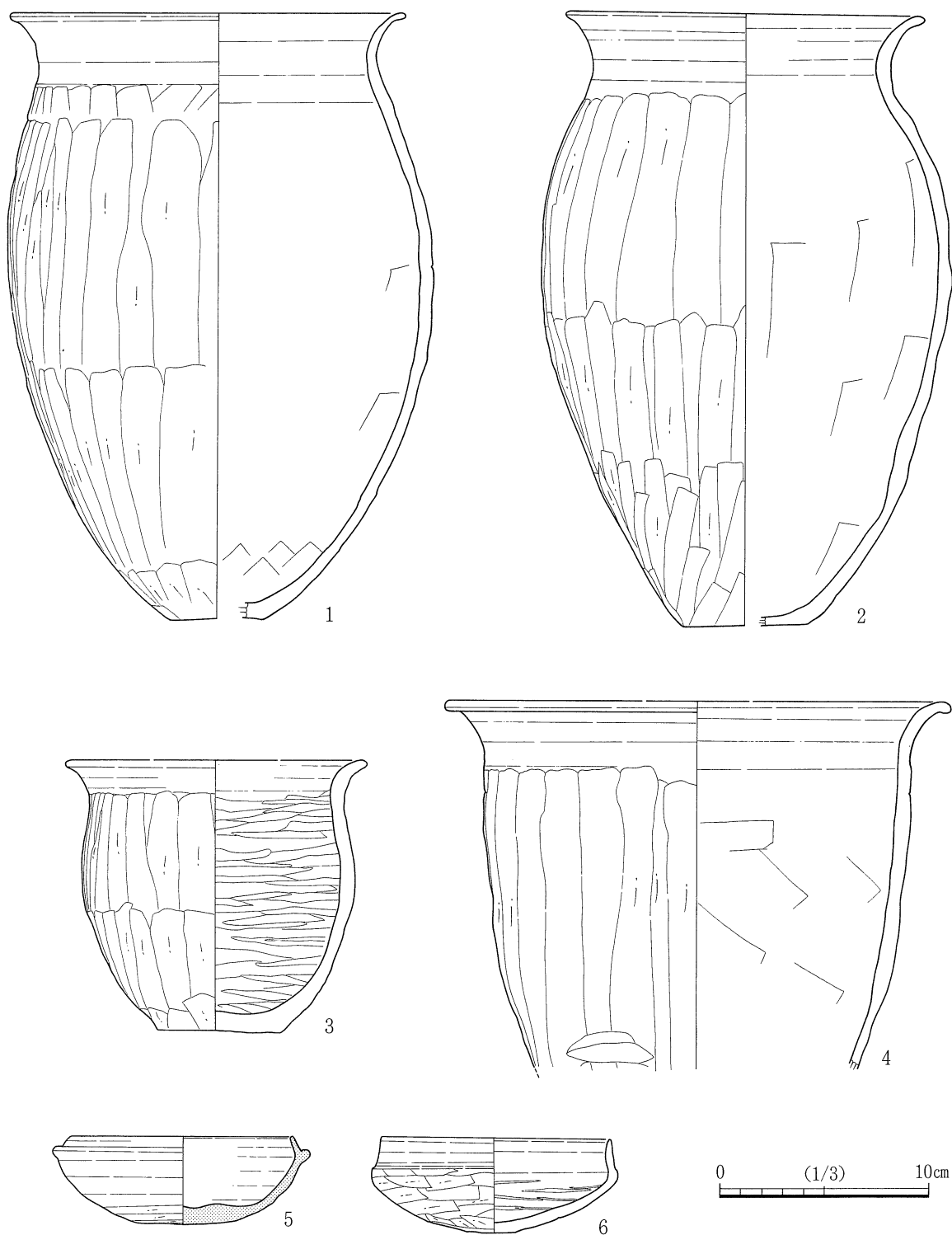


第11図 9号住居跡

と考える。4・5の緑釉陶器埴は2点とも覆土中の出土で混入遺物であるが、住居跡とほぼ同時期の資料と感取される。

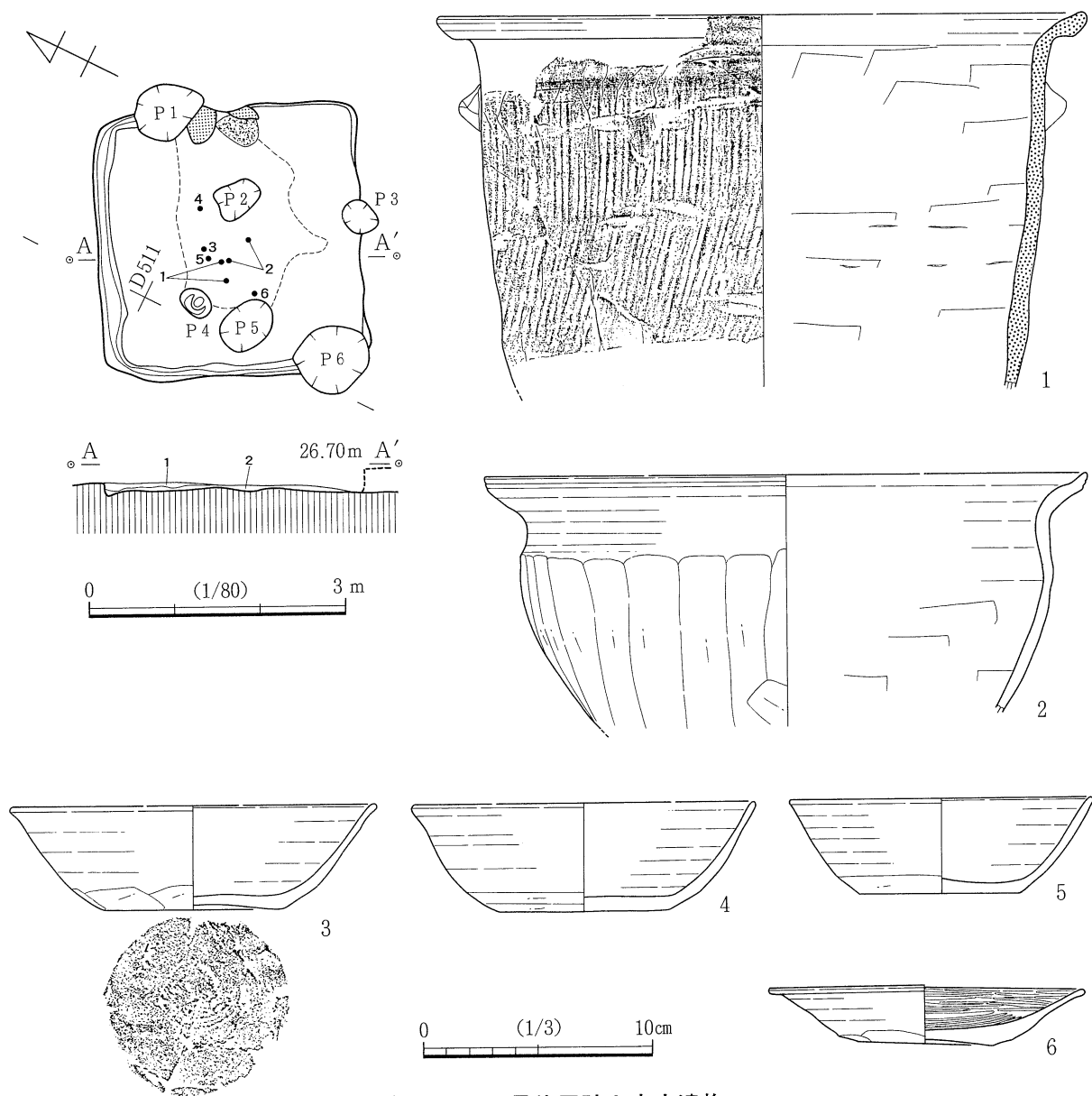
9号住居跡(第11図)

調査区南側D5区の校舎建設時の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、プラン南側の3分の1を削平され、また後世のPitや攪乱により床面を部分的に欠失し検出する。推定規模は、主軸長・副軸長ともほぼ3.8mを測る。平面形は、均整の取れた方形プラ



第13図 10号住居跡出土遺物

ンを呈するものと思われる。主軸方位は、 $N-65^{\circ}-E$ を指向する。残存壁高0～3cm。Pitの深さは、P1－8cm・P2－24cm・P3－44cm・P4－13cm・P5－11cm・P6－24cm・P7－7cm・P8－24cm・P9－27cm・P10－17cmを測る。P9が梯子穴の他P1・P2・が住居跡に伴うもので主柱穴は明確にできない。カマドは東壁中央に設けられ煙道部は大きく張出し、張出長1mを測る。床面は、ローム面に直接構築され、壁周辺はやや軟弱ながら相対的に固く踏み締められている。壁溝は、



第14図 11号住居跡と出土遺物

カマドの両端で途切れるもののほぼ四周するものと感取される。

遺物 カマド燃焼部から土師器甕片の他、覆土中からロクロ土師器坏小片を検出するものの、実測可能な遺物はないが、九世紀後半の所産と考えられる。

10号住居跡（第12図）

調査区南東側D5・D6区の斜面下方から、プランの西半分を調査区域外に南半分を削平され、カマドとプラン北東隅と床面を検出する。推定規模は、カマドが北壁中央に設けられたものと仮定するなら、一辺4.4m程の方形プランを呈するものと想定される。主軸方位は、N-30°-Wを指向する。残存壁高0~34cm。Pitの深さは、P1-51cmで支柱穴の一つで、本来は支柱穴4穴を有しよう。カマドは、北壁中央に設けられ、煙道部が僅かに壁より張り出す。床面は、住居跡が斜面に構築され地形上の影響からやや南側に傾斜する。壁溝は、調査範囲で存在することから本来は四周するものであろう。

覆土土層（第12図） A－A′ 1層から9層までが小学校建設に伴う造成工事による客土。10層、黒褐色土で旧表土。11層、黒褐色土で褐色土を含む。12層、暗黒褐色土で多量の黒色砂粒（宝永火山灰）を含む。13層、黒褐色で多量のローム粒と茶褐色土をブロック状に含む。14層、茶褐色土でローム粒・ローム土・黒褐色土の混合土層。15層、黒褐色土でローム粒と褐色土を含む。16層～19層、カマド構築土の白色粘土を含む。20層、暗褐色土多量のローム粒とローム土を含む。

遺物（第13図） 主な出土遺物は土師器甕3点・土師器甕1点・須恵器坏身1点・土師器坏1点である。カマド燃焼部や床面よりの出土で本住居跡の帰属を示す資料である。5の須恵器坏身は口径の縮小化傾向にあり、口縁の立ち上がりも短くTK217型式であろう。

11号住居跡（第14図）

調査区南側D5区のソフトローム上面を削平された平坦地より、壁を削平され壁溝と床面を検出する。プラン東側で、2号掘立柱建物跡に掘り込まれている。規模は、主軸長3.15m・副軸長3.1mを測る。平面形は、やや均整を欠く正方形を呈する。主軸方位は、N－62°－Eを指向する。壁は殆ど削平され、残存壁高は0～5cmを測る。Pitの深さは、P1－10cm・P2－5cm・P3－5cm・P4－40cm・P5－10cm・P6－15cmを測る。P4が梯子穴として本住居跡に伴うものの主柱穴は確認できない。カマドは、東壁中央に設けられているものの、削平され僅かにその痕跡を残すだけである。床面は、張り床面で固く踏み締められている。壁溝は北と西壁辺に検出する。

覆土土層（第14図） A－A′ 1層、黒褐色土で褐色土を含む。2層、黒褐色で多量のローム粒と少量の小ロームブロックを含む。

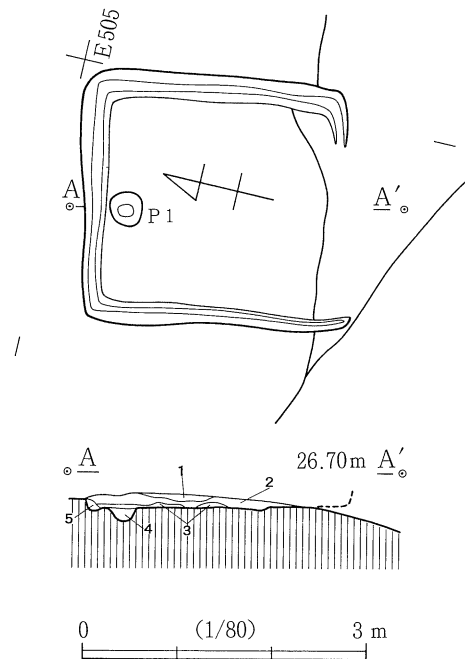
遺物（第14図） 主な出土遺物は須恵器甕1点・土師器甕1点・ロクロ土師器坏3点・ロクロ土師器皿1点である。いずれも床面の中央より押しつぶされ出土し、住居跡の帰属を示す資料である。1は千葉市周辺地域の古窯跡の製品である。

12号住居跡（第15図）

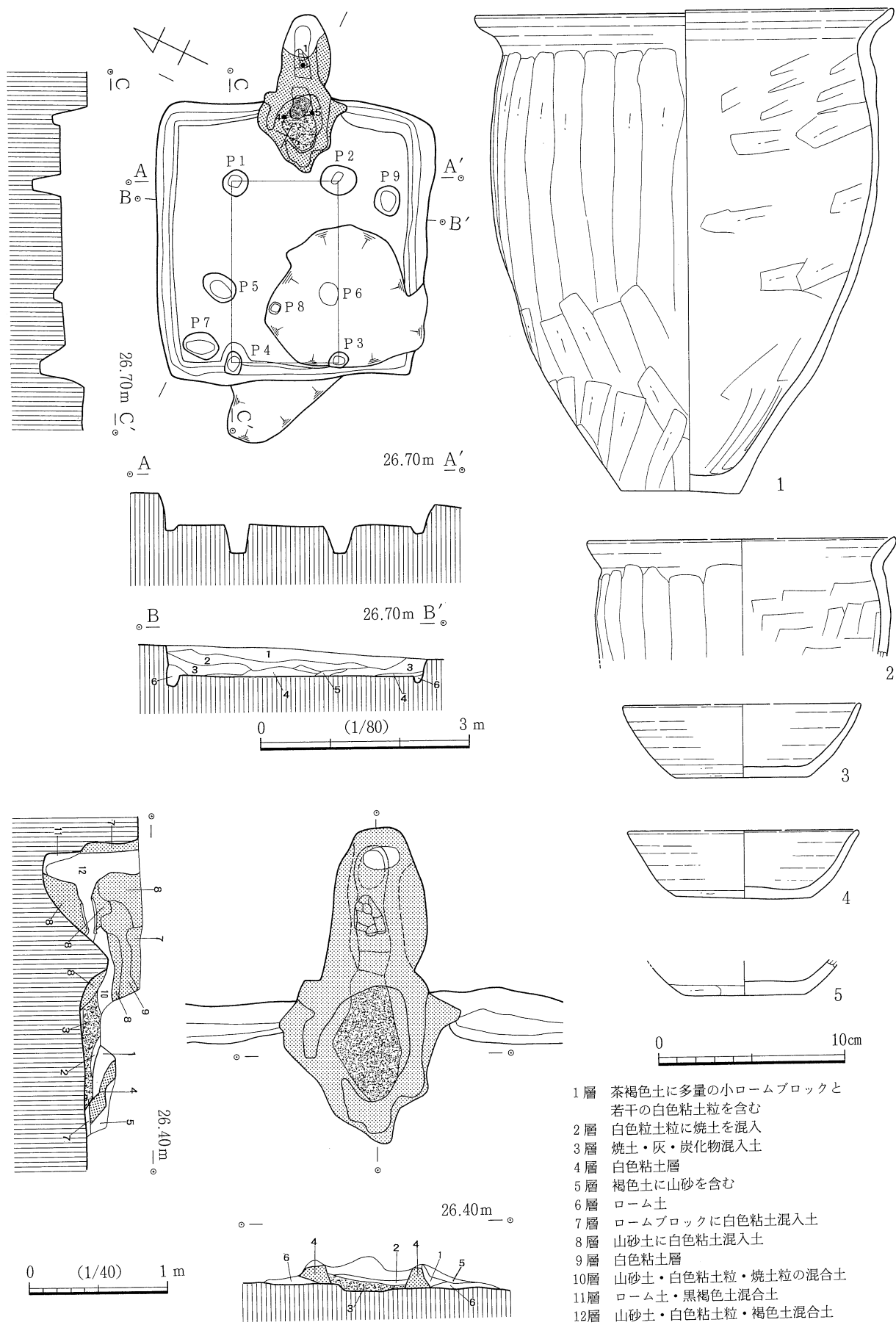
調査区南側D5・E5区より、プラン南側の床面および壁面を削平され検出する。規模は、南北長2.85m・東西長2.6mを測る。平面形は、比較的均整の取れた方形プランを呈するものと思われる。長軸方位は、N－11°－Wを指向する。残存壁高は、0～13cm。Pitの深さは、P1－5cmと僅かに窪む程度である。主柱穴は無い。カマドおよび炉跡も無い。壁溝は、調査範囲で存在することから本来は四周するものであろう。

覆土土層 A－A′ 1層、黒褐色土でロームブロックを含む。2層、黒褐色で多量のローム粒と少量の小ロームブロックを含む。3層、黒褐色土でローム粒と少量の焼土粒を含む。4層、暗褐色土で多量のローム粒とローム土を含む。5層、暗茶褐色土でロームと褐色土の混合土。

遺物 覆土中から土師器甕・坏の小片が出土するものの実測可能な遺物は無い。土師器坏は、底に回転糸切りや



第15図 12号住居跡



第16図 13号住居跡と出土遺物

高台付のものがあ、やや小型化の傾向がうかがえる。

13号住居跡（第16図）

調査区東側E5区のソフトローム上面を僅かに削平された平坦地より検出し、プラン南西部の床面を大きく攪乱されるものの壁および四隅を残している。規模は、主軸長4.0m・副軸長3.9mを測る。平面形は、やや胴張り気味の方形プランを呈する。主軸方位は、N-63°-Eを指向する。残存壁高25~48cm。Pitの深さは、P1-41cm・P2-39cm・P3-38cm・P4-36cm・P5-11cm・P6-5cm・P7-11cmを測り、主柱穴はやや変則的に設けられたP1・P2・P3・P4の4穴であるが、P5・P6の底面に柱痕跡の跡を明瞭に留めることから補助的な柱と認めることが可能である。カマドは東壁の中央に位置し、山砂や白色粘土を多量に用いしっかりとした造りで、煙道部構築材に土師器甕を据え付けている。煙道部は壁より1.2mほど張出し、燃焼部位置も壁面よりやや張り出しきみである。床面は、張り床され中央は特に固く踏み締められている。壁溝は、攪乱された東南隅付近で不明であるが、本来は四周するものであろう。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土で多量のローム粒を含む。2層、暗褐色土で多量のローム粒・小ロームブロックを含む。3層、褐色土でローム粒・小ロームブロックを含む。4層、黒褐色土でカマド構築土の白色粘土粒・少量のローム粒・小ロームブロックを含む。5層、黒褐色土で少量の炭化物を含む。6層、暗茶褐色でローム粒・ローム土・褐色土の混合土。

遺物（第16図） 主な出土遺物は土師器甕2点、土師器坏3点がある。1・4・5が住居跡との共伴関係が明らかなもので、2・3は覆土中の出土であるが住居跡の帰属を示す資料と考えてよからう。

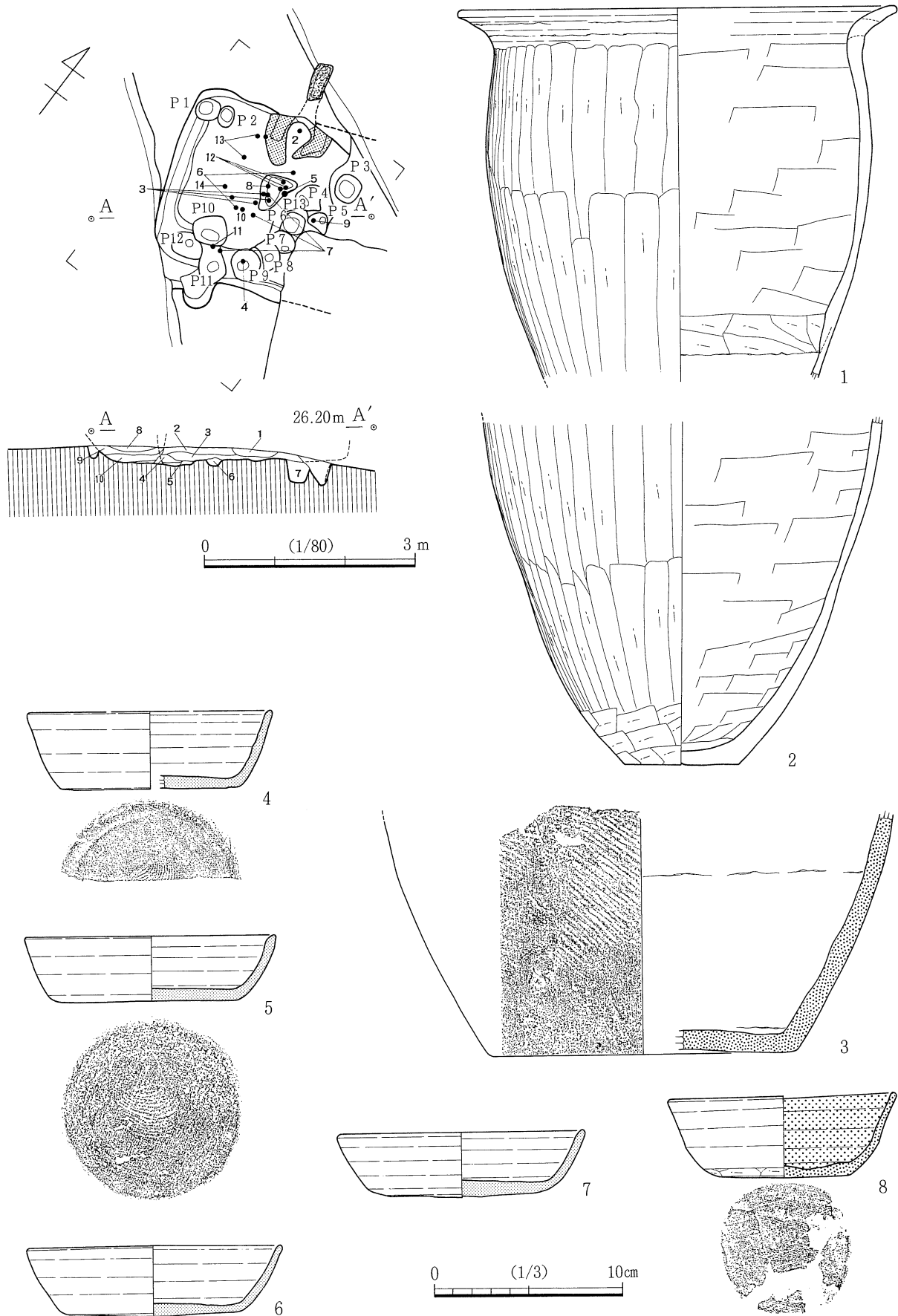
3~5のロクロ土師坏は器高が低く体部下端および底部に丁寧な回転篋ケズリ施し、5の坏内面に焼成後に弱い線刻により×印を有する。

14号住居跡（第17・18図）

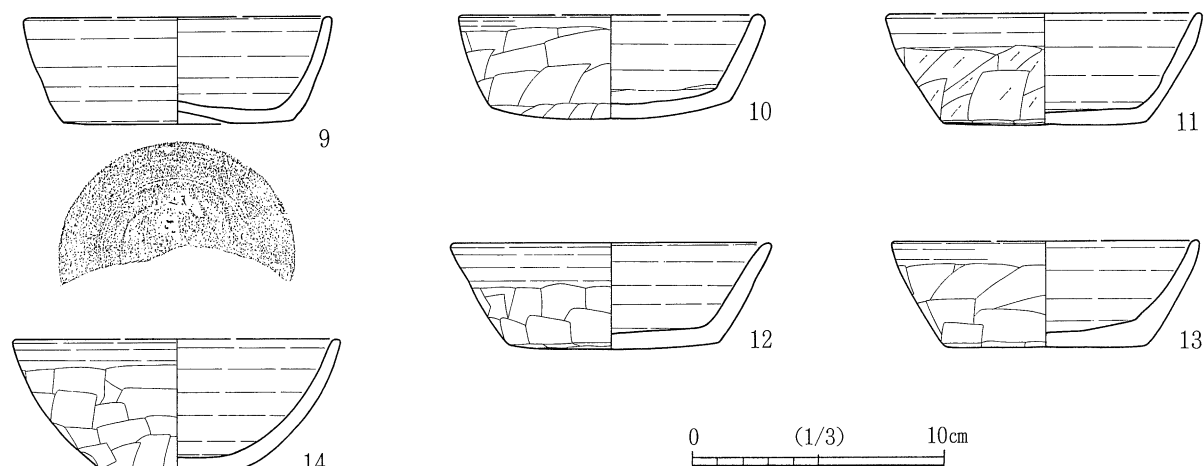
調査区東側D5のソフトローム面を削平された緩やかな斜面地に、15号住居跡と一部複合して検出する。遺存状態は、攪乱や削平により東側床面を大きく削平され不良である。規模は、主軸長2.7m、カマドが北壁中央に位置すると仮定すると副軸長3.0mと復元でる。平面形は、やや胴張りきみの方形プランが想定できる。主軸方位は、N-19°-Wを指向する。残存壁高0~33cm。Pitの深さは、P1-28cm・P2-11cm・P3-48cm・P4-17cm・P5-49cm・P6-35cm・P7-64cm・P8-36cm・P9-54cm・P10-57cm・P11-61cm・P12-35cm・P13-4を測り、主柱穴は不明である。カマドは北壁のほぼ中央に位置すると思われ、煙道部は壁より0.9mほど張出す。床面はPitや攪乱により削平される部分が多く明瞭な硬化面は確認できない。壁溝も攪乱により削平され、遺存状態の良い西・南壁の直下で検出できるものの全体については不明である。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土で多量のローム粒を含む。2層、褐色土で多量のローム粒・小ロームブロックを含む。3層、褐色土でローム粒・小ロームブロックを含む張り床面である。4層、褐色土少量のローム粒・小ロームブロックを含む。5層、暗茶褐色でローム粒・ローム土の混合土。6層、黒褐色で少量のローム粒・褐色土を含む。7層、ロームブロック土に褐色を含む。

遺物（第17・18図） 主な出土遺物は土師器甕2点・須恵器甕1点・須恵器坏5点・土師器坏6点である。2の甕はカマド燃焼部に直立して置かれ、他は住居跡床面や後世のPitより検出されるものも含まれるが、総体的に見て全てが住居跡の帰属を示す資料であると感取される。3と8の須恵器甕と



第17図 14号住居跡と出土遺物



第18図 14号住居跡出土遺物

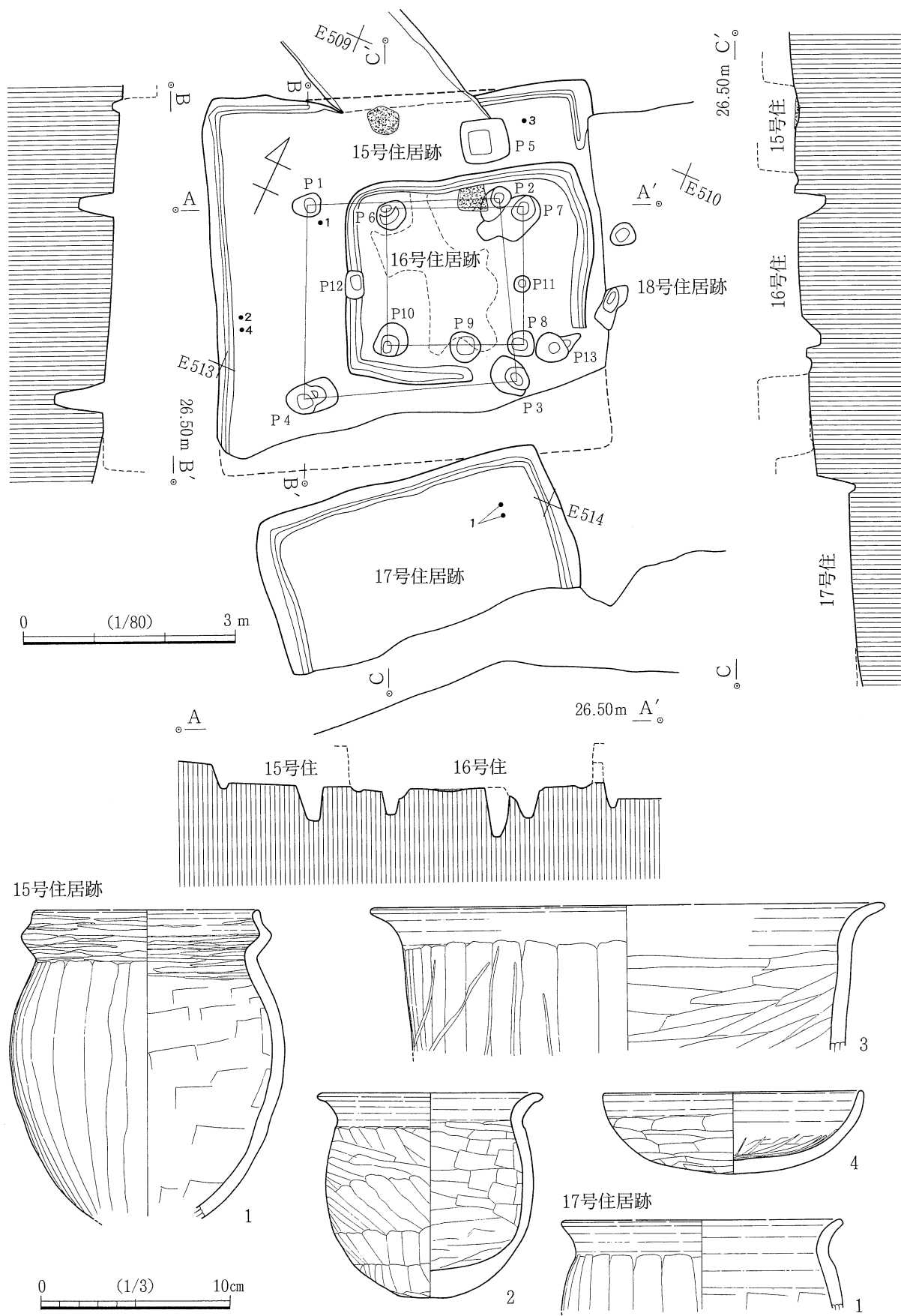
坏はいわゆるくすべ焼成の須恵器で、千葉市域の南河原坂産を中心とする須恵器であろう。4～7の須恵器坏は底部回転篋ケズリで僅かに回転糸切り痕を残し、市原市の永田・不入窯産の製品である。10～14は非クロ土師器坏で底体部外面手持ち篋ケズリを施す。9は器形および整形技法とも永田・不入窯産の須恵器の作りであるものの焼きが酸化煙焼成である。本来なら須恵器と判断するものであるがこの主の土器の存在を暗示する物かも知れない。

15号住居跡（第20図）

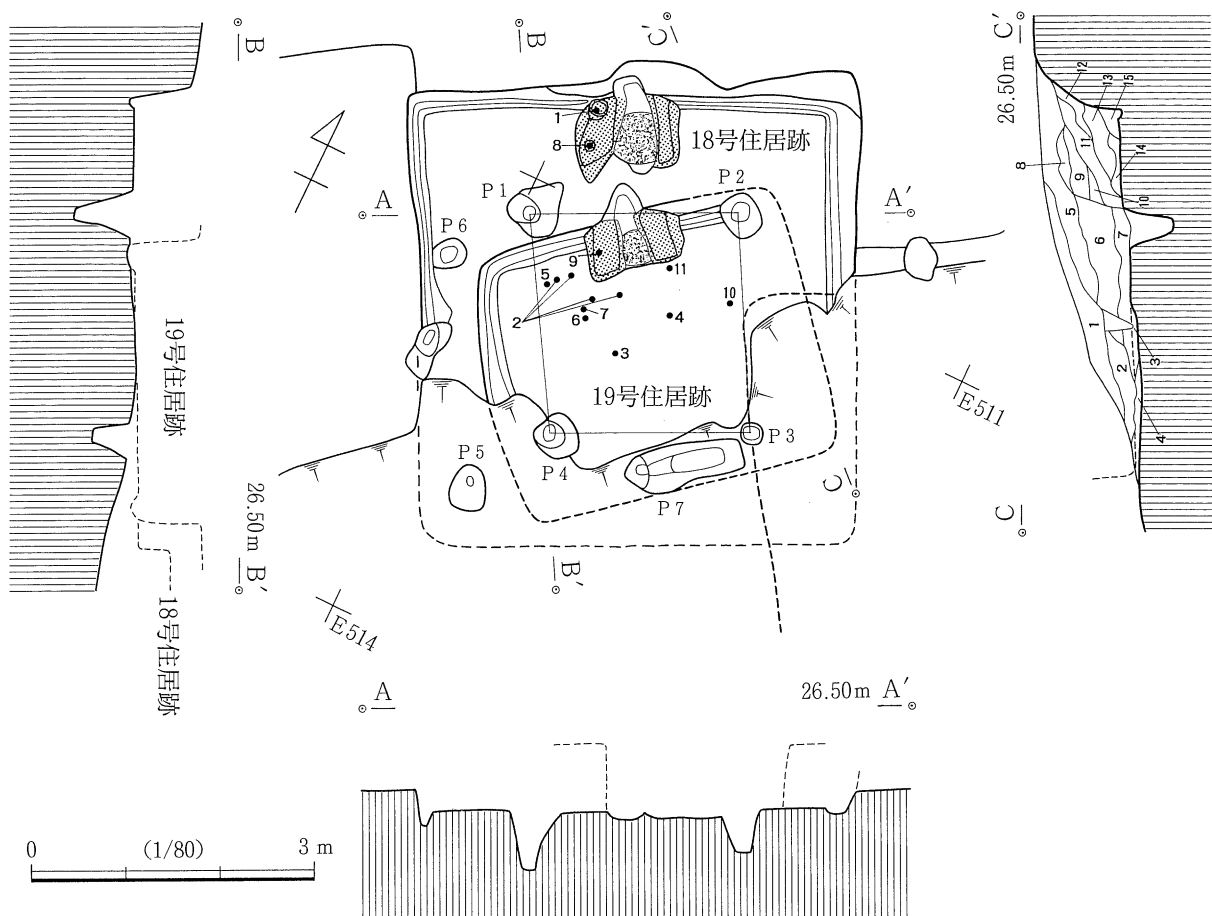
調査区南端のD 5・E 5区のソフトローム面を削平された緩やかな斜面に位置し、プラン中央に床面を同レベルに置く16号住居跡によって掘り込まれ、東壁で18号住居跡を掘り込んで複合し、プラン南壁および床面を後世に削平されている。正確な主軸長は不明であるが、推定規模は一辺5.5m程を測る。平面形は、均整の取れた方形の平面プランを呈する。主軸方位は、N-28°-W指向する。Pitは16号住居跡と通し番号となるが、深さP 1-48cm・P 2-70cm・P 3-47cm・P 4-73cm・P 5-49cm・P 6-36cm・P 7-37cm・P 8-38cm・P 9-22cm・P 10-40cm・P 11-13cm・P 12-21cm・P 13-68cmを測り、支柱穴はP 1・P 2・P 3・P 4の4穴でP 5は貯蔵穴である。カマドは、北壁中央に設けられるが燃焼部を検出するにとどまる。床面は、16号住居跡によって中央を掘り込まれることもあり、遺存状況は不良である。壁溝は、北・西壁辺に確認され、本来は四周すると考えられる。遺物（第20図） 主な出土遺物は土師器甕2点・土師器甌1点・土師器坏1点で、本住居跡の帰属を決定する資料となり得る。4の内面には放射状暗文のミガキを施している。

16号住居跡（第20図）

調査区東側E 5区の緩やかな斜面に位置し、15号住居跡覆土中を掘り込み床面を同レベルに置いて検出する。規模は、主軸長2.9m・副軸長3.5mを測る。平面形は、同張り気味の均整を欠く、横長の長方形を呈する。主軸方位は、N-27°-Wを指向する。残存壁高0～5cm。Pitの深さは、P 6-36cm・P 7-37cm・P 8-38cm・P 9-22cm・P 10-40cm・P 11-13cm・P 12-21cmを測り、支柱穴はP 6・P 7・P 8・P 10の4穴でP 9は梯子穴である。カマドは北壁のほぼ中央に位置するが燃焼部だけの検出である。床面は、中央に硬化面を残すものの、凹凸がある。壁溝はほぼ四周する。遺物 器形を復元できるような資料がなく、所属時期を明確にできない。



第20図 15・16・17号住居跡と出土遺物



第21図 18・19号住居跡

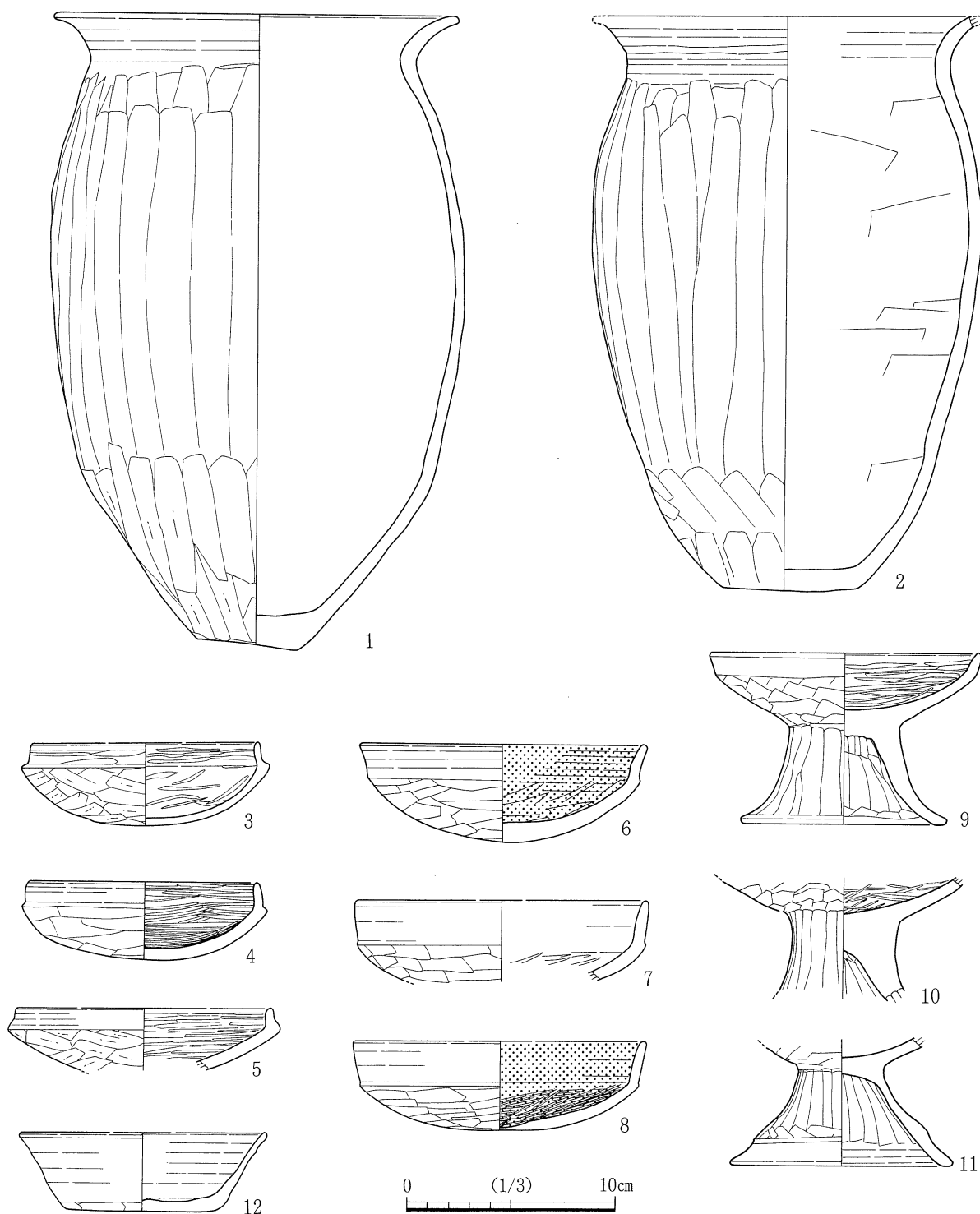
ない。床面は、張り床で総体的に軟弱で、短時間の生活空間であったことが想定できる。壁溝は、確認されたプラン内では存在することから本来は四周するものであろう。

遺物 覆土中より土師器小片若干出土するものの、器形を復元できた資料は、覆土中より出土した土師器甕1点にとどまり、遺構の帰属を明確に判断できる資料がない。

18号住居跡（第21図）

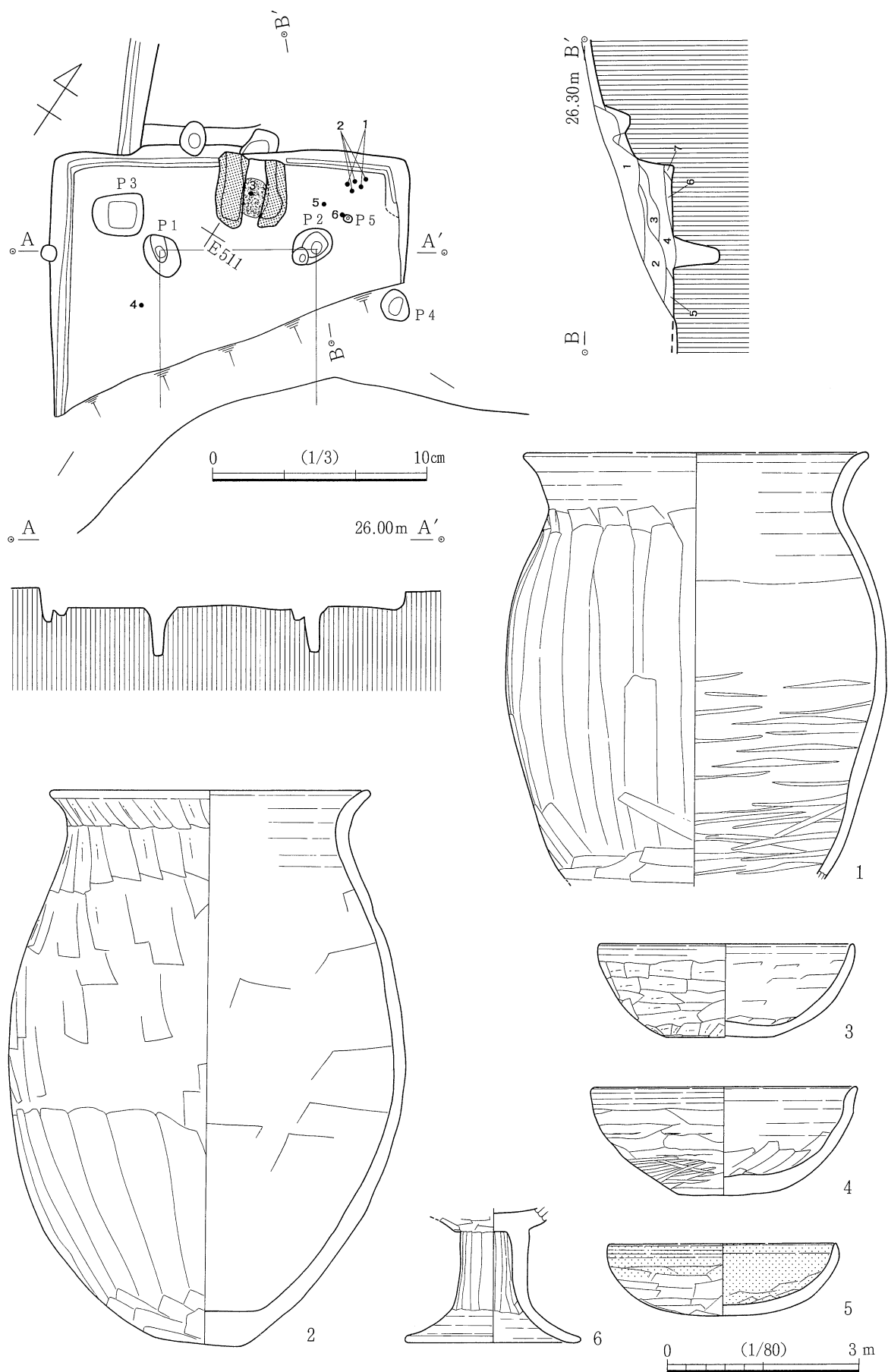
調査区東側のE5区の斜面に、西壁で15号住居跡と東南側で20号住居跡を掘り込み、プラン内に床面を僅かに掘り込む19号住居跡と複合して検出する。遺存状況は、他の住居跡と複合し、攪乱により南壁および床面を大きく削平され不良である。規模は、主軸長が不明だが副軸長4.7mを測る。平面形は、均整の取れた方形プランが想定できる。主軸方位は、 $N-26^{\circ}-W$ を指向する。残存壁高0～96cm。Pitの深さは、P1-62cm・P2-46cm・P3-45cm・P4-36cm・P5-62cm・P6-41cm・P7-20cmを測り、支柱穴はP1・P2・P3・P4の4穴である。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、良好に遺存する。床は、中央に19号住居跡が掘り込んでおり顕著な硬化面は確認されないが、他は張り床されほぼ平坦である。壁溝は調査範囲内では検出されたことから本来は四周するものであろう。

覆土土層A-A' 1層、旧表土。2層、黒褐色で旧表土を含む。3層、黒褐色土で多量のローム粒・小ロームブロック状を含む。4層、暗茶褐色土でローム粒・小ロームブロックを含む張り床土層であ



第22図 18・19号住居跡出土遺物

る。5層、黒褐色土に少量のローム粒を含む。6層、褐色土で多量のローム粒・小ロームブロックロームを含む。7層、褐色土で少量のローム粒・褐色土をブロック状に含む。8層、黒褐色土。9層、褐色土に多量のロームブロック土に褐色を含む。10層、褐色土にロームブロック土。11層、黒褐色土に多量のロームブロックを含む。12層、暗茶褐色土にローム土を含む。13層、黒褐色土に多量のローム粒・小ロームブロックとカマド構築土の白色粘土粒を含む。14層、13層に焼土を含む。15層、褐色土



第23図 20号住居跡と出土遺物

に多量のローム土を含む。

遺物（第22図） 主な出土遺物は土師器甕1点・土師器坏1点である。1の甕は、カマド左袖壁よりに立てかけられ、8の坏もカマド左袖上に据え置かれた状況で出土し、住居跡の帰属時期を示す資料である。

19号住居跡（第21図）

調査区東側E5区斜面に、18号住居跡のプラン内に床面を僅かに掘り込み位置し、南側壁および床面を大きく削平され検出する。規模は、主軸長が不明だが副軸長3.3mを測る。平面形は、各壁辺が同張りする方形プランが想定できる。主軸方位は、N-34°-Wを指向する。残存壁高0~60cm。Pitの深さは、P7-20cmを測り、主柱穴は認められない。カマドは北壁のほぼ中央に設けらる。床面は凹凸が目立つものの全体に踏み締められている。壁溝は、北と西壁辺に存在するが、東壁では不明である。

遺物（第22図） 主な遺物は、覆土中より出土した土師器甕1点・土師器模倣坏3点・土師器坏2点・土師器高坏3点・ロクロ土師器坏1点がある。遺物は、床面よりやや浮いてカマド寄りの覆土中焼土中などから検出し、廃棄遺物と考えられ住居跡の帰属を示す資料とは断定できない。

また、18・19号住居跡の複合関係は、土層状況からやや時間差を持ち、18号住居跡が古いと判断される。19号住居跡の覆土中出土の遺物の中には8の土師器坏とほぼ同時期の物が存在することから、断定はできないが19号住居跡覆土出土遺物は、二次的な廃棄遺物と判断される。

20号住居跡（第23図）

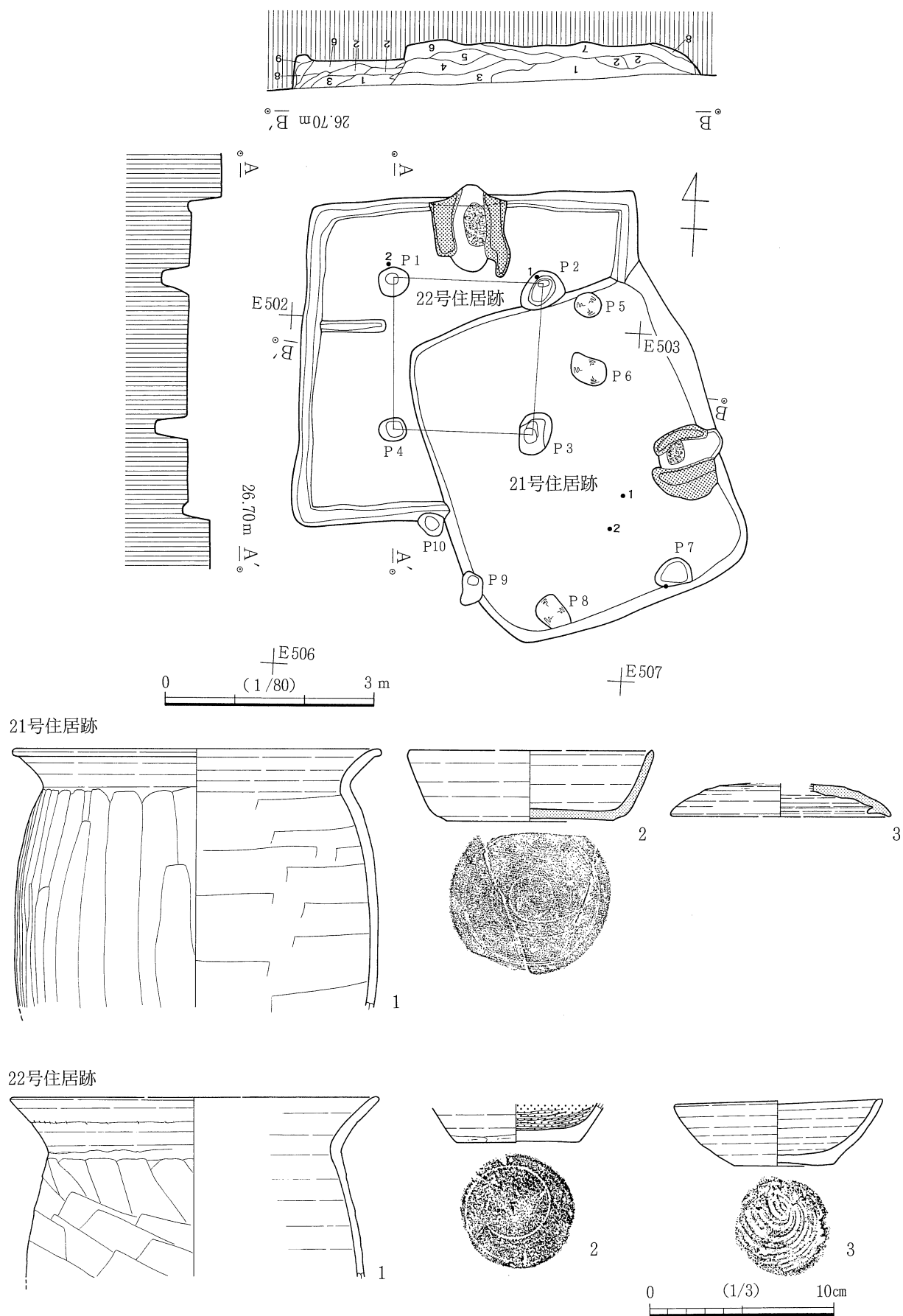
調査区東側のE5区の斜面に位置し、西壁を18号住居跡に掘り込まれ、南・西・東の壁および床面を大きく削平され検出する。規模は、主軸長が不明だが副軸長4.95mを測る。平面形は、均整の取れた方形プランが想定できる。主軸方位は、N-31°-Wを指向する。残存壁高0~84cm。Pitの深さは、P1-64cm・P2-65cm・P3-59cm・P4-38cm・P5-26cmを測り、主柱穴はP1・P2の2穴を検出し、4穴の構造を示している。P3は、プラン西北隅に設けられてた貯蔵穴と考えられる。カマドは北壁の中央よりやや東側に寄り設けられている。床面は、凹凸があるものの比較的固く踏み締められている。また、北東隅床面には炭化物と共に1・2の甕が押しつぶされた状況で出土している。壁溝は、北と西壁に存在するが、検出状態の良くない東では途中で途切れ不明である。

覆土土層A-A' 1層、旧表土直下のやや汚れた黒褐色でローム粒を含む。2層、褐色土に多量のローム粒を含む。3層、黒褐色土でローム粒と褐色土ブロックを含む。4層、暗黒褐色土でローム粒・小ロームブロックを含む。5層、黒褐色土に少量のローム粒と小ロームブロックロームを含む。6層、褐色土で多量のローム粒・小ロームブロック・炭化物を含む。7層、茶褐色土で少量のローム粒・ロームの混合土。

遺物（第23図） 主な出土遺物は土師器2点・土師器坏3点・土師器高坏1点、カマド燃焼部や床面から出土し、本住居跡の時期を決定する資料となる。3・4は半球状の平底で無彩の埴形坏で、6は長脚で柱状の脚部である。

21号住居跡（第24図）

調査区東側のE4・E5区のソフトローム上面を僅かに削平された平坦に位置し、22号住居跡のプラン南東を大きく掘り込んで検出する。規模は、主軸長4.05m・副軸長4.7mを測る。平面形は、隅



第24図 21・22号住居跡と出土遺物

に丸身を有し、各壁辺が同張りする横長の長方形プランを呈する。主軸方位は、N-67°-Eを指向する。残存壁高31~51cm。Pitの深さは、P 5-7cm・P 6-5cm・P 7-10cm・P 8-8cm・P 9-7cmの5穴を検出するもすべて僅かに落ち込む程度で、主柱穴は認められない。カマドは東壁の中央よりやや南に設けられ、上部構造は既に崩壊し、燃烧部位置はやや壁面よりやや離れた床面側に位置する。床面は、凹凸があり踏み締められた状況も無く、張り床面が剥がされた状況を呈している。壁溝は無い。

覆土土層B-B' 1層、黒褐色土で多量のローム粒を含む。2層、黒褐色でローム粒と褐色土をブロック状に含む。3層、褐色土に多量ローム粒・小ロームブロックを含む。4層、黒褐色土で多量ローム粒・小ロームブロックを含む。5層、暗褐色土で多量のローム粒を含む。6層、暗黒褐色土で多量ローム粒と小ロームブロックを含む。7層、褐色土で多量のローム粒と少量のロームブロックを含む。8層、褐色土でローム粒・ローム土の混合土。

遺物(第24図) 主な出土遺物は土師器甕1点、須恵器坏1点・須恵器蓋1点がある。2の須恵器坏は永田・不入窯跡産で八世紀後半で、3の須恵器蓋はTK217~TK46号窯期で七世紀後半の所産である。いずれも覆土混入遺物で本住居跡の時期を決定する資料とはならない。但し、22号住居跡覆土中より出土した3の底部回転糸切りのロクロ土師器坏が好資料となる。

22号住居跡(第24図)

調査区東側のE4・E5区の平坦地に位置し、21号住居跡にプラン南東側を大きく掘り込まれ検出する。規模は、主軸長4.6m・副軸長4.8mを測る。平面形は、均整の取れた方形プランを呈する。主軸方位は、N-2°-Eを指向する。残存壁高29~47cm。Pitの深さは、P 1-40cm・P 2-51cm・P 3-47cm・P 4-49cm・P 10-20cmの5穴を検出し、主柱穴は4穴である。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より僅かに0.15mほど張出すに過ぎない。燃烧部位置は壁面寄りに位置する。床面は、張り床され平坦で、中央がやや固く踏み締められているだけである。壁溝は調査範囲内に存在することから、本来は四周するものである。西側床面に間仕切りに伴う溝を検出し、深さ5~8cm・長さ0.95mを測る。

覆土土層、21号住居跡B-B'に同じ。

遺物(第24図) 主な出土遺物は土師器甕1点、土師器坏2点がある。1の甕が柱穴より、2の古相を程するロクロ土師器坏がほぼ床面から出土し、住居跡の帰属を決定する資料なる。21号住居跡覆土出土の2の須恵器坏は本住居跡からの混入遺物であろうか。

23号住居跡(第25図)

調査区中央東端E4・E5区より一部調査区域外に置き、南壁および床面を攪乱により削平されプランの2分の1程を検出する。推定規模は、全体を検出した西壁辺で5.1mを測る。平面形は、各壁辺が同張りする方形プランを呈するものと考えられる。カマド位置が不明で主軸方向が限定できないが、西壁辺の方位はN-12°-Eを指向する。残存壁高0~55cm。Pitの深さは、P 1-42cm・P 2-45cm・P 3-42cmの3穴を検出し、主柱穴は4穴を有しよう。壁溝は、西壁辺の南側3分の2から南壁辺から検出し、P 1から西壁に向かって設けられた間仕切り溝と相互に関係している状況がうかがえる。溝は、深さ8~10cm・長さ1.05cmを測る。床面には、焼土や柱部材が木炭化し、遺物と共に検出し、火災住居跡である。床面は凹凸があるもののほぼ平坦でやや踏み締められる。

覆土土層A-A' 1層、表土層。

2層、黒褐色で土地造成による客土。3層、旧表土層。4層、黒褐色土で表土直下のよごれた土層。5層、褐色土。6層、黒褐色土で褐色土をブロック状に含む。7層、褐色土で少量ローム粒とロームブロックを含む。8層、黒褐色土でローム粒・小ロームブロックと少量の焼土粒を含む。9層、茶褐色土・黒褐色・焼土の混合土層。10層、暗褐色土・ローム粒・多量焼土・炭化物混合土層。

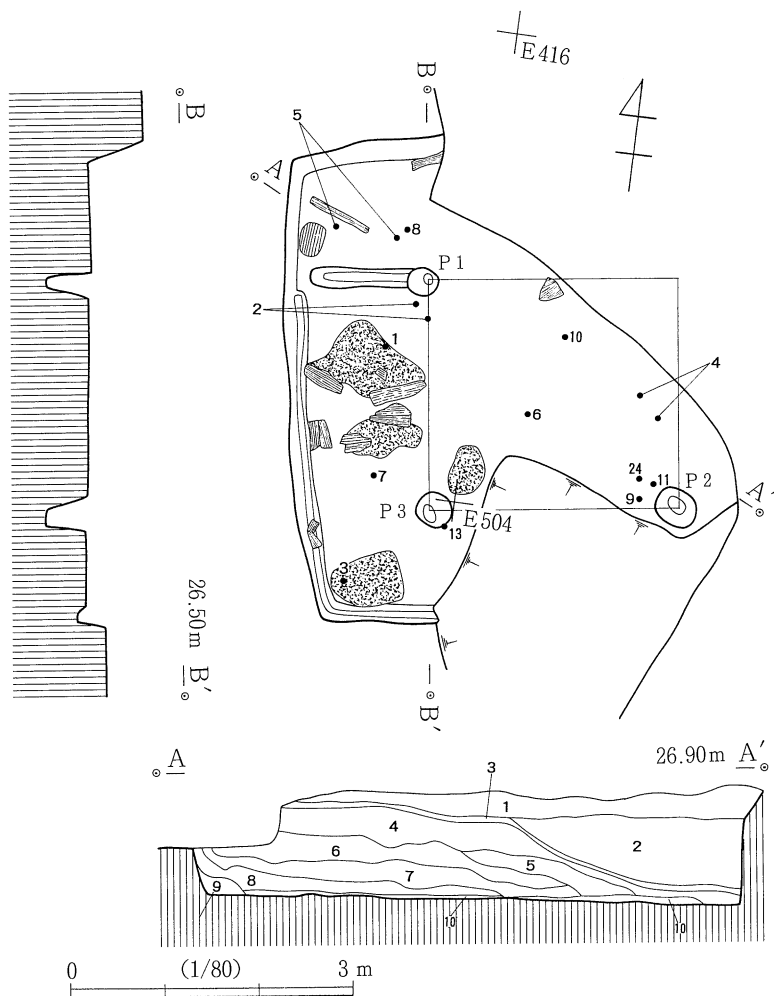
遺物（第26図） 主な出土遺物は土師器甕3点、土師器甕1点・土師器模倣坏1点・土師器碗形坏2点・土師器高坏6点がある。図指はしないものの内外面赤色された高坏が脚の破片からこの他に十数点が出土し、特異な器種構成を示す。図指した物には

24号住居跡（第27図）

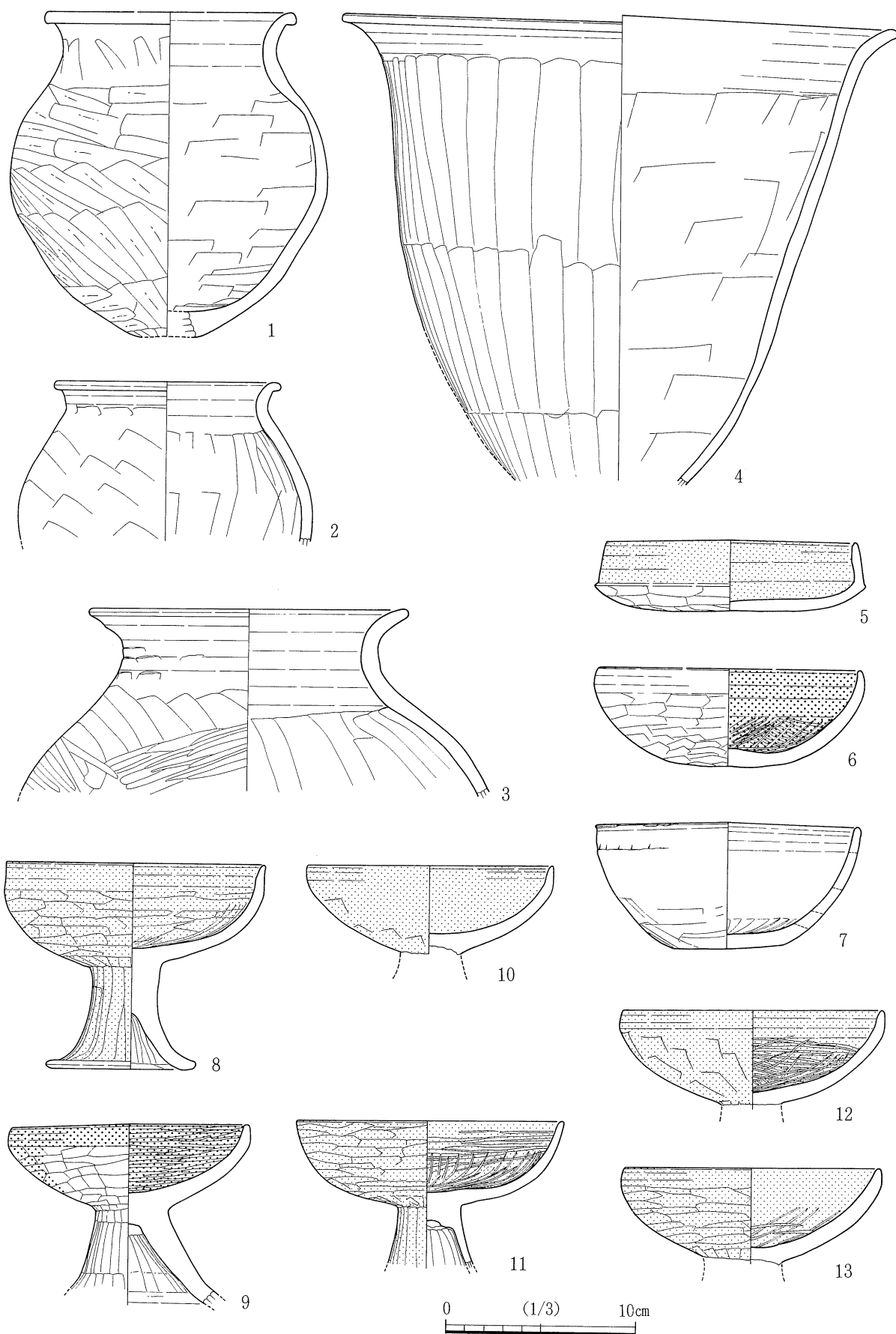
調査区中央東側E 4のソフトローム上面を僅かに削平された平坦地に単独で検出する。規模は、主軸長3.05m・副軸長3.15mを測る。平面形は、比較的均整の取れた、正方形プランを呈する。主軸方位は、N-18°-Eを指向する。残存壁高5~12cm。Pitの深さは、P 1-11cm・P 2-25cm・P 3-12cm・P 4-23cm・P 5-46cm・P 6-39cm・P 7-29cmの7穴を検出するものの、支柱穴は明らかにできない。また、P 5・P 6は梯子穴と考えられる。カマドは、北壁の中央に設けられ、袖部が壁より張出して造られ、煙道部張出長は1.05mを測る。床面は、張り床され凹凸があるものの中央は固く踏み締められる。壁溝は、東壁でやや不鮮明となるものの四周する。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土にローム粒と黒色土をブロック状に含む。2層、黒褐色土・ロームブロック土の混合土で張り床土層。

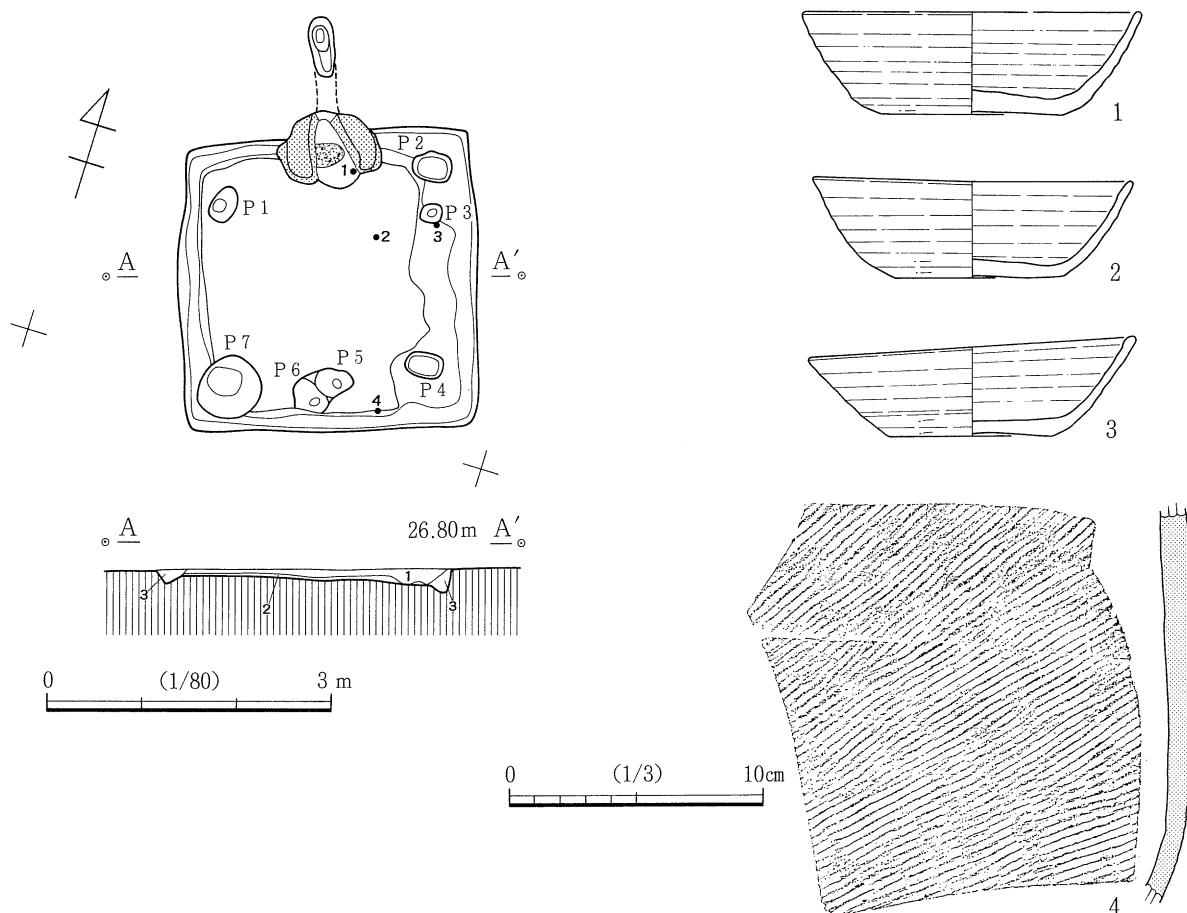
遺物（第27図） 主な出土遺物は土師器坏3点・須恵器甕片1点がある。1~3は体部下端および底部に回転篋ケズリを施すロクロ土師器坏で、4は15cm四方の須恵器大甕の破片で内面に研磨痕跡をとどめることから転用硯であろうか。1~4は床面直上やカマドからの出土ですべて本住居跡の帰属を決定する資料なる。



第25図 23号住居跡



第26图 23号住居跡出土遺物



第27図 24号住居跡と出土遺物

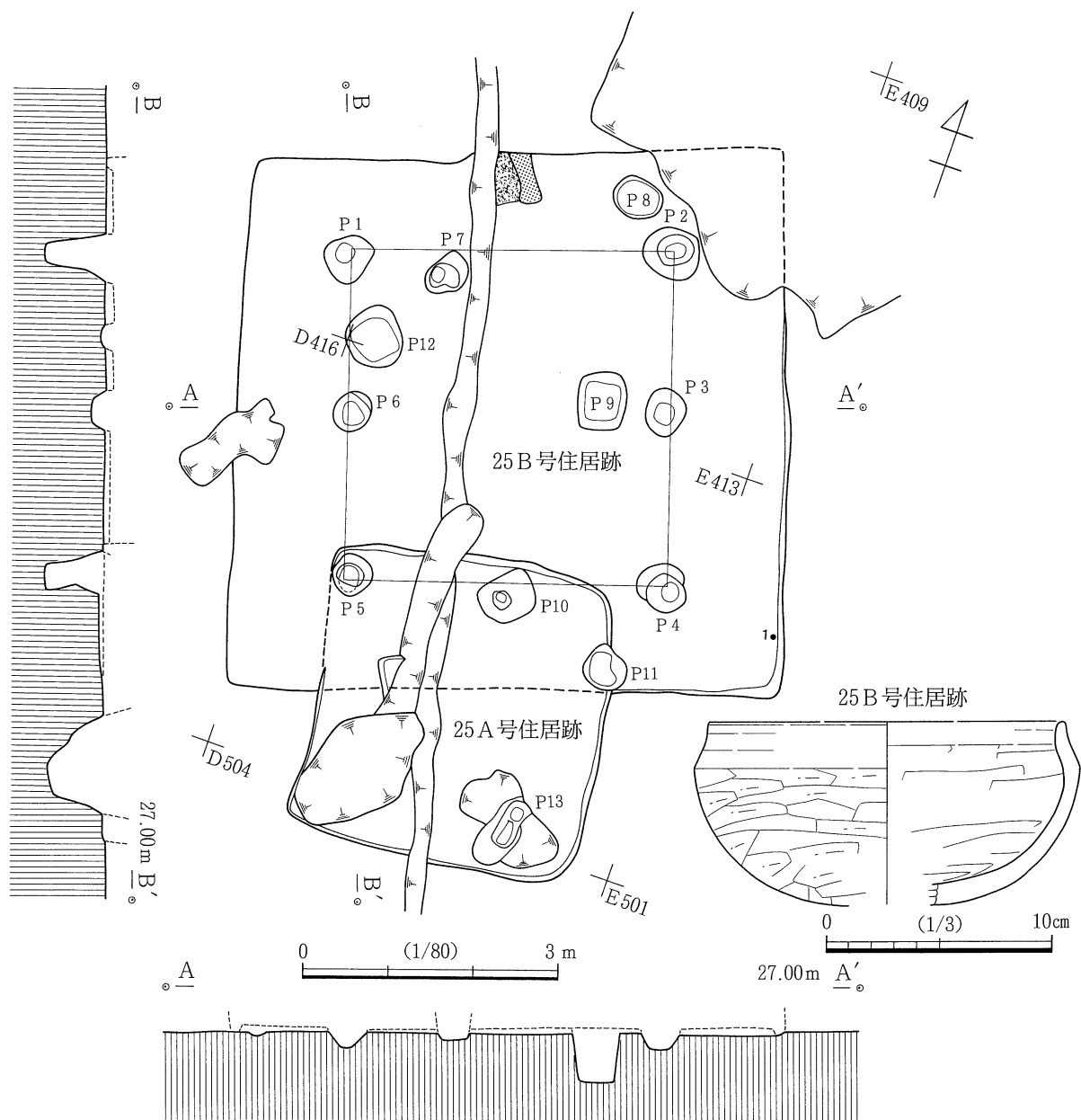
25A号住居跡（第28図）

調査区東側のD4・D5区の土地造成によりローム上面を大きく削平された地域に位置し、四辺の壁面および壁溝を大きく削平され僅かに削平を免れた床面も攪乱によって部分的に失い、プラン北側で25B号住居跡を掘り込んで検出する。規模は、長軸長3.6m・短軸長3.4mを測り、長軸を南北に置く。平面形は、各隅に丸身を有し、各壁辺が胴張りする方形を呈する。主軸方位は、カマドの位置が不明であるが、長軸でN-9°-Wを指向する。残存壁高0～5。Pitは、深さP13-37cmを測る。床面は、凹凸面を有するが、張り床され比較的固く踏み締められている。主柱穴および壁溝は、検出されない。

遺物 覆土より土師器甕片やロクロ土師器の小片を検出するものの、器形を復元できた遺物はない。ロクロ土師器坏には、回転糸切りと手持ち篋ケズリのものが存在することから、九世紀末～十世紀代の所産と思われる。

25B号住居跡（第28図）

調査区東側のD4・E4区の土地造成によりローム上面を大きく削平された地域に位置し、四辺の壁面および壁溝・床面を全て削平され僅かに壁最下端の立ち上がりが分かる程度で、南側で25A号住居跡に掘り込まれ検出する。規模は、主軸長6.5m・副軸長6.2mを測る。平面形は、均整の取れたやや縦長の方形プランを呈する。主軸方位は、N-17°-Wを指向する。残存壁高0～10cm。Pitの深さは、P1-71cm・P2-72cm・P3-19cm・P4-83cm・P5-71cm・P6-18cm・P7-38cm・



第28図 25A・25B号住居跡と出土遺物

P 8 - 5 cm・P 9 - 57cm・P 10 - 33cm・P 11 - 9 cm・P 12 - 21cmを測り、主柱穴はP 1・P 2・P 4 - 83cm・P 5 の 4 穴を基本とし、やや深さの浅いP 3・P 6 が補助的な柱穴で、6 穴と考えられる。P 10は梯子穴であろう。カマドは、北壁のほぼ中央に位置するが上部構造は削平され、痕跡だけの検出にとどまる。

遺物(第28図) 床面を全て削平されて、遺物は殆ど皆無であったが、辛うじて東壁南の壁溝と考えられる位置より土師器鉢を出土し、本住居跡の時期を決定する資料となる。古墳時代後期の六世紀後半の所産であろう。

26号住居跡(第29図)

調査区東側のE 4 の緩やかな傾斜地に位置し、1号掘立柱建物跡に掘り込まれて検出する。規模は、主軸長4.4m・副軸長4.45mを測る。平面形は、均整の取れたほぼ正方形を呈する。主軸方位は、N-

1°-Eを指向する。残存壁高は、西が高く東が低く10~43cmを測る。Pitの深さは、P 1-39cm・P 2-33cm・P 3-32cm・P 4-26cm・P 5-15cmを測り、支柱穴4穴を検出する。カマドは、北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より僅かに0.15mほど張出す。壁溝は四周するが北西隅では不鮮明となる。床面はカマドから中央部にかけて固く踏みしめられているものの全体としては軟弱で、傾斜地に占地する影響であろうか西が高く東が低く、その差0.15mを測る。

覆土土層B-B' 1層、黒褐色土にローム粒を含む。2層、暗褐色土に多量のローム粒・小ロームブロックを含む。3層、暗黒褐色土に多量の小ロームブロックを含む。4層、暗黒褐色土に多量のローム土・褐色土を含む。5層、褐色土とローム粒土の混合土。

遺物(第29図) 主な出土遺物は土師器甕2点・鉄斧1点、本住居跡の帰属を示す資料である。鉄斧はP 1に埋没し検出され、一方の刃部を欠損し、全長7.7cm、現存最大幅4.3cm、推定刃部幅4.6cm、厚さ1.5cm、重量76.5gを測る。土師器甕は薄造りで八世紀代の所産であろう。

27号住居跡(第30図)

調査区東側のE 3・E 4区の土地造成により表土ならびソフトローム面を削平された平坦地に位置し、四辺の壁面を削平され辛うじて床面を残し検出する。規模は、主軸長4.4m、副軸長4.45mを測る。平面形は、四隅に丸身を有し、各壁辺が胴張りぎみとなる方形プランを呈する。主軸方位は、N-4°-Wを指向する。残存壁高3~12cm。Pitの深さは、P 1-30cm・P 2-37cm・P 3-33cm・P 4-22cm・P 5-8cm・P 6-11cmを測り、支柱穴4穴を確認する。カマドは北壁の中央よりやや東側に設けらる。床面は、細かな凹凸は有るものの比較的平坦で中央が固く締まる。壁溝は西壁辺北半分以外に検出される。

覆土土層B-B' 1層、黒褐色土に多量の小ロームブロックを含む。2層、褐色土とローム粒土の混合土層。

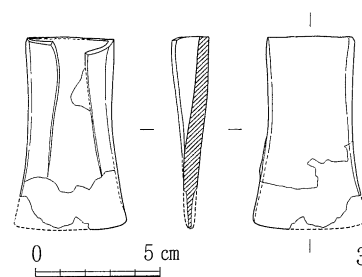
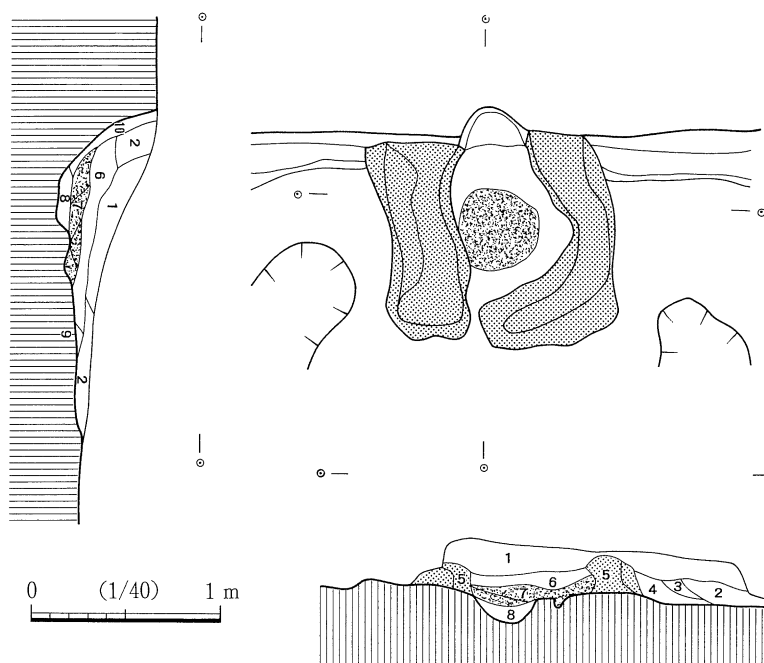
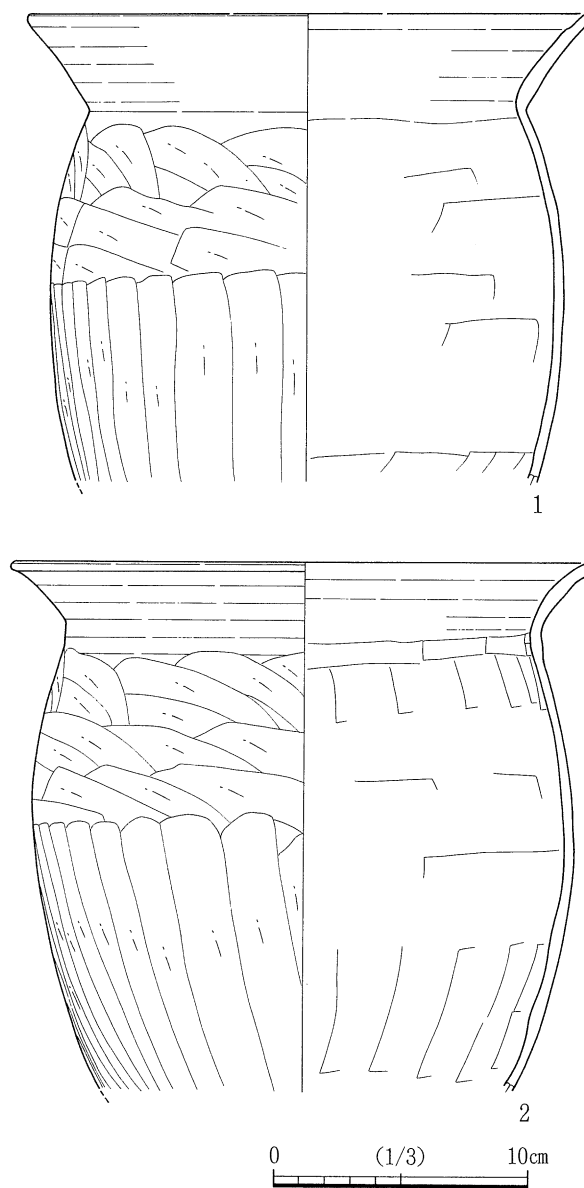
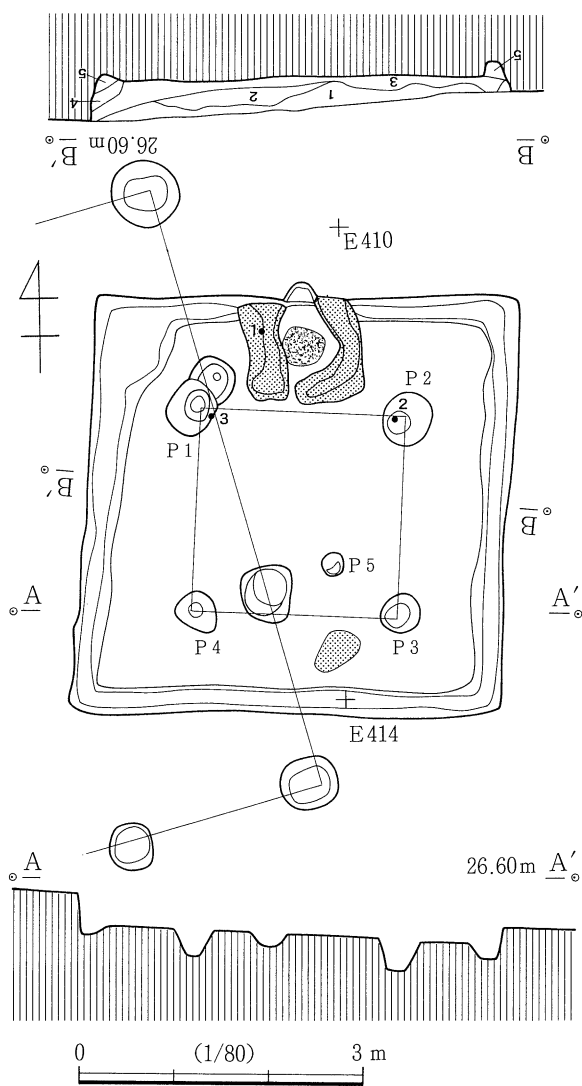
遺物 カマド覆土より土師器甕片をするものの、器形を復元できる遺物の出土が無く、帰属時期を明確にできない。

28号住居跡(第31図)

調査区東端のE 3・E 4区の緩やかな傾斜地に位置し、北側で29号住居跡を掘り込み、北東隅を削平され検出する。規模は、主軸長4.9m・副軸長4.3mを測る。平面形は、各隅が丸身を有し、壁辺が胴張りする縦長の方形プランを呈する。主軸方位は、N-1°-Wを指向する。残存壁高は、斜地に占地することから西が高く東が低く0~64cmを測る。Pitの深さは、P 1-11cm・P 2-21cmを測り、支柱穴は無い。カマドは部分的に攪乱され、北壁の中央よりやや東側寄り設けられ、煙道は壁より1.1m張り出す。床面は、凹凸が有り部分的に固く締まり、斜面に占地する地形上の影響からか西が高く東が低く、その差0.15mを測る。壁溝は削平によって失われた東壁辺の北半分以外は検出されることから、本来は四周するものであろう。

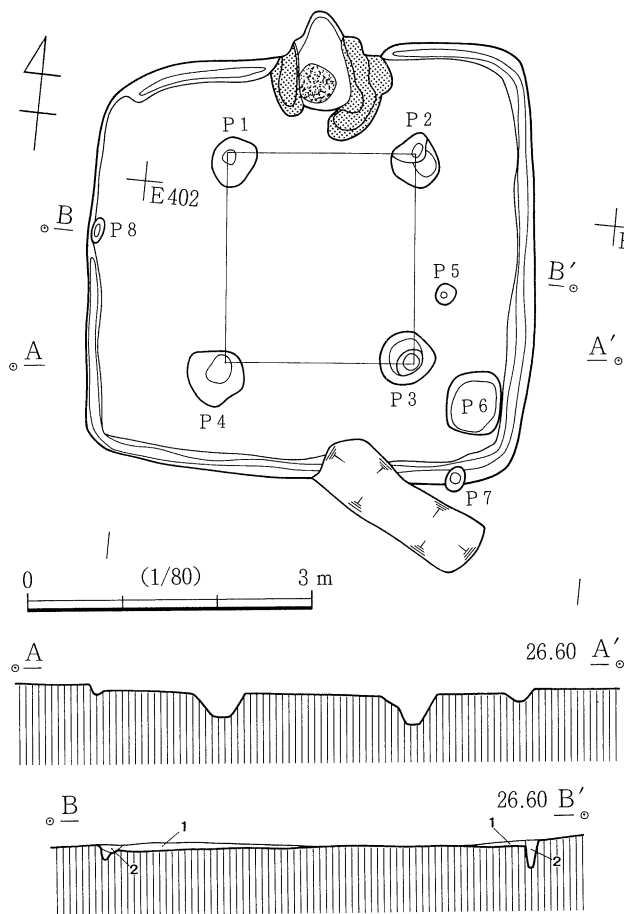
覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に褐色土をブロック状に含む。2層、黒褐色土に多量のローム粒・小ロームブロックを含む。3層、褐色土に多量のローム粒を含む。4層、暗黒褐色土でローム粒を含む。5層、暗黒褐色土に少量のローム粒と小ロームブロックロームを含む。6層、褐色土に多量のローム粒と少量の焼土粒を含む。

遺物(第31図) 主な出土遺物はカマド覆土中から出土した土師器甕2点があり、いずれも小片であ

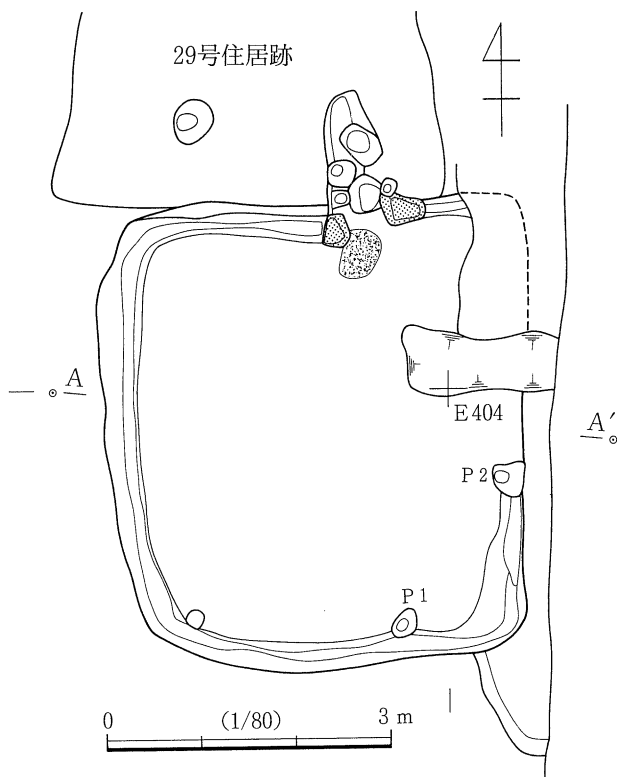


- 1層 暗茶褐色土層・ロームブロック・ローム土・山砂混入
- 2層 白色粘土と山砂混入土
- 3層 白色粘土と黒褐色土混入土
- 4層 褐色土層・山砂とローム粒土の混入土
- 5層 白色粘土
- 6層 白色粘土混入の褐色土
- 7層 焼土と焼土塊混入土に若干の木炭を含む
- 8層 ローム塊土
- 9層 ローム土
- 10層 黄褐色土層・ローム土と山砂混入土

第29図 26号住居跡と出土遺物



第30図 27号住居跡

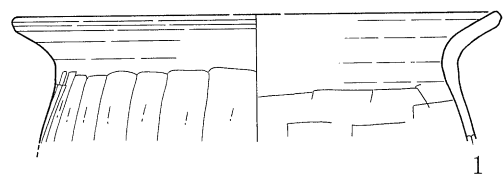


第31図 28号住居跡と出土遺物

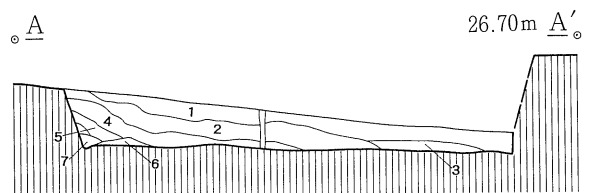
が本住居跡の帰属を示す資料となる。所属時期は明確にできないが、1の甕の特徴から奈良時代の所産と思われる。

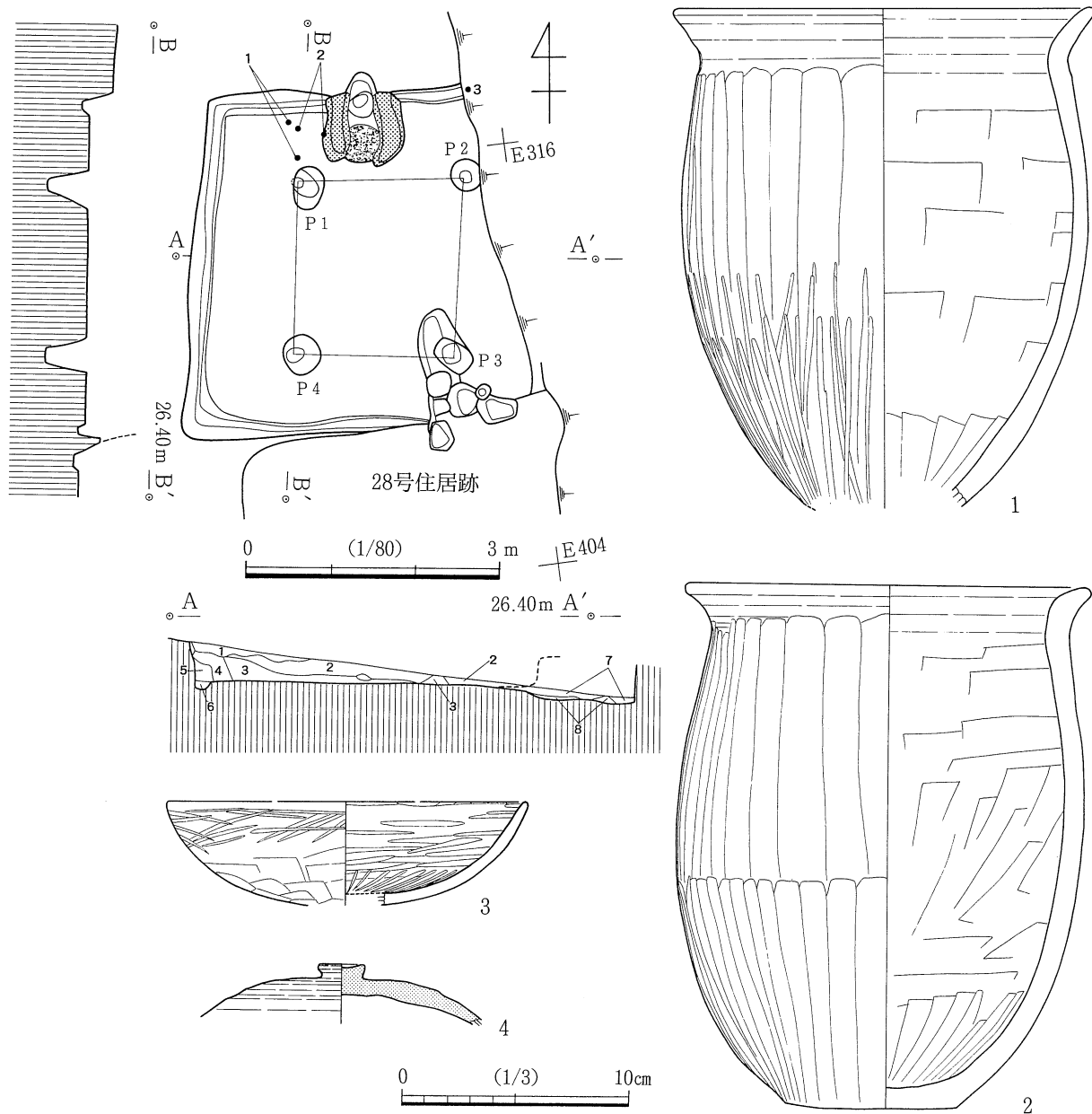
29号住居跡（第32図）

調査区中央東端のE3区の緩やかな斜地に位置し、南側で28号住居跡に掘り込まれ、東壁ならび床面を大きく削平られ検出する。規模は、主軸長4.1m、副軸現存長4.1mを測る。平面形は、確認された北・南隅および三壁辺の状況からやや歪んだ方形のプランを呈するものと思われる。主軸方位は、北壁辺と南壁辺を基準とすると $N-3^{\circ}-E$ 、西壁辺を基準とした場合では $N-9^{\circ}-E$ を指向する。残存壁高は斜地に占地することから西が高く東が低く0～55cmを測る。Pitの深さは、P1-44cm・P2-44cm・P3-52cm・P4-46cmを測り、支柱穴4穴を確認する。カマドは、北壁の中央よりやや西に設けられ、煙道部は壁より僅かに0.2m程張出



0 (1/3) 10cm





第32図 29号住居跡と出土遺物

し、燃焼部位置もやや壁面よりやや離れた床面側に位置する。床面には細かな凹凸があるものの中央が固く踏み締められており、ほぼ平坦である。壁溝は調査範囲内では検出されることから、本来は四周するものであろう。

覆土土層A-A' 1層、褐色土にローム粒と黒色土をブロック状に含む。2層、暗褐色土で多量のローム粒と褐色土をブロック状に含む。3層、暗褐色土に多量のローム粒を含む。4層、茶褐色土で多量のローム粒を含む。5層、暗褐色土で多量のローム粒を含む。6層、暗茶褐色土で多量のロームを含む。7層、茶褐色土で多量のローム土を含む。8層、黒褐色土にローム粒を含む。

遺物(第32図) 主な出土遺物は土師器甕2点、土師器坏1点・須恵器蓋1点がある。1・2の土師器甕がカマド左袖西床面より出土し、本住居跡の時期を決定する資料となる。3は半球状の坏内面に放射状暗文を施し、4の須恵器蓋は偏平なつまみを有しMT21号窯期と考えられる。

30号住居跡（第33図）

調査区東端のE3区の緩やかな斜地に位置し、プラン東側を大きく調査区域外に置き検出する。規模は、主軸長4.7m、副軸現存長4m程を測る。平面形は、東壁辺が不明だが台形状の歪んだ方形プランを呈する。主軸方位は基準により異なり、北壁とカマドを基準とするとN-20°-W、西壁を基準とした場合ではN-15°-Wを指向する。残存壁高は斜地に占地することから西が高く東が低く30~61cmを測る。Pitの深さは、P1-48cm・P2-45cm・P3-47cm・P4-48cm・P5-8cm・P6-3cmを測り、支柱穴4穴を確認するものの均整を欠き配置されている。カマド位置は、北東隅が調査区域外にあるため不明確だが北壁の中央より東に寄った位置に設けられ、煙道部は壁より0.35mほど張出し、燃焼部は壁面よりやや離れた床面側に位置する。床面は、比較的全体に踏み締められやや傾斜を有し、南西隅床面と北東床面との高低差0.1mを測る。また、西壁辺より床面側に間仕切り用の溝2条を検出する。壁溝は北壁の東と南壁東で不明瞭となる。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に少量のローム粒と褐色土をブロック状に含む。2層、暗茶褐色土でローム粒を含む。3層、黒褐色土に多量のローム粒・小ロームブロックを含む。4層、暗褐色土で多量のローム粒を含む。5層、暗褐色土層。6層、暗茶褐色土で多量のロームを含む。7層、黒褐色土で多量のローム土を含む。8層、暗黄褐色土。9層、6層に同じ。

遺物（第33図） 主な出土遺物は土師器坏3点・手づくね土器3点がある。手づくね土器は覆土中からの出土で廃棄遺物であり、4・5は内面黒色処理を施し、稜線も明瞭で立ち上りのしっかりとした須恵器模倣坏身で時期を決定する資料となる。

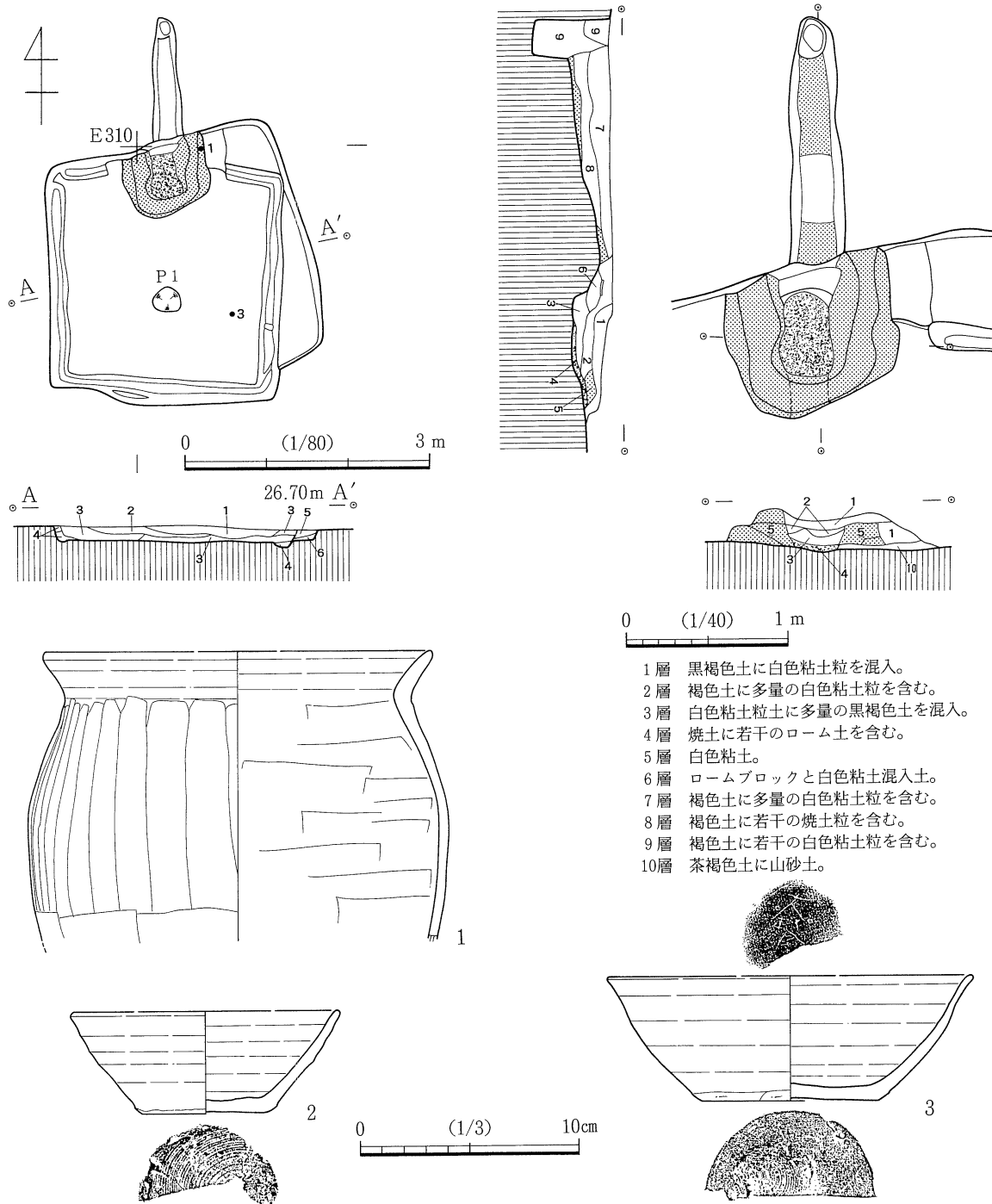
31号住居跡（第33図）

調査区東端のE3区の緩やかな傾斜地に位置し、プラン東側半分を攪乱により削平され検出する。規模は、主軸長3.4m・副軸現存長2.7mを測る。平面形は、均整を欠く方形プランを呈するものである。主軸方位は、N-7°-Wを指向する。残存壁高は斜地に占地することから西が高く東が低く0~30cmを測る。Pitの深さは、P1-15cm・P2-49cm・P3-26cm・P4-43cm・P5-31cmを測るものの明確な支柱穴は認められない。カマド位置は、北壁のほぼ中央に位置するものの左袖部を残すだけである。床面は、凹凸が有り、僅かに東側に傾斜する。また、南西隅を区画するL字形の間仕切りに伴う溝1条を検出し、区画された内側は床面より僅かに低いレベルにある。壁溝は調査範囲内で確認されることから、本来は四周するものと感取される。

遺物（第33図） 出土遺物は、口径に比して底径が小さく器高の高い底部回転糸切りのロクロ土師器坏1点が出土し、本住居跡の時期を決定する資料となる。

32号住居跡（第34図）

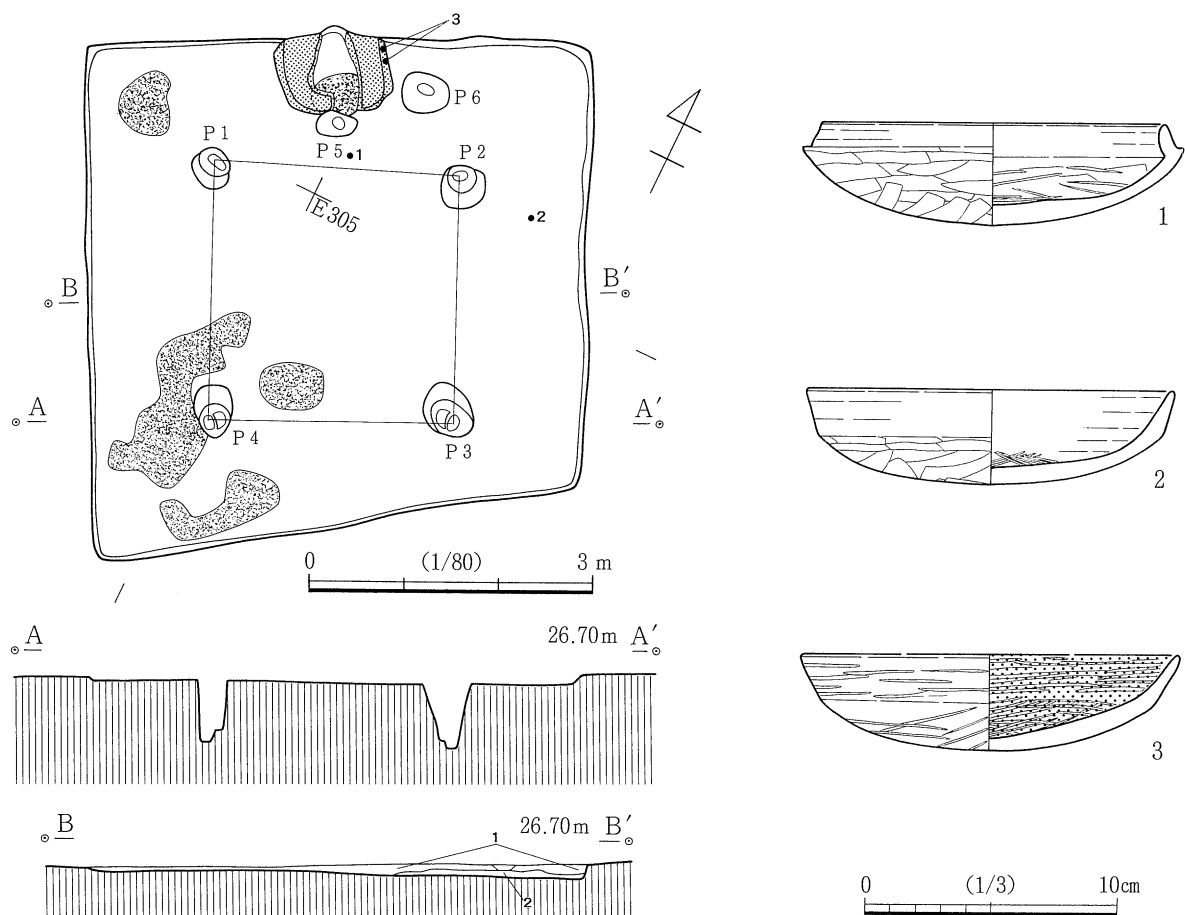
調査区東側のE3区の造成工事によりソフトローム上面を削平された地域に位置し、各壁上面を削平され検出する。規模は、主軸長3.1m・副軸長2.85mを測る。平面形は、北壁辺中央がやや膨らむものの、均整の取れた縦長の方形プランを呈する。主軸方位は、N-1°-Eを指向する。残存壁高は14~18cm。Pitの深さは、P1-8cmと床中央に窪みを検出するにとどまり、柱穴は確認されない。カマドは、北壁中央に設けられ、煙道部は壁より1.5mと大きく張出し、煙道部先端にはPitが掘られる。床面は、全体に固く踏み絞められ平坦であるがカマド周辺には細かな凹凸が見られる。壁溝はカマド両袖脇と北西隅で僅かに途切れる他はほぼ四周する。



第34図 32号住居跡と出土遺物

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に褐色土をブロックに含む。2層、暗黒褐色土に褐色土をブロック状に含む。3層、黒褐色土にローム粒と褐色土をブロック状に含む。4層、褐色土にローム粒・小ロームブロックを含む。

遺物(第34図) 主な出土遺物は、土師器甕1点・ロクロ土師器坏2点である。ロクロ土師器2点は覆土中の出土であるが本住居跡の時期を決定する資料として差し支えないものである。3の大形の体部下端および底部に回転篋ケズリを施し、僅かに糸切りを残す坏内面に焼成後に浅く細い線刻により「大□」と刻む。□は琴とも読みとれる。



第35図 33号住居跡と出土遺物

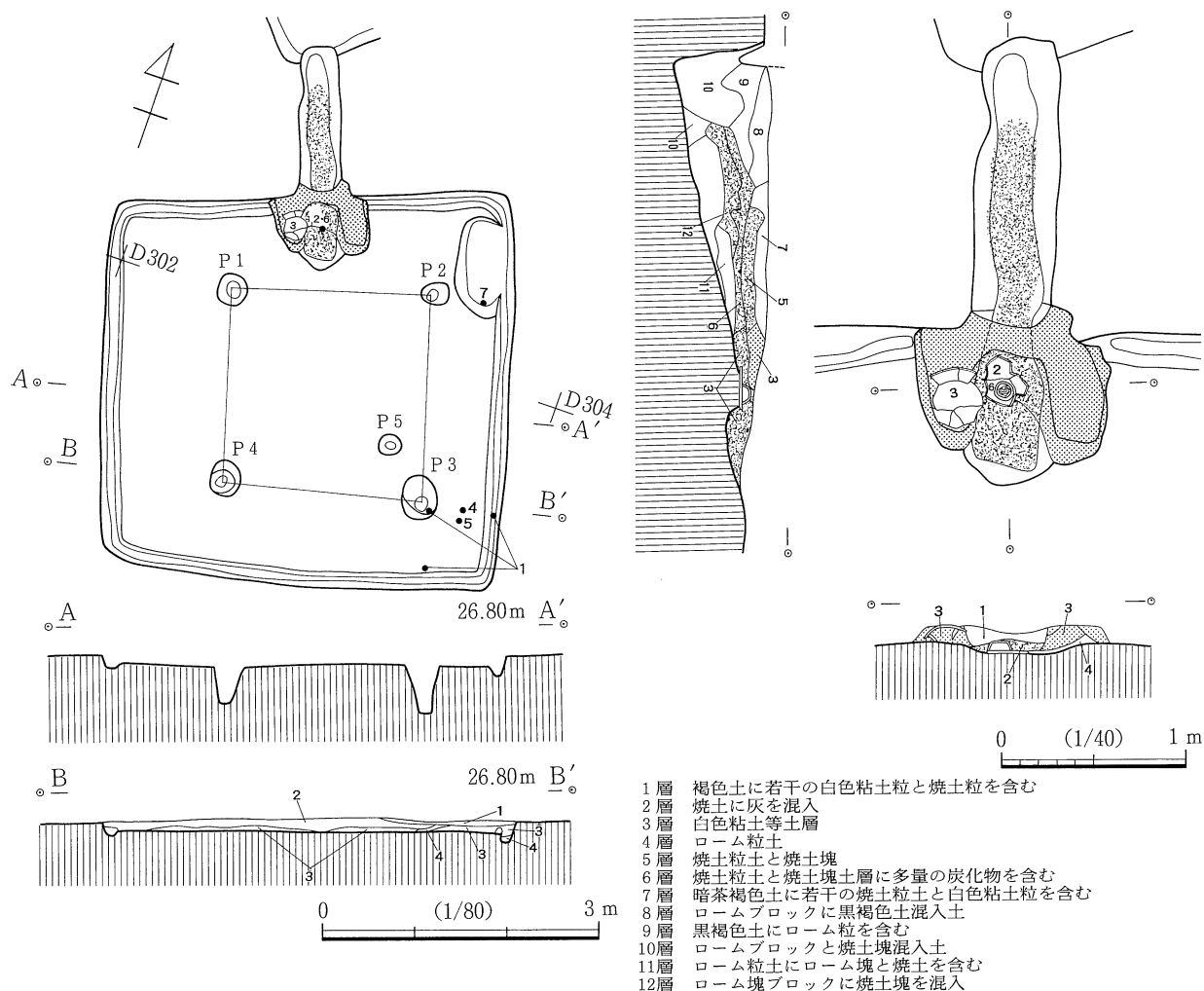
33号住居跡（第35図）

調査区東側のE3・E4の土地造成によりソフトローム上面を削平された平坦地に、各壁辺上面を削平され検出する。規模は、北壁辺長5.4m・東壁辺長4.75m・南壁辺長5.25m・西壁辺長5.55m測り、各壁辺長が異なり東壁辺が他の三辺より極端に短い。平面形は、台形を呈する。主軸方位は、N-26°-Wを指向する。残存壁高4~17cm。Pitの深さは、P1-57cm・P2-67cm・P3-68cm・P4-65cm・P5-57cm・P6-79cmを測り、支柱穴は均整を欠く配置で4穴を確認する。P6は、位置的には貯蔵穴であるものの断面すり鉢状で、柱穴の形状を呈する。カマドは、北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より僅かに張出し。燃烧部位置もやや壁面よりやや離れた床面側に位置する。床面は、平坦で固く締まり、床面上に焼土や炭化物が検出されることから火災住居跡である。壁溝は検出されない。覆土土層B-B' 1層、暗褐色土にローム粒とローム土を含む。2層、褐色土で多量のローム粒と焼土粒を含む。

遺物（第35図） 主な出土遺物は、須恵器模倣坏身1点・土師器坏2点である。床面やカマドより出土することから、本住居跡の時期を決定する資料である。

34号住居跡（第36図）

調査区D2・D3の造成によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、煙道部先端を41号住居跡に掘り込まれ検出する。規模は、各壁辺長が相違するが主軸長約4.25m・副軸長約4.45mを測る。平面形は、僅かに横長の方形プランを呈する。主軸方位は、N-17°-Wを指向する。残存



第36図 34号住居跡

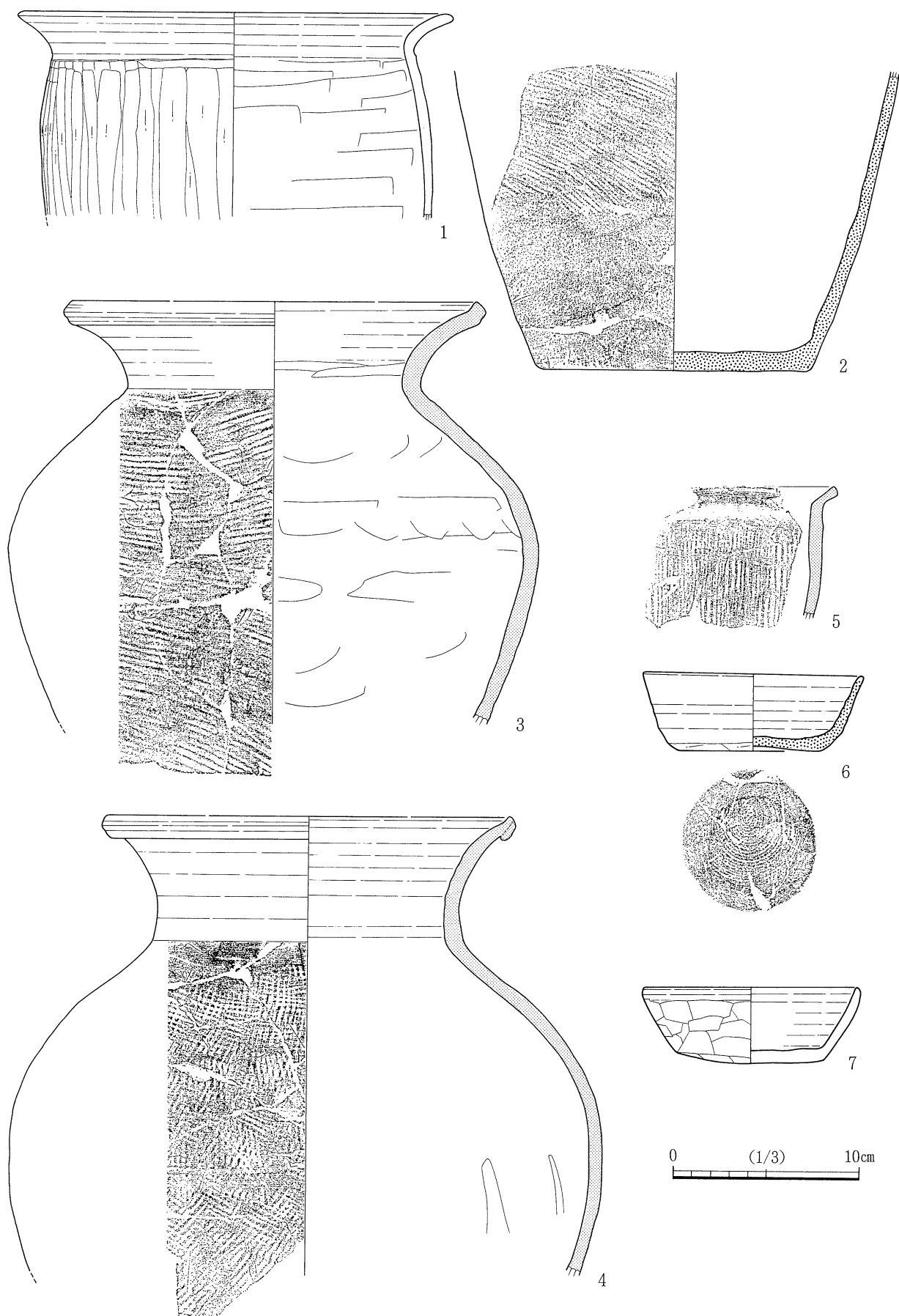
壁高7～13cm。Pitの深さは、P 1－45cm・P 2－48cm・P 3－50cm・P 4－39cm・P 5－10cmを測り、支柱穴4穴を有する。カマドは、北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より大きく張出し、長さ1.6mを測り、煙道部は外側に大きく傾斜して掘られる。カマド左袖部に補強構築材として3の須恵器壺を使用し、燃烧部では2の須恵器甕を敷きその上にゴトクとして6の須恵器环を転用している。床面は、平坦で固く締まる。壁溝は四周し検出する。

覆土土層B－B' 1層、川砂（客土）。2層、黒褐色土に多量のローム粒を含む。3層、黒褐色土にローム粒と小ロームをブロックに含む。4層、暗茶褐色土にローム質土層。

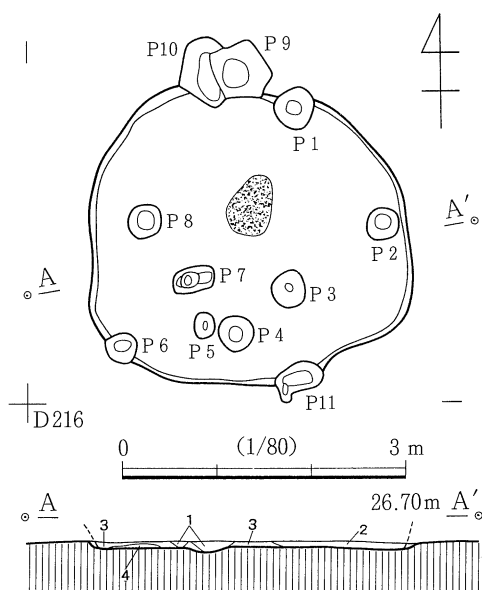
遺物（第37図） 主な出土遺物は、土師器甕1点・須恵器甕2点・須恵器広口壺3点・須恵器环1点・非ロクロ土師器环1点である。床面やカマドより出土し、本住居跡の時期を決定する資料である。須恵器は全て千葉市域を中心とする古窯跡の製品と思われる。

35号住居跡（第38図）

調査区D 2 区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、壁を大きく削平され検出する。規模は、南北長3.1m・東西長3.4mを測る。平面形は、不正な楕円を呈する。主軸方位は、支柱穴が不明な為明確に判断しかねるが、炉跡の形状および長軸からN－21°－Eを指向するとも推測できる。残存壁高4～11cm。Pitの深さは、P 1－56cm・P 2－53cm・P 3－23cm・P 4－46cm・P 5－55cm・P 6－18cm・P 7－47cm・P 8－41cm・P 9－65cm・P 10－22cm・P 11－10cmを



第37図 34号住居跡出土遺物



第38図 35号住居跡

壁内側での主軸長2.7mを測る。平面形は、縦長の方形を呈するものの、北壁内側を基準とすると横長の方形を呈する。主軸方位は、 $N-21^{\circ}-W$ を指向する。残存壁高41~60cm測り、南西側が高く北東側が低くなる。Pitは、南東隅直下に検出した1穴で深さP1-13cmを測り、主柱穴は無い。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より1.0mと大きく張出し、燃焼部の一部は壁の外側に位置する。床面には、細かな凹凸を有し、全体に締まり、中央は固く踏み締められている。壁溝は四周し

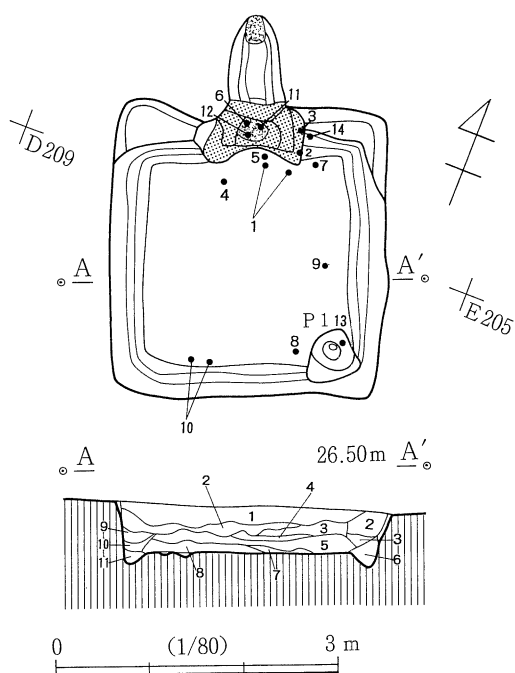
測り、主柱穴は明確にできないもののP1・P2・P4・P8が比較的深く主柱穴の可能性も残る。炉跡はほぼ中央の床面に設けられ、焼土の堆積は8cm前後を測る。床面は全体が軟弱で硬化面は認められない。

覆土土層A-A' 1層、暗茶褐色土に多量のローム粒を含む。2層、褐色土に多量のローム粒を含む。3層、黒褐色土にローム粒と小ロームをブロックに含む。4層、暗黄褐色土に少量の炭化物を含む。

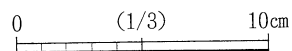
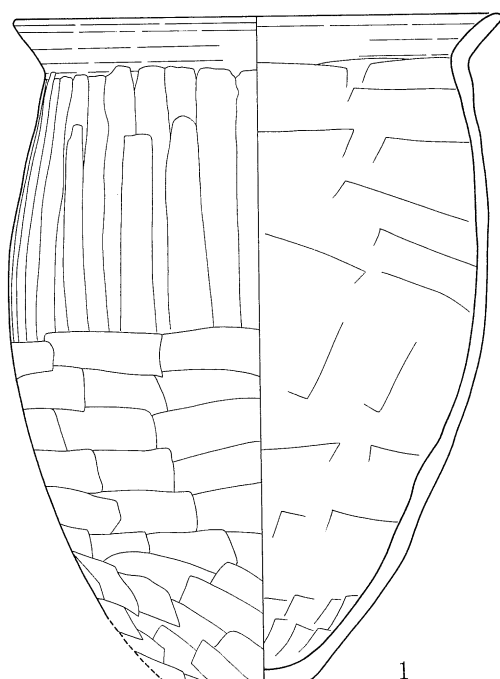
遺物(第34図) 本住居跡に伴う遺物の出土は無く、明確な帰属を判断できないが、プランの形状から弥生後期の所産と思われる。

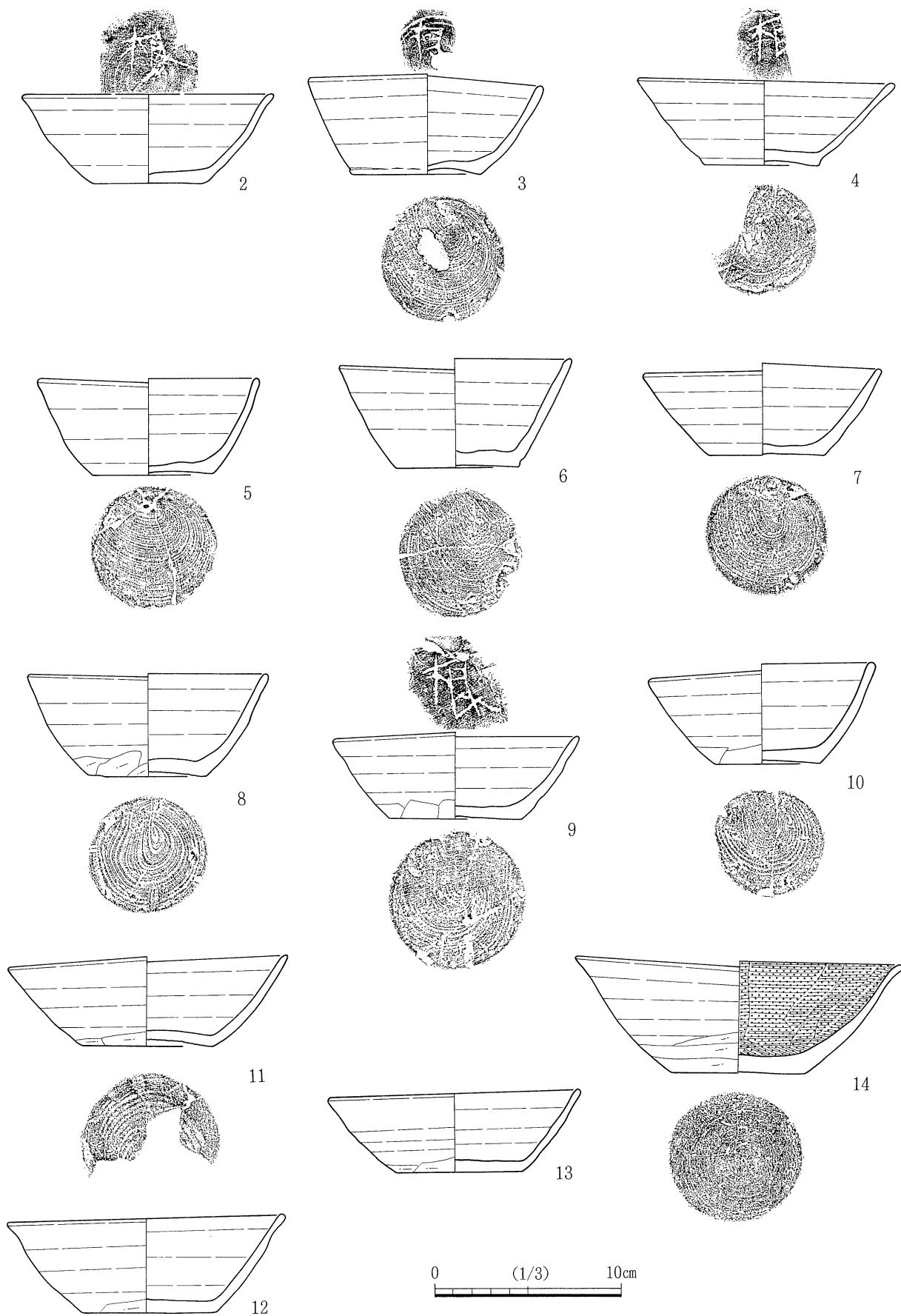
36号住居跡(第39図)

調査区北東側D2区の土地造成による影響を受けなかった緩やかな斜面より単独で検出する。規模は北壁が二段に堀り込まれ、主軸長3.0m・短軸長2.9m、北



第39図 36号住居跡と出土遺物





第40図 36号住居跡出土遺物

検出する。

覆土土層A-A' 1層、暗黒褐色土に少量のローム粒を含む。2層、黒褐色土に多量のローム粒を含む。3層、暗褐色土に多量のローム粒を含む。4層、暗褐色土に黒色土を含む。5層、暗茶褐色土にローム粒と小ロームブロックを含む。6層、暗茶褐色土に多量のローム粒を含む。7層、暗茶褐色土に炭化物を含む。8層、暗褐色土に多量のローム粒を含む。9～11層、暗黄褐色土でローム粒、小ロームブロックを主体とする土層。

遺物（第39・40図） 主な出土遺物は、土師器甕1点・ロクロ土師器13点で全て床面やカマドより出土し、本住居跡の時期を決定する資料である。ロクロ土師器13点の内14以外は回転糸切りで、2・3・4・9の4点の坏内面に焼成後の線刻により『根』を刻む。

37号住居跡（第41図）

調査区中央東側のE4区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、壁を削平され西側に39号住居跡を掘り込んで検出する。規模は、主軸長2.7m・副軸長2.95mを測る。平面形は、各隅に丸身を帯びた方形を呈する。主軸方位は、N-12°-Wを指向する。残存壁高9～11cm。Pitは、床面中央南側に深さP1-13cmを測る梯子穴と考えられるを1穴を検出するだけで、支柱穴は無い。カマドは北壁の東隅寄りに設けられ、削平された最下層の検出で痕跡を残すだけである。床面には、細かな凹凸を有し、南壁より北に延びた間仕切り用の溝1条を検出する。壁溝は検出されない。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に多量のローム粒を含む。2層、暗茶褐色土に多量のローム粒と小ロームブロックを含む。3層、暗褐色土に多量のローム粒を含む。

遺物（第41図） 覆土やカマドより土師器の小片を出土するが、器形を復元できたものは体部下端および底部に回転篋ケズリを施したロクロ土師器1点にとどまる。覆土からの出土であるが、住居跡の帰属を判断できる資料である。

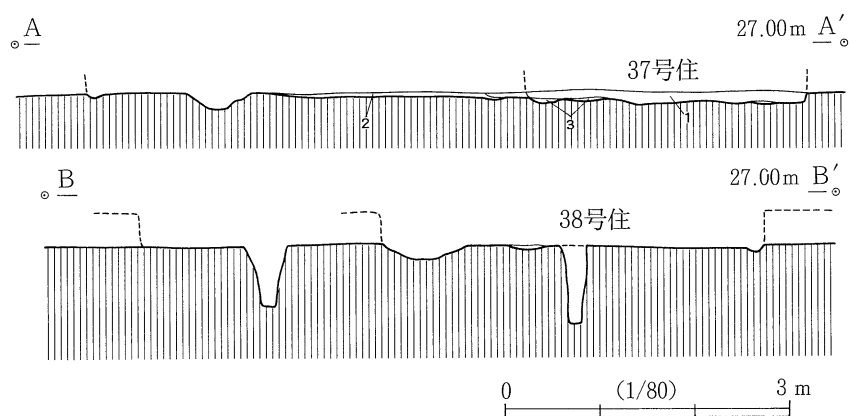
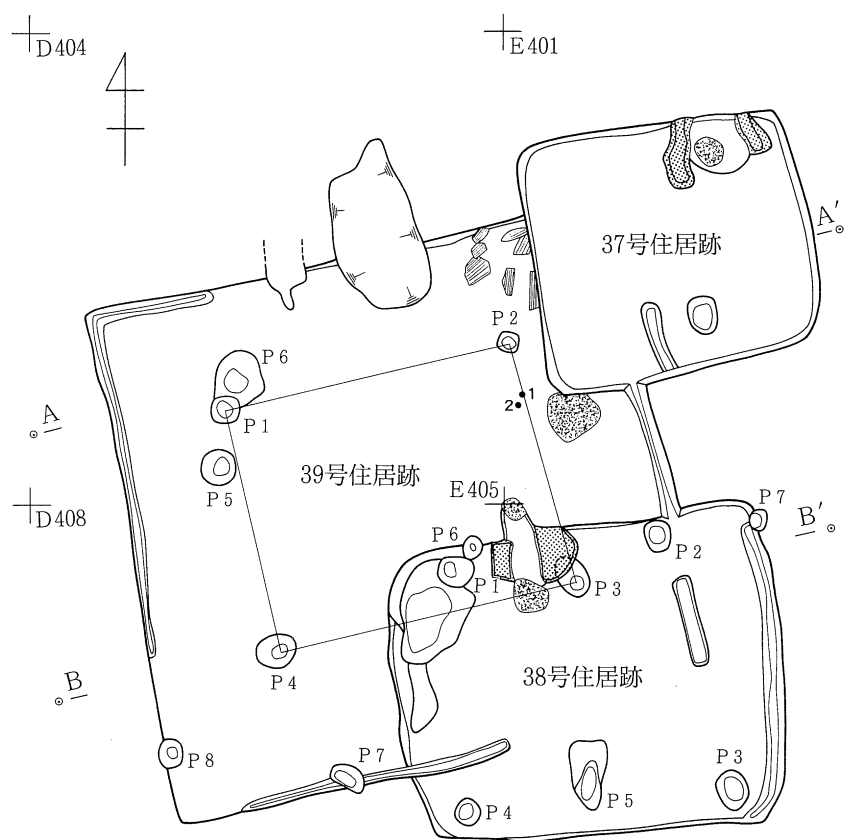
38号住居跡（第41図）

調査区中央東側のD4・E4区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、プラン壁を大きく削平され北側に39号住居跡を掘り込んで検出する。規模は、主軸長3.25m・副軸長4.1mを測る。平面形は、各隅に丸身を有し、東西の壁辺が胴張りする長方形を呈する。主軸方位は、N-7°-Wを指向する。残存壁高4～8cm。Pitの深さは、P1-13cm・P2-31cm・P3-17cm・P4-8cm・P5-26cm・P6-22cm・P7-13cmを測り、P5は梯子穴に、P1・P2・P3・P4の4穴は壁寄りに配置されているが支柱穴を構成するものと感取される。カマドは、北壁の中央よりやや西側に寄り設けられ、煙道部は壁より0.4mほど張り出す。床面は、全体に固く締まりほぼ平坦である。また、僅かながら焼土や炭化物が検出され火災住居跡の可能性はある。壁溝は東辺壁に検出される他は無い。

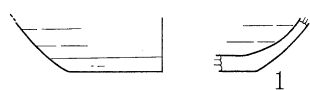
遺物（第41図） 覆土やカマドより土師器の小片を出土するものの、器形を復元できたものは体部下端および底部に回転篋ケズリを施した須恵器1点にとどまる。覆土からの出土で、住居跡の時期決定の資料とは成り得ないが、永田・不入窯跡産の須恵器である。

39号住居跡（第41図）

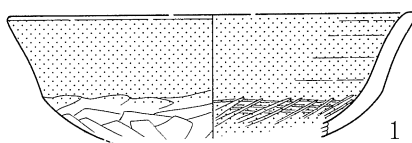
調査区中央の東側のD4・E4区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に



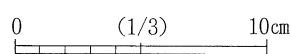
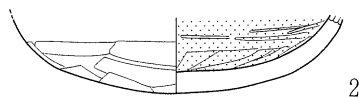
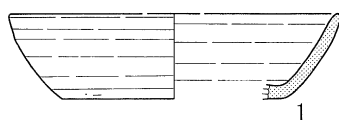
37号住居跡



39号住居跡



38号住居跡



位置し、各壁を大きく削平されプラン北東側で37号住居跡に南東で38号住居跡に大きく掘り込まれて検出する。規模は、主軸長5.65m・副軸長5.5mを測る。平面形は、均整の取れた方形を呈する。主軸方位は、 $N-12^{\circ}-W$ を指向する。残存壁高0~10cm。Pitの深さは、P1-83cm・P2-65cm・P3-87cm・P4-57cm・P5-54cm・P6-16cm・P7-15cm・P8-18cmを測り、主柱穴4穴を確認する。カマドは、北壁の中央に設けられたと思われるが僅かに燃焼部の痕跡を残すだけである。壁溝は、各壁辺に部分的に検出するだけである。床面は、南半分で削平されているものの、辛うじて削平を免れた東北床面から焼土や炭化材が検出されることから火災住居跡であろう。

遺物（第41図） 覆土より土師器小片を出土するものの、器形を復元できたものは、丸底で外反する口縁と体部に鈍い稜線を有し丹彩を施すやや大形の土師器碗形坏2点である。

第41図 37・38・39号住居跡と出土遺物

40A号住居跡（第42図）

調査区中央の東側D3・D4区の土地造成によりソフトロームを大きく削平された平坦地に位置し、壁および床面を全て削平され、主柱穴とカマド痕跡を検出するだけである。プラン内には建て替えの可能性のある40B号住居跡と複合する。規模は、主柱穴間で3.3～3.4mを測り、一辺5.5m以上の方形のプランが想定される。主軸方位は、N-9°-Wを指向する。Pitの深さは、P1-47cm・P2-52cm・P3-72cm・P4-44cm・P5-69cm・P6-58cm・P7-61cm・P8-14cm・P9-54cm・P10-13cm・P11-11cm・P12-15cm・P13-36cm・P14-89cm・P15-55cmを測る。主柱穴はP1・P2・P3・P4の4穴で、P13は梯子穴、P9は貯蔵穴であろう。カマドは、北壁の中央に僅かにその痕跡を残すロームの焼け跡がローム塊となって残るだけである。床面・壁・壁溝とも削平されている。

遺物（第42図） P3の柱穴より39号住居跡同タイプの土師器埴形坏1点を出土し、住居跡の帰属を示す資料であるが、P3は40A・40B号住居跡の主柱穴として重複しており、土師器坏の共判関係は特定できない。

40B号住居跡（第42図）

D3・D4区に位置し、40A号住居跡プラン内に、A号住居跡同様、壁および床面を全て削平され、主柱穴とカマド痕跡を検出するだけである。規模は、主柱穴間で2.7～2.8mを測り、一辺4.8m以上の方形のプランが想定される。主軸方位は、N-8°-Wを指向する。主柱穴は、P3・P5・P6・P7の4穴を確認する。カマドは北壁の中央に僅かにその痕跡を示す焼土が残るだけである。40B→40Aへの建て替え住居跡の可能性はある。

41号住居跡（第43図）

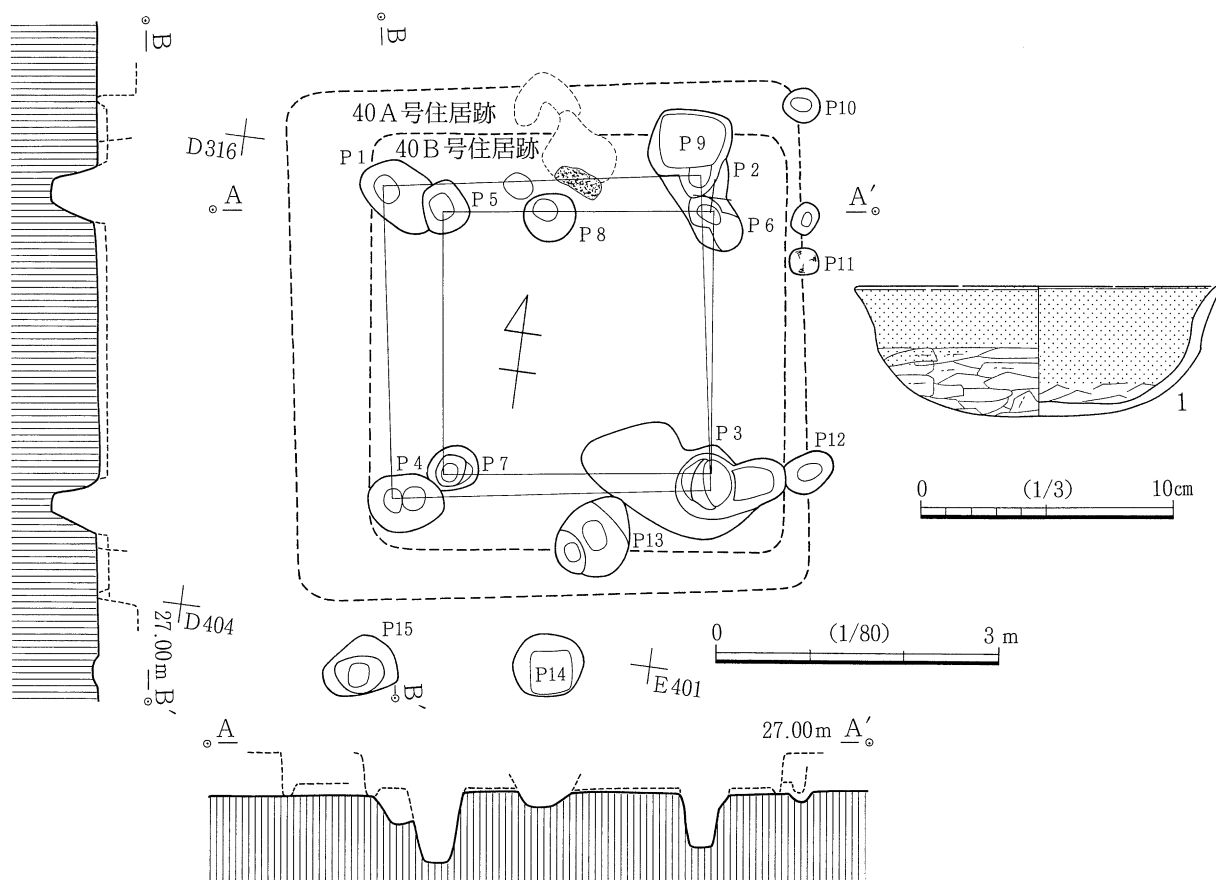
調査区北東側D2区の土地造成によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、北側で48号住居跡を南側で34号住居跡をカマド煙道部先端をそれぞれ掘り込んで検出する。規模は、各壁辺長が相違し、北壁辺長4.25m・東壁辺長3.90m・南壁辺長3.75m・西壁辺長4.05mを測る。平面形は、各隅に丸身を有するやや横長の均整を欠く方形を呈する。主軸方位は、N-36°-Wを指向する。残存壁高7～11cm。Pitの深さは、P1-47cm・P2-53cm・P3-47cm・P4-40cmを測り、主柱穴4穴を確認する。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部は三角形に壁より0.35mほど張出す。床面は、平坦で中央が固く踏み締められている。壁溝は四周して検出される。床面東に焼土の堆積が見られ、火災住居跡と感取される。

覆土土層A-A' 1層、川砂（グラウンドに引いた砂）。2層、褐色土にローム粒を含む。3層、黒褐色土に焼土粒とローム粒を混入する。4層、黒褐色土に多量焼土を含む。5層、焼土層。6層、暗茶褐色土ロームと褐色土の混合土。

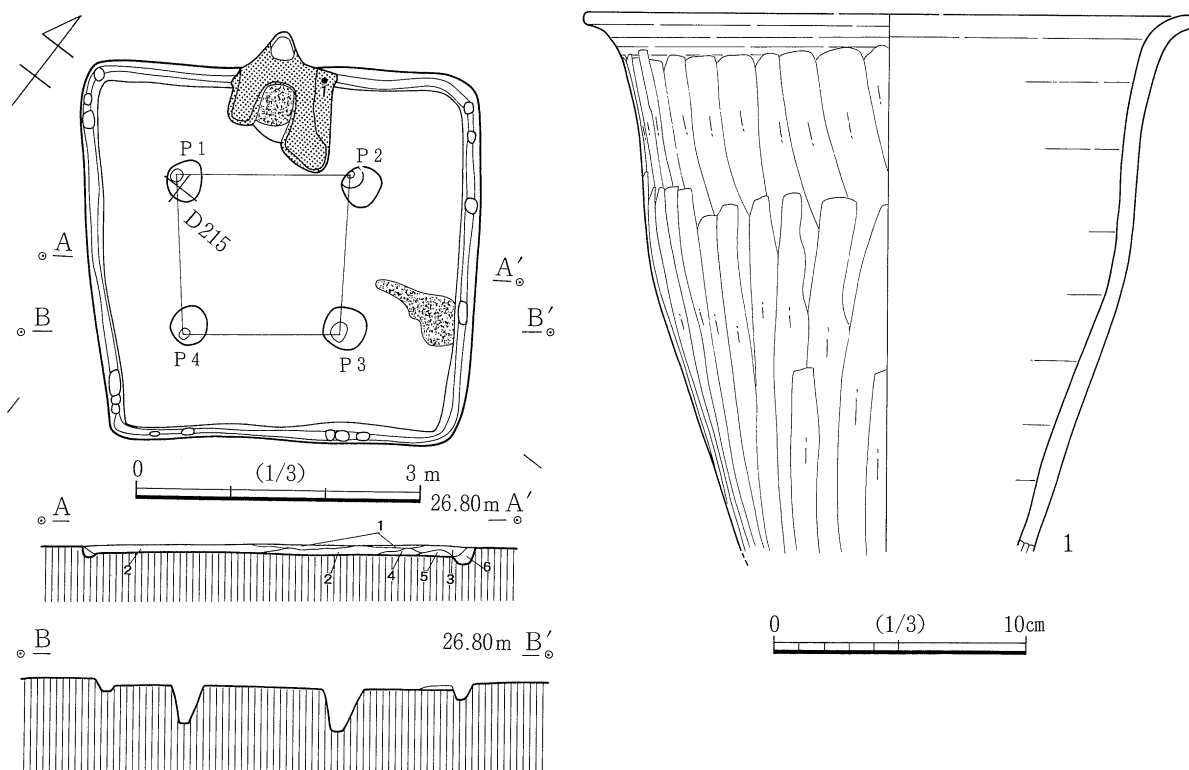
遺物（第43図） 覆土中や床面から土師器小片を出土するものの、器形を復元できたものはカマド右袖部より出土した土師器甗1点で、住居跡の帰属を決定できる資料である。口縁が大きく開き胴部が直線的であることから古墳時代後期の七世紀代の所産であろう。

42号住居跡（第44図）

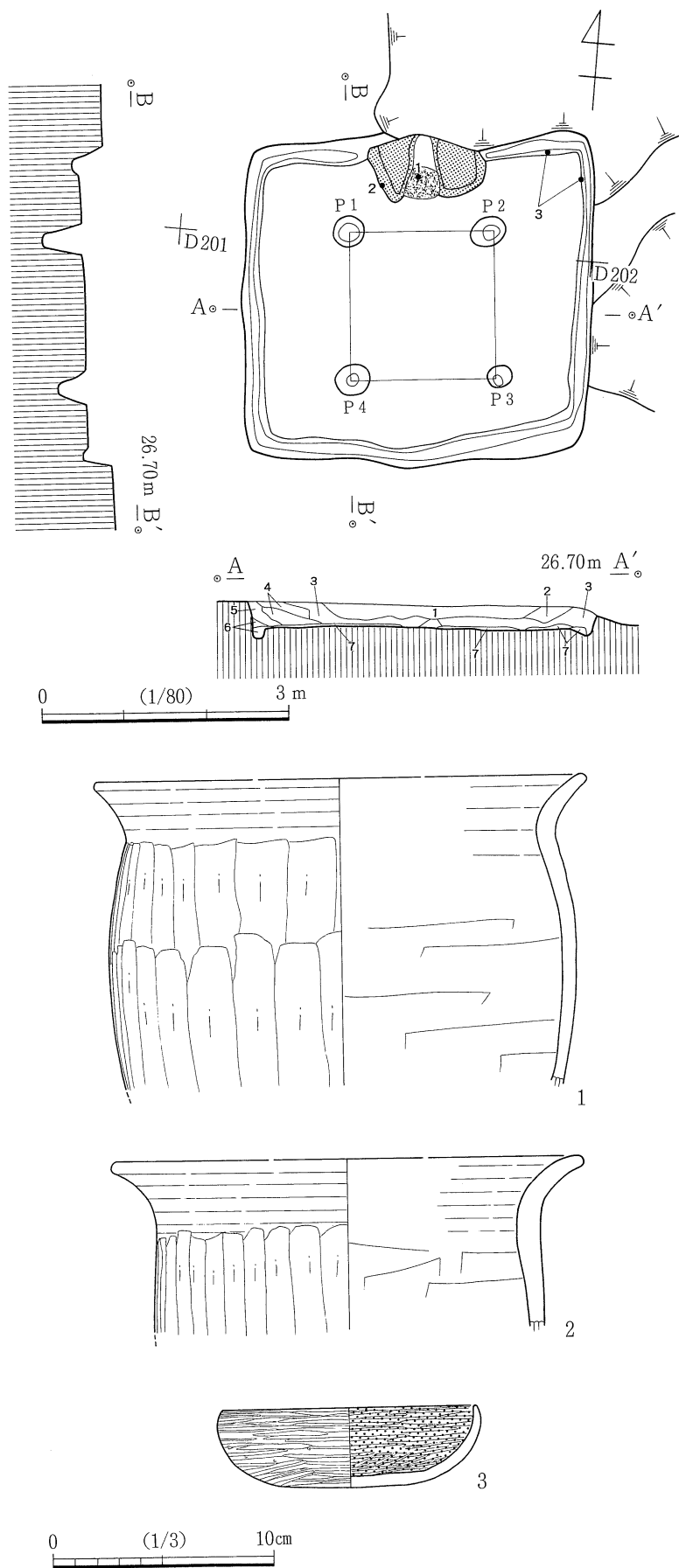
調査区北側のD1・D2区の土地造成によりソフトローム上面を僅かに削平された地域に位置し、北・東壁ならびカマド煙道部を攪乱され検出する。規模は、主軸長3.9m・副軸長4.2mを測る。平面



第42図 40A・40B号住居跡と出土遺物



第43図 41号住居跡と出土遺物



第44図 42号住居跡と出土遺物

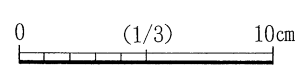
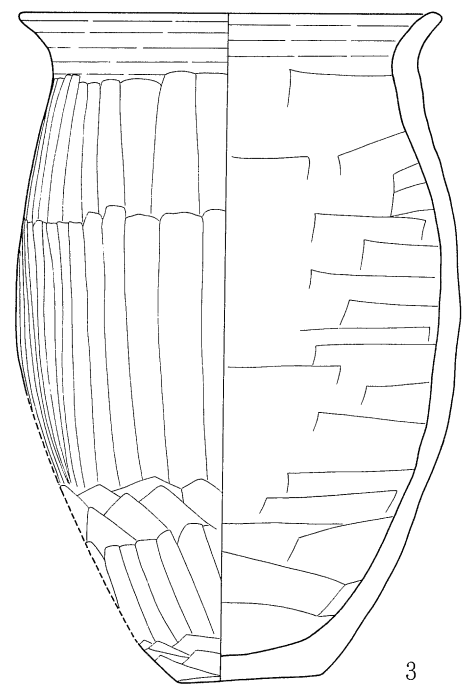
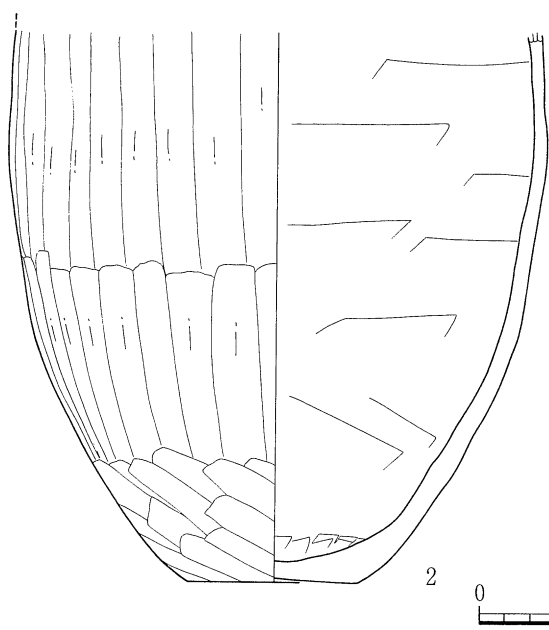
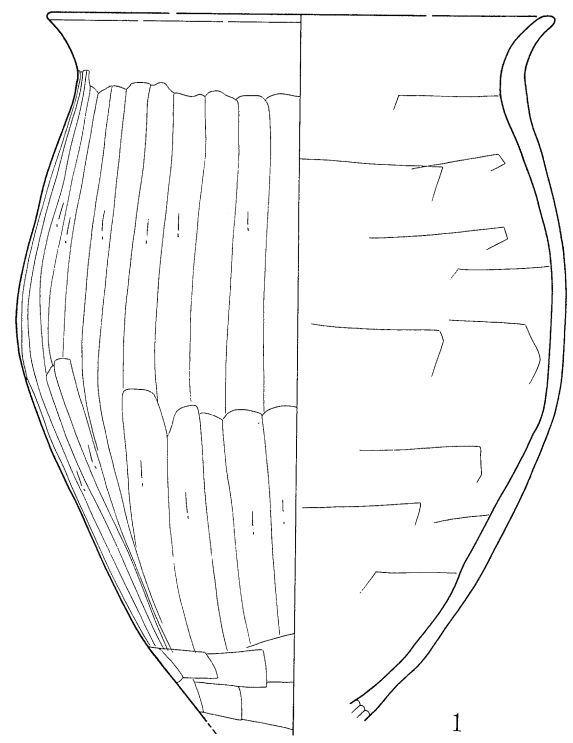
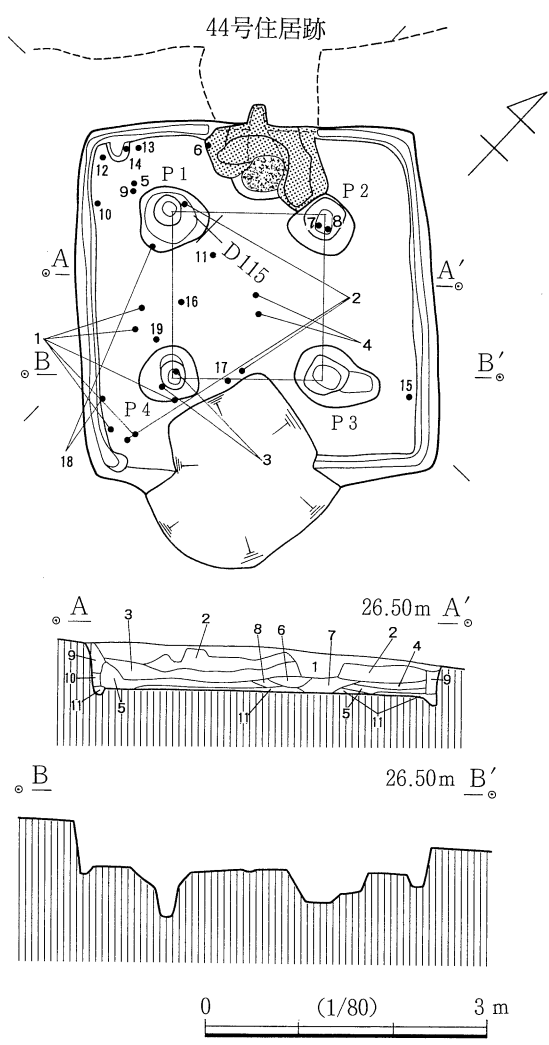
形は、やや横長の均整を欠く方形を呈する。主軸方位は、 $N-5^{\circ}-W$ を指向する。残存壁高21~29cm。Pitの深さは、P1-50cm・P2-38cm・P3-24cm・P4-32cmを測り、主柱穴4穴を検出する。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部は攪乱され張出しは不明である。床面は、細かな凹凸があるものの固く締まり、中央は特に踏み締められている。壁溝は四周し検出されるが、南壁中央で壁と共に僅かに外側に張出し、プランに均整を欠いている。

覆土土層A-A' 1層、暗黒褐色土に若干の褐色土ブロックを含む。2層、黒褐色土に多量のローム粒と褐色土を含む。3層、黒褐色土に多量のローム粒を含む。4層、褐色土にローム粒と褐色土ブロックを含む。5層、暗褐色土に多量のローム粒を含む。6層、暗茶褐色土に多量のローム粒土を含む。7層、暗茶褐色土にロームブロックを含み硬質土層。

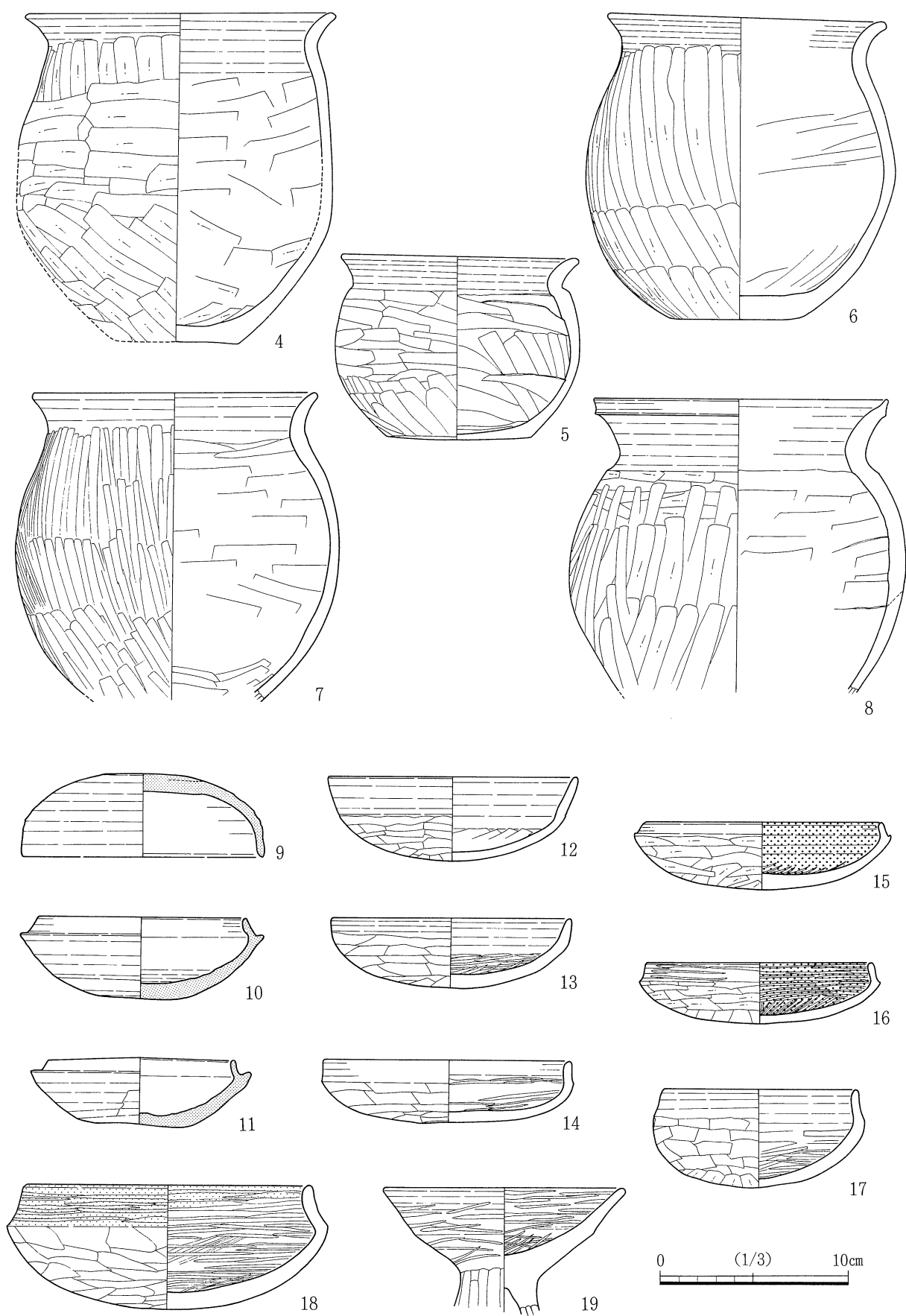
遺物(第43図) 主な遺物は床面やカマドより、土師器甕2点・土師器坏1点出土する。3点とも住居跡の時期を決定する資料である。

43号住居跡(第45図)

調査区北側のD1区の造成工事の影響を受けなかった緩やかな傾斜地に位置し、北西側で44号住居跡南西壁を張り出して設けられた貯蔵穴を掘り込み、南東壁辺を攪乱により大きく削平され検出する。



第45図 43号住居跡と出土遺物



第46图 43号住居跡出土遺物

規模は、主軸長3.7m・副軸長3.8mを測る。平面形は、均整の取れた方形を呈する。主軸方位は、N-45°-Wを指向する。壁は南西壁を大きく攪乱されるものの他は比較的良好に遺存し、斜面に占地することから南が高く北が低く、残存壁高32~48cmを測る。Pitの深さは、P1-44cm・P2-31cm・P3-33cm・P4-40cmを測り、堀方がやや大きめの主柱穴4穴を検出する。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部の張出は角状を呈し、僅かに0.2m程張り出す。壁溝は南東壁辺の南に検出されないだけである。床面は、中央に細かな凹凸を有するものの固く踏み締められるの対して主柱穴の外側床面に踏み締められた状況がまったく見られないことと対照的である。また、覆土下層に多量の焼土粒が見られることから火災住居跡であろうか。

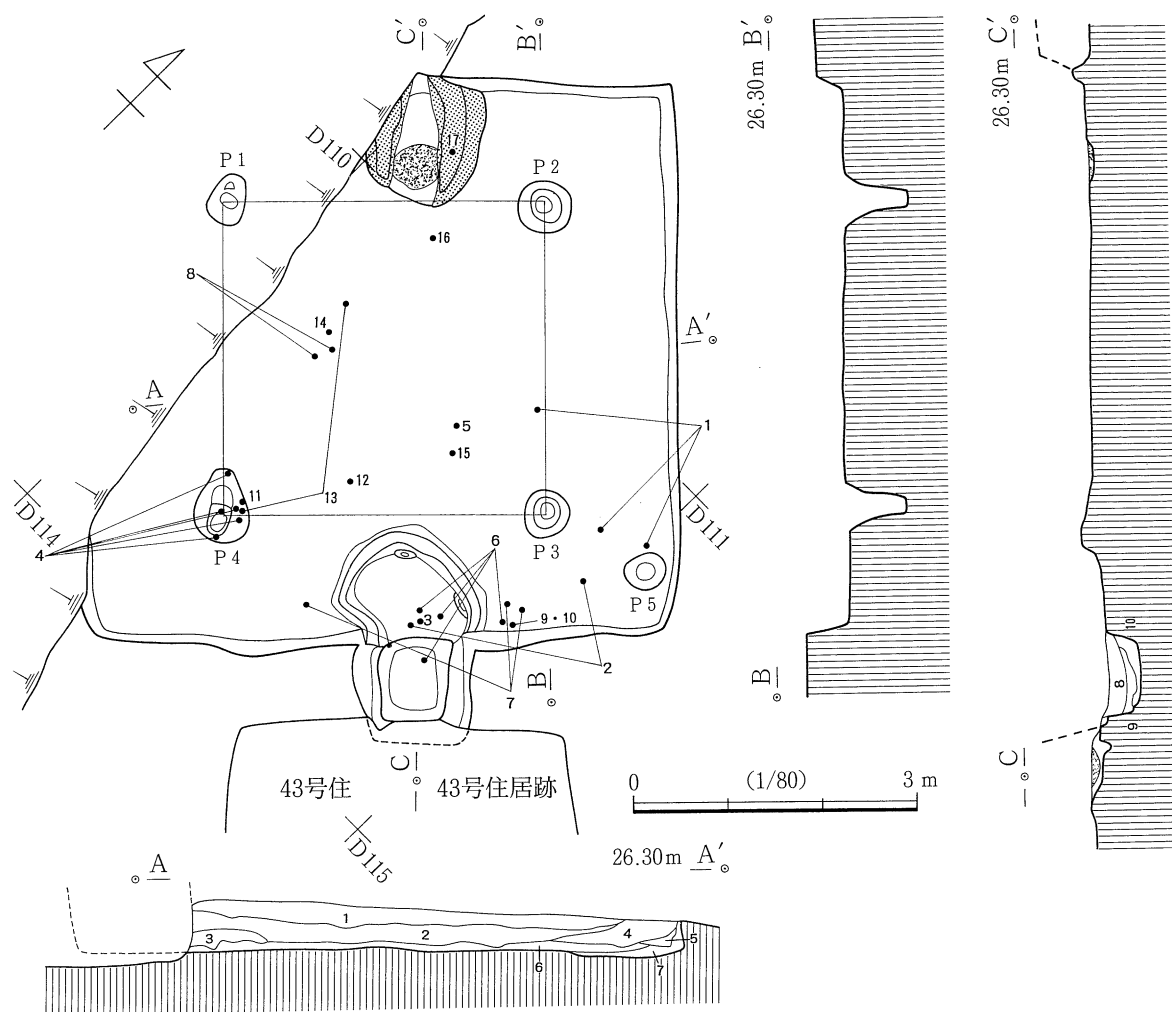
覆土土層A-A' 1層、暗黒褐色土に多量の褐色土をブロックを含む。2層、暗茶褐色土に多量のロームブロックを含む。3層、暗茶褐色土に多量のローム粒・ロームブロックを含む。4層、3層に同じ。5層、褐色土にローム粒・焼土粒・若干の灰を含む。6層、黒褐色土に多量の白色粘土を含む。7層、暗褐色土に焼土粒を含む。8層、黒褐色土にローム粒と焼土粒量の白色粘土を含む。9層、暗茶褐色土。10層、暗褐色土と黒褐色土の混合土。11層、暗茶褐色土にローム粒と小ロームブロックを含む。遺物(第45・46図) 主な出土遺物は長胴系甕3点、球胴系甕5点、須恵器蓋坏1点、須恵器坏身2点、土師器模倣坏4点、埴形坏1点、高坏1点である。14~15の模倣坏は偏平化し、口縁の立ち上がりにはやや幅があるものの短く、18の大形模倣坏の共判は古相を予測させる。19の高坏の坏は小ぶりで稜も鈍い。10・11の須恵器坏身は口径9.9から11.2cmを測り小形化し、口縁の立ち上がりも短くTK217号窯期でも古相を呈するものと思われる。

44号住居跡(第47図)

調査区北側のD1区の緩やかな傾斜地に位置し、プランの西隅と北西壁辺西半分と西南壁の大部分を攪乱で削平され検出する。規模は、主軸長6.0m・副軸長6.3mを測る。平面形は、やや横長の方形を呈し、カマドと相対する位置の南東壁辺中央に張出しの貯蔵穴を設ける。貯蔵穴の南東壁面は僅かに43号住居跡に掘り込まれ検出する。主軸方位は、N-47°-Wを指向する。壁は攪乱を受けるものの、造成工事の影響を受けなかったため比較的良好に遺存し、残存壁高30~38cmを測る。Pitの深さは、P1-55cm・P2-69cm・P3-65cm・P4-67cm・P5-21cmを測り、主柱穴4穴を確認する。カマドは北壁の中央よりやや東に寄って設けられ、煙道は僅かに張り出すものの攪乱により全体は不明である。壁溝の検出は無い。床面には細かな凹凸を有し、やや踏み締められる程度である。貯蔵穴はカマドと相対して南東壁辺中央の東に寄り張出として設けられる。確認面での張出は幅1.2m×張出長1.0mで、その中に幅0.75m・長さ0.85m・深さ0.35mの縦長の不整形のPitを設けている。また、貯蔵穴を区画する様に床面に半円形に地山のロームを掘り残した土手状の区画を有している。

覆土土層A-A' 1層、暗黒褐色土。2層、黒褐色土に少量の褐色土をブロック状に含む。3層、黒色土。4層、黒褐色土に黒色土と小ロームブロックを含む。5層、暗褐色土。6層、暗茶褐色土にローム粒・小ロームブロックを多量に含む。7層、暗茶褐色土でローム混入土。

遺物(第48・49図) 主な出土遺物は長胴系甕1点、球胴系甕5点、須恵器蓋坏2点、須恵器坏身1点、土師器短頸壺2点、土師器模倣坏1点、土師器坏5点、高坏1点である。5・6球胴系甕底部は突出の名残が見られる。15の黒色処理を施す大形の模倣坏は稜も明瞭で口縁立ち上がりも直立気味で口唇は内面に稜線を残しシャープな仕上がりである。16・17の半球状の坏は覆土中の出土で混入遺物



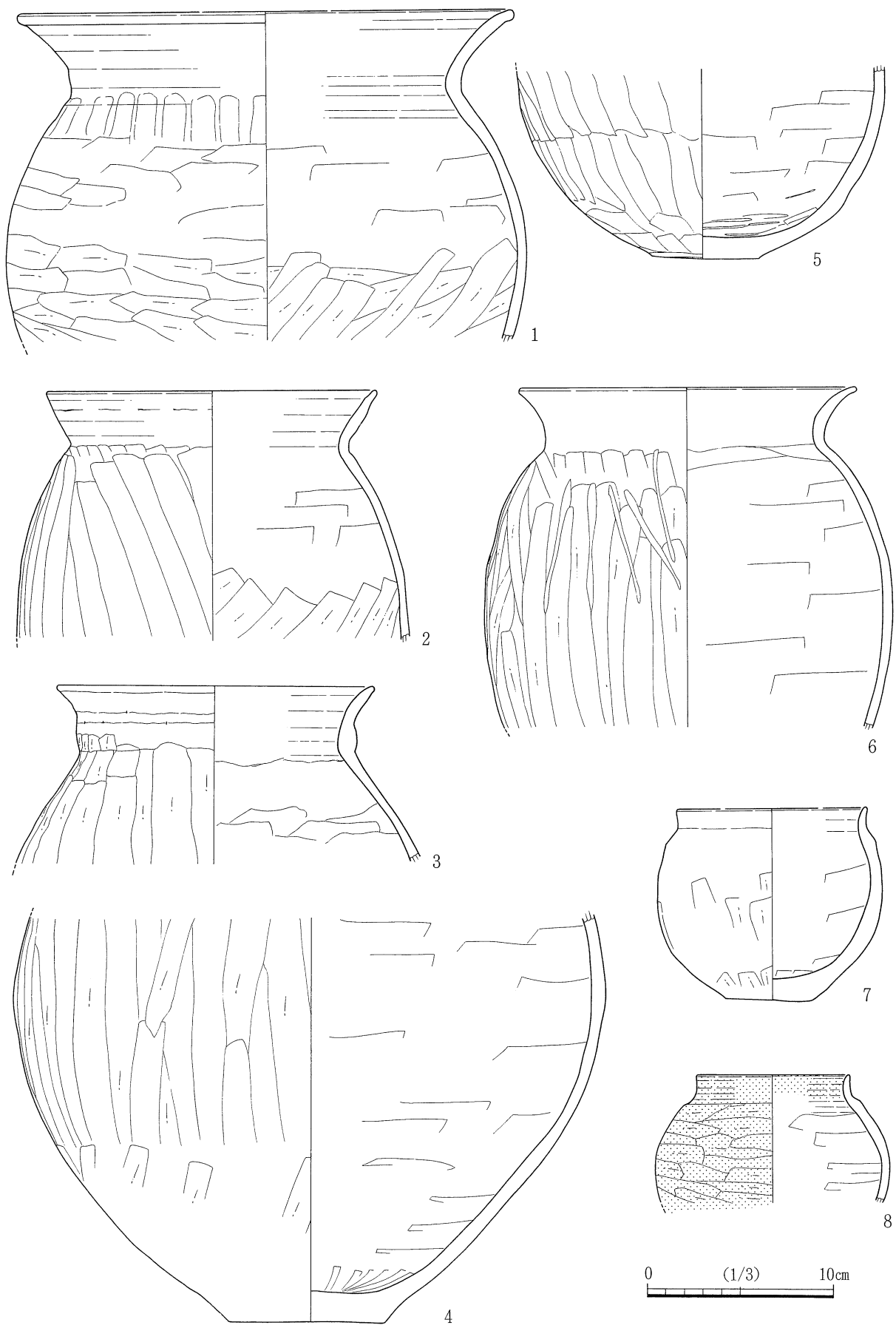
第47図 44号住居跡

と見られる。9～11の須恵器の特徴からTK10～MT85号窯期と思われる。

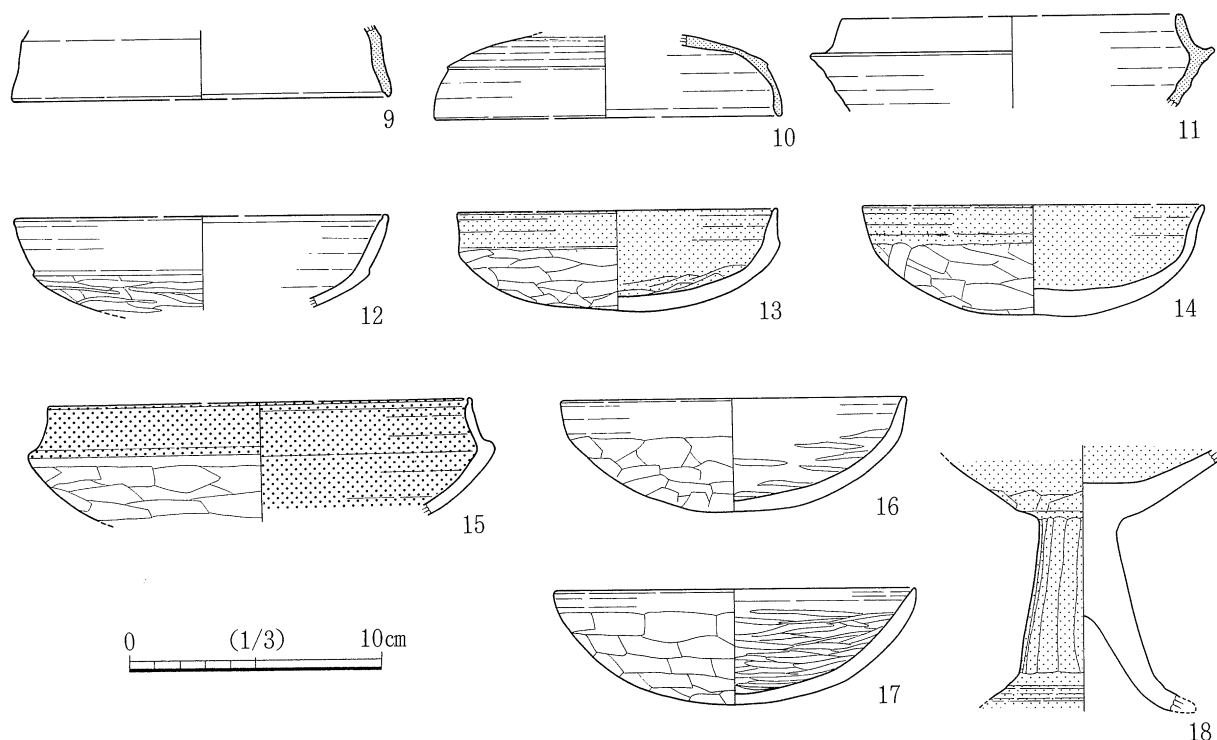
45号住居跡（第50図）

調査区北端のC1・D1区の造成工事の影響を受けなかった緩やかな斜地に位置し、東側に46号住居跡を大きく掘り込んで検出する。規模は、主軸長3.85m・副軸長3.5mを測る。平面形は、やや縦長の方形を呈する。主軸方位は、N-26°-Wを指向する。壁は南が高く北が低く、残存壁高24～51cmを測る。Pitは、床面北側にP1-36cmの1穴を検出するものの後世のPitで、支柱穴は無い。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より0.5m程張出す。床面は、全体に凹凸を有し中央が固く踏み締められているが東側では顕著な踏み締め跡は認められない。壁溝は北壁の東半分を除いて設けられる。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に少量のローム粒を含む。2層、黒褐色土に多量のローム粒を含む。3層、2層に同じ。4層、褐色土に白色粘土粒と多量のローム粒を含む。5層、暗褐色土にローム粒と小ロームブロックを含む。6層、暗茶褐色土に多量のローム粒を含む。7層、黒褐色土に少量の焼土粒とローム粒を含む。8層、褐色土に多量のローム粒を含む。9層、黒色土。10層、暗黒褐色土に多量の焼土粒とローム粒を含む。11層、褐色土に多量のローム粒と小ロームブロックを含む。12層、



第48図 44号住居跡出土遺物



第49図 44号住居跡出土遺物

茶褐色土にローム土含む。13層、黒褐色土にローム粒と小ロームブロックを含む。

遺物（第50・51・52図） 主な出土遺物には、4・7・8・9の球胴系甕4点、1・2・3・5・6の長胴系甕5点、土師器鉢1点、灰釉長頸瓶1点、須恵器蓋1点、土師器坏2点、石製紡錘車1点がある。6・10・12・13・14・15の遺物が出土状況から遺構の帰属を示す資料と判断される。それ以外の遺物は住居跡廃絶後に廃棄された遺物である。廃棄遺物中には、長胴系でも1の器肉の薄い甕や球胴系甕、二段構成の灰釉長頸瓶があり、六～九世紀代の3時期の遺物が混在する様相を呈している。遺構に伴う遺物では、12の径16.2cmを測るやや大形の須恵器蓋がMT21号窯期と見られ、13の半球状の土師器坏の内面には5～6条単位の暗文が施されている。

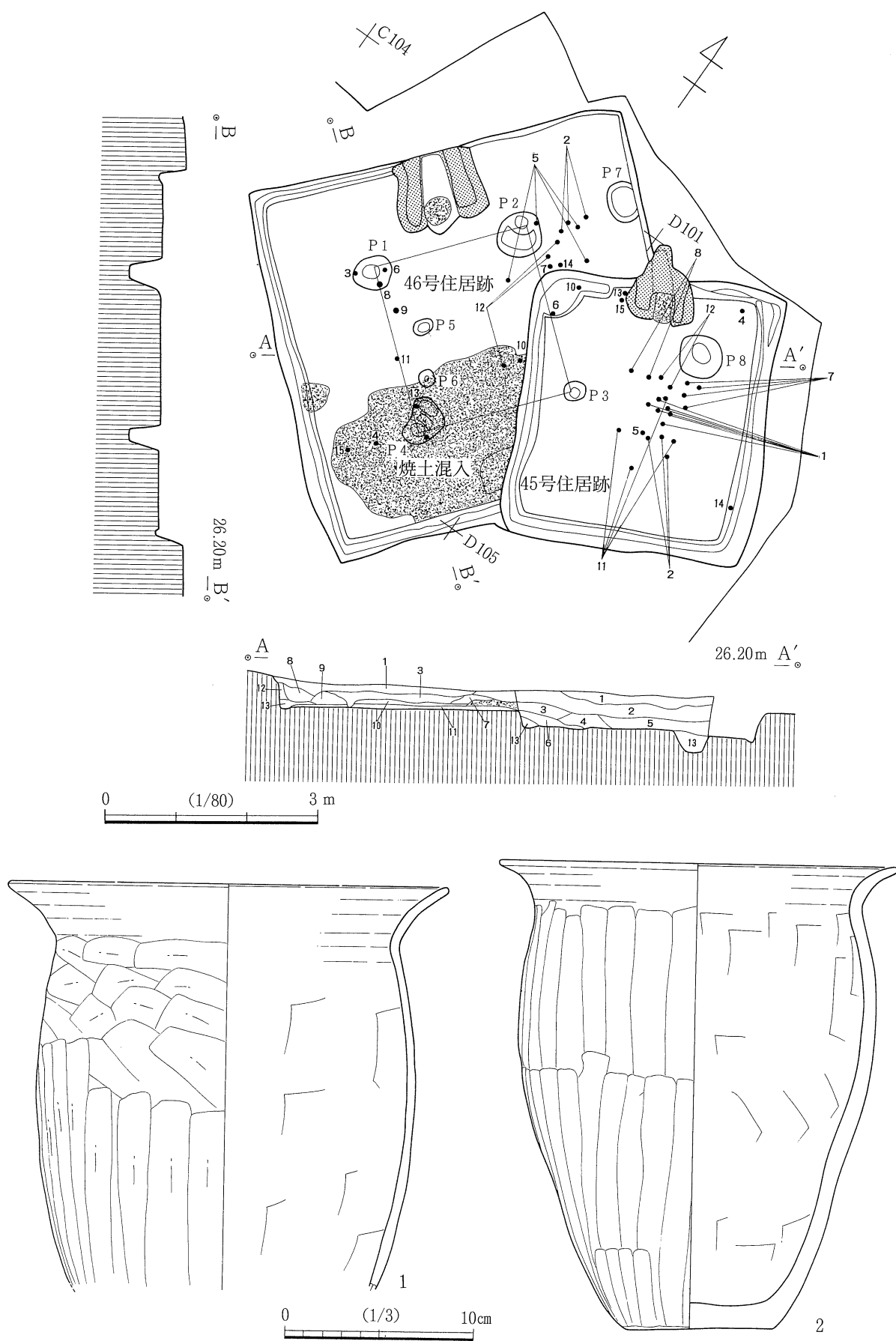
廃棄遺物は住居跡廃絶跡のものであることから、この場合住居跡の方が新しく廃棄遺物が古いと言う矛盾が生じ、その出土状況には疑問を持たざるを得ない。

46号住居跡（第50図）

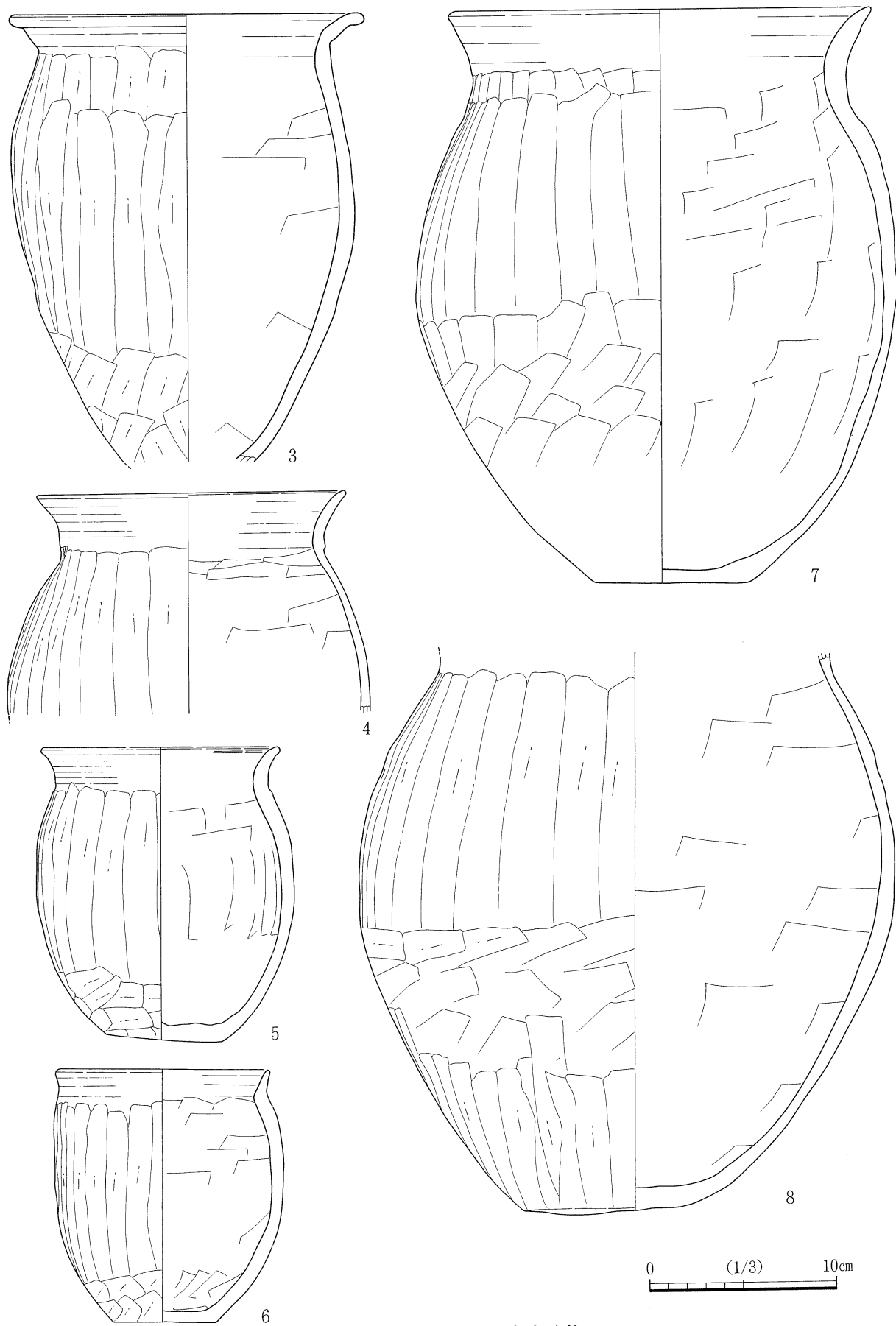
調査区北端のC1・D1区の緩やかな斜面に位置し、東側を45号住居跡により大きく掘り込まれ検出する。規模は、主軸長5.2m・副軸長5.4mを測る。平面形は、均整の取れた定角な方形を呈する。主軸方位は、N-48°-Wを指向する。壁は南が高く北が低く、残存壁高17～37cmを測る。Pitの深さは、P1-39cm・P2-50cm・P3-34cm・P4-39cm・P5-29cm・P6-8cm・P7-31cmを測り、支柱穴4穴を検出する。カマドは北西壁辺のほぼ中央に設けられ、燃焼部は壁から離れた床面側に位置する。床面は、ほぼ平坦で中央が固く踏み締められている。壁溝は北西壁辺の北半分と東北壁辺に検出されない。また、床面より僅かに上層に焼土の堆積が見られ住居跡廃絶後に消失した住居跡と感取される。

覆土土層A-A'（45号住居跡に同じ）

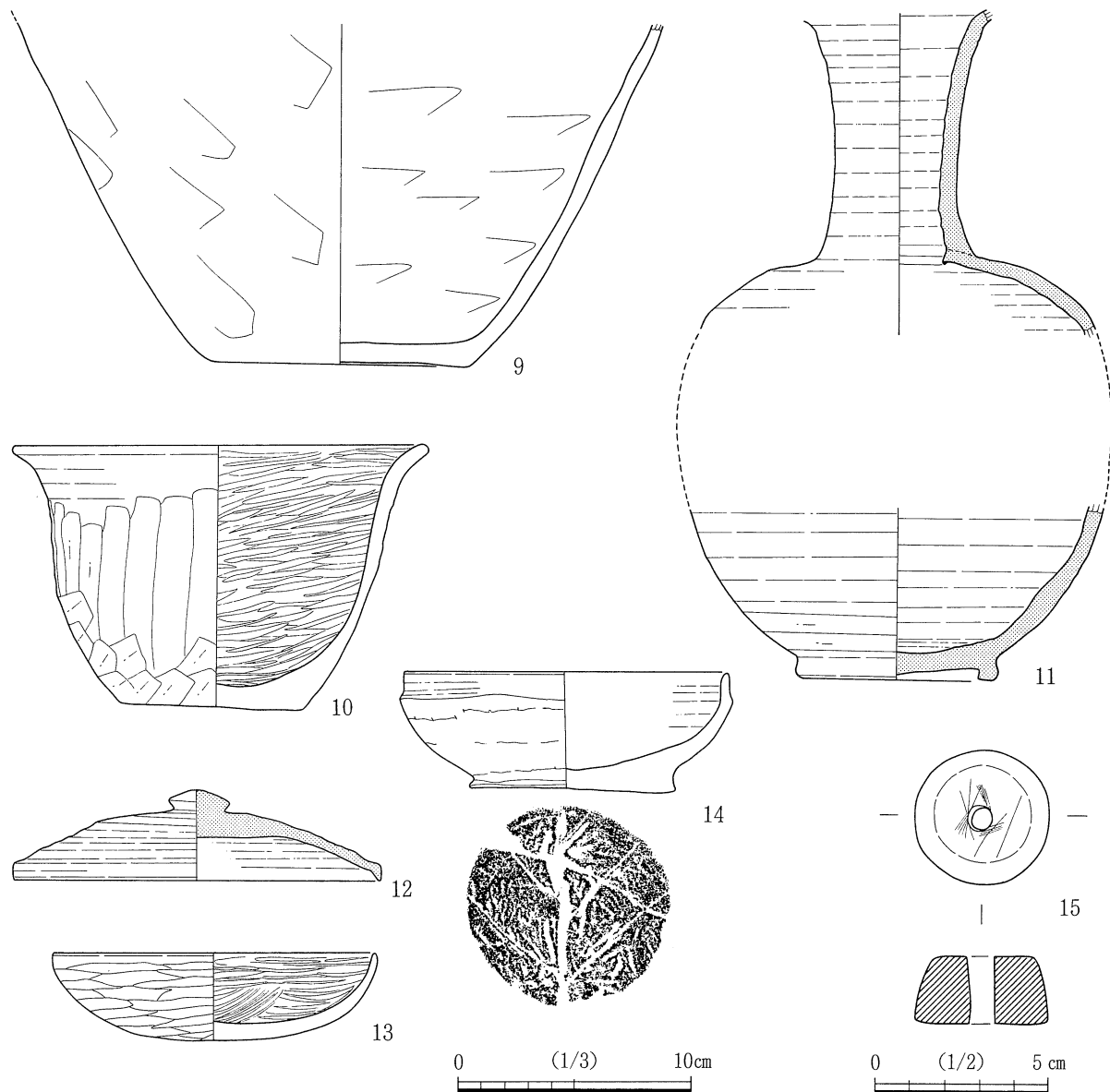
遺物（第53図） 主な出土遺物は、土師器甕1点、須恵器坏身1点、土師器碗形坏2点、土師器鉢2



第50図 45・46号住居跡と出土遺物



第51図 45号住居跡出土遺物

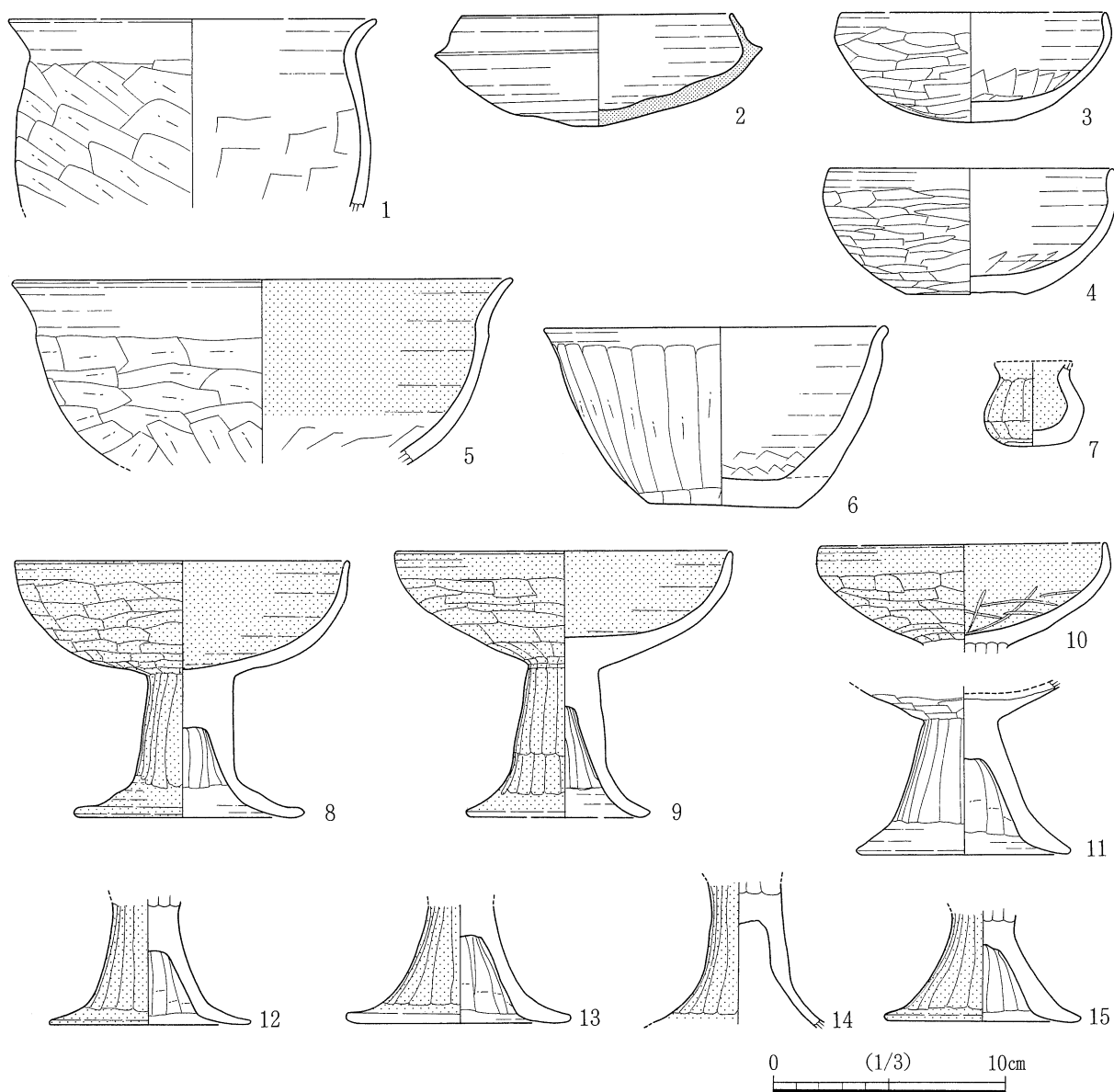


第52図 45号住居跡出土遺物

点、ミニチュア土器1点、土師器高坏8点がある。3・4は無彩の埴形坏である。高坏には、8の様な坏部が旧来の深い埴状のものや9・10の様な浅いものがあり、脚は短脚のものが姿を消し、長脚化のきざしが明瞭に認められる。2の口径11.6cmを計る須恵器坏身は、稜線の作りがやや鈍く内傾気味に立ち上がる口縁の特徴からTK10～MT85号窯期と考えられる。45号住居跡の覆土中に混在する球胴系甕の一群と同時期と考えられる。

47号住居跡（第54図）

調査区北端C1区の平坦地より良好な状態で検出する。規模は、主軸長4.8m・副軸長5.1mを測る。平面形は、やや横長の方形を呈する。主軸方位は、N-55°-Wを指向する。壁は削平を受けなかったため良好に遺存し、残存壁高34～45cmを測る。Pitの深さは、P1-46cm・P2-47cm・P3-59cm・P4-46cm・P5-51cm・P6-11cm・P7-23cm・P8-21cmを測り、支柱穴4穴を検出する。P5は横長で方形の貯蔵穴、P7は梯子穴であろう。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、煙道部は壁より0.4mほど張出す。床面は、平坦でカマドから中央は特に良く踏み締められている。壁溝は南

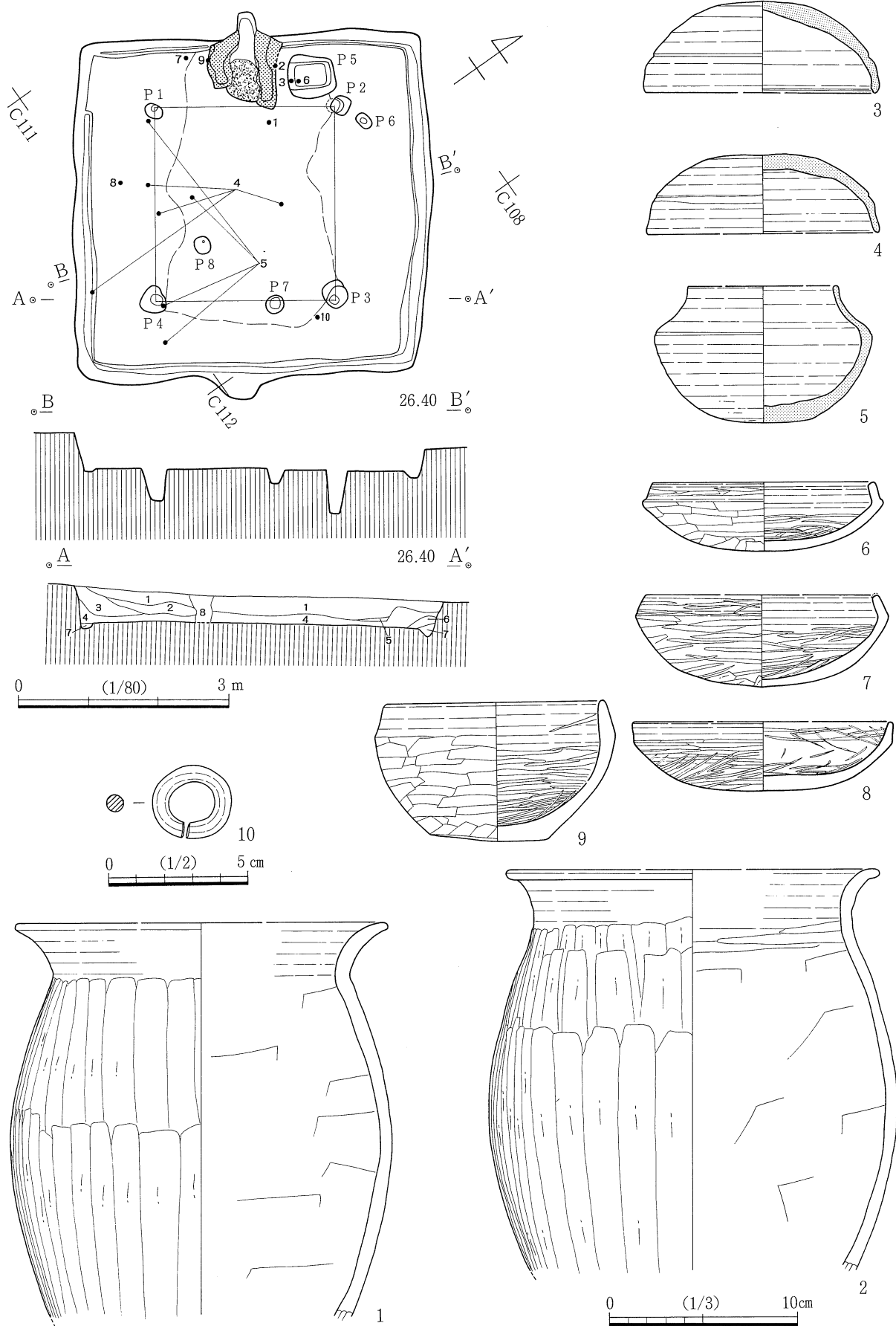


第53図 46号住居跡出土遺物

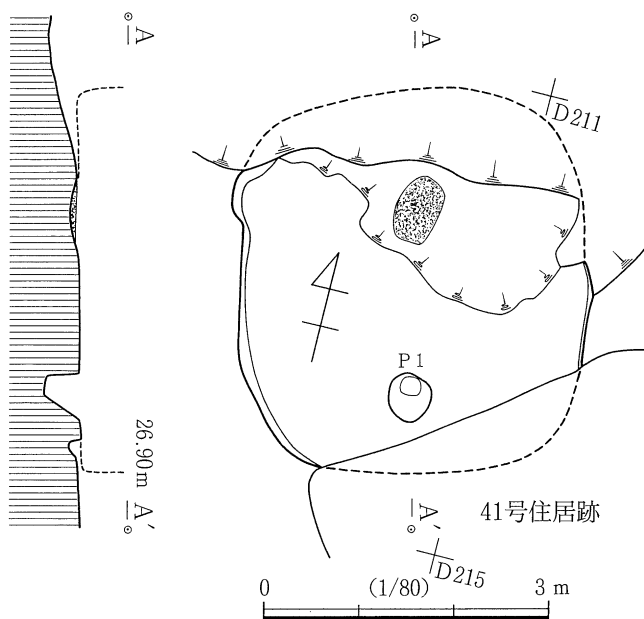
西壁辺西隅に検出されない他はほぼ四周する。また、床面中央には、カマド構築土の白色粘土が敷かれ強固なものにしている。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に少量のローム粒を含む。2層、暗黒褐色土に多量のローム粒を含む。3層、褐色土に多量のローム粒を含む。4層、黒褐色土に多量のローム粒を含む。5層、黒褐色土に多量の焼土粒を含む。6層、暗黒褐色土に黒色土と多量のローム粒を含む。7層、暗茶褐色土。

遺物（第53図） 主な出土遺物は、土師器甕2点・須恵器蓋坏2点・須恵器短頸壺1点・土師器坏3点・土師器鉢1点・青銅製耳環1点である。青銅製耳環は、南側床面直上より単独で出土し、現状では緑青に覆われ鍍金は認められない。径は2.84cm×2.66cm、厚さ0.56cm、重量12.6gを測る。3の須恵器蓋と6の土師器坏は貯蔵穴より出土し、住居跡との共判関係が明らかなものであるが、他の覆土から出土する土器についても住居跡の時期を決定する資料と感取される。3・4の口径12.6cm前後を計る須恵器蓋はTK217号窯期と考えられる。



第54図 47号住居跡と出土遺物

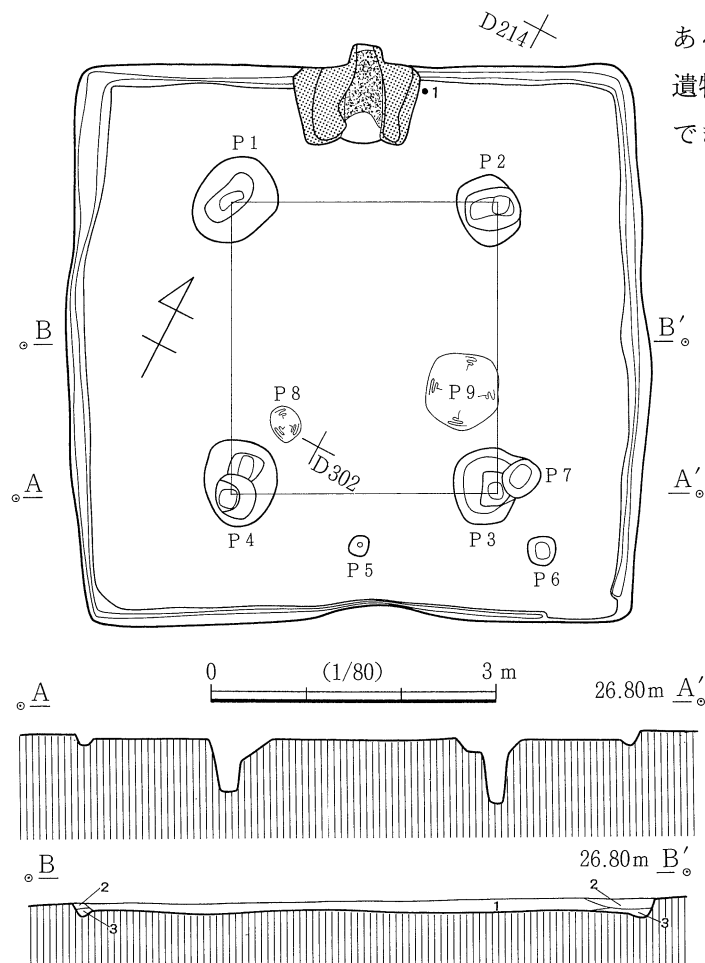
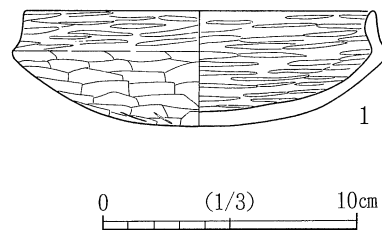


第55図 48号住居跡

48号住居跡（第55図）

調査区北東側のD 2 区の土地造成によりソフトローム上面を削平された地域に位置し、プラン壁面および北側を削平され、南側で41号住居跡に掘り込まれて検出する。規模は、東西長3.7m・現存南北長3.3mを測る。平面形は、不整な楕円形を呈するものと思われる。主軸方位は、炉跡とP 1 が中軸線上にあると仮定するとN-10°-Wを指向する。残存壁高0~15cmを測る。P itの深さは、P 1-37cmを測り、主柱穴は検出されない。床面は、炉跡周辺に僅かに硬化面を検出するだけである。炉跡は0.72m×0.45mを測り、焼土の堆積は8cm程である。

遺物 出土遺物が無く、明確に時期を判断できないが、弥生後期の所産と思われる。



第56図 49号住居跡と出土遺物

49号住居跡（第56図）

調査区中央のD 2・D 3 区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、辛うじて削平を免れたプラン下層面を検出する。規模は、主軸長5.9m・副軸長6.0mを測る。平面形は、比較的整った方形を呈する。主軸方位は、N-28°-Wを指向する。残存壁高6~15cmを測る。P itの深さは、P 1-41cm・P 2-59cm・P 3-69cm・P 4-55cm・P 5-22cm・P 6-8

cm・P 7-30cm・P 8-12cm・P 9-13cmを測り、主柱穴4穴を検出する。P 5は梯子穴。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、煙道部は壁より僅かに0.1m張出す。床面は、カマド周辺が踏み締めら

れ、ほぼ平坦である。壁溝は南東隅で僅かに途切れる他は四周する。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土にローム粒を含む。2層、暗茶褐色土に少量の黒褐色土ブロックを含む。3層、褐色土にロームブロックを含む。

遺物(第56図) 覆土より土師器小片を検出するものの、器形を復元できたものは推定口径14cmを計る土師器模倣坏1点だけであるが、カマド右袖床面より出土し、本住居跡の帰属を限定できる資料である。

50号住居跡(第57図)

調査区北西側C1区よりプランの大部分を攪乱により削平され、カマドと北西隅を検出する。規模は、カマド位置が北壁中央に設けたと仮定すると一辺3m程の方形プランを呈するものと思われる。主軸方位は、N-18°-Wを指向する。残存壁高0~35cm。床面は、厚く張り床され、硬化面は認められない。Pitおよび壁溝は検出されない。

遺物(第58図) 覆土より土師器小片を出土するものの本跡の帰属を限定できる資料は、カマド燃焼部から出土した底部と体部下端に丁寧な回転篋ケズリを施した完形のロクロ土師器皿1点である。

51号住居跡(第57図)

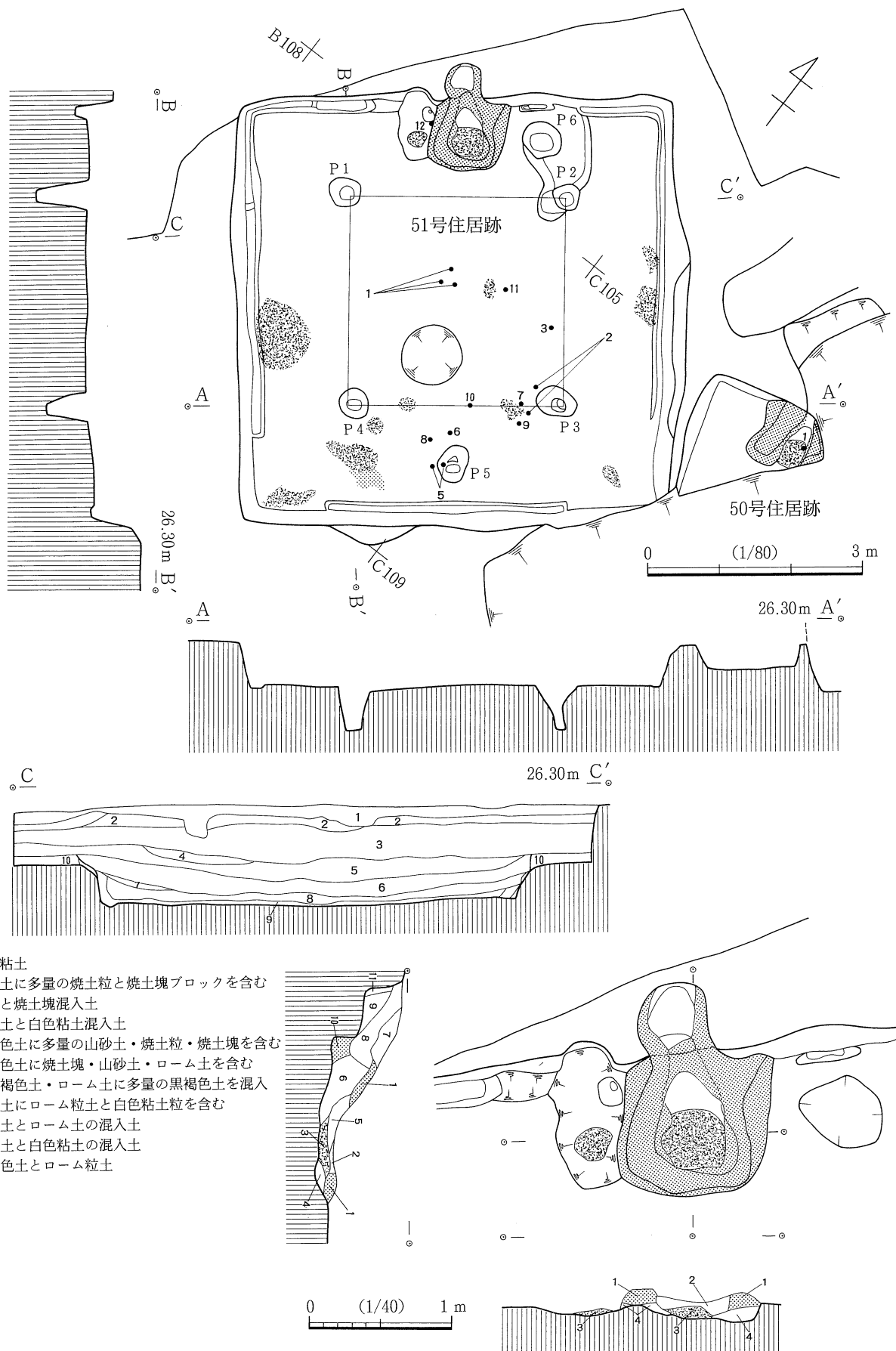
調査区北西端のB1・C1区より南東隅を僅かに削平されるも、良好な状態で検出した。規模は、主軸長6.2m・副軸長6.3mを測る。平面形は、各壁辺に僅かに歪みが有るものの比較的整った正方形を呈する。主軸方位は、N-37°-Wを指向する。残存壁高40~61cmを測る。Pitの深さは、P1-64cm・P2-63cm・P3-63cm・P4-59cm・P5-51cm・P6-67cmを測り、主柱穴4穴を検出する。P5は梯子穴。カマドは北壁のほぼ中央に設けられているが、カマド西側にカマド燃焼部状の炉跡と壁を削りだした痕跡があり、カマド造り替えの跡を明瞭に残している、煙道部は壁より0.5m張出す。壁溝は南東隅・南西隅ならび北壁に部分的な堀り残しがある。床面には細かな凹凸を有し、中央が比較的固く踏みしめられているものの、主柱穴を結んだ壁よりはやや軟弱である。また、床面直上に焼土や炭化物が検出されることから火災住居である。

覆土土層A-A' 1層、客土ロームブロック混じり。2層、客土ロームブロックと黒褐色土混合土。3層、旧表土黒褐色土に少量のロームブロックを含む。4層、黒褐色土に少量のロームブロックと褐色土を含む。5層、暗黒褐色土で黒色土とローム粒を含む。6層、黒褐色土でローム粒と褐色土ブロックを含む。7層、焼土と木炭粒の混合土。8層、黒褐色土に多量の焼土を含む。9層、暗茶褐色土に小ロームブロックを含む。

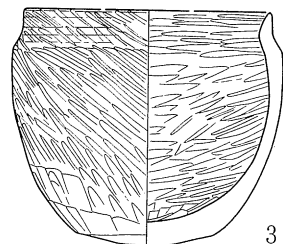
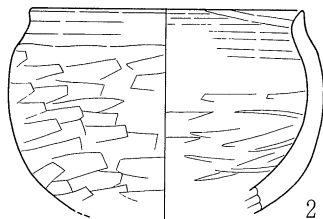
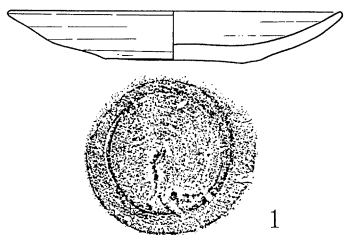
遺物(第58図) 主な出土遺物は、土師器甕1点・土師器鉢2点・土師器模倣坏3点・土師器坏4点・土師器高坏2点である。図指した遺物のほとんどは覆土からの出土で、模倣坏4と5では明らかに様相の違いを見せやや時間的な差を感じ取れるものである。住居跡の帰属判断する遺物としてはカマド左袖に接して出土した12の土師器高坏が良好な資料となる。7は、客体的な有段口縁坏である。

52号住居跡(第59図)

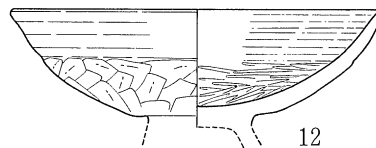
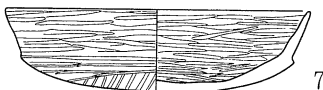
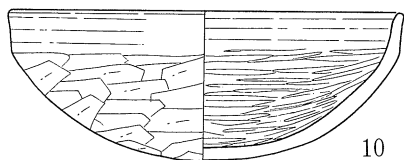
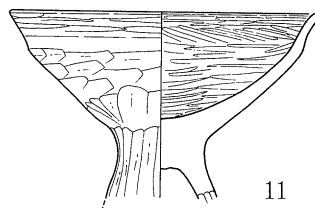
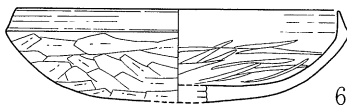
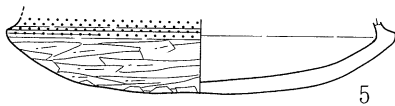
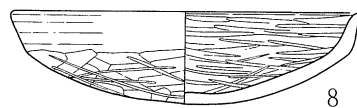
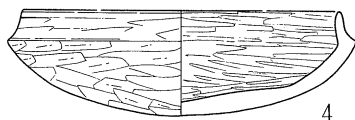
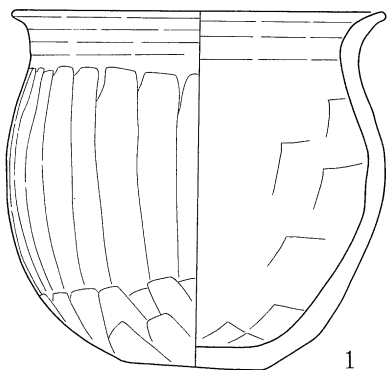
調査区北西端B1・B2区に位置し、西壁北半分を攪乱により削平され検出する。規模は、主軸長2.7m・副軸長2.6mを測る。平面形は、隅に丸身を有し壁辺が胴張りする方形を呈している。主軸方位は、N-16°-Eを指向する。壁はソフトローム上面を削平されるものの残存壁高5~12cmを測る。Pitは検出されず、主柱穴は無い。カマドは北壁の東に寄って設けられる。壁溝は、カマド両端で途



50号住居跡

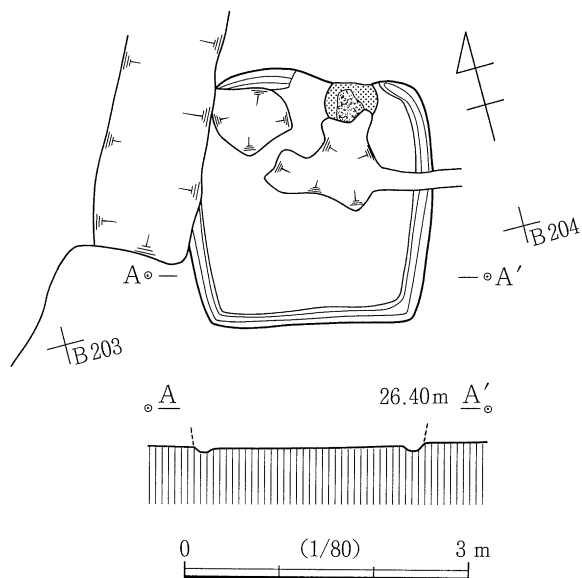


51号住居跡



0 (1/3) 10cm

第58図 50・51号住居跡出土遺物



第59図 52号住居跡

切れる。床面は、大きく攪乱され、細かな凹凸を有し、全体に固く踏み締められている。

遺物 出土遺物は、覆土中より土師器小片を検出するものの、器形を復元できる遺物はなく、住居跡の帰属を判断する資料が無い。

53号住居跡 (第60図)

調査区北西端B2区の校舎建設時に掘られた攪乱が蜜に分布する地域位置し、北東側で54号住居に掘り込まれ、南東側に55号住居と複合して検出される。規模は、主軸長3.5m・現存副軸長3m程を測る。平面形は、方形プランを呈するものと思われる。主軸方位は、N-25°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を削平され、プランのほとんどが削平され、

僅かに西・北・南壁の一部を残すだけで残存壁高0～7cmを測るに過ぎない。Pitは検出されず、推定プラン内にP3-16cm・P4-23cmを測るものの、住居跡との関係は不明で支柱穴の検出は無い。カマドは北壁のやや西寄りの設けられ燃焼部と袖の一部を残すだけである。床面は、細かな凹凸を有するものの比較的平坦である。壁溝は、検出されない。

遺物(第60図) 主な出土遺物は、かまど燃焼部と床面より小形の手持ち篋ケズリと回転糸切りのクロ土師器を出土し、住居跡の帰属を判断できる資料である。

54号住居跡(第60図)

調査区北西のB1・B2・C1・C2区に位置し、攪乱により部分的に遺存するだけで、南西に53号住居跡を南壁に55号住居跡を掘り込んで検出する。規模は、東西長4.9m・南北長2.9mを測る。平面形は、横長の長方形を呈するものと思われる。主軸方位は短軸で、N-4°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を削平され、残存壁高0～22cmを測る。Pitの深さは、P1-62cm・P3-12cm・P5-41cm・P6-38cmを測り、プラン内に4穴を検出するものの住居跡との共判関係が不明であり、支柱穴は確認できない。床面は、全体に軟弱である。壁溝は、比較的良好な東・西・南壁に存在し、本来は四周するものと感取される。

遺物(第60図) 覆土より土師器小片を出土するものの、器形を復元できたものはK90号窯期の灰釉高台付碗だけで住居跡との共判関係を明確にできないものの、住居跡の帰属を判断できる資料であると思われる。

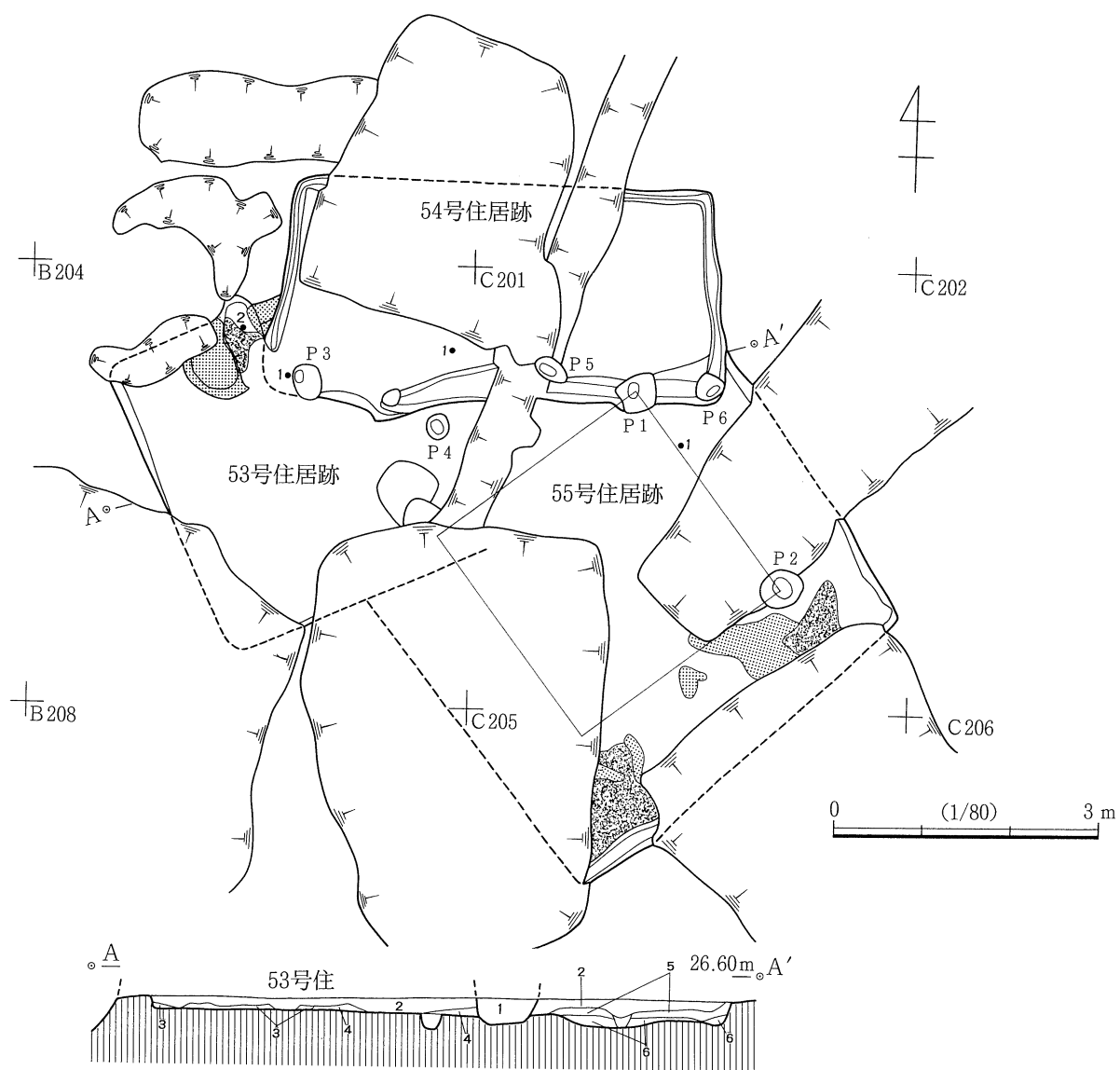
55号住居跡(第60図)

調査区北西のB2・C2区に位置し、攪乱により大きく削平され東・西壁の一部と床面の部分的な遺存で、北西で53・54号住居跡に掘り込まれ検出する。推定規模は、一辺5.0m程を測る。平面形は方形を呈するものと思われる。主軸方位は、カマド位置が不明であるが、北壁に設けられたものとするN-43°-Wを指向する。壁は東と南壁の一部を検出するだけで、残存壁高0～17cmを測る。Pitの深さは、P1-67cm・P2-64cmを測り、プラン内に支柱穴2穴を検出し、本来は4穴であろう。カマドは54号住居跡や攪乱に削平され、検出できない。壁溝は、南壁辺の西に確認できただけである。部分的に確認した床面に、焼土や白色粘土が検出され火災住居跡であろう。

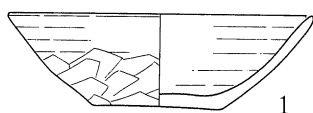
遺物(第60図) 床面焼土中より土師器甕片を検出するものの、器形を復元できたものは床面出土の内面黒色処理を施した大型の土師器模倣坏1点で住居跡の帰属を判断できる資料である。また、覆土中から有孔土製品を出土するが住居跡との共判関係は不明である。

56号住居跡(第61図)

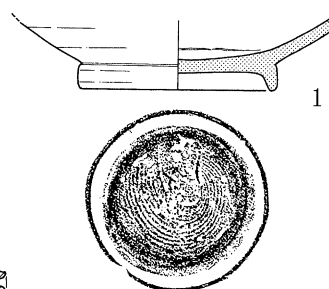
調査区北側C2区の造成工事によりソフトローム上面を僅かに削平された平坦地に位置し、プラン東側を57号住居跡覆土中に構築し検出する。規模は、57号住居跡覆土中に構築される東辺壁が不明確であるが、主軸長4.1m・副軸長約4.2mを測る。平面形は、やや隅に丸身を有し、均整を欠く方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-17°-Wを指向する。壁は57号住居跡覆土中に構築される部分が明確さに欠けるものの、残存壁高8～17cmを測る。Pitおよび支柱穴は確認できない。カマドは北壁の東寄りに構築され、燃焼部の焼土の堆積がほとんど見られない。壁溝は東・南辺壁下で良好に検出されるものの、57号住居跡覆土中に構築される部分は不鮮明となるものの、本来は四周するものと感取される。



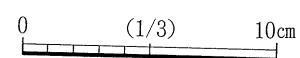
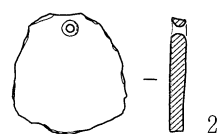
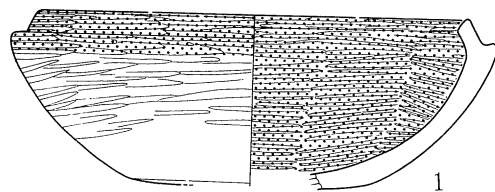
53号住居跡



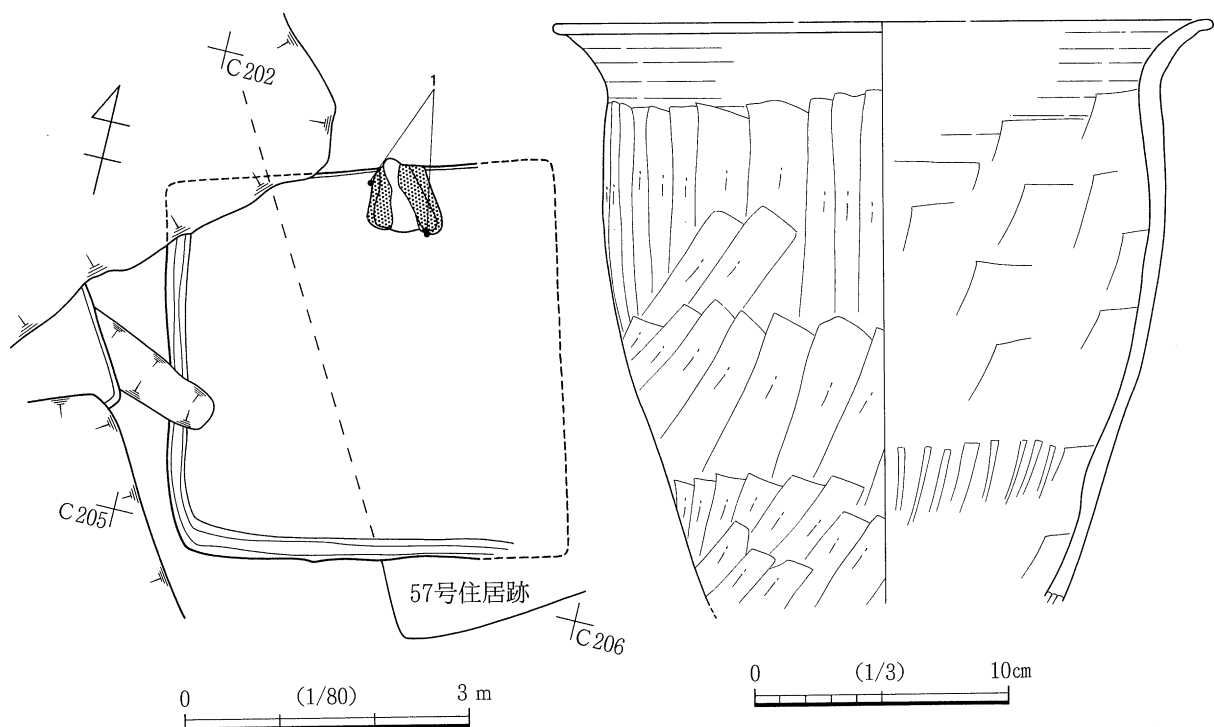
54号住居跡



55号住居跡



第60図 53・54・55号住居跡と出土遺物



第61図 56号住居跡と出土遺物

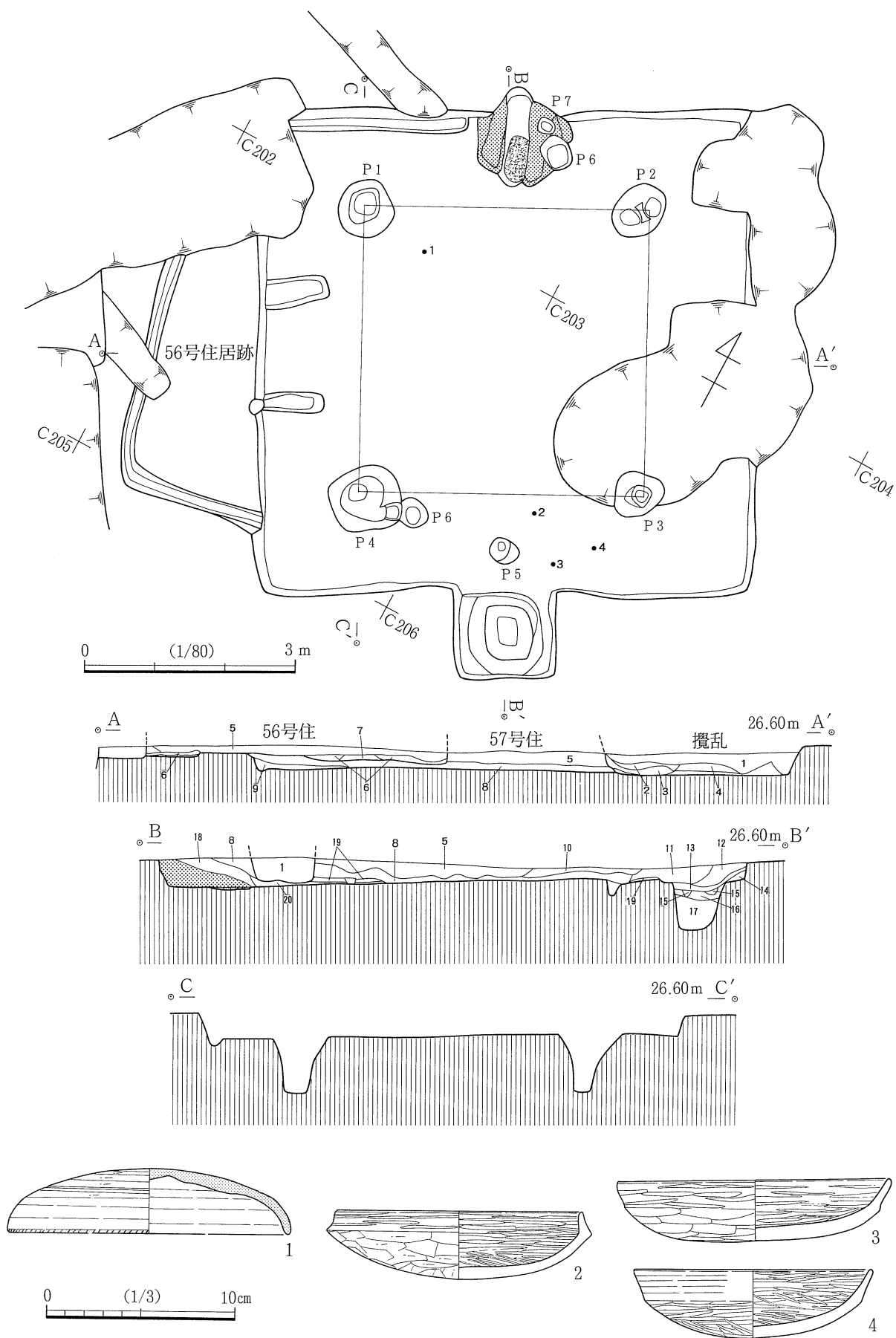
覆土土層A-A' (第62図A-A')

遺物(第61図) 器形を復元できた遺物は、カマド袖周辺から出土した土師器甗1点にとどまり、本住居跡の帰属を示す資料である。

57号住居跡 (第62図)

調査区北側のC1・C2区の造成工事によりソフトローム上面を僅かに削平された平坦地に位置し、西側で壁および覆土を56号住居跡に掘り込まれ、東側を攪乱により大きく削平され検出する。規模は、主軸長6.9m・副軸長7.0mを測る。平面形は、比較的整った方形を呈し、南壁中央に張り出した貯蔵穴を有する。主軸方位は、N-27°-Wを指向する。残存壁高20~30cmを測る。Pitの深さは、P1-74cm・P2-83cm・P3-85cm・P4-79cm・P5-40cm・P6-25cm・P7-12cmを測り、主柱穴4穴を検出する。各主柱穴に段を有して掘り込まれ状況等から立替えの可能性はある。P5は梯子穴、カマド右袖にあるP6・P7は後世のPitである。カマドは、北壁中央に設けられ、煙道部は僅かに0.35mほど張出す。床面は中央が固く踏み締められ平坦である。壁溝は北壁辺の西半分を検出される。西壁に1.2mの間を置き間仕切りに伴う溝2条を検出し、長さ0.7~0.8m、深さ8~12cmを測る。貯蔵穴は、南壁中央を幅1.5m・張出長1.3mを測り、床面より僅かに低い区画を成し、中央に設けられたPitは、径0.7×0.8m・深さ71cmを測る。

覆土土層A-A'・B-B' 1層~4層、攪乱土層。5層、暗黒褐色土で少量のローム粒を含む。6層、黒褐色土と小ロームブロックの混合土。7層、暗黒褐色土でローム粒を含む。8層、暗褐色土でローム粒と茶褐色土を含む。9層、暗茶褐色土で多量ローム粒と褐色土を含む。10層、暗黒褐色土に少量の褐色土ブロックを含む。11層、5層に同じ。12層、暗茶褐色土に小ロームブロックを含む。13層、黒色土。14層、暗茶褐色土。15層、黒褐色土に白色粘土混入する。16層、茶褐色土に焼土粒・小



第62図 57号住居跡と出土遺物

ロームブロックを含む。17層、黒褐色土に小ロームブロックを含む。18層、黒褐色土に白色粘土粒を混入する。

遺物（第62図） 出土遺物は、覆土から須恵器蓋坏1点、床面から土師器模倣坏1点・土師器坏2点を出土し、本住居跡の帰属を示す資料である。須恵器蓋坏はTK209号窯期に比定される。

58号住居跡（第63図）

調査区北側C2区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、南西側で59号住居跡を掘り込み検出する。規模は、主軸長4.95m・副軸長5.3mを測る。平面形は、各隅に丸身を有するやや横長の方形を呈する。主軸方位は、N-42°-Wを指向する。残存壁高10~17cmを測る。Pitの深さは、P1-55cm・P2-49cm・P3-37cm・P4-46cm・P5-40cmを測り、主柱穴4穴を検出する。カマドは北壁の中央に設けられ、煙道部は壁より僅かに張出する。壁溝は北壁のカマド右側に確認されない。床面は、平坦で全体に踏み固められたている。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土に川砂混入（攪乱層）。2層、暗黒褐色土にローム粒を含む。3層、黒褐色土にローム粒を含む。4層、暗黒褐色土に黒色土と小ロームブロックを含む。5層、褐色土。6層、暗茶褐色土に小ロームブロックを多量に含む。

遺物（第63図） 覆土中や床面から土師器小片を出土するものの、器形を復元できたものは土師器甕2点・土師器甗1点・土師器坏の有段口縁坏1点で、カマドや床面からの出土で住居跡の帰属を決定する資料である。

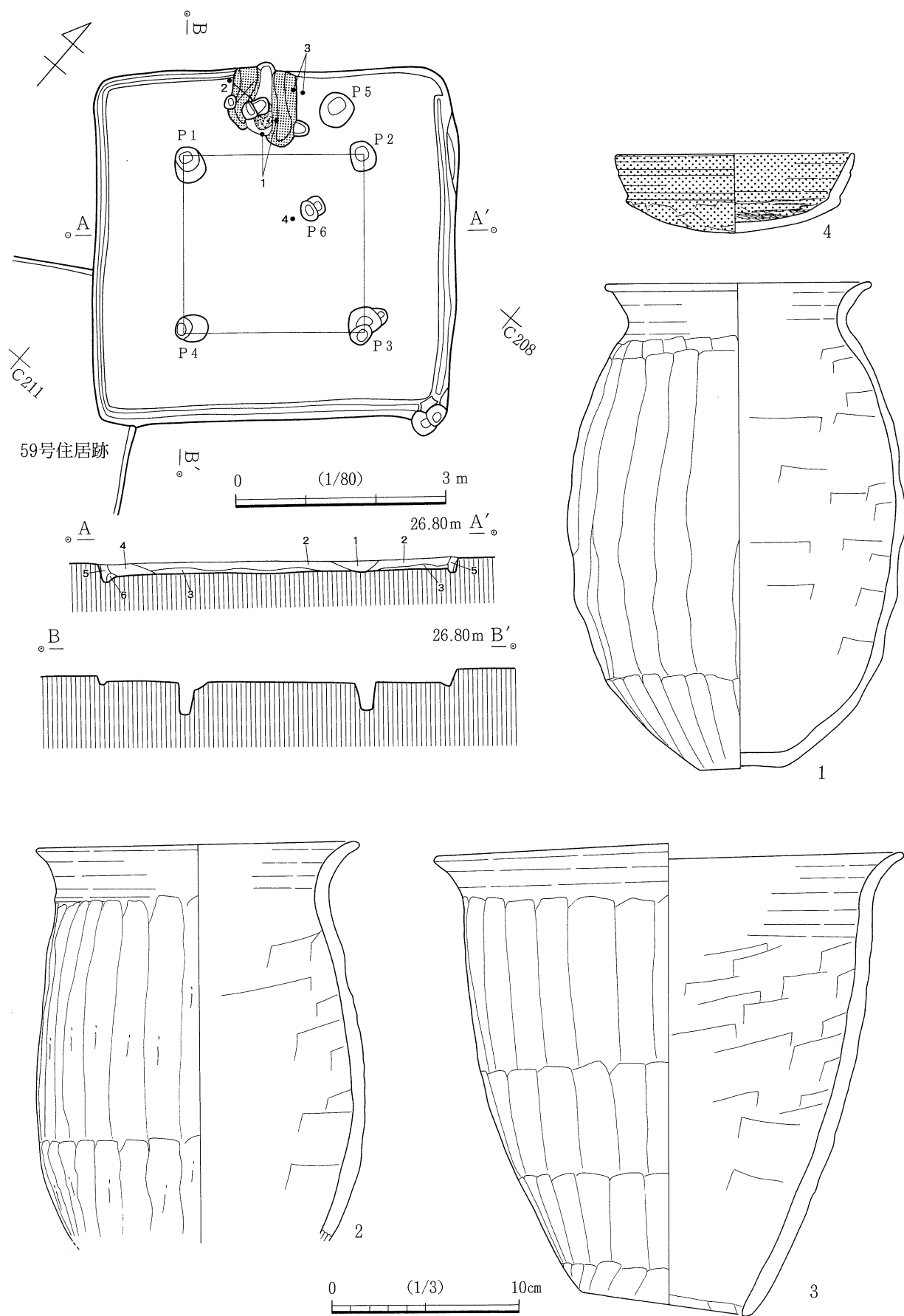
59号住居跡（第64・65図）

調査区中央C2区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、北隅で58号住居跡、西南側半分を60号住居跡に大きく掘り込まれて検出する。規模は、主軸長6.8m・推定副軸長で7.0mを測る。平面形は、四隅の内の東隅のみの検出であることから詳細は不明であるが、比較的均整の取れた方形を呈すものと感取され、南壁中央に張り出した貯蔵穴を設ける。主軸方位は、N-30°-Wを指向する。壁は削平された遺存状態は不良であるが、残存壁高0~10cmを測る。Pitの深さは、P1-95cm・P2-48cm・P3-84cm・P4-80cm・P5-71cm・P6-81cm・P7-99cm・P8-64cm・P9-26cm・P10-37cmを測り、主柱穴4穴を検出する。P10は梯子穴。主柱穴P2・P3・P4に掘り直しの跡が観察されることから、立替えの可能性がある。カマドは北壁の中央に設けられているものの最下層の検出である。床面は、張り床され平坦である。壁溝は東壁辺の中央に確認できるだけで他は無い。貯蔵穴は、南壁辺の中央を幅1.2m・張出長1.1mを測り、中に径0.95m×0.6m・深さ61cmの長方形の穴を設けている。また、床面に焼土や大きめの炭化材が検出されることから火災住居跡であろう。

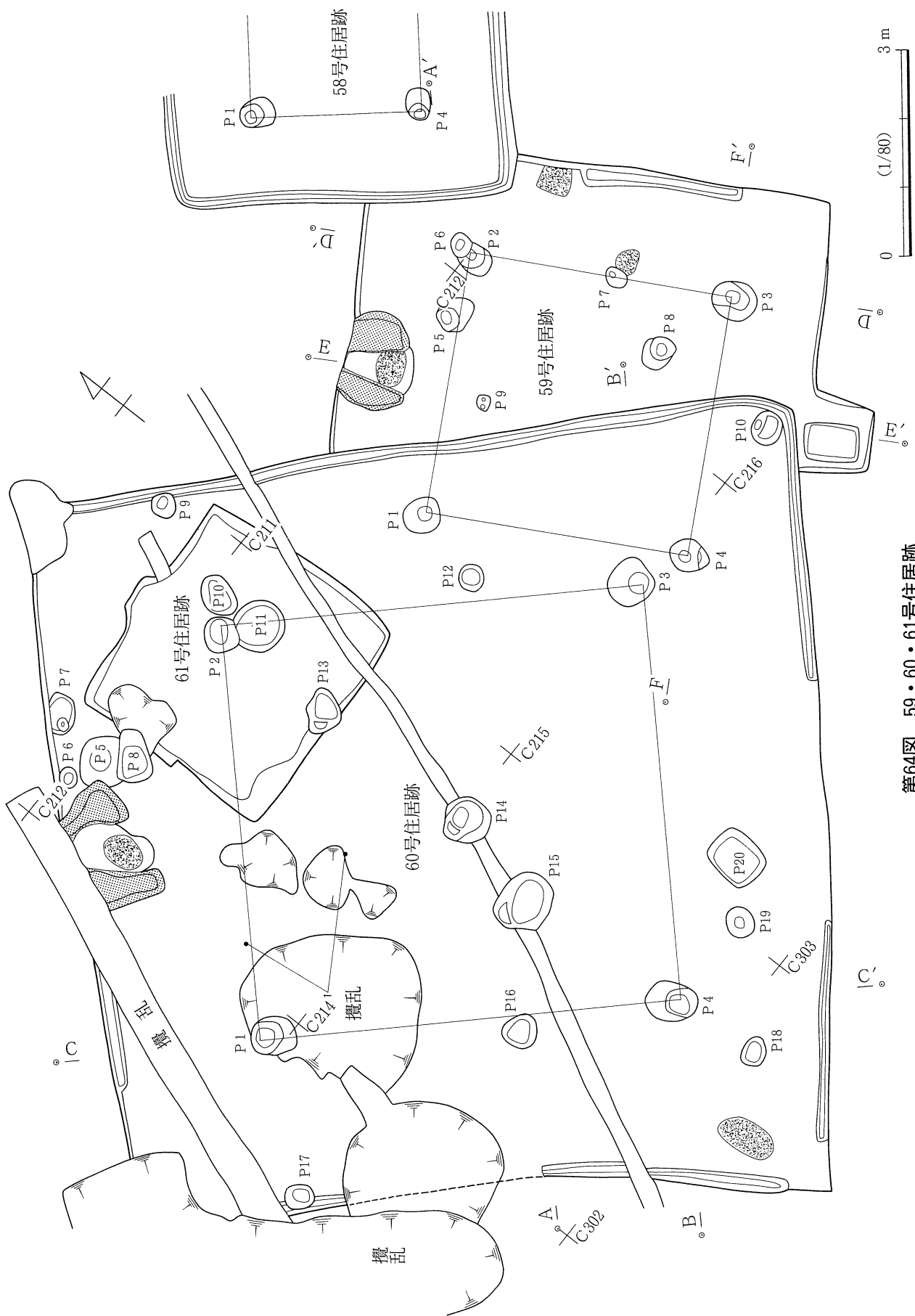
遺物（第66図） 覆土や床面から土師器小片を検出するが、器形を復元できたものは土師器坏1点で住居跡の時期を決定する資料である。

60号住居跡（第64・65図）

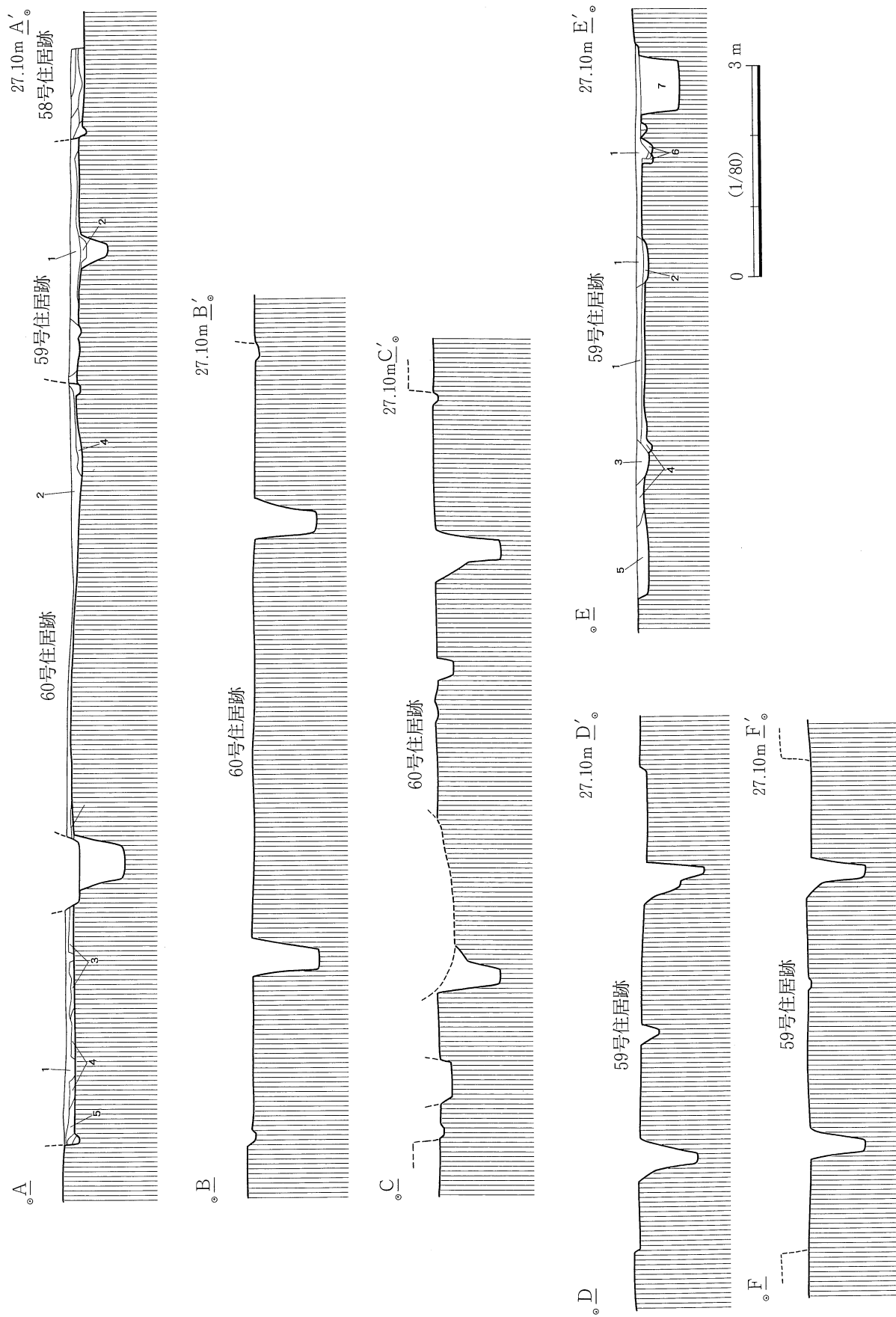
調査区中央C2・C3区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、東側で59号住居跡を大きく掘り込み、またプラン内北側で61号住居跡に掘り込まれ検出する。規模は、各壁辺の長さが異なり、北西壁辺長10.5m・北東壁辺長11.6m・南東壁辺長11.8m・南西壁辺長10.2mを測り、中央での主軸長・副軸長は共に11.2mで、均整を欠く方形を呈する。主軸方位は、N-4



第63図 58号住居跡と出土遺物

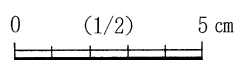
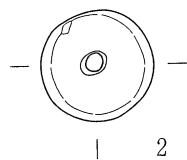
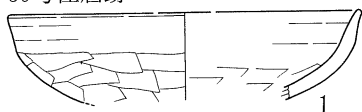


第64図 59・60・61号住居跡

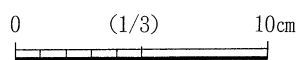
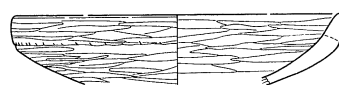
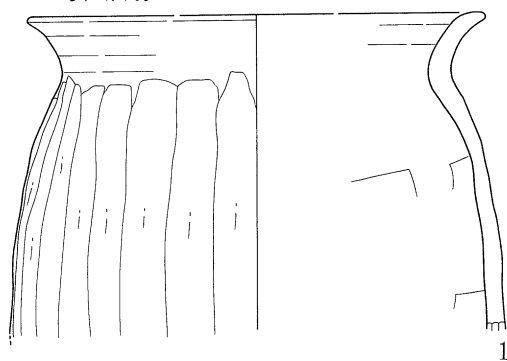


第65图 59・60号住居跡断面

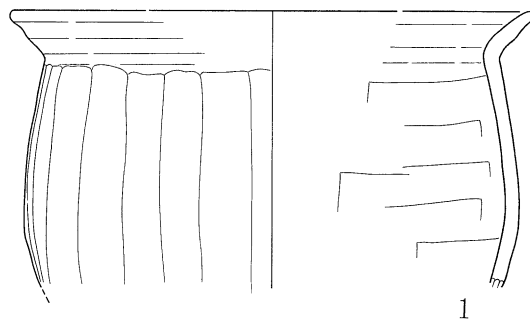
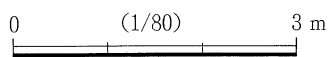
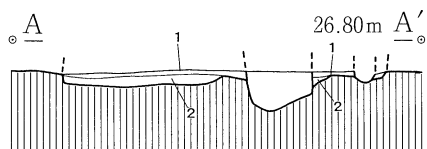
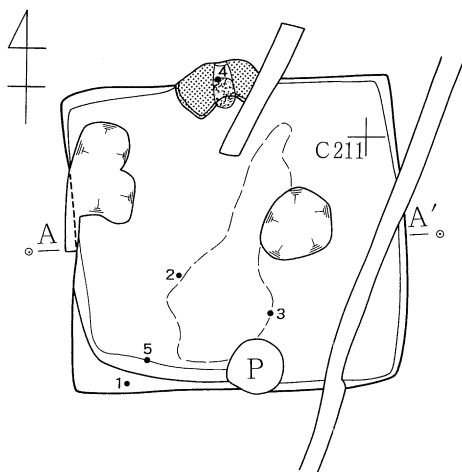
59号住居跡



60号住居跡



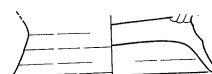
第66図 59・60号住居跡出土遺物



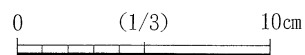
3



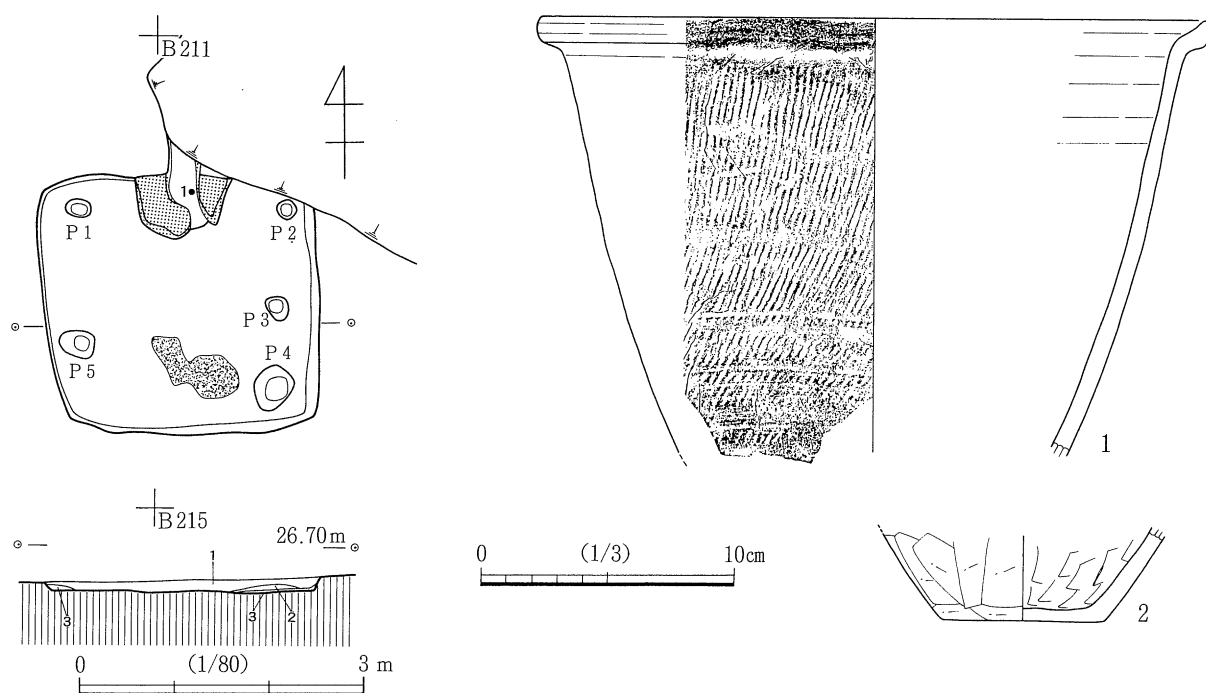
4



5



第67図 61号住居跡と出土遺物



第68図 62号住居跡と出土遺物

2°-Wを指向する。壁は削平され、残存壁高0～8cmを測る。Pitの深さは、P1-89cm・P2-72cm・P3-83cm・P4-92cm・P5-48cm・P6-9cm・P7-10cm・P8-60cm・P9-17cm・P10-31cm・P11-40cm・P12-16cm・P13-25cm・P14-76cm・P15-41cm・P16-20cm・P17-14cm・P18-16cm・P19-51cm・P20-36cmを測り、主柱穴はP1・P2・P3・P4の4穴でP16・P17が補助的な柱穴で、各主柱穴を対角線上に結んだ中央に位置するP14も補助的な柱穴の可能性もある。カマドは北壁の中央に設けられるものの最下層の検出で煙道部は攪乱され不明である。壁溝は北東壁辺で良好に確認できるが他は部分的な検出である。また、床面に焼土や炭化物が検出されることから火災住居跡であろう。

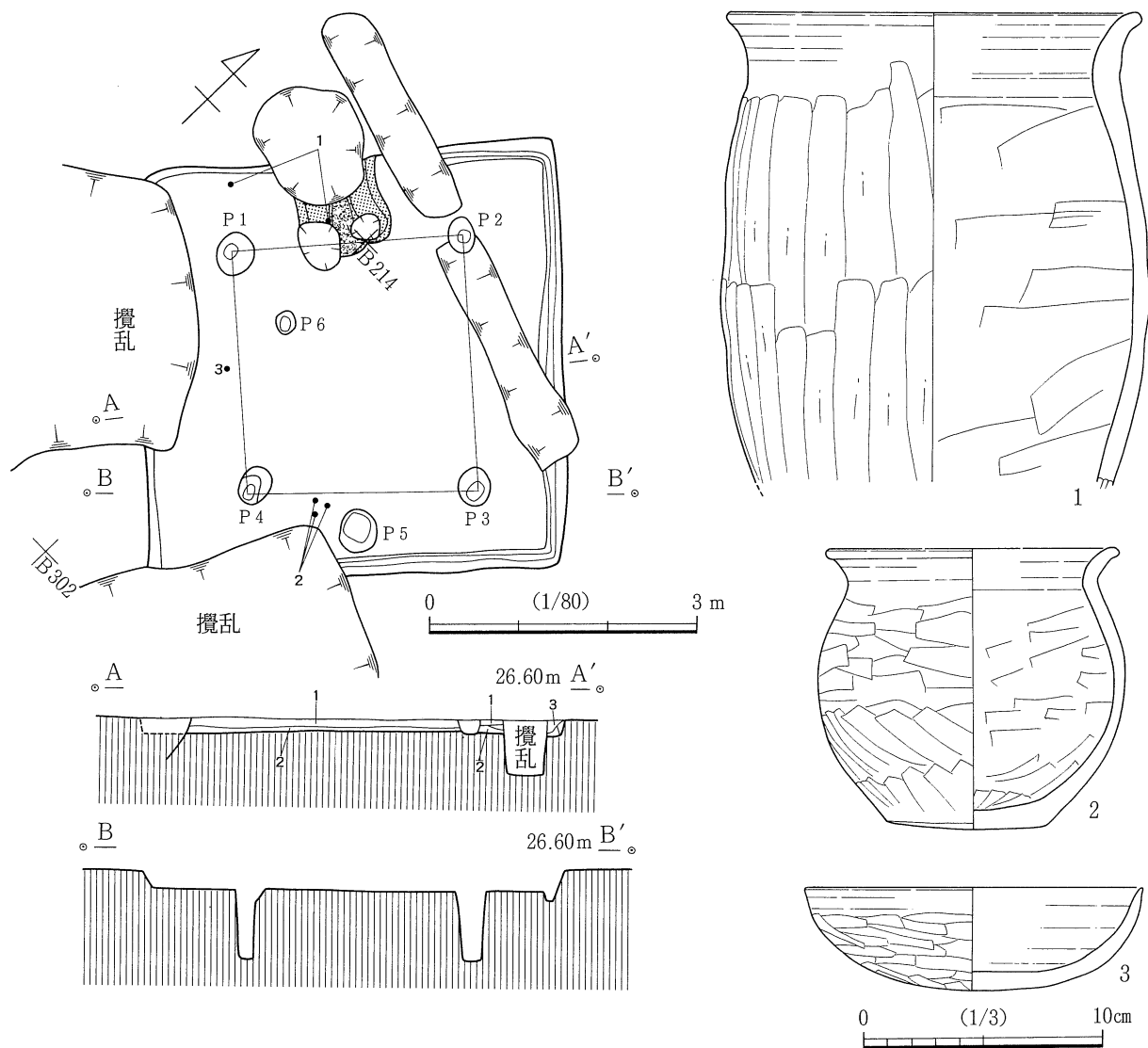
遺物(第66図) 覆土や床面から土師器小片を検出するが、器形を復元できたものは土師器甕1点・土師器坏1点で住居跡の時期を決定する資料に乏しい。

61号住居跡(第67図)

調査区北側C2区の60号住居跡プラン内に掘り込んで位置する。規模は、主軸長3.25m・副軸長3.45mを測る。平面形は、やや均整の欠く方形を呈する。主軸方位は、N-3°-Wを指向する。壁は造成工事によりソフトローム上面を削平され、残存壁高0～10cmを測る。Pitは、検出されない。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、袖部が壁を張出して構築される。床面は、張り床され、部分的に硬化面を残すだけである。壁溝は検出されない。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土にローム粒を含む。2層、黒褐色土に多量の小ロームブロックを混入する(張り床面)。

遺物(第67図) 主な出土遺物は、土師器甕1点・須恵器大甕片1点・ロクロ土師器坏2点・土師器高台付坏1点である。2の須恵器大甕破片内面中央には研磨痕跡を残し転用硯と思われる。3は回転糸切り、4は体部下端と底部に手持ち篋ケズリを施すロクロ土師器でカマド燃焼部よりの出土で住居跡の帰属を決定する資料である。



第69図 63号住居跡と出土遺物

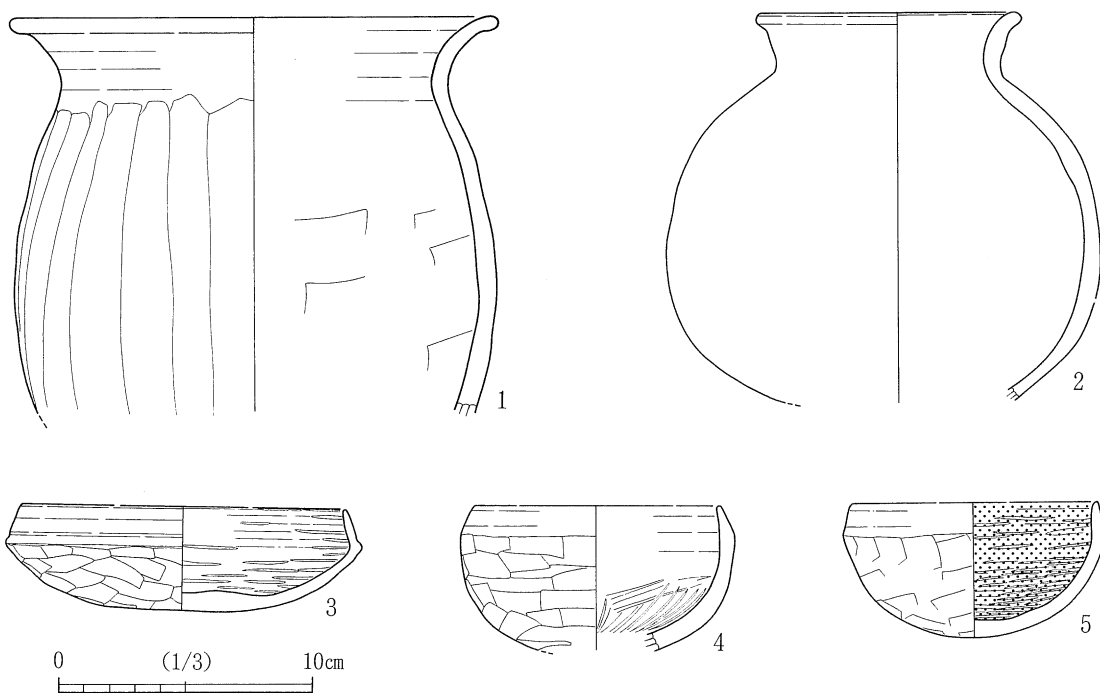
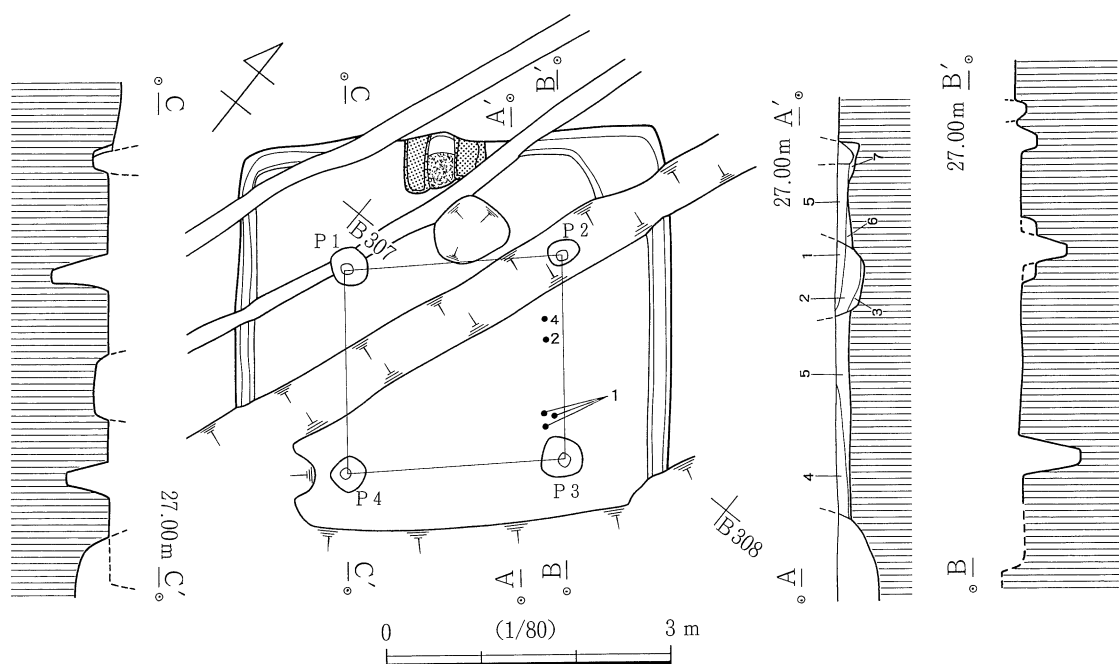
62号住居跡 (第68図)

調査区北西側のB 2 区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、北東隅およびカマド煙道を攪乱により削平され検出する。規模は、主軸長2.75m・副軸長2.9mを測る。平面形は、均整を欠く方形を呈する。主軸方位は、N-2°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を削平され、残存壁高0~19cmを測る。Pitの深さは、P 1-6cm・P 2-7cm・P 3-32cm・P 4-15cm・P 5-37cmを測るものの支柱穴は不明である。カマドは北壁の中央に設けられ、明確な焼土の堆積が無く、煙道は攪乱により削平され現存突出長0.45mを測る。壁溝は確認できない。床面には、細かな凹凸を有し、中央が踏み締められ、南側に焼土の堆積が見られ火災住居跡である。

遺物 (第68図) 主な出土遺物は、須恵器甕1点・土師器甕1点である。須恵器甕はカマド燃焼部からの出土で住居跡の帰属を決定できる資料である。

63号住居跡 (第69図)

調査区北西側B 2 区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、部分



第70図 64号住居跡と出土遺物

的に攪乱され検出する。規模は、主軸長・副軸長ともに4.75mを測る。平面形は、部分的な攪乱により不明な点もあるものの比較的整った正方形を呈するものと感取される。主軸方位は、N-47°-Wを指向する。残存壁高12~25cmを測る。Pitの深さは、P1-74cm・P2-63cm・P3-75cm・P4-53cm・P5-12cm・P6-20cmを測り、支柱穴はP1・P2・P3・P4の4穴を検出する。P5は梯子穴。カマドは北壁中央に設けられるものの、袖部や煙道部を攪乱されている。床面には、細かな凹凸を有し、中央が固く踏み締められている。壁溝はプラン北東側半分を検出される。

覆土土層A-A' 1層、黒褐色土にローム粒を含む。2層、暗茶褐色土にローム粒と少量の褐色土ブ

ロックを含む。3層、茶褐色土にロームブロックを含む。

遺物（第69図） 主な出土遺物は、土師器甕2点・土師器坏1点である。3点とも床面からの出土で住居跡の帰属を判断できる資料である。

64号住居跡（第70図）

調査区西側B2区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、プランの北西に溝状に、また南東壁を大きく攪乱され検出する。規模は、現存主軸長4.2m・副軸長4.6mを測る。平面形は、各隅にやや丸身を有した方形を呈するものと感取される。主軸方位は、N-42°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を削平され、残存壁高0~22cmを測る。Pitの深さは、P1-59cm・P2-47cm・P3-53cm・P4-43cmを測り、支柱穴4穴を検出する。床面は、細かな凹凸を有し、中央が固く踏み締められている。壁溝は北隅で幅広になり不明確となる他は確認されることから本来は四周すりものである。

覆土土層A-A' 1層~3層は攪乱層。4層、黒褐色土にローム粒・小ロームブロックを含む。5層、黒褐色土にローム粒を含む。6層、茶褐色土にロームブロックを含む。7層、茶褐色土に褐色土とローム粒土を含む。

遺物（第70図） 主な出土遺物は、土師器甕1点・土師器壺1点・土師器模倣坏1点・土師器小形埴形坏2点である。覆土中や床面よりやや浮いて出土し、1の胴径よりも口径が僅かに大きい甕と4・5の小形埴形坏が住居跡の帰属を決定できる資料である。

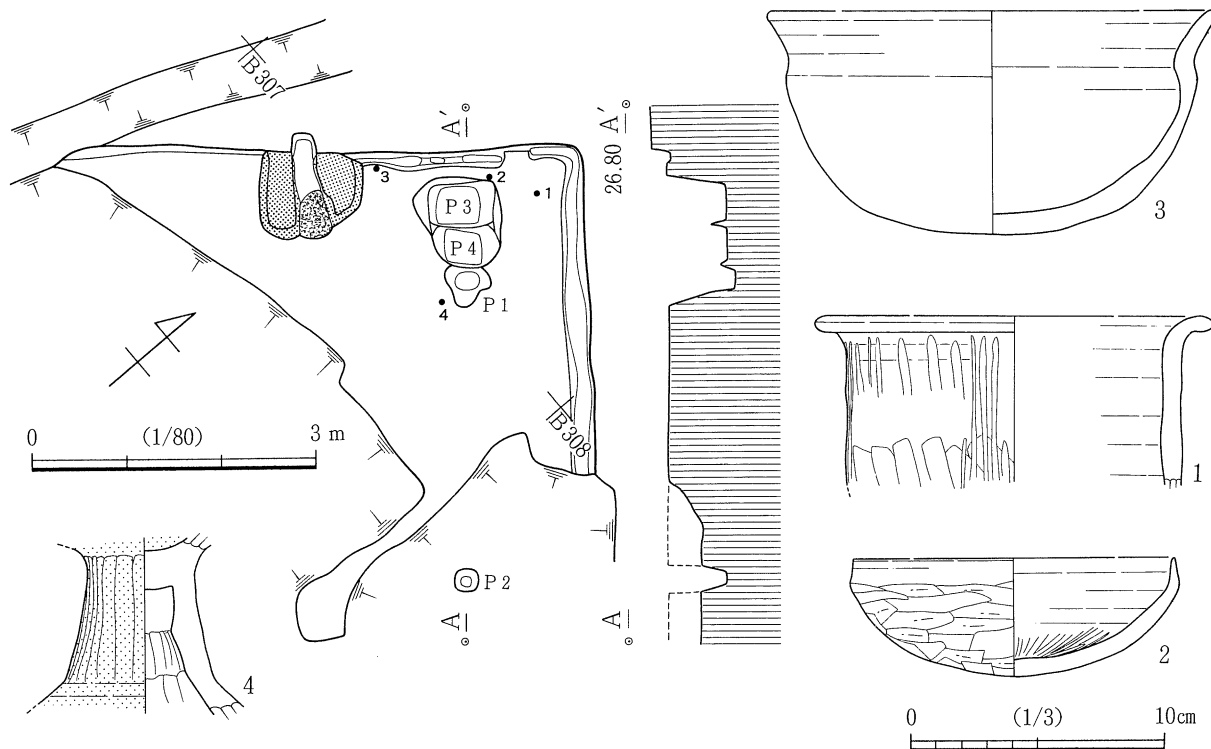
65号住居跡（第71図）

調査区北西B2区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、東・南・西隅壁を大きく攪乱され、北隅・カマドと床面の一部の検出である。規模は、カマドが北西壁辺の中央に設けられたとすると、推定副軸長で6m程を測る。平面形は、比較的整った方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-51°-Wを指向する。残存壁高0~19cmを測る。Pitの深さは、P1-68cm・P2-66cm・P3-61cm・P4-62cmを測り、支柱穴はP1・P2の2穴を検出し、本来は4穴を有しよう。P3・P4に貯蔵穴。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、煙道部は壁より僅かに0.2m程張出す。床面は、カマド周辺に細かな凹凸があるものの良く踏み締められて入る。壁溝は北西壁辺と北東壁辺に確認されるが、北西壁辺南半分には検出されない。

遺物（第71図） 主な出土遺物は、土師器甕1点・土師器坏1点・土師器鉢1点・土師器高坏1点である。全て床面よりやや浮いて出土し、遺構との共判関係には疑問も残る。2は内面に放射状暗文のミガキを有し、1の甕は口径>胴径である。

66号住居跡（第72図）

調査区西端B3区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、北・東・南隅を大きく攪乱され、西隅と床面とカマドの一部の検出である。規模は、カマドが北西壁辺の中央に設けられたとすると、推定副軸長6.5mを測る。平面形は、比較的整った方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-43°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を大きく削平され、残存壁高0~8cmを測る。Pitの深さは、P1-87cmを測り、支柱穴の1穴を検出し、本来は4穴を設けるものと思われる。カマドは、削平され最下層の検出で痕跡を残すだけで北壁の中央に設けられるものと思われる。床面は、部分的に削平され締まっているものの踏み締められた状況はうかがえない。壁溝は、検出部



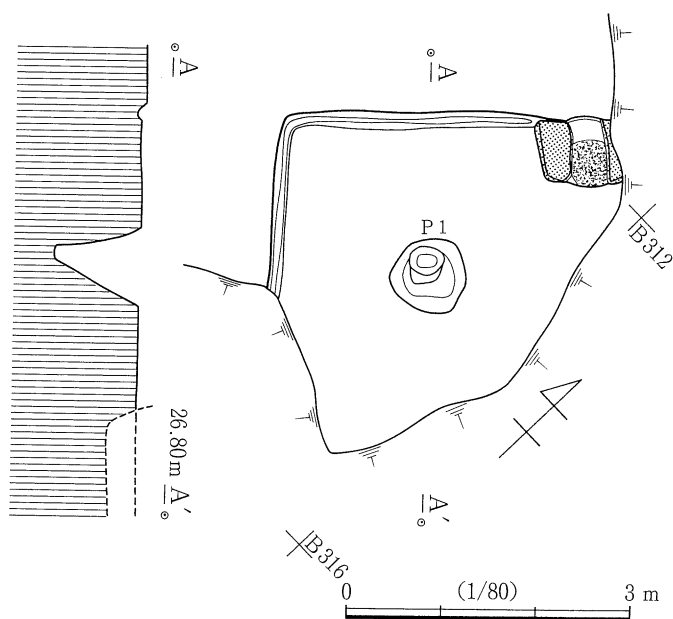
第71図 65号住居跡と出土遺物

分で遺存することから本来は四周するものと思われる。

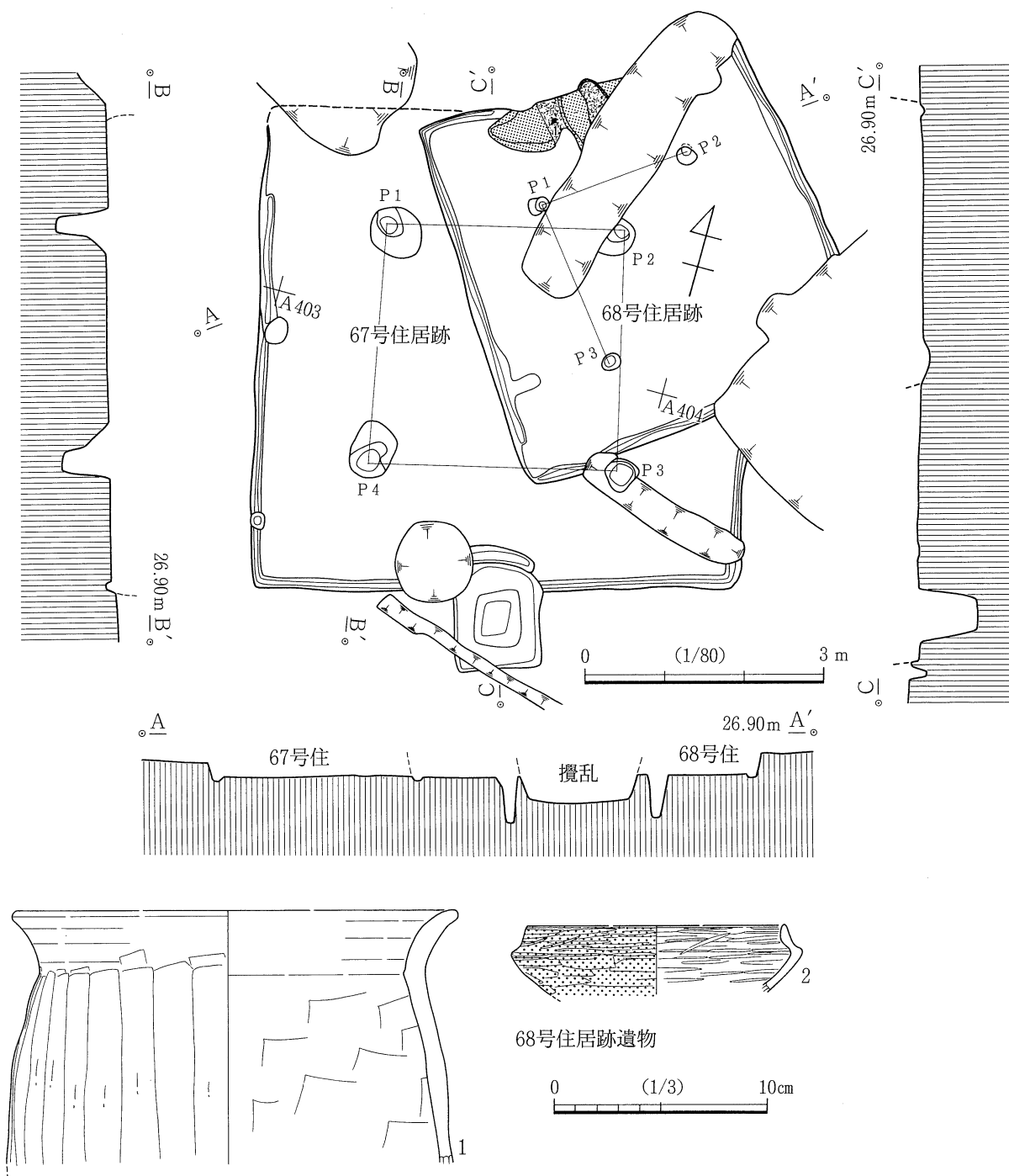
遺物 覆土中より土師器小片を検出するものの、器形を復元できる遺物はなく、住居跡の帰属を明確に判断する資料が無い。

67号住居跡（第73図）

調査区西端A3・A4区の造成工事によりソフトローム上面を削平され攪乱された凹凸のある地域に位置し、プラン北東部床面を68号住居跡に大きく掘り込まれ検出する。規模は、北西壁辺が不鮮明だが、主軸長約6.6m・副軸長6.1mを測る。平面形は、均整の取れたやや縦長の方形を呈し、南壁中央に張出しの貯蔵穴を有する。主軸方位は、N-15°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を削平され、北と西側は無く、西28cm・南12cmを測る。Pitの深さは、P1-63cm・P2-59cm・P3-71cm・P4-59cmを測り、主柱穴4穴を検出する。カマドは北壁に設けられたと思われるが、カマド位置に68号住居跡カマドが重複し詳細は不明である。壁溝は、残りの良い壁で検出されることから本来は四周するものと判断される。南壁中央に設けられた張出し



第72図 66号住居跡



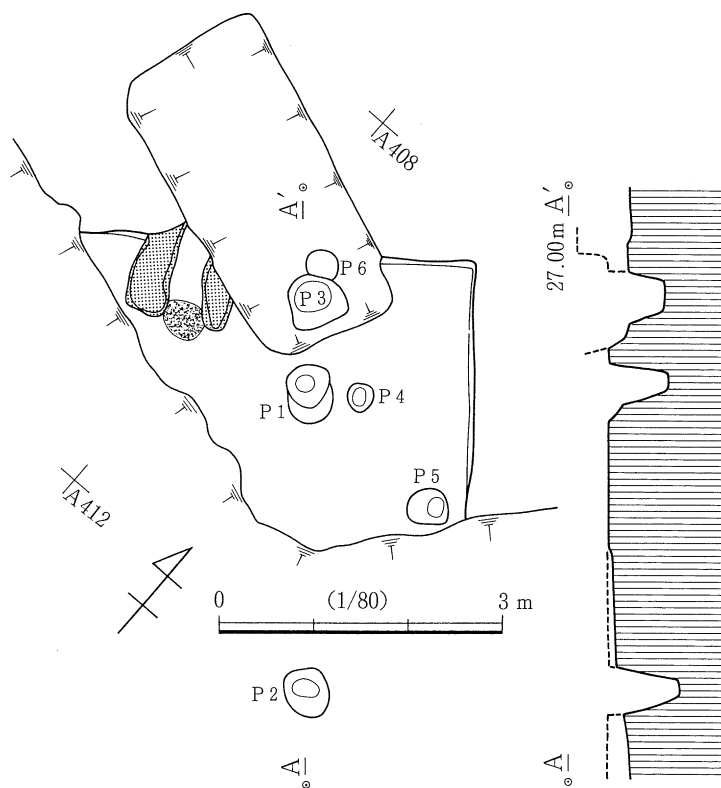
第73図 67・68号住居跡と出土遺物

の貯蔵穴は、南壁を幅1.1m張出長1.0mで、中央に0.7m×0.55m・深さ72cmの貯蔵穴を有する。床面側に床と張出し貯蔵穴を区画する壁溝状の弧状の浅い溝を設けている。

遺物 覆土中より土師器小片を検出するものの、器形を復元できる遺物はなく、住居跡の帰属を明確に判断する資料が無い。

68号住居跡（第73図）

調査区西端A3・A4区の造成工事によりソフトローム上面を削平され攪乱された凹凸のある地域に位置し、西側で67号住居跡床面を大きく掘り込みプラン北側と南隅を大きく攪乱されて検出する。



第74図 69号住居跡

69号住居跡（第74図）

調査区西端A 4 区の造成工事によりソフトローム上面を削平され攪乱による凹凸のある地域に位置し、カマドと北隅を検出する。規模は、カマドが北西壁辺中央に設けられたものとする、副軸長6 m程を測る。平面形は、均整の取れた方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-39°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を大きく削平され、残存壁高0~10cmを測る。Pitの深さは、P 1-63cm・P 2-76cm・P 3-56cm・P 4-8 cm・P 5-16cmを測り、支柱穴2穴を検出し、本来は4穴を有するものであろう。P 3は貯蔵穴であろうか。カマドは煙道部と左袖部を攪乱され北壁に検出されるものの、痕跡を示す程度である。壁溝は検出されない。

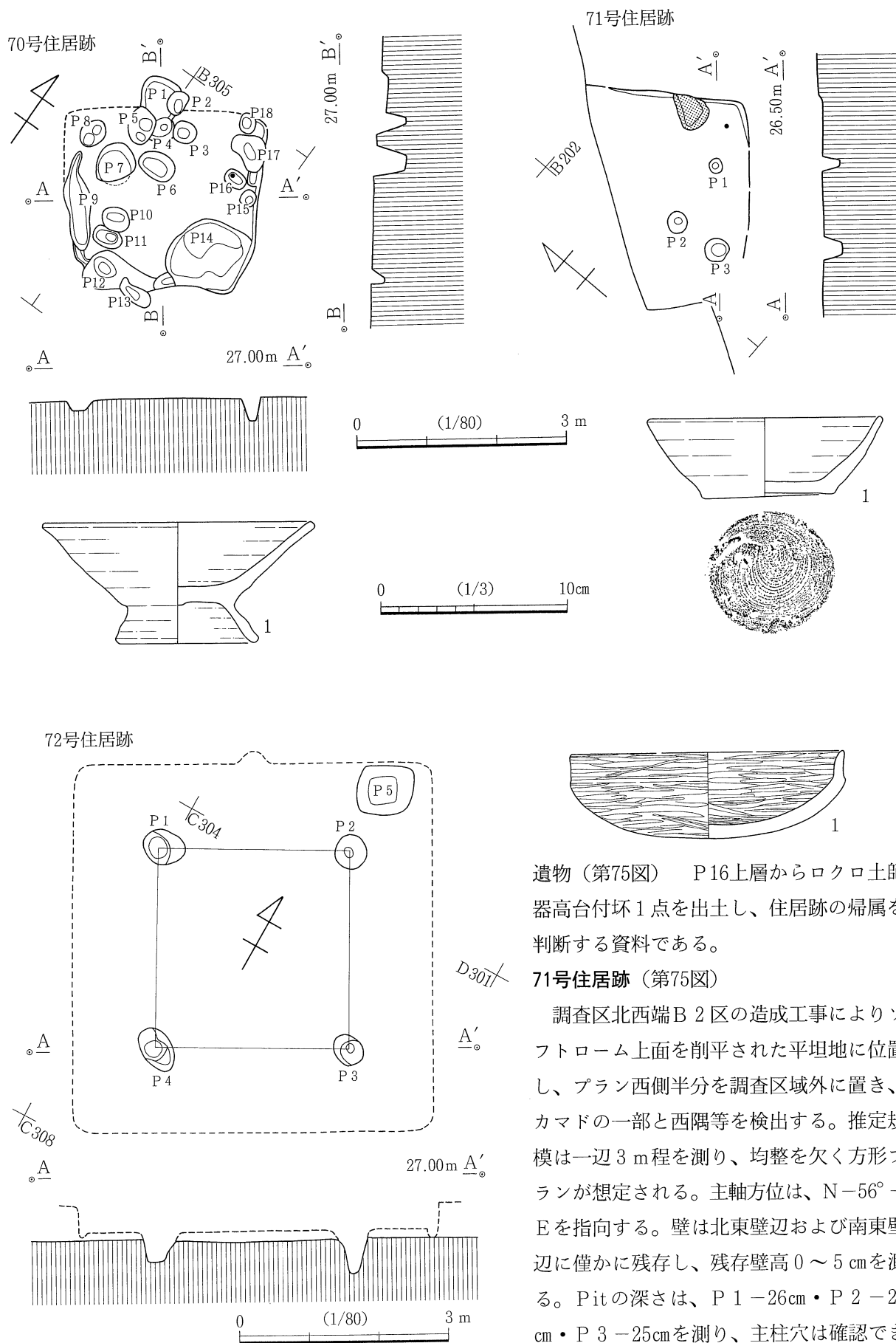
遺物 覆土中から土師器小片を出土するものの、器形を復元できた遺物がなく、住居跡の帰属を明確に判断する資料ない。

70号住居跡（第75図）

調査区西側A 3・B 3 区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、Pit群と床面の部分的な検出である。規模は明確な壁が存在しないためPit群を範囲と考えると一辺2.7 m前後を測り、平面形は均整を欠く方形プランを呈するものと思われる。主軸方位は不明。壁はソフトロームを削平することから僅かに東側で確認するにとどまり、残存壁高0~5 cmを測る。Pitの深さは、P 1-8 cm・P 2-33cm・P 3-30cm・P 4-42cm・P 5-24cm・P 6-45cm・P 7-52cm・P 8-16cm・P 9-17cm・P 10-23cm・P 11-54cm・P 12-63cm・P 13-52cm・P 14-38cm・P 15-31 cm・P 16-54cm・P 17-36cm・P 18-35cmを測り、支柱穴は明確にできない。カマドおよび壁溝は無く、床面も中央が僅かに踏み締めた跡がある程度である。

規模は、主軸長4.65 m・副軸長4.45 mを測る。平面形は、均整の取れた方形を呈する。主軸方位は、N-31°-Wを指向する。壁はソフトローム上面を大きく削平され、残存壁高2~23cmを測る。Pitの深さは、P 1-59cm・P 2-43cm・P 3-45cmを測り、支柱穴3穴を検出し、本来は4穴を有するものであろう。カマドは、北壁の中央に2基検出し、中央の袖を共有し2基同時に使用したものと感取される。壁溝は、南西隅で途切れるものの、本来は四周するものと思われる。

遺物（第60図） カマド燃焼部より、土師器甕1点・土師器模倣坏1点を出土し、住居跡の帰属を判断できる資料である。



第75図 70・71・72号住居跡と出土遺物

遺物（第75図） P16上層からロクロ土師器高台付坏1点出土し、住居跡の帰属を判断する資料である。

71号住居跡（第75図）

調査区北西端B2区の造成工事によりソフトローム上面を削平された平坦地に位置し、プラン西側半分を調査区域外に置き、カマドの一部と西隅等を検出する。推定規模は一辺3m程を測り、均整を欠く方形プランが想定される。主軸方位は、N-56°-Eを指向する。壁は北東壁辺および南東壁辺に僅かに残存し、残存壁高0~5cmを測る。Pitの深さは、P1-26cm・P2-27cm・P3-25cmを測り、支柱穴は確認でき

ない。カマドは右袖部を確認するだけで燃焼部・煙道部は確認できない。床面は、カマドから中央部に踏み締められた硬化面がある。壁溝は検出されない。

遺物 東隅床面から底部回転糸切りのロクロ土師器坏1点土を出土し、住居跡の帰属を判断できる資料である。

72号住居跡（第75図）

調査区中央C2・C3区の造成工事によりソフトローム上面を大きく削平された平坦地に位置し、主柱穴と貯蔵穴だけの検出である。規模は、各壁および床面を大きく削平されることから不明であるが、主柱穴間で2.8mを測り、一辺5.2～5.3mの方形プランを呈するものと思われる。主軸方位は、北にカマドが設けられたと仮定するとN-29°-Wを指向する。Pitの深さは、P1-32cm・P2-19cm・P3-48cm・P4-32cm・P5-51cmを測り、主柱穴4穴を検出する。カマドおよび壁・壁溝は削平され確認できない。

遺物 P5覆土中から外部に鈍い稜を有する土師器坏1点土を出土し、住居跡の帰属を判断できる資料である。

2. 掘立柱遺構

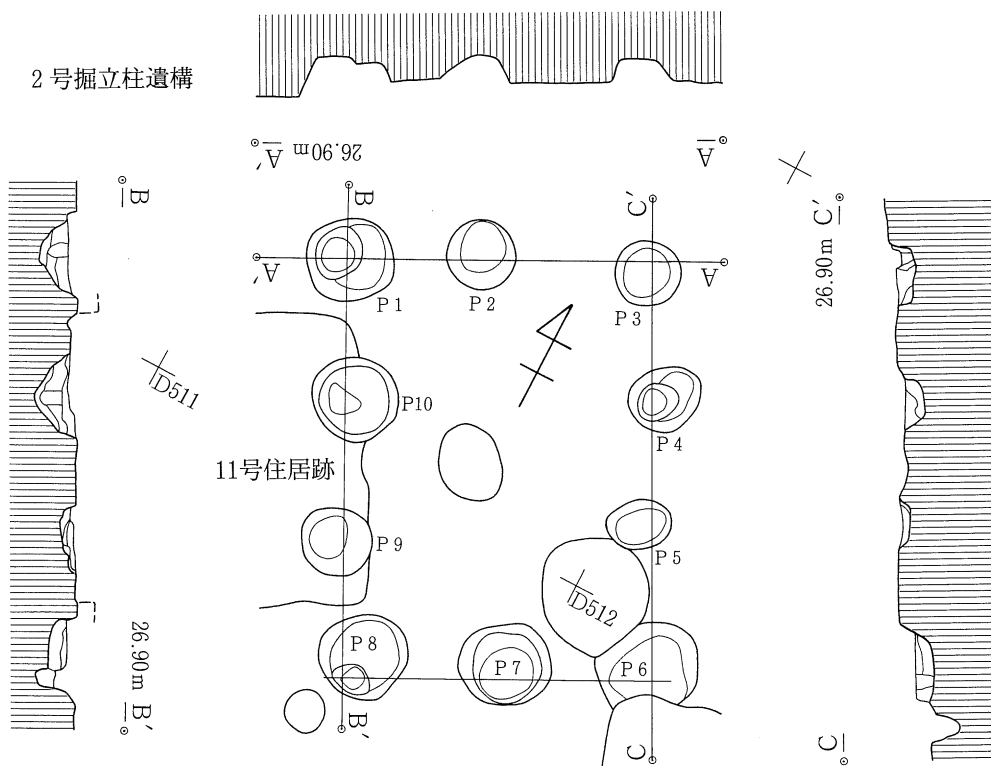
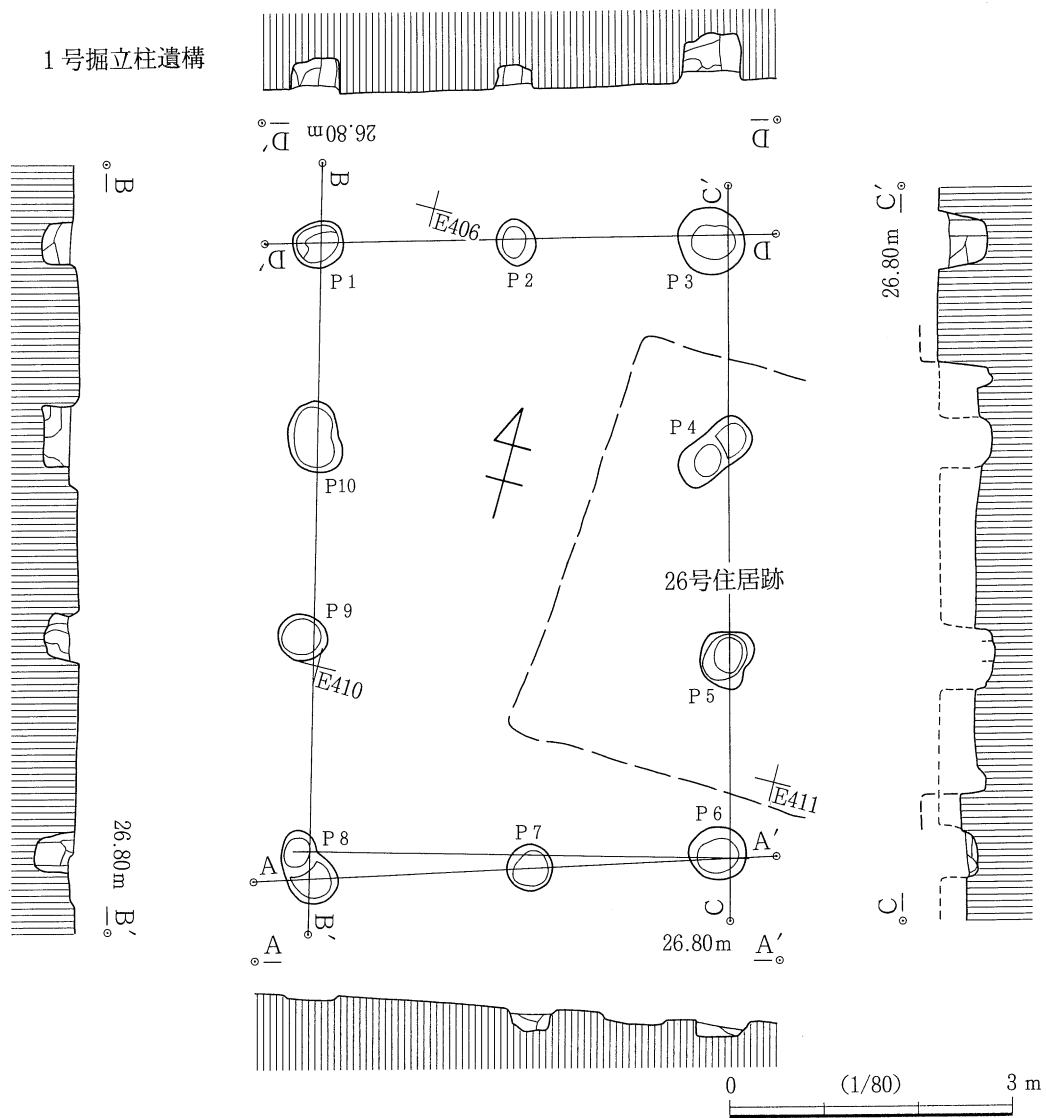
1号掘立柱遺構（第76図）

調査区東側中央E4区に、プラン東側柱穴が26号住居跡を掘り込み検出する。桁行3間（東側柱間6.6m・西側柱間6.5m）、梁行2間（北側柱間4.3m・南側柱間4.4m）の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行2～2.4m、梁行2～2.2mを測る。柱掘り方は、直径0.5～0.7mの円形を呈する。Pitの深さは、緩やかな斜面に占地することから一応に比較できないが、P1-32cm・P2-27cm・P3-49cm・P4-40cm・P5-39cm・P6-21cm・P7-24cm・P8-46cm・P9-35cm・P10-37cmを測り、東側斜面下方のレベルの低いPitが深くなる傾向にある。主軸方位は、桁行でN-15°-Wを指向する。建替は、覆土土層からは観察されない。

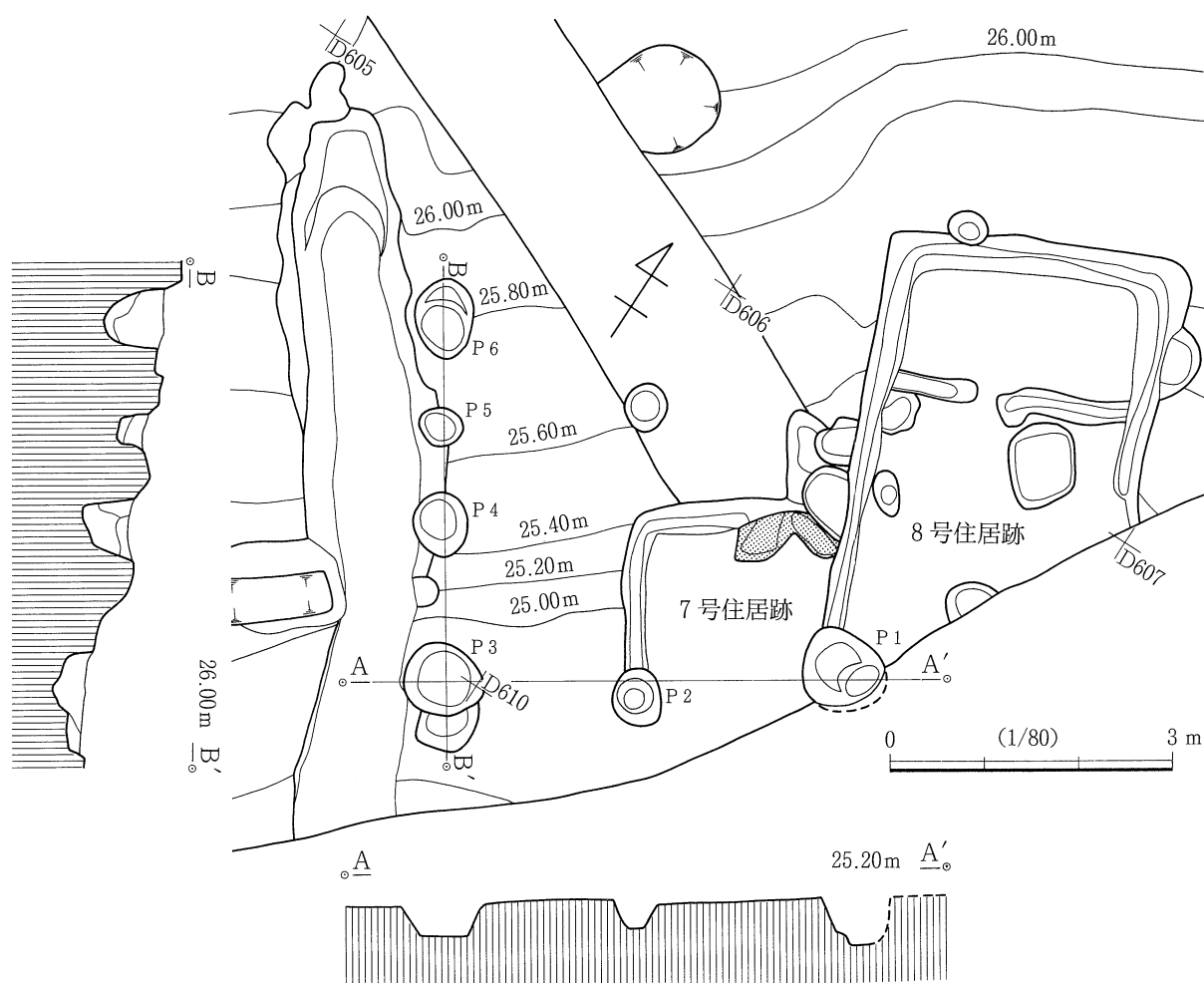
遺物 器形を復元するような遺物は無く、遺物からは所属時期を明確に判断できない。遺構の切り合い関係では、八世紀末葉の26号住居跡を掘り込んで検出することから九世紀以降の所産と見ることができる。

2号掘立柱遺構（第76図）

調査区南側D5区の、工事によりソフトロームを大きく削平された地域に立地し、西側で11号住居跡を掘り込み検出する。桁行3間（東側柱間4.5m・西側柱間4.4m）、梁行2間柱間（北側柱間3.2m・南側柱間3.3m）の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行1.3～1.6m、梁行1.5～1.7mを測る。柱掘り方は、直径0.7～1.1mの円形を呈する。Pitの深さは、P1-39cm・P2-29cm・P3-24cm・P4-34cm・P5-18cm・P6-37cm・P7-32cm・P8-30cm・P9-16cm・P10-42cmを測り、不ぞろいで規則性に欠ける。主軸方位は、桁行でN-28°-Wを指向する。建替は、覆土土層からは観察されない。



第76図 1・2号掘立柱建物跡



第77図 3号掘立柱遺構

遺物 器形を復元するような遺物は無く、遺物からは所属時期を明確に判断できない。遺構の切り合い関係では、九世紀第3四半紀の所属と考えられる11号住居跡を掘り込んで検出することから九世紀末葉以降の所産と見ることができる。

3号掘立柱遺構（第77図）

調査区南側D6区の斜面地に7・8号住居跡を掘り込み、直行するL字形の2列の柱列遺構を検出する。A-A'は2間で、全長4.5m程で、柱間寸法は2.0~2.5mを測る。柱掘り方は、0.6~0.9mの円形を呈する。方位は、N-58°-Eを指向する。Pitの深さは、P1-51cm・P2-52cm・P3-42cmを測り、不ぞろいで規則性に欠ける。柱列は南側が調査区域外と接していることから、更に南側に広がる掘立柱建物跡の存在が想定できる。

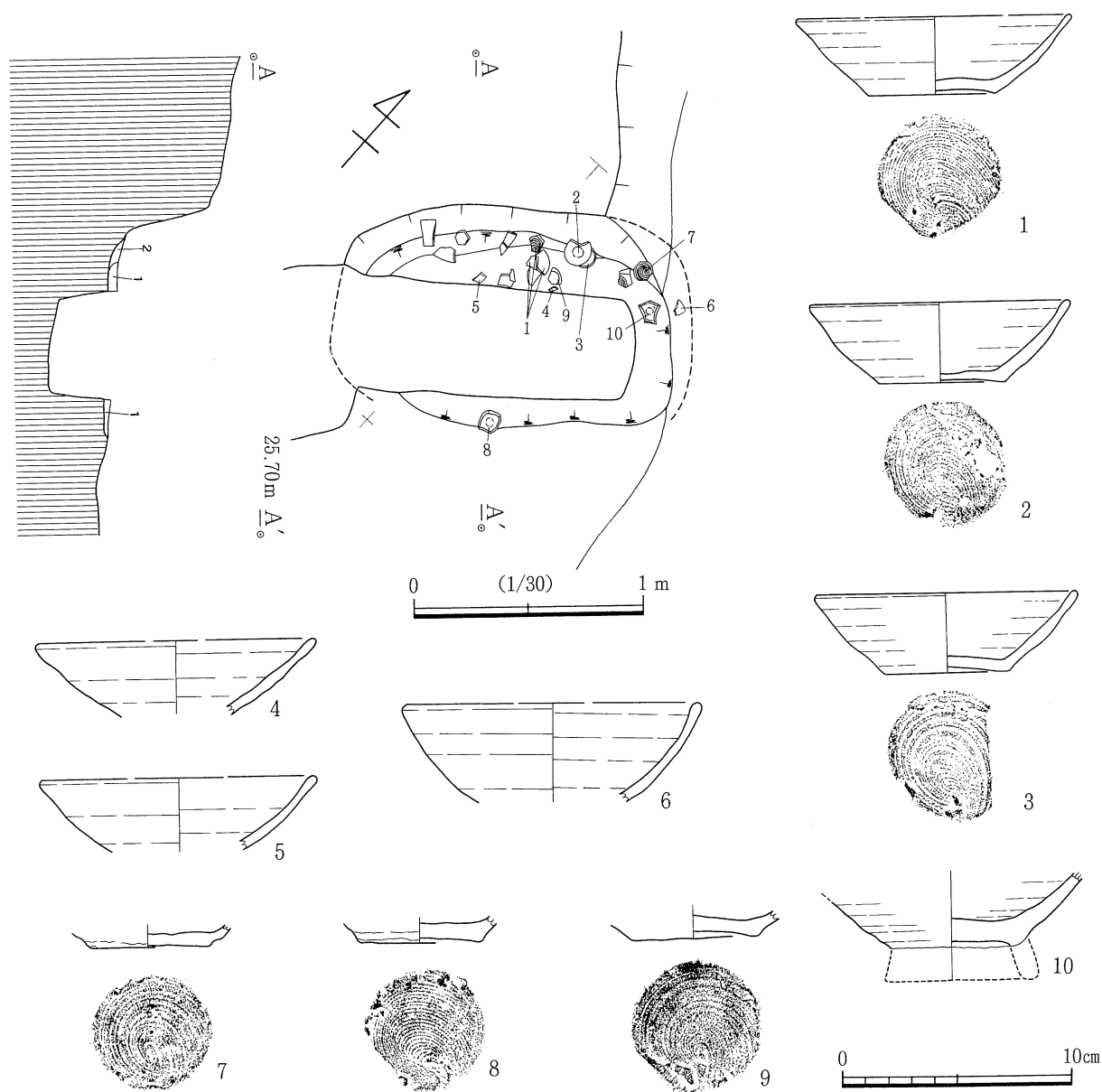
B-B'は3間で、全長4m程で、柱間寸法は1.0~1.7mを測る。柱掘り方は、0.4~0.8mの円形を呈する。方位は、N-32°-Wを指向する。Pitの深さは、斜面に占地することから一応に比較できないが、P3-42cm・P4-70cm・P5-50cm・P6-78cmを測り、不ぞろいで規則性に欠ける。

遺物 器形を復元するような遺物は無く、遺物からは所属時期を明確に判断できない。遺構切り合い関係では、柱列A-A'は九世紀第4四半紀の所属と考えられる8号住居跡を掘り込んでいることから九世紀末葉以降の所産と見ることができる。

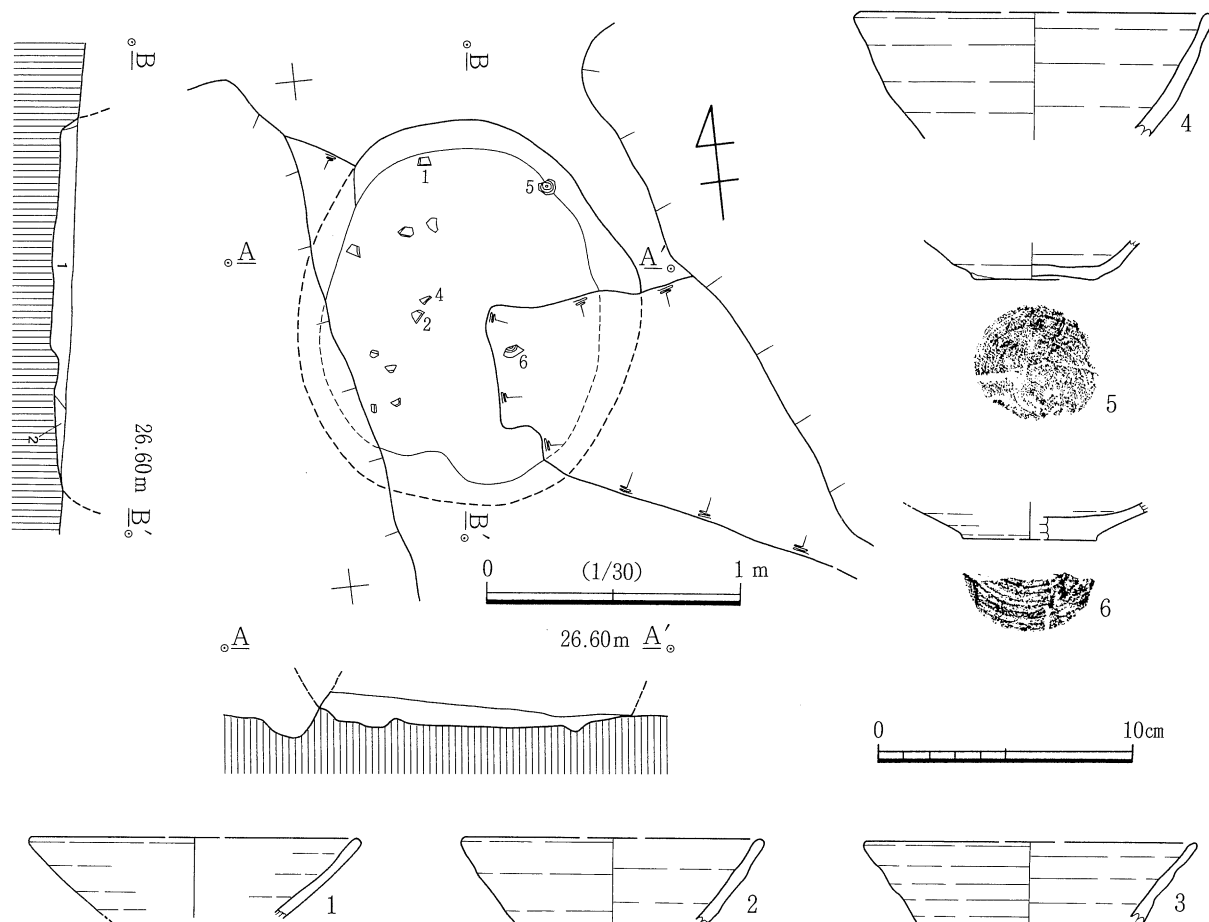
3. 土師器窯跡

1号土師器窯跡（第78図）

調査区南端のD6区の斜面に立地し、プランを大きく削平され検出する。プラン中央を近代の畑作に伴う芋穴により窯底部まで大きく攪乱され、北壁面と壁下に窯底の一部、南と西に窯底の一部を辛うじて残すだけである。推定規模は、確認面で長軸長1.6m・短軸長1.1m、窯底長軸長で1.35m・短軸長0.9m。深さは、北壁0.4m、最深部で0.45mを測る。平面形は、整った縦長の楕円形を呈するものと感取される。長軸の方位は、N-40°-Eを指向する。掘り方は、ローム層地山を掘り窪め、壁はほぼ垂直に立ち、顕著な壁面の焼土化は認められない。窯底は、掘り窪めたローム面に直接置かれ1枚で、ロームが僅かに焼土化したローム塊となり、粘土等による張り床は観察されない。



第78図 1号土師窯跡



第79図 2号土師窯跡

また、窯底直上の覆土に黒褐色土に焼土粒を多量に混入するものの、明確な焼土の単一層は観察されなく。覆土は、攪乱され土師器窯跡の存在が想定できなかったため、十分な観察ができなかったが、黒褐色土中に僅かに木炭片がみられた程度である。

遺物 残りの良い北西側に散在し、床面より僅かに浮きロクロ土師器坏や混入遺物の須恵器甕小片を出土する。ロクロ土師器坏は底部に回転糸切りを施すものが主体で、底部破片の1割程に体部下端および底部周縁に手持ち匏ケズリを施すものや、高台付坏も数点出土する。出土遺物から稲荷台VI以降の十世紀代の所産と思われる。

2号土師器窯跡（第79図）

調査区西側E5区の校舎建設工事によりソフトルーム面を大きく削平され、西側で12号住居跡に東側で攪乱され、北壁を僅かに残し、窯底のみの検出にである。旧地形の立地は、台地縁辺の斜面と平坦面変換線の僅かに平坦部側に占地した状況がうかがうことができる。確認面の規模は、長軸長1.45m・短軸長1.24mを計測し、窯底の復元規模は、長軸長1.5~1.6m・短軸長1.3~1.4mと推測され、1号窯より僅かに大きくなり、平面形は、楕円または倒卵形を呈するものと感取される。長軸の方位は、N-10°-Eを指向する。壁は、北壁の最下層を0.08~0.15mと僅かに残し、壁面は焼土化したローム塊となり、長時間熱せられた状況がうかがえる。窯底は、掘り窪めたローム面に直接置かれ粘土等による張り床はみられない。窯底も壁面同様に焼土化したローム塊状に固く締まり、5~7cmを測る。

覆土A-A'、1層、暗褐色土層に多量の焼土化した小ローム塊をブロックに含む土層である。

遺物 床面よりロクロ土師器坏の小片が数点出土するだけである。ロクロ土師器坏は底部回転糸切りを施すものだけである。ロクロ土師器坏の法量は推定で12~14cmを計測し、1号窯跡の11~13cmよりやや大きな数値を示す。

4. その他の遺構と遺物

78号遺構（第80図）

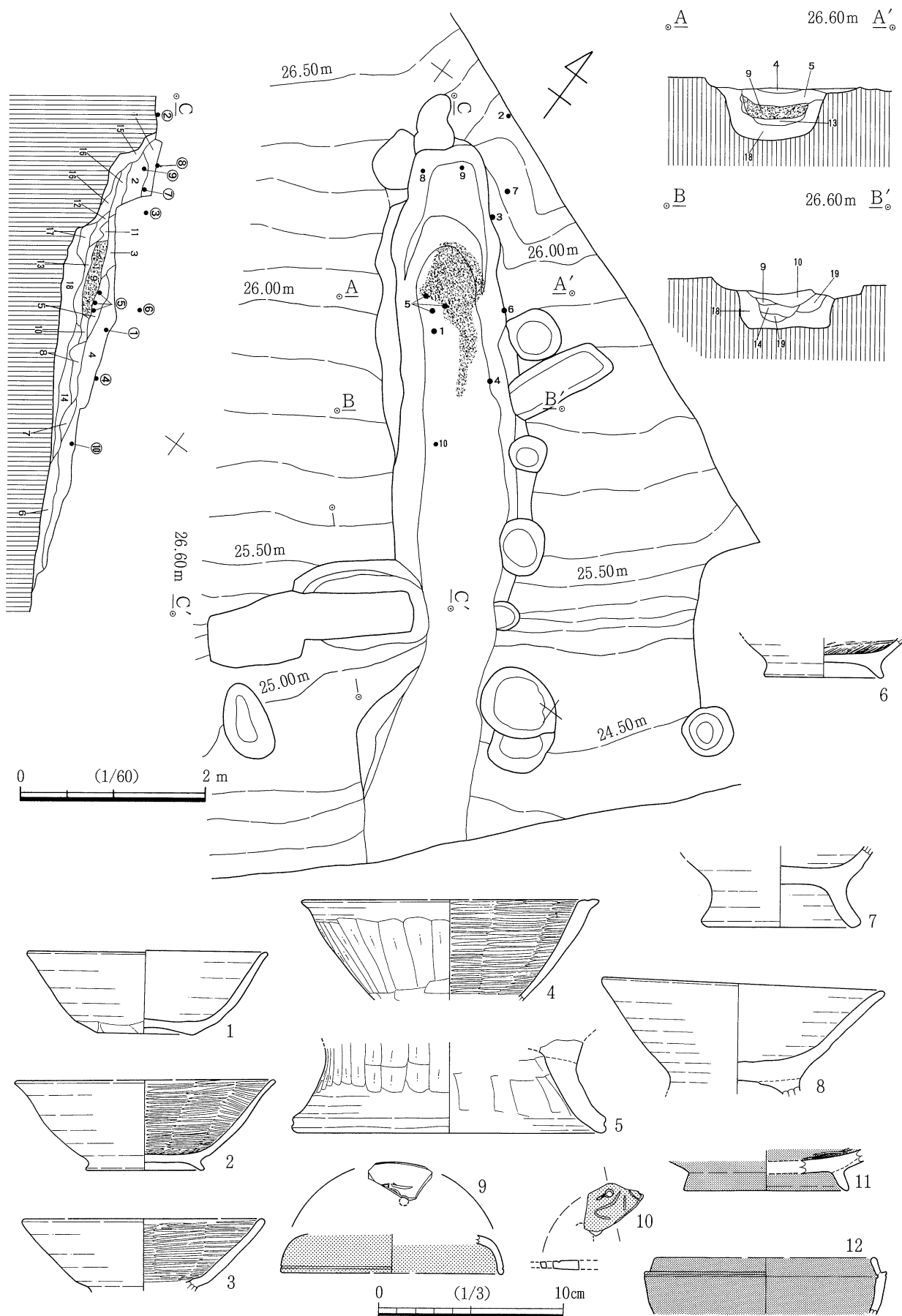
調査区南側のD6区の斜地に、斜面に直行する縦長の溝状に検出し、その形状は窖窯を思わせるものである。南端斜面で、両端の壁を人為的な台地整形により削平され、壁は漸次的に無くなり床面だけとなり正確な規模・形状の把握は困難である。両端の壁の長さ5.1m・幅1.4m程で、調査区域外に達する床面の長さを含めると7.6m以上を測る。長軸の方位は、N-40°-Wを指向する。床面は北端で0.3m程の段を有し、地形に沿い緩やかに傾斜し凹凸を有する。床面は、一枚で張り床は観察できない。壁面および壁面にも凹凸を有し、比較的急な立ち上がりである。覆土、北側中位に焼土や木炭を含む土層が0.7×0.9m、厚さ0.1~0.15mの範囲に観察され、覆土中に構築された土師窯跡とも想定されるが、焼土中よりの遺物の出土が土師器小片であることや焼土範囲が1・2号土師窯より小規模なことなどから土師窯跡とは断定できなかった。

覆土A-A'・B-B'・C-C'。1層、黒褐色土層で旧表土直下土層。2層、黒褐色土層で多量のロームブロックを含む。3層、黒褐色土層でロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。4層、黒褐色土層でローム粒を含む。5層、黒褐色土層でロームと大ロームブロックを含む。6層、黒褐色土層に小ロームブロックを含む。7層、黒色土層に木炭を含む。8層、黒褐色土層にロームブロックと少量の焼土粒を含む。9層、焼土層。10層、褐色土層に小ロームブロックと少量の焼土粒を含む。11層、暗黄褐色土層で大ロームブロック土層。12層、黒褐色土にローム粒と焼土粒を含む。13層、小ロームブロック・焼土・木炭の混合土層。14層、7層に同じ。15層、黒褐色土に褐色土ブロックと小ロームブロックを含む。16層、褐色土に小ロームブロックを含む。17層、褐色土に大ロームブロックを含む。18層、暗褐色土層に多量の小ロームブロックを含む。19層、褐色土層。

遺物は、覆土上層からロクロ土師器坏・須恵器甕片・緑釉陶器小片を出土し、多種が混在することから廃棄遺物と感取される。1は体部下端手持ち篋ケズリ、2~4・6は内面黒色で内面を丁寧に磨き上げている。4は、平な口唇部に一条の沈線を有している。9~12は緑釉陶器で、9・10には陰刻紋が施されている。いずれも折戸53号窯期と感取される。

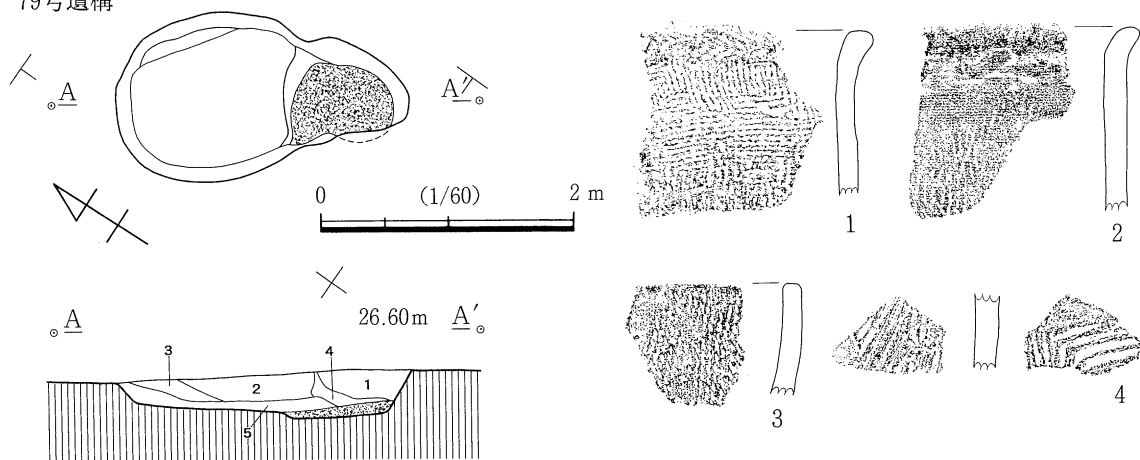
79号遺構（第81図）

調査区北西側B2のソフトローム上面を削平された平坦地に検出した、縄文時代早期の炉穴で竪穴と炉跡から構成される。規模は、長軸長2.28m・短軸長1.32m、竪穴部で長軸長1.60m・短軸長1.32m、深さは竪穴で0.31m、炉跡で0.35mを測る。主軸方位は、長軸でN-39°-Wを指向する。平面形は、竪穴部が楕円、炉跡が不整楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、炉跡側が良く残り0.35m、竪穴部が0.15m~0.25mを測る。床は竪穴部北側から炉跡に向かって僅かに傾斜し、炉跡との境に僅かに段を有する。炉跡は、竪穴床面から抉らてた横穴として掘られたことが、焼土上層がローム

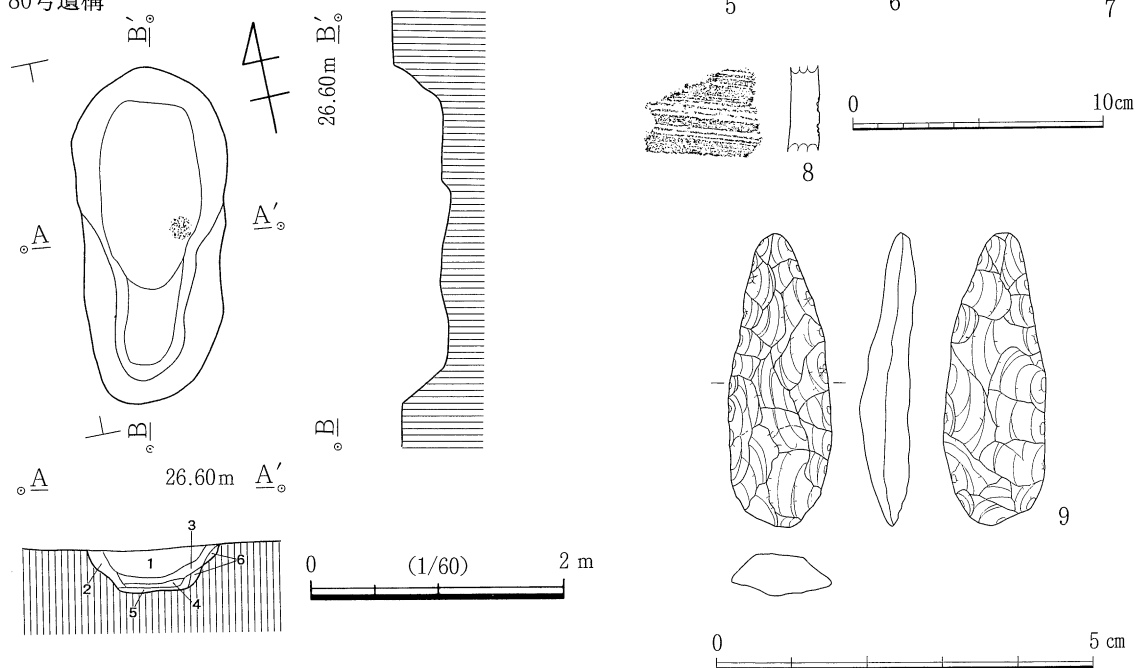


第80图 78号遺構

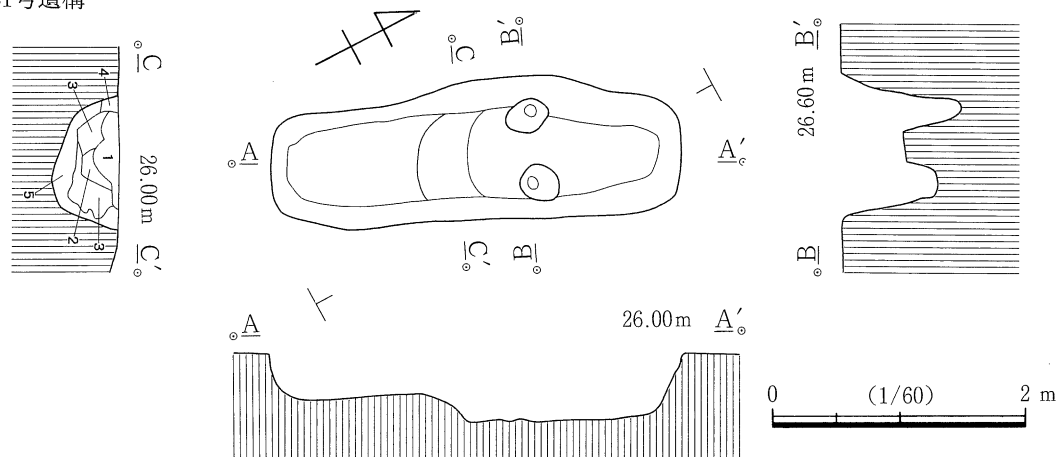
79号遺構



80号遺構

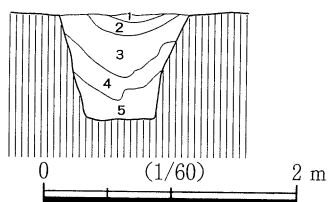
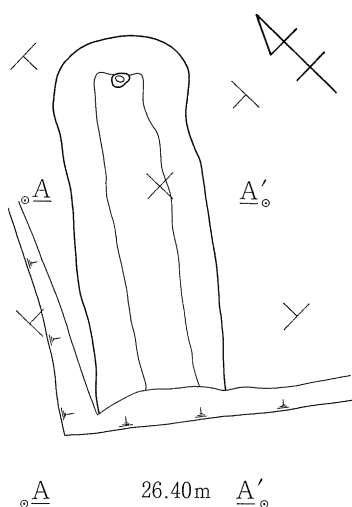


81号遺構

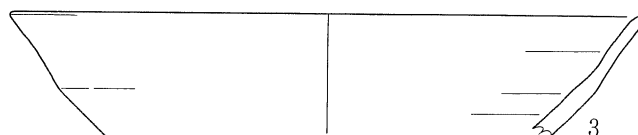
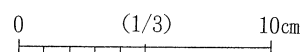
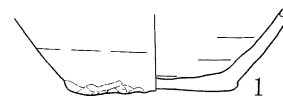
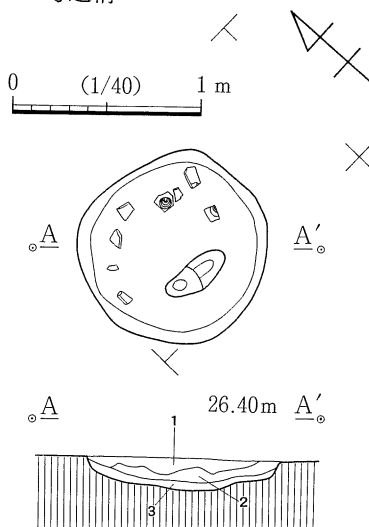


第81図 79・80・81号遺構

82号遺構



83号遺構



第82図 82・83号遺構

の単一層で、埋没後に天井部が落下した状況を呈することで推測される。炉跡には、焼土が径0.6m程の範囲に6cm前後の堆積が観察される。

土層A-A' 第1層、黄褐色土（ソフトローム土）。第2層、暗黒褐色土に多量のローム粒を含む。第3層、暗茶褐色土。第4層、暗黒褐色土に多量のローム粒とローム土を含む。第5層、暗茶褐色土でローム土に褐色土を含む。

遺物（第81図4） 覆土中から縄文時代早期茅山期の土器小片1点を出土する。

なお、81図1～3の撚紋系の土器片3点と9のチャート製の尖頭器は調査区B1・B2・C1区の遺構外より出土している。

80号遺構（第81図）

調査区北側C1区のほぼ平坦な地域より検出し、炉穴と考えられる遺構である。規模は、長軸長2.68m・短軸長1.20m、深さは0.32～0.44mを測る。主軸方位は、長軸でN-9°-Eを指向する。平面形は、楕円が2個連った縦長の楕円を呈する。壁は北側で緩やかに立ち上がり、南半分では中断に稜線を有している。床面には明確な焼土の堆積は無く、本来の炉跡と思われるプラン南半分の炉床面には凹凸を有し、焼土は床面中央の東壁より、径0.2mの範囲に僅かに検出されるだけである。

土層A-A' 第1層、黒色土。第2層、暗茶褐色土にローム粒を含む。第3層、黒色土に多量のローム粒を含む。第4層、暗黒褐色土に多量のローム粒と焼土粒を含む。第5層、暗茶褐色土でローム粒・ロームブロック土を含む。

遺物 遺物の出土は皆無で、所属時期の明確な判断が困難であるが、縄文時代早期のと考えられる。

81号遺構（第81図）

調査区北側C1区の東端のほぼ平坦な地域より検出する。規模は、長軸長3.3m・短軸長1.10m、

深さは0.45～0.53mを測る。長軸の主軸方位は、N-28°-Eを指向する。平面形は、隅丸の縦長の長方形を呈する。壁は急角度で立ち上がる。床面は中央に0.1m程の段を有するものの比較的平坦で、北側が低くなる。北側床面には、床面を挟むんで壁に接し2穴が設けられ、Pitの深さP1-50cm・P2-28cmを測る。

土層A-A' 第1層、黒色土で少量のローム粒を含む。第2層、黒褐色土にローム粒を含む。第3層、暗褐色土に多量のローム粒と少量のロームブロックを含む。第4層、暗黄褐色土と茶褐色土の混合土でロームブロックを含む。第5層、暗黄褐色土でロームブロックを含む。

遺物 遺物の出土は皆無で、所属時期の明確な判断が困難であるが、覆土状況から縄文時代の所産と思われる。

82号遺構（第82図）

調査区北東端に一部調査区域外に跨がり、溝状に検出する。規模は、確認面長軸長2.95m・短軸長1.08m、深さは0.8～0.93mを測る。長軸の主軸方位は、N-52°-Wを指向する。平面形は、隅丸の縦長の長方形を呈する。壁には凹凸を有し、急角度で立ち上がる。床面は平坦であるが踏み固められた状況は無く、西端に壁直下の床面に1穴が設けられ、Pitの深さ-17cmを測る。また、覆土状況から埋めもどされた状況がうかがえる。

土層A-A' 第1層、暗黄褐色土でロームブロック質土層。第2層、暗茶褐色土でロームブロックを含む。第3層、暗褐色土に多量のローム粒と少量のロームブロックを含む。第4層、暗黄褐色土に多量のロームブロックを含む。第5層、暗黄褐色土でロームブロックを含む。

遺物（第81図5～8） 遺物は縄文土器片を出土し、所属時期を示す資料と考えられる。縄文時代中期加曽利E式期の所産であろう。

83号遺構（第82図）

調査区北側C1区より確認された土壌である。規模は、南北長0.99m・東西長1.0mの径1mの不整な円系を呈する。掘方は、ソフトローム中でおさまり、深さは12～19cmを測る。床は船底型を呈し、南側にPitを有するものの木根によるものである。

土層A-A' 第1層、黒褐色土に少量のローム粒を含む。第2層、黒褐色土に褐色土ブロックを含む。第3層、暗褐色土に少量のロームブロックを含む。

遺物 遺物はロクロ土師器坏を出土し、所属時期を示す資料である。

第3章 ま と め

郡本大宮遺跡では、今回の調査によって、竪穴住居跡76軒、掘立柱遺構3棟、土師器窯跡2基、土壙等6基が検出された。竪穴住居跡から成る集落跡の主体的な時期は、古墳時代後期の六世紀から平安時代の十世紀に比定され、断続的に営まれた集落跡であることが想定されるが、台地中央部が削平され遺構の多くが失われたことを考慮すると、断続期間はより短期間であったことが想定される。ここでは本遺跡における各期の設定と変遷について説明を加えまとめとしたい。

各期は、Ⅰ～Ⅶ期を設定し、Ⅰ期－縄文時代、Ⅱ期－弥生時代後期、Ⅲ期－古墳時代後期（鬼高期）、Ⅳ期－古墳時代終末期（飛鳥時代）、Ⅴ期－奈良時代、Ⅵ期－平安時代（九世紀）、Ⅶ期－平安時代（十世紀以降）を目安として行った。

Ⅲ期、Ⅳ期の設定については、古墳時代全般に渡り調査の実施された市原市椎津茶ノ木遺跡を、Ⅴ期～Ⅵは坊作遺跡、Ⅵ～Ⅶ期は稲荷台遺跡を参考とした。椎津茶ノ木遺跡は、養老川左岸の眼下に東京湾を見下ろす台地上に位置し、本遺跡の所在する市原台地とは養老川を挟み立地し、一概に比較はできないが当地域における古墳時代のまとまりのある資料を出土した遺跡である。現在、整理作業中で最終的なものではないが、検出された150～160軒の竪穴住居跡のうち時期不明は50軒ほどで、縄文4軒、弥生中期5軒、弥生後期8軒、古墳時代前期14軒、中期13軒、後期44軒、終末期10軒、奈良時代8軒、平安時代5軒が判明している。これを須恵器窯期と対比したのが『椎津茶ノ木遺跡変遷試案』で、調査担当者の木對和紀氏より提供していただいた。坊作・稲荷台遺跡については、「房総における歴史時代土器の研究」による。

Ⅰ期に該当する遺構は、79・80号跡の炉穴と82号跡の縄文時代の遺構である。79号跡から縄文早期の条痕紋を施した茅山期の土器片を出土する。82号遺構は、中期の条線紋を施した加曾利E期の土器片を出土する。

Ⅱ期に該当する遺構は、35・48号の2軒の竪穴住居跡がある。いずれも出土遺物が無く、住居跡の平面形等の状況から弥生時代後期を中心とする時期と予想される。南東に小谷を隔てて位置する千山遺跡も同様な分布状況を示している。

Ⅲ期に該当する遺構は、4・10・18・23・25B・30・33・39・40A・40B・43・44・46・47・49・51・55・57・58・59・60・63・64・68・72号住居跡の立替えを含めて25軒の竪穴住居跡がある。

鬼高期の開始を巡っては議論の別れるところではあるが、器高が高く内彎する口縁と半球状の坏に短脚で裾に明瞭な稜線を有する高坏や、やや後出する須恵器模倣坏の出現をもって鬼高期の開始とする論点に集約されるところである。この時期は、前代の和泉期の要素が失われ、鬼高期の指標である高坏や模倣坏が定着安定化した以降で器種に様々な変化が見られ、模倣坏がその最終段階に至、鬼高期の後半の土器で概ね六世紀の第2四半世紀～七世紀第2四半世紀代の年代感が与えられる。

甕は、前段階から引き続き長胴・球胴系の2種があり、大まかには球胴系甕の減少から消滅の過程にある。球胴系甕外面整形は、横方向の篋ケズリおよび篋ナデ（ミガキ）から縦方向（ケズリ）にその手法が変化し消滅する過程を辿る、小形のものより大形がより速く消滅する。小形の球胴系甕は、突出気味の底部から平底となる。本遺跡では23住の1～3・44住の1に横と縦ケズリの混在するものが存在し古相を呈し、44住の2～6や45住覆土出土の7・8の段階を経て新相の43号住居跡に至る。

長胴系甕では、胴径の減少、口縁径 $\geq$ 胴径、胴形の直線化が顕著に認められる。高坏では、壺形坏に短脚の脚裾に強い稜を有するものがほぼ失われ、壺形から直線的に開く坏に弱い稜を有するものへと変化する。23住8は深い半球状の坏で古相を呈するが脚にはやや長脚化の兆しが見え、他の高坏は丹彩を主体とするが既に黒色処理されるものが出現している。新相を呈する4住や43住では無彩となり、脚が完全に長脚化し坏部に強いナデにより鈍い段状の稜線を有している。模倣坏では、初現期の直立する口縁や口縁と体部を分ける鋭くシャープな稜線を特徴とする器種ががほぼ姿を消し、名残りを止めるものとなり、鋭い稜線→鈍い稜線となり、しだいに小形偏平化へと変化する。23住5・44住15→18住3～4・30住4～5→43住15～16→18住5と器形を変化する。39・40住からは、大ぶりで口縁が外傾して開き底体部が深く丸底を有する内外面に丹彩を施す壺形坏も本期では古相を呈するものであろう。小期に細分でき、Ⅲa期には23・44・46号住居跡→Ⅲb期には18・33・51・57号住居跡→Ⅲc期には43・47号住居跡の変遷が可能である。年代感については、茶ノ木遺跡との比較によりⅢa期は六世紀第2四半世紀～第3に、Ⅲb期は六世紀第3四半世紀～七世紀第4四半世紀初頭に、Ⅲc期は七世紀第1四半世紀～第2に比定できる。

Ⅳ期に該当する遺構は、29・41・42・45・60・64号住居跡7軒である。Ⅲ期に比定した43や47号住居跡が連続する資料と言える。模倣坏の終焉、暗文系の壺の出現が認められるが、住居跡数が少なく個々の住居跡においても出土資料が限定されることから組成変化を論じられない。64住4・5は、器高が高く口縁外面が屈曲し、半球状の底体部内面を有し、4には放射状暗文を伴い5は内面黒色を施している。29住3や45住13は比較的浅めの半球状の坏内面に放射状や5～6条一組の暗文を有している。年代感については、七世紀第4四半世紀～八世紀第1四半世に定点を置くものと感取される。

V期の指標とする遺構は、3・14・34号住居跡で、他には2A・2B・22・26・28・62号住居跡がある。土師器坏は3住11・12の非ロクロの底部と体部の境が明瞭なものを主体とするが、僅かながら2A住1や3住10の口径10～11cm前後の小ぶりのロクロ土師器坏が存在する。また、極小ながら2B住1の様なロクロ整形が底部周縁までおよび内面底部と体部の境が明瞭でくの字状を呈するものが存在する。非ロクロ土師器で内面に斜格子の暗文を施す上総型の土師器坏は、この段階では既に存在しない。須恵器では千葉県周辺地域の古窯跡群を中心とする下総系と市原市の永田・不入窯産の須恵器が共判している。須恵器無高台坏では、口径12.7～13.8cm・器高3.4～4.1cmを計り、口高指数25.5～31で永田窯でも13号窯の数値を計測する。各遺構の市原産の須恵器無高台坏や非ロクロの土師器坏の比較からは小期を分けるまでの明確な差は見いだせない。年代感については、坊作遺跡との比較から八世紀第4四半世紀～九世紀第1四半世前半に比定可能である。

Ⅵ期に該当する遺構は、1・5B・7・9・11・13・24・31・32・36・37・38・50・71の15軒の竪穴住居跡がある。前段階の主体であった非ロクロ土師器坏の消滅とロクロ土師器の普遍化。市原産や下総系の須恵器の減少→消滅が認められ、遺構および遺物数が限定されるが、3小期に細分可能である。Ⅵa期の指標とするのは13・24号住居跡で、ロクロ土師器坏の口径12.6～13.5cm計り、口高指数28.5～30.5で、体部下端および底部に回転篋ケズリを施す。Ⅵb期の指標とするのは11号住居跡で、口高指数29～32で、体部下端および底部に回転篋ケズリが主体であるが手持ち篋ケズリが僅かに認められる。Ⅵc期の指標とするのは36号住居跡で、口径12.2～13.7cm計り、口高指数35.5～45で底部回転系切りや体部下端および底部に手持ち篋ケズリを主体とする一群と、口径15cm前後口高指数32.5～

35と、大形で口径17.6cm口高指数35で内面黒色処理で体部下端および底の回転篋ケズリを施す3群が存在する。年代感については、稲荷台遺跡との比較からⅥa期は九世紀第1四半世後半～九世紀第2四半世に、Ⅵb期は九世紀第3四半世に、Ⅵc期は九世紀第3四半世～第4に比定可能である。

Ⅶ期に該当する遺構は、8・12・21・25A・52・53・54・61・70の9軒の竪穴住居跡と2基の土師器窯跡・78号遺構が該当すると思われるが、住居跡については遺物が限定される。ロクロ土師器坯の小形化と内面黒色処理を施した黒色土師器の多様化が認められ、Ⅵ期に比して土器様相そのものが一変する時期である。ロクロ土師器坯は口径11.3～13cm計り、口高指数30～35前後で、Ⅵ期に比して小形化し、底部には回転篋ケズリ技法が見られなく、手持ち篋ケズリか糸切りだけとなる。黒色土師器は三角形の高台付すものの割合が急増する。年代感については、十世紀第2四半世に定点を求めることができよう。

『椎津茶ノ木遺跡変遷試案』木對和紀作成（平成3年1月）

時 期					
I 期		縄文			
Ⅱ期		弥生中期			
Ⅲ期		弥生後期			
Ⅳ期		古墳時代前期			
		須 恵 器 窯 様 式		年 代	
V	1 期	a	T K－216古	五世紀第 2 四半期後半	
		b	T K－216新	五世紀第 3 四半期後半	
	2 期	a	O N－ 46	五世紀第 3 四半期	
		b	T K－208	五世紀第 3 四半期～第 4	
	3 期	a	T K－ 23	五世紀第 4 四半期前半	
		b	T K－ 47	五世紀第 4 四半期後半	
Ⅵ	4 期	a	T K－47末～M T－15古	六世紀第 1 四半期	
		b	M T－15新～T K－10古	六世紀第 2 四半期	
	5 期		T K－10新～M T－85古	六世紀第 2 四半期～第 3	
	6 期	a	M T－85新～T K－43古	六世紀第 3 四半期～第 4	
		b	T K－43新～T K－209極頭	六世紀第 4 四半期	
	7 期	a	T K－209古	飛鳥Ⅰ	六世紀第 4 四半期～七世紀第 1 四半期初頭
		b	T K－209古～新		七世紀第 1 四半期前半
Ⅶ	8 期	a	T K－209新	飛鳥Ⅰ～Ⅱ	七世紀第 1 四半期
		b	T K－209新～T K－217古		七世紀第 1 四半期～第 2
	9 期		T K－217	飛鳥Ⅱ	七世紀第 2 四半期
	10期		T K－217新～T K－46初頭	飛鳥Ⅱ～Ⅲ	七世紀第 3 四半期
	11期		T K－46～T K－48	飛鳥Ⅲ～Ⅳ	七世紀第 3 四半期～第 4
Ⅷ	12期		M T－21	飛鳥Ⅴ＝平城Ⅰ	七世紀第 4 四半期～八世紀第 1 四半期

坊作遺跡年代感

Pre. 坊作遺跡 A期 八世紀初頭前後
 B期 八世紀前葉前後
 坊作遺跡 I-a期 (八世紀後葉)前後
 II-b期 八世紀末葉前後
 III期 (九世紀初頭)前後
 IV期 (九世紀前葉)前後
 V期 九世紀中葉前後
 VI期 九世紀後葉前後
 VII期 九世紀末葉～十世紀初頭

稲荷台遺跡年代感

I期 九世紀第1四半期～第2四半期
 II期 九世紀第2四半期
 III期 九世紀第3四半期
 IV期 九世紀第3四半期～第4四半期
 V期 九世紀第4四半期
 VI期 十世紀前半



第83図 郡本大宮遺跡 I～VII期変遷図

第1表 竪穴住居跡一覧表

住居 番号	位置	規模 (m) 確認面 主軸長×副軸長 床 面 主軸長×副軸長	主 軸 方 位	残存壁高 (cm)	カマド等 の有無	柱穴	備 考	時 期	
								他との比較	大宮
1	C6	2.9 × 2.9 2.7 × 2.75	N-7°-W	28~31	北壁中央	無し	5 A住→4住→1住	稲荷台V期	VI期
2 A	B6 B7	3.8 × 3.7 3.6 × 3.5	N-7°-W	8~35	北壁中央	無し	5 A住→2 B住→2 A住	坊作II期?	V期
2 B	B6 B7	(3.6) × —	N-10°-W	0~25	北壁中央	無し	5 A住→2 B住→2 A住	坊作II期?	V期
3	C7	3.8 × 3.65	N-23°-W	0~33	北壁中央	有り	5 A住→4住→3住→1住	坊作II期	V期
4	B7 C7	5.9 × 5.85 5.75 × 5.65	N-35°-W	0~40	北壁中央	有り	5 A住→4住→3住→1住	茶ノ木7~ 8期	III期
5 A	B7 C7	(5.95) × —	(N-55°-W)	0~37	不明	不明	5 A住→4住→2 B住→ 2 A住		不明
5 B	B7	— × —	N-71°-W	0~14	東壁	無し		稲荷台 IV~V期	VI期
6	C6	(4.0) × —	N-29°-W	0~50	北壁	無し			不明
7	D6	(3.6) × —	N-33°-W	0~50	北壁中央	無し	7住→8住	稲荷台I期	VI期
8	D6	(4.5) × 3.1 — × 2.9	N-66°-E	0~50	東壁南	無し	7住→8住	稲荷台VI期	VII期
9	D5	3.8 × — 3.7 × —	N-65°-E	0~2	東壁中央	無し		稲荷台 III~V期	VI期
10	D5 D6	(4.4) × —	N-30°-W	0~34	北壁中央	有		茶ノ木8期	III期
11	D5	3.15 × 3.1 3.0 × 2.95	N-62°-E	0~5	東壁中央	無し	11住→2掘立	稲荷台III期	VI期
12	D5 E5	2.8 × 2.6 2.7 × 2.5	長軸 N-11°-W	0~13	無し	無し		稲荷台VI期 以降	VII期
13	E5	4.0 × 3.9 3.75 × 3.65	N-63°-E	25~48	東壁中央	有り		稲荷台 I~II期	VI期
14	D5	2.7 × —	N-19°-W	0~33	北壁中央	無し	15住→14住	坊作II期	V期
15	D5 E5	— × 5.55	N-28°-W	0~31	北壁中央	有り	18住→15住→16住・14住	茶ノ木7~ 8期?	III期
16	E5	2.9 × 3.5 2.6 × 3.3	N-27°-W	0~4	北壁中央	有り	15住→16住		IV?
17	E5	— × 4.2 — × 3.95	—	0~52	不明	無し			不明
18	E5	— × 4.8 — × 4.5	N-26°-W	0~4	北壁中央	有り	18住→15住・19住	茶ノ木7期	III期
19	E5	— × 3.3 — × 3.0	N-34°-W	0~60	北壁中央	無し	18住→19住		不明
20	E5	— × 4.95 — × 4.65	N-31°-W	0~84	北壁中央	有り	18住→20住	茶ノ木6~ 7期	III期
21	E4 E5	4.05 × 4.7 3.7 × 4.4	N-67°-E	31~51	東壁中央	無し	22住→21住	稲荷台VI期	VII期
22	E4 E5	4.6 × 4.8 4.45 × 4.5	N-2°-W	29~47	北壁中央	有り	22住→21住	坊作II期	V期
23	E4 E5	5.1 × — 4.85 × —	N-12°-W	0~55	不明	有り	火災住居跡	茶ノ木4~ 5期	III期

住居 番号	位置	規模 (m) 確認面 主軸長×副軸長 床 面 主軸長×副軸長	主 軸 方 位	残存壁高 (cm)	カマド等 の有無	柱穴	備 考	時 期	
								他との比較	大宮
24	E4	3.05 × 3.15 2.9 × 3.0	N-18°-W	5~12	北壁中央	無し		稲荷台Ⅰ～Ⅱ期	Ⅵ期
25 A	D4 D5	3.6 × 3.4 3.4 × 3.25	長軸 N-9°-W	0~5	無し	無し	25B住→25A住		Ⅶ期 ?
25 B	D4 E4	6.5 × 6.2	N-17°-W	0~10	北壁中央	有り	25B住→25A住	茶ノ木5~6期	Ⅲ期
26	E4	4.4 × 4.45 4.25 × 4.30	N-1°-E	16~43	北壁中央	有り	26住→1号掘立	坊作Ⅱ期?	Ⅴ期
27	E3 E4	4.6 × 4.7 4.45 × 4.6	N-4°-E	7~12	北壁中央	有り			不明
28	E3 E4	4.9 × 4.3 4.7 × —	N-1°-W	0~64	北壁中央	無し	29住→28住		Ⅴ期
29	E3	4.1 × — 3.9 × —	N-3°-E	0~51	北壁中央	有り	29住→28住	茶ノ木11~12期	Ⅳ期
30	E3	4.7 × — 4.5 × —	(N-15°-W)	30~61	北壁中央	有り		茶ノ木6期	Ⅲ期
31	E3	3.4 × — 3.15 × —	N-7°-W	0~30	北壁中央	無し		稲荷台Ⅳ期	Ⅵ期
32	E3	3.1 × 2.85 2.8 × 2.7	N-1°-W	14~18	北壁中央	無し		稲荷台Ⅲ～Ⅳ期	Ⅵ期
33	D3 E3	5.55 × 5.4 5.1 × 5.15	N-26°-W	4~17	北壁中央	有り	火災住居跡	茶ノ木6~7期	Ⅲ期
34	D2 D3	4.25 × 4.45 4.1 × 4.3	N-17°-W	7~13	北壁中央	有り	41住→34住	坊作Ⅱ期	Ⅴ期
35	D2	3.15 ~ 3.4 3.1 ~ 3.2	N-21°-E	4~11	ほぼ中央 に炉	無し		弥生後期?	Ⅱ期
36	D2	3.2 × 2.9 2.5 × 2.55	N-21°-E	41~56	北壁中央	無し		稲荷台Ⅳ期	Ⅵ期
37	E4	2.7 × 2.95 2.5 × 2.8	N-12°-W	9~11	北壁東	無し	39住→37住	稲荷台Ⅲ期	Ⅵ期
38	D4 E4	3.25 × 4.1 3.2 × 3.9	N-7°-W	4~8	北壁西	有り	火災号住居跡 39住→38住	坊作Ⅱ～Ⅲ期	Ⅵ期
39	D4 E4	5.65 × 5.5 5.55 × 5.4	N-12°-W	0~10	北壁中央	有り	火災号住居跡 39住→38住・37住	茶ノ木4~5期	Ⅲ期
40 A	D3 E3	(5.4) × —	N-9°-W	0	北壁中央	有り	40A住→40B住	茶ノ木4~5期?	Ⅲ期
40 B	D3 E3	(4.4) × —	N-8°-W	0	北壁中央	有り	40A住→40B住	茶ノ木4~5期?	Ⅲ期
41	D2	3.9 × 4.25 3.8 × 4.15	N-37°-W	7~11	北壁中央	有り	火災号住居跡 41住→34住	茶ノ木10期	Ⅳ期
42	D1 D2	4.0 × 4.2 3.85 × 4.1	N-35°-W	21~29	北壁中央	有り		茶ノ木11~12期	Ⅳ期
43	D1	3.7 × 3.78 3.5 × 3.56	N-45°-W	32~48	北西辺壁 中央	有り	火災住居跡 44住→43住	茶ノ木7~8期	Ⅲ期
44	D1	6.0 × 6.3 5.7 × 6.05	N-47°-W	30~38	北西辺壁 中央	有り	44住→43住	茶ノ木5期	Ⅲ期
45	C1 D1	3.85 × 3.5 3.55 × 3.3	N-26°-W	24~51	北壁中央	無し	46住→45住	坊作A	Ⅴ期
46	C1 D1	5.2 × 5.4 5.05 × 5.2	N-48°-W	34~45	北西辺壁 中央	有り	46住→45住	茶ノ木5期	Ⅲ期
47	C1	4.8 × 5.1 4.65 × 4.9	N-55°-W	5~12	北西辺壁 中央	有り	火災住居跡	茶ノ木8期	Ⅲ期

住居 番号	位置	規模 (m) 確認面 主軸長×副軸長 床 面 主軸長×副軸長	主 軸 方 位	残存壁高 (cm)	カマド等 の有無	柱穴	備 考	時 期	
								他との比較	大宮
48	D2	(4.2) ~ 3.7	(N-10°-W)	12~15	炉跡	無し		弥生後期?	Ⅱ期
49	D2 D3	5.9 × 6.0 5.65 × 5.9	N-28°-W	6~15	北壁中央	有り		茶ノ木7期	Ⅲ期
50	C1	— × —	N-18°-E	0~10	北壁中央	無し		稲荷台Ⅱ期	Ⅵ期
51	B1 C1	6.2 × 6.3 5.7 × 5.8	N-37°-W	40~61	北壁中央	有り	火災住居跡	茶ノ木7期	Ⅲ期
52	B1 B2	2.7 × 2.6 2.6 × 2.5	N-16°-E	5~12	北壁中央	無し			Ⅶ期
53	B2	— × —	N-25°-W	0~7	北壁中央	有り	55住→53住→54住	稲荷台Ⅵ期?	Ⅶ期
54	B2 C2	2.4 × 4.9 2.3 × 4.8	N-4°-W ?	8~22	不明	無し	55住→53住→54住	稲荷台Ⅵ期?	Ⅶ期
55	B2 C2	(5) × —	N-43°-W ?	0~17	不明	有り	火災住居跡 55住→53住→54住	茶ノ木5~ 6期	Ⅲ期
56	B2	4.1 × 4.2	N-17°-W	8~17	北壁東寄	無し	57住→56住		
57	C1 C2	6.9 × 7.0 6.55 × 6.9	N-27°-W	20~30	北壁中央	有り	57住→56住	茶ノ木7期	Ⅲ期
58	C2	4.95 × 5.2 4.75 × 5.0	N-42°-W	10~17	北壁中央	有り	59住→58住・60住	茶ノ木6~ 7期	Ⅲ期
59	C2	6.8 × (7.0)	N-30°-W	0~10	北壁中央	無し	火災住居跡 59住→58住・60住	茶ノ木6~ 7期?	Ⅲ期
60	C2 C3	10.8 × 11.2 10.6 × 11.05	N-42°-W	0~8	北壁中央	有り	火災住居跡 59住→58住・60住→61住		Ⅲ期
61	C2	3.25 × 3.45 3.15 × 3.35	N-3°-W	0~10	北壁中央	無し	60住→61住	稲荷台Ⅵ期	Ⅶ期
62	B2	2.75 × 2.9 2.6 × 2.8	N-2°-W	0~19	北壁中央	無し	火災住居跡	坊作Ⅱ~Ⅲ 期	Ⅴ期
63	B2	4.75 × 4.75 4.5 × 4.5	N-47°-W	12~25	西北辺壁 中央	有り		茶ノ木9~ 10期	Ⅳ期
64	B3	— × 4.6	N-42°-W	0~22	北西辺壁 中央	有り		茶ノ木8期	Ⅲ期
65	B2 C2	— × (6.0)	N-51°-W	0	北西辺壁 中央	有り		茶ノ木9期	Ⅳ期
66	B3	— × (6.5)	N-43°-W	0~8	北西辺壁 壁中央	有り			不明
67	A3 A4	6.0 × 6.1 —	N-15°-W	0~28	—	有り	67住→68住		不明
68	A3 A4	4.65 × 4.45 4.5 × 4.35	N-31°-W	2~23	北壁中央	有り	67住→68住	茶ノ木7期	Ⅲ期
69	A4	— × (6.0)	N-39°-W	5~23	北壁中央	有り			不明
70	A3 B3	2.8 × 2.6	—	0~5	—	無し		稲荷台Ⅵ期	Ⅶ期
71	B2	(3.0) × —	N-56°-E	0~5	東北辺壁	無し		稲荷台Ⅳ~ Ⅴ期	Ⅵ期
72	B7	(5.0) + × —	N-29°-W	~	東北辺壁	無し		茶ノ木7期	Ⅲ期

第2表 竪穴住居跡出土遺物観察表

住居 番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径	底 径					
1	土師器 甕	上半 1/3	(11.3)	4.5+	(14) 胴		雲母粒含	暗赤褐色	良好	床面	
	土師器 坏	1/3	(14.5)	4.1	—	(7.4)	微砂粒含	暗 褐 色	普通	床面	内面黒色処理。
	土師器 坏	1/3	(14)	4.8	—	6.9	微 密	淡暗褐色	良好	床面	
2 A	土師器 坏	一部欠く	(11.4)	3.5	—	6.5	微砂粒含	淡赤褐色	良好	床面	
	土師器 坏	一部欠く	13.2	4.3	—	8	微砂粒含	赤 褐 色	良好	覆土中 +25	
2 B	土師器 有段口縁坏	1/3	(13)	4.2	—	—	微 密	褐 色	普通	覆土中 +15	
	土師器 甕	上半 2/3	22	19.8+	19.6 胴		微砂粒含	淡赤褐色	良好	カマド燃 焼部内	
3	土師器 甕	上半	20.2	11.7+	(18.5) 胴		微砂粒含	淡赤褐色	良好	カマド燃 焼部内	
	土師器 甕	上半	22.4	12.8+	19.4 胴		微砂粒含	淡赤褐色	良好	カマド燃 焼部内	
	土師器 甕	上半	21	18.7	19.2 胴		微砂粒含	淡赤褐色	良好	カマド燃 焼部内	
	須恵器 蓋	天井部欠 く 1/4	(18)	3+	—	—	微 密	暗 灰 色	良好	床面	
	須恵器 高台付碗	1/3	(16)	6.5	—	8.6	微砂粒含	暗青灰色	良好	ほぼ床面 +10	
7	須恵器 坏	一部欠く	12.7	3.4	—	8	微 密	白 灰 色	普通	床面	
8	須恵器 坏	一部欠く 1/2	13	4.5	—	7.2	白色砂粒 含	暗 褐 色	普通	カマド内	
9	須恵器 坏	一部欠く 2/3	12.7	4	—	7.8	白色砂粒 含	暗黒褐色	良好	カマド右 袖接する	

住居 番号	種 器 号	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径	底 径					
3	10	土師器 坏	一部欠く 1/3	(10)	3.4	—	6.2	明 褐 色	良好	ほぼ床面 +5	内面黒色処理。
	11	土師器 坏	一部欠く 1/3	(12)	4	—	7.6	明 褐 色	普通	ほぼ床面 +6	
	12	土師器 坏	一部欠く 1/3	12.5	3.9	—	7.5	暗茶褐色	普通	床面	
	13	石 皿	完形							床面	
4	1	土師器 坏	一部欠く 1/3	(12.1)	3.8	(13) 稜	—	明 褐 色	普通	覆土中 +20	口縁外面および 内面に丹彩。
	2	土師器 碗形坏	一部欠く 1/2	8.4	5.6	8.8 胴	—	微淡褐色	普通	覆土中	
	3	土師器 高坏	ほぼ完形	15.3	12.1	5 基部径	10.8 口台径	淡 褐 色	普通	カマド袖 に接する	
	4	土師器 高坏	脚のみ 2/3		9+	5.4 基部径	10 口台径	淡 褐 色	普通	ほぼ床面 +5	
	5	土師器 高坏	脚のみ		6.5+	4.2 基部径	9 口台径	明 褐 色	普通	カマド内	
	6	土師器 高坏	脚のみ 2/3		6.7+	5.1 基部径	10 口台径	明 褐 色	普通	カマド内	
5 A	7	砥 石	ほぼ完形						普通	南側覆土 中	
	1	土師器 坏	一部欠く 2/3	10	2.8	—	4.7	淡赤褐色	良好	覆土中	
	2	土師器 坏	接合完形	9.7	2.8	—	4.2	淡 褐 色	不良	覆土中	
	3	土師器 高台付坏	一部欠く	11	2.6	—	4.4	暗 褐 色	普通	覆土中	
5 B	1	土師器 坏	部分欠く	(15)	5.7	—	7.4	淡 褐 色	普通	覆土中	
7	1	土師器 甕	上半 1/4	(19)	7+	(18.5)		暗 褐 色	普通	覆土中	

住居 番号	種 器 番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
7	2	須恵器 坏	底部のみ			—	体部下端ロクロ整形。底部に回転筒ケズリ。	細砂粒含	暗青灰色	普通	ほぼ床面 +5	
	3	土師器 坏	部分 1/4	(13)	3.7	—	ロクロ土師器。底部に回転筒ケズリ。	細砂粒含	暗青灰色	普通	覆土中	
	1	須恵器 高台付碗	底部 1/4		2.8+	—	坏部内外面丁寧なロクロ整形。底部は回転筒ケズリを施す。 口台は角状を呈しシャープな作り。	微砂粒含	暗青灰色	良好	ほぼ床面 +10	
8	2	土師器 坏	一部欠く	12	4.1	—	ロクロ土師器。体部下端は手持ち筒ケズリ。底部回転糸切。	細砂粒含	明 褐色	良好	ピット内 覆土	
	3	土師器 坏	一部欠く 1/2	12.5	4.1	—	ロクロ土師器。体部下端および底部周縁に手持ち筒ケズリ。 底部回転糸切	砂 粒 含	淡 褐色	普通	ピット内 覆土	
	4	緑釉陶器 碗	口縁一部	(16)	4+	—	器厚0.3cmと薄い。表地は淡白灰色を呈し硬質。全体に丁寧な作りで、内面に僅かに筒ミガキ痕跡をとどめる。	微	淡濃緑色	良好	覆土中	
	5	緑釉陶器 碗	底部 1/3		1.8+	—	素地は淡灰色で須恵器質を呈する。底部内面に丁寧な筒ミガキ、外面丁寧なナデを施す。口台は張付けで角状で、口唇部には一次の沈線有する。	微	淡濃緑色	良好	覆土中	
	1	土師器 甕	部分欠く 1/2	19.2	30	20.6	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面筒ケズリ、内面筒ナデ。	砂粒多含	暗い褐色	普通	カマド燃 焼部	
10	2	土師器 甕	一部欠く	17.4	30.2	19.8	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面筒ケズリ、内面筒ナデ。	砂粒多含	明 褐色	普通	床面	
	3	土師器 甕	部分欠く 1/2	(15)	13.2	13.5	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面筒ケズリ、内面筒ミガキ状 のナデ	砂粒多含	暗赤褐色	不良	カマド燃 焼部	
	4	土師器 甕	上半 1/2	(25)	17.8+		口縁内外面ヨコナデ。胴部外面筒ケズリ、内面筒ミガキ状 のナデ。全体に丁寧な作り。	微砂粒含	明 褐色	良好	床面	
	5	須恵器 坏身	接合完形	11	4.3	12.7	器表面風化する。口縁および内面ヨコナデ。底部部中位まで 回転筒ケズリを施す。稜は丸みを有し鈍い作り。	微砂粒含	淡白灰色	不良	カマド燃 焼部	
	6	土師器 坏	完形	11.5	4.7	12.1	口縁内外面ヨコナデ、内面底部に雑なミガキを施す。底部 部外面は筒ケズリ。丸底の底部部と口縁の境に鈍い稜線 を作る。	砂粒多含	淡茶褐色	普通	カマド燃 焼部	
11	1	須恵器 甕?	上半 1/3	(29)	16.2+	(25)	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向の平行タタキ目、内 面筒ナデ施すも、輪積み痕をとどめる。口縁直下に断面三 角の把手有する。	細砂粒含	濃茶褐色	良好	床面	
	2	土師器 甕	上半 1/3	(27)	11+	(24) 胴	口唇部外面に強いヨコナデにより2条の沈線を作る。胴部 外面は筒ケズリ、内面は丁寧な筒ナデ。	砂粒多含	明 褐色	普通	床面	
	3	土師器 坏	部分欠く 1/2	(16)	4.7	8	ロクロ土師器。体部下端および底部周縁手持ち筒ケズリ。 底部中央に回転糸切痕をとどめる。	細砂粒含	淡茶褐色	普通	ほぼ床面	

住居 番号	番号	種 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
11	4	土師器 坏	部分欠く 1/3	(15)	4.8	—	ロクロ土師器。体部下端および底部に回転鑊ケズリを施す。	微砂粒含	淡 褐 色	普通	床面	
	5	土師器 坏	接合完形	(13.4)	4.2	—	ロクロ土師器。体部下端および底部に回転鑊ケズリを施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	床面	
	6	土師器 皿	一部欠く	13.8	2.7	—	ロクロ土師器でやや歪む。内面丁寧な鑊ミガキ、体部下端および底部に手持ちケズリを施す。	微砂粒含	淡茶褐色	普通	床面	
13	1	土師器 甕	部分欠く	22.5	26.5	20.9 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面丁寧な鑊ケズリ、内面はケズリ状の鑊ナデを施す。全体に器肉を薄く仕上げ丁寧な作り。	細砂粒含	明 褐 色	普通	カマド煙 道部	
	2	土師器 甕	上半一部	(17)	6.3+	(16) 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面は鑊ケズリ、内面は丁寧な鑊ナデ。	砂粒多含	暗茶褐色	普通	覆土中	
	3	土師器 坏	部分欠く 1/4	(13)	3.9	—	ロクロ土師器。体部下端および底部に回転鑊ケズリを施す。	微砂粒含	淡赤褐色	普通	覆土中	
	4	土師器 坏	部分欠く 1/2	12.6	3.6	—	ロクロ土師器。体部下端および底部に回転鑊ケズリを施す。	微砂粒含	淡 褐 色	不良	カマド燃 焼部	
	5	土師器 坏	底部のみ		1.9+	—	ロクロ土師器。体部下端および底部に回転鑊ケズリを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	不良	カマド燃 焼部	底部内面に焼成 後に×印を線刻
	1	土師器 甕	上半 1/3	23.6	20.4+	20.8 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面鑊ケズリ、内面上半鑊ナデ、下半鑊ケズリ。	砂 粒 含	淡 褐 色	良好	覆土中	
14	2	土師器 甕	下半 1/2		18.9+	6	胴部外面鑊ケズリ、内面鑊ナデ。	砂 粒 含	暗 褐 色	普通	カマド燃 焼部	
	3	須恵器 甕	下半 1/3		12.5+	(17)	器肉厚く、外面に斜方の平行タタキ目、胴下端は鑊ケズリを施す。	細砂粒含	白黄褐色	普通	ほぼ床面	
	4	須恵器 坏	部分欠く 1/3	(13.2)	4.1	—	内面にロクロ整形による凹凸を明瞭に残し、ロクロ成形は底部周縁におよぶ。底部に回転鑊ケズリを施すも、中央に僅かに回転系切り痕を残す。	微砂粒含	淡暗灰色	普通	床面ピッ ト内	
	5	須恵器 坏	一部欠く	13.5	3.6	—	内外面とも凹凸の少ないロクロ整形。底部に回転鑊ケズリを施し、中央に回転系切り痕を残す。	微砂粒含	淡黄灰色	不良	ほぼ床面 +4	
	6	須恵器 坏	一部欠く	13.8	3.8	—	内外面とも凹凸の少ないロクロ整形。底部は丁寧な回転鑊ケズリを施す。	細砂粒含	淡白灰色	良好	ほぼ床面 +4	
	7	須恵器 坏	一部欠く	13.3	3.4	—	内外面とも凹凸の少ないロクロ整形。ロクロは底部周縁におよぶ。底部は回転鑊ケズリを施し、中央に回転系切り痕を残す。	微砂粒含	淡暗灰色	普通	ほぼ床面 +5	
	8	須恵器 坏	部分欠く	12.8	4.5	—	内外面ともロクロ整形。体部外面下端手持ち鑊ケズリ。底部は静止鑊ケズリを施す。	細砂粒含	暗黒褐色	普通	ほぼ床面 +4	

住居 番号	番号	種 器 別	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
14	9	土師器？ 坏	部分欠く 1/2	12.3	4.3	—	内外面とも凹凸の少ないロクロ整形。底部は回転鑿ケズリを施し、中央に回転糸切り痕を残す。	微砂粒含	明茶褐色	普通	床面ピット内	還元炎焼成不完全な須恵器か？
	10	土師器 坏	一部欠く	12.2	4.1	—	口縁内外面ヨココナデ。体部底部外面は手持ち鑿ケズリ施す。	微砂粒含	明茶褐色	不良	ほぼ床面 +4	
	11	土師器 坏	部分欠く 1/2	12.6	4.4	—	口縁内外面ヨココナデ。体部底部外面は手持ち鑿ケズリ施す。	微砂粒含	赤 褐 色	普通	床面ピット内	
	12	土師器 坏	一部欠く	12.8	4.3	—	口縁内外面ヨココナデ。体部底部外面は手持ち鑿ケズリ施す。	微砂粒含	暗 褐 色	良好	床面	
	13	土師器 坏	部分欠く 1/3	12.3	4.3	—	口縁内外面ヨココナデ。体部底部外面は手持ち鑿ケズリ施す。	細砂粒含	暗赤褐色	普通	覆土中 +14	
15	14	土師器 坏	部分欠く 1/2	13	5.1	—	口縁内外面および内面丁寧なヨココナデ。体部底部外面は手持ち鑿ケズリを施す。	細砂粒含	暗黒褐色	良好	覆土中 +13	
	1	土師器 甕	底部欠く 1/3	(13.5)	16.4+	(15)	くの字状の口縁を有し、口縁内外面に鑿ミガキ。胴部外面はケズリ状のナデ、内面は丁寧な鑿ナデを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	良好	ほぼ床面 +7	
	2	土師器 甕	部分欠く 1/2	12.2	10.9	11.3 胴	口縁内外面に強いヨココナデ、胴部外面にナデ状の鑿ミガキ、内面はケズリ状のナデを施す。	微砂粒含	明茶褐色	良好	床面	
	3	土師器 甕	口縁 1/3	(28)	7.7+	24.5 胴	口縁内外面に強いヨココナデ、胴部外面丁寧な鑿ケズリ、内面はケズリ状のナデを施す。	微 密	明 褐 色	良好	覆土中 +15	
	4	土師器 坏	一部欠く 3/4	13.8	4.3	—	口縁内外面ヨココナデ。底底部外面ナデ状の鑿ケズリ、内面放射状の鑿ミガキを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	普通	床面	
17	1	土師器 甕	口縁～胴 上半 1/2	13	4.9+		口縁内外面ヨココナデ。胴部外面は雑な鑿ケズリ、内面鑿ナデを施す。	砂粒多含	暗 褐 色	普通	覆土中 床面+23	
18・ 19	1	土師器 甕	完形	19.7	31.5	20 胴	口縁内外面ヨココナデ。胴部外面は雑な鑿ケズリ、内面鑿ナデを施す。	砂粒多含	淡 褐 色	普通	カマド左 袖	
	2	土師器 甕	上半 1/2 欠く	(19)	28.5	19 胴	口唇欠く、口縁内外面強いヨココナデ。胴部外面鑿ケズリ、内面鑿ナデを施す。	砂粒多含	明 褐 色	普通	覆土中 +25	
	3	土師器 模倣坏	1/4	(11)	4.2	(12) 稜	口縁内外面および底底部内面部分的に鑿ミガキ。底底部外面鑿ケズリを施す。	砂粒多含	淡 褐 色	普通	覆土中 +14	
	4	土師器 模倣坏	完形	10.7	3.9	11.8 稜	口縁外面ヨココナデ、内面丁寧な鑿ミガキ。底底部外面ナデ状のケズリを施す。	微砂粒含	淡赤褐色	普通	覆土中 +17	
	5	土師器 模倣坏	1/4	(12.5)	3+	(13) 稜	口縁内外面強いヨココナデ。内面鑿ミガキ。底底部外面鑿ケズリを施す。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土中 +29	

住居 番号	種 器 番 号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
18 ・ 19	6	土師器 坏	1/4	(14)	5	(13) 稜	口縁内外面強いヨコナデ。内面ヨコナデで部分的にミガキ、底体外面匚ケズリを施す。	微 密	暗黒褐色	良好	覆土中 +14	内面黒色処理。
	7	土師器 坏	底部欠く 1/5	(14)	3.9+	(13.7)	口縁内外面強いヨコナデ。内面ヨコナデで部分的に匚ミガキ、底体外面匚ケズリを施す。	密	暗 褐 色	普通	覆土中 +29	
	8	土師器 坏	接合完形	14.2	5	13.3	口縁内外面強いヨコナデ。内面ヨコナデで部分的にミガキ、底体外面匚ケズリを施す。	密	暗黒褐色	普通	カマド左 袖	内面黒色処理。
	9	土師器 高坏	部分欠く 1/3	(13)	8.5	(5.4) 基部	口縁外面強いヨコナデ。坏内面光沢のある匚ミガキ、外面匚ケズリ。脚はナデ状の匚ケズリ、端部はヨコナデを施す。	微砂粒含	褐 色	普通	覆土中 +50	
	10	土師器 高坏	一部		6+	(5.4) 基部	坏内面光沢のある匚ミガキ、外面匚ケズリ状の匚ナデ。脚はナデ状の匚ケズリを施す。	密	暗 褐 色	普通	覆土中 +28	
	11	土師器 高坏	脚のみ		6.4+	(4.2) 基部	坏内面光沢のある匚ミガキ、外面匚ケズリ。脚は匚ケズリで、端部にヨコナデを施す。	砂 粒 含	明 褐 色	普通	覆土中 +38	
20	12	土師器 坏	部分欠く 1/3	(12)	3.9	—	ロクロ土師器。内外面とも丁寧なロクロ整形。体部下端および底部は回転匚ケズリ後ナデ。	微砂粒含	褐 色	普通	覆土中	
	1	土師器 甕	底部欠く 1/3	(18)	23.8	(20) 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面匚ケズリ、内面上半はヨコナデ、下半は荒いミガキ状の匚ナデを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	普通	床面	
	2	土師器 甕	一部欠く	16.9	29.9	21 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面匚ケズリ、内面上半はヨコナデ、下半は匚ナデを施す。	砂 粒 含	明 褐 色	普通	床面	
	3	土師器 碗形坏	一部欠く	13.5	5.1	—	口縁内外面ヨコナデ。内面ナデ状の匚ミガキ、外面ナデ状の匚ケズリを施す。	微砂粒含	暗黒褐色	普通	カマド燃 焼部内	
	4	土師器 碗形坏	一部欠く	14	5.9	—	口縁内外面ヨコナデ、部分的に雑なミガキ。底体内面雑なミガキ、外面ナデ状の匚ケズリを施す。全体に雑な作り。	微砂粒含	明 褐 色	普通	床面	
	5	土師器 坏	1/3	(12)	4	—	口縁内外面ヨコナデ。内面荒い匚ナデ、外面匚ケズリを施す。	砂 粒 含	赤 褐 色	普通	覆土中 +8	内面と外面底体 部中位まで丹彩。
21	6	土師器 高坏	脚のみ		7.2+	(3.6) 基部	脚外面ケズリ状の匚ナデ。端部にはヨコナデを施す。	微砂粒含	淡赤褐色	普通	床面	
	1	土師器 甕	上半 1/4	(20)	14.3+	(19.5)	口縁内外面ヨコナデ。胴外面匚ケズリ、内面丁寧な匚ナデを施す。	砂 粒 含	淡赤褐色		覆土中 +15	
	2	須恵器 坏	1/2	13.4	3.8	—	内外面とも凹凸の少ないロクロ整形。ロクロは底部周縁におよぶ。底部は回転匚ケズリを施し、火だすきを残す。	微砂粒含	淡白灰色	普通	覆土中 +30	
	3	須恵器 蓋	一部	(12)	1.7+	—	天井部外面回転匚ケズリ、内面丁寧なロクロ整形を施す。断面色調は淡いチャコレート色。	微 密	濃青灰色	良好	覆土中	

住居 番号	種 器 番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
22	1	土師器 甕	上半一部	(20)	10+		口縁内外面ヨココナデ。胴外面篋ケズリ、内面丁寧な篋ナデを施す。全体に器肉が薄い。	砂粒多含	明赤褐色	普通	主柱穴内	
	2	土師器 坏	底部		2.1+	—	口縁内外面ヨココナデ。体部最下端および底部回転篋ケズリ、内面丁寧な篋ミガキを施す。	微砂粒含	明赤褐色	普通	ほぼ床面 +10	内面黒色処理。
	3	土師器 坏	完形	11.3	3.6	—	口縁内外面ヨココナデ。内外面とも強い口縁を呈し、口縁内外面ヨココナデ。胴外面ナデ状の篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	微砂粒含	明 褐色	普通	覆土中 +22	灯明皿。
23	1	土師器 甕	部分欠く 1/3	(13.5)	17.8	16	口縁は折り返しぎみに丸く玉口縁を呈し、口縁内外面ヨココナデ。胴外面ナデ状の篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	細砂粒含	淡 褐色	普通	覆土中 +18	
	2	土師器 甕	上半 3/4	12.1	8.8+	15.8	口縁は折り返しぎみに丸く玉口縁を呈し、口縁内外面ヨココナデ。胴外面ナデ状の篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	微砂粒含	淡 褐色	良好	ほぼ床面 +7	
	3	土師器 甕	上半 3/4	17.3	9.8+		口縁内外面ヨココナデ、頸部外面に篋状の圧痕を残す。胴外面荒い篋ナデ、部分的にミガキ。内面荒い篋ナデを施す。	細雲母粒 含	淡 褐色	普通	床面	
	4	土師器 甕	底部欠 2/3	30	24.8+		器形やや歪む。口縁内外面ヨココナデ。胴外面ナデ状の篋ケズリを施す。	微砂粒含	淡 褐色	普通	ほぼ床面 +5	
	5	土師器 模倣坏	一部欠く	13.2	3.8	14.5 稜	口縁内外面ヨココナデ、底体部内面ミガキ、外面篋ナデを施す。	微 密	淡 褐色	普通	覆土中 +25	口縁内外面および内面に丹彩。
	6	土師器 埴形坏	一部 1/3	(14)	5.1	(14.5)	口縁内外面ヨココナデ。底体部内面荒いミガキ、外面篋ナデを施す。	細砂粒含	暗黒褐色	普通	覆土中 +17	内面黒色処理。
	7	土師器 埴形坏	部分欠く	14.3	7.2	—	口縁内外面ヨココナデ。口縁外面および体部ケズリ状の篋ナデ。底部篋ケズリ。内面荒い篋ナデを施す。	細砂粒含	暗黒褐色	普通	覆土 +17	
	8	土師器 高坏	部分 1/3	14	10.7	(3.8) 基部	口縁内外面ヨココナデ。内面篋ナデで部分的に篋ミガキ、外面篋ナデ。脚はナデ状の篋ケズリを施す。	微砂粒含	淡 褐色	普通	覆土中 +22	内外面に丹彩。
	9	土師器 高坏	脚端欠く	12.8	9.6+	(3.9) 基部	口縁内外面ヨココナデ。内面光沢のあるミガキ、外面丁寧な篋ナデ。脚はナデ状の篋ケズリを施す。	細砂粒含	暗赤褐色	普通	床面	内外面と口縁内外面に黒色処理。
	10	土師器 高坏	脚欠く	13.2	4.7+	(3.3) 基部	口縁内外面ヨココナデ。内面ナデ、外面雑な篋ナデを施す。	微砂粒含	赤 褐色	不良	床面	内外面に丹彩。
23	11	土師器 高坏	脚部欠く	14.3	7.7+	(3.4) 基部	内外面篋ナデ、内面篋ミガキ。脚はナデ状の篋ケズリを施す。	微砂粒含	暗赤褐色	不良	床面	内外面に丹彩。
	12	土師器 高坏	脚欠く	14.2	5+	(3.1) 基部	口縁内外面ヨココナデ。内面篋ミガキを施す。	細砂粒含	暗赤褐色	不良	床面	内外面に丹彩。
	13	土師器 高坏	脚欠く 2/3	13.9	5+	(4.2) 基部	口縁内外面ヨココナデ。外外面光沢のあるミガキ、外面篋ナデを施す。	細砂粒含	淡 褐色	不良	ほぼ床面 +6	内外面に丹彩。

住居 番号	番号	種別 器種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
24	1	土師器 坏	1/3	(13.5)	4.1	—	ロクロ土師器。内外面凹凸を残したロクロ整形。体部下端および底部回転篋ケズリ施す。	細砂粒含	淡 褐 色	普通	カマド 焚口	
	2	土師器 坏	部分欠く 3/4	12.8	4	—	ロクロ土師器。内外面凹凸を残したロクロ整形。体部下端および底部回転篋ケズリ施す。	細砂粒含	暗 褐 色	普通	床面	
	3	土師器 坏	2/3	13.1	4	—	ロクロ土師器。内外面凹凸を残したロクロ整形。体部下端および底部回転篋ケズリ施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	床面	
	4	須恵器 甕	破片				外面平行タキ目。内面あて具圧痕を残すも丁寧なミガキ状のナデを施す。	微 密	灰 色	良好	床面	転用硯の可能性あり。
25B	1	土師器 鉢	底部欠く 1/3	(16)	8.1+	(17)	口縁内外面ヨコナデ。底・体部内面篋ナデ、部分的にミガキ、外面ケズリ状の篋ナデを施す。	細砂粒含	明赤褐色	普通	壁溝内	
26	1	土師器 甕	上半 1/3	(23)	18.6+	(21) 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面篋ケズリ、内面丁寧な篋ナデを施す。全体に薄作り。	細砂粒含	淡 褐 色	普通	カマド左 袖	
	2	土師器 甕	上半 1/2	(19)	28.5	19 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面篋ケズリ、内面丁寧な篋ナデを施す。全体に薄作り。	砂粒多含	淡 褐 色	普通	ピット内	
	3	鉄斧	部分欠く				全長7.7cm・現存最大幅4.3cm・推定刃幅4.6cm・厚さ1.5cm・重量76.5kg				ピット内	
28	1	土師器 甕	口縁一部	(20)	5.1+		口縁内外面ヨコナデ。胴外面丁寧な篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	良好	カマド覆 土	
	2	土師器 甕	上半 1/4	(13)	8.3+	(15.5) 胴	口縁内外面および胴内面ヨコナデ。胴外面丁寧な篋ケズリで器肉を薄く仕上げる。全体に丁寧な作り。	白色砂粒 含	暗黒褐色	良好	カマド覆 土	
29	1	土師器 甕	底部欠く 2/3	18.8	22.5+	18.1 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面丁寧なケズリ状の篋ナデ、内面雑な篋ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ床面	
	2	土師器 甕	一部欠く	19	23.9	19.1 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面ケズリ状の篋ナデ、内面篋ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ床面 +4	
	3	土師器 坏	底部欠く 1/3	(16)	4.7+	—	内面光沢があるものやや雑な放射状のミガキ、外面ミガキ状の篋ナデを施す。	密	明 褐 色	良好	覆土中	
	4	須恵器 蓋	一部	(12.5)	3+	(13)	摘まみを有し、天井部外面回転篋ケズリ後丁寧な篋ナデ、内面ロクロ整形。	微 密	青 灰 色	良好	覆土中	
30	1	土師器 手づくね	完形	—	2.8	6.8	輪積み痕および指頭圧痕を明瞭に残す。底部は篋ナデを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土中	
	2	土師器 手づくね	完形	—	3.4	6.6	輪積み痕および指頭圧痕を明瞭に残す。底部は篋ナデを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	普通	ほぼ床面 +7	

住居 番号	番号	種 器 別	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
30	3	土師器 手づくね	完形	—	3.7	7	輪積み痕および指頭圧痕を明瞭に残す。底部は篋ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	覆土中 +20	
	4	土師器 模倣坏	完形	12.3	4.3	12.8 稜	口縁内外面ヨココナデ。底体外面ケズリ状の篋ナデ、内面荒い篋ナデを施す。	微砂粒含	暗黒褐色	普通	床面	内面黒色処理。
	5	土師器 模倣坏	完形	12	4.2	13.5 稜	口縁外面ヨココナデ、内面丁寧な篋ミガキ。底体内面篋ミガキ、外面ケズリ状の篋ナデを施す。稜はシャープな作り。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	ほぼ床面 +4	内面黒色処理。
	6	土師器 坏	完形	12.5	3.6	—	口縁内外面篋ミガキ。底体外面ケズリ状の篋ナデ、内面丁寧な篋ミガキを施す。	細砂粒含	淡赤褐色	普通	壁溝内	内面黒色処理。
	1	土師器 坏	1/3	(13)	4.6	—	ロクロ土師器。口縁および体部内外面丁寧なロクロ整形。底部は回転糸切り。	微 密	淡 褐 色	良好	床面	
31	1	土師器 甕	上半 1/5	(18)	13.7+	(19.5)	口縁内外面ヨココナデ。胴外面ナデ状の篋ケズリ、内面ケズリ状の篋ナデを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	普通	カマド右 袖	
	2	土師器 坏	1/3	(12.5)	4.7	—	ロクロ土師器。口縁および体部内外面丁寧なロクロ整形。底部は回転糸切り。	微砂粒含	淡赤褐色	普通	覆土中	
	3	土師器 坏	1/4	(17)	5.7	—	ロクロ土師器。内外面丁寧なロクロ成形。体部下端から底部は回転篋ケズリ、底部中央に回転糸切りを残す。	微砂粒含	淡赤褐色	普通	覆土中	底部内面に、焼成後の線刻により「大琴」?を刻む
32	1	須恵器 模倣坏	部分欠く 3/4	13.7	4.1	15.2 稜	口縁内外面ヨココナデ。底体内面雑な篋ミガキ、外面ケズリ状の篋ナデ。	細砂粒含	暗黒褐色	普通	床面	内面黒色処理。
	2	土師器 坏	部分欠く	14.8	3.8	—	口縁内外面丁寧なヨココナデ。底体外外面ナデ状の篋ケズリ、内面丁寧な篋ミガキを施す。	微 密	明 褐 色	良好	床面	
	3	土師器 坏	一部 1/3	(15)	3.9+	—	外面荒い篋ミガキ、内面篋ミガキを施す。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	カマド右 袖	内面黒色処理。
33	1	土師器 甕	上半	23.7	11.4+	21.4 胴	口縁内外面丁寧なヨココナデ。頸部外面に篋状圧痕を残す。胴外面丁寧な篋ケズリ、内面丁寧な篋ナデを施す。器肉が薄い。	細砂粒含	明 褐 色	良好	床面	
	2	須恵器 甕	下半 1/4		16.2+	—	胴外面中に斜向する細い平行タキ目、下端は篋ケズリ、内面は全体にナデる。	砂 粒 含	暗 灰 色	不良	カマド燃 焼部	還元炎焼成が不完全で内面褐色。
	3	須恵器 広口壺	上半 1/3	(23)	23.4+ 29	29	口縁は肉厚きもととなり、口唇を上方につまみ上げる。口縁および頸部は強いヨココナデにより凹凸を明瞭に残す。胴部外面は斜向する平行タキ目、内面は雑な篋ナデを施す。	雲母粒含	淡 灰 色	不良	カマド左 袖	
	4	須恵器 広口壺	上半 1/3	(23)	24.9+	33	口縁は折り返し肉厚となり、口唇を上方につまみ上げる。口縁および頸部は強いヨココナデにより凹凸を明瞭に残す。胴部外面は規則な平行タキ目で格子状を呈し、内面丁寧な篋ナデを施す。	細砂粒含	淡 灰 色	不良	ほぼ床面 +5	
	5	須恵器 甕	口縁一部	19	7.3+		口唇を上方につまみ上げる。口縁内外面ヨココナデ。胴部外面縦方向の平行タキ目、内面雑な篋ナデを施す。	微砂粒含	暗茶褐色	不良	ほぼ床面 +7	器肉色調淡茶色。

住居 番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径						
34	6	1/2	12	4.3	7.5	内外面に凹凸を残すロクロ整形。体部下端および底部周縁は手持ち篋ケズリを施し、底部中央に回転糸切り痕を残す。	微砂粒含	暗黒褐色	不良	カマド燃焼部	
	7	1/2	11.9	4.4	8	口縁内外面ヨコナデ。体部・底部は手持ち篋ケズリ、内面丁寧なヨコナデを施す。	微砂粒含	褐色	普通	床面	
36	1	部分欠く	19.6	27.2	19	6	細砂粒含	暗黒褐色	普通	床面	
	2	1/4	(13.5)	4.8	6.4	6.4	微砂粒含	暗褐色	良好	床面	底部内面に焼成後線刻文字「根」を刻む。
	3	完形	12.8	5.4	6.9	6.9	密	明褐色	良好	カマド右袖	底部内面に焼成後線刻文字「根」を刻む。
	4	1/2	13.7	4.7	6.3	6.3	微砂粒含	淡茶褐色	普通	床面	底部内面に焼成後線刻文字「根」を刻む。
	5	2/3	12.5	5.2	6.5	6.5	微砂粒含	淡暗褐色	普通	カマド燃焼部	
	6	完形	12.8	5.8	6.9	6.9	微砂粒含	暗褐色	普通	カマド燃焼部	
	7	一部欠く	12.8	4.9	6.4	6.4	微砂粒含	淡暗褐色	普通	床面	
	8	部分欠く 2/3	13	5.6	6.4	6.4	微砂粒含	淡赤褐色	良好	ほぼ床面 +6	
	9	部分欠く 2/3	13.2	4.7	7.3	7.3	微砂粒含	淡暗褐色	不良	床面	底部内面に焼成後線刻文字「根」を刻む。
	10	一部欠く	12.2	5.4	5.8	5.8	微砂粒含	淡赤褐色	良好	ほぼ床面 +6	口縁外面に煤痕付着、灯明皿か？
36	11	一部欠く	15	4.9	7.4	7.4	微砂粒含	明褐色	普通	カマド燃焼部	
	12	1/2	15	5.3	7.3	7.3	微砂粒含	暗茶褐色	普通	カマド燃焼部	
	13	1/2	13.5	4.4	6.9	6.9	微砂粒含	暗褐色	良好	ピット内	
	14	3/4	17.6	6.2	7.8	7.8	微砂粒含	暗褐色	良好	壁溝内	底部外面に焼成後線刻により「X」印を刻む。内面黒色処理。

住居 番号	番号	種 器 別 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
37	1	土師器 坏	口縁欠く 一部		2.2+	—	ロクロ土師器。内外面凹凸の少ない丁寧なロクロ整形。体部下端および底部回転鑊ケズリ施す。	密	明 褐 色	良好	覆土中	
	1	須恵器 坏	一部	(13)	3.5	—	ロクロ土師器。内外面凹凸の少ない丁寧なロクロ整形。体部下端および底部回転鑊ケズリ施す。	細砂粒含	暗淡青灰 色	普通	覆土中	外面に火だすき を残す。
39	1	土師器 坏	1/4	(16)	5+	—	口縁内外面ヨコナデ。底体外面荒い鑊ケズリ、内面丁寧な鑊ミガキを施す。	細砂粒含	明赤褐色	普通	床面	口縁外面と内面 に丹彩。
	2	土師器 坏	底体部			—	底体内面難な鑊ナデ、外面ケズリの後鑊ナデを施す。	細砂粒含	暗赤褐色	普通	床面	内面丹彩。
40 A・B	1	土師器 坏	1/3	(14.5)	5.1+	—	口縁内外面丁寧なヨコナデ。底体外面ナデ状の丁寧な鑊ケズリ、内面鑊ミガキを施す。	微砂粒含	暗赤褐色	良好	ピット内	内外面丹彩。
41	1	土師器 甗	底部欠く 一部	(25)	21.5+		口縁内外面および胴内面丁寧なヨコナデ。胴部外面鑊ケズリを施す。	砂 粒 含	明 褐 色	良好	カマド右 袖	
42	1	土師器 甗	上半 1/3	(23)	14+		口縁内外面難なヨコナデ。胴部外面鑊ケズリ、内面鑊ナデを施す。	砂粒多含	明 褐 色	不良	カマド燃 焼部	
	2	土師器 甗	上半 1/3	(22)	7.8+		口縁内外面強いヨコナデ。胴部外面鑊ケズリ、内面鑊ナデを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	良好	ほぼ床面 +5	
	3	土師器 坏		12	3.6	—	口縁外面および内面光沢のある丁寧な鑊ミガキ。底体外外面ケズリ状の鑊ナデ後難な鑊ミガキを施す。	赤色粒含	淡 褐 色	良好	壁溝内	内面黒色処理。
43	1	土師器 甗	底部欠く 1/2	20.3	29+	21.8	口縁内外面ヨコナデ。胴外面荒い鑊ケズリ、内面鑊ナデを施す。	砂粒多含	暗黒褐色	普通	ほぼ床面 +3〜8	
	2	土師器 甗	下半 1/3		22.4+	—	胴外面中位難な鑊ケズリ、下端ナデ状の鑊ケズリ、内面鑊ナデを施す。	砂粒多含	暗黒褐色	不良	ほぼ床面 +2〜10	
	3	土師器 甗	1/2	16.8	27.5	17.7	口縁内外面強いヨコナデ。胴外面荒い鑊ケズリ、内面鑊ナデを施す。	砂粒多含	暗 褐 色	普通	主柱穴内	
	4	土師器 甗	1/2	17	17.7	17.3 胴	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面荒い鑊ケズリ、内面丁寧な鑊ナデを施す。	細砂粒含	淡赤褐色	良好	床面	
	5	土師器 甗	完形	12.3	10.1	13.1 胴	口縁内外面強い丁寧なヨコナデ。胴外面鑊ケズリ、内面鑊ナデ。底部ケズリ状の鑊ナデを施す。	細砂粒含	明赤褐色	良好	床面	
	6	土師器 甗	完形	14.9	16.8	16.7 胴	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面ナデ状の鑊ケズリ、内面上半ナデ、下半丁寧な鑊ケズリ。底部ケズリ状の鑊ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	床面	
	7	土師器 甗	底部欠く	15.7	16.6+	17.7 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面鑊ミガキ、内面丁寧な鑊ナデを施す。	微砂粒含	淡 褐 色	良好	床面	

住居 番号	種 器 別	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径						
43	土師器 甕	底部欠く	16.2	16+	18 胴	口唇端部を上方につまみ上げ、シャープナ作り。口縁内外面ヨコナデ。胴外面鑑ミガキ部分的鑑ケズリ、内面ケズリ状の鑑ナデを施す。	微砂粒含	明 褐 色	良好	床面	
	須恵器 蓋 坏	1/2	13	4.4	—	天井部・底体部・口縁部の境に僅かに稜線を残す。口縁および内面は、凹凸の少ない丁寧なクロ整形。天井部外面は回転鑑ケズリを施す。	微砂粒含	淡 灰 色	普通	覆土中 +23	
	須恵器 坏 身	完形	11.2	4.4	13 稜	口縁内外面クロ成形。底体部外面は回転鑑ケズリを施す。	黒色粒含	淡 灰 色	普通	覆土中 +15	
	須恵器 坏 身	一部欠く	9.9	3.8	11.8 稜	器形にやや歪みあり。内外面凹凸を残す雑なクロ整形。底部外面に雑な回転鑑ケズリを施す。	細砂粒含	暗 灰 色	普通	ほぼ床面 +5	
	土師器 坏	完形	13.4	4.5	—	口縁内外面丁寧なヨコナデ。底体部外面ケズリ状の鑑ナデ、内面ミガキ状の鑑ナデを施す。	密	明 褐 色	良好	覆土中 +15	
	土師器 坏	3/5	13.6	3.7	—	口縁内外面ヨコナデ。底体部外面ナデ状の鑑ケズリ、内面鑑ミガキを施す。	密	明 褐 色	良	覆土中 +16	
	土師器 坏	一部欠く	13.4	3.4	—	口縁内外面強いヨコナデ。底体部外面ナデ状の鑑ケズリ、内面ミガキ状の鑑ナデを施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	床面	
	土師器 模倣坏	一部欠く	13	3.6	13.8 稜	口縁内外面丁寧なヨコナデ。底体部外面鑑ケズリ、内面ナデ状の鑑ミガキを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	覆土中 +11	内面黒色処理。
	土師器 模倣坏	1/2	12.3	3.2	12.8 稜	口縁内外面丁寧なヨコナデで部分的にミガキ。底体部外面ナデ状の鑑ケズリ、内面光沢のある鑑ミガキを施す。	微砂粒含	明 褐 色	良	ほぼ床面	内面黒色処理。
	土師器 坏	2/3	10.4	5.3	11.3	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面ミガキ状の鑑ナデ、内面鑑ミガキ。底部鑑ケズリを施す。	細砂粒含	暗黒褐色	普通	床面	
44	土師器 坏	2/3	15.5	6.7	17.2	口縁外面および内面鑑ミガキ。底体部外面ケズリ状の鑑ナデを施す。	微砂粒含	暗茶褐色	普通	ほぼ床面 +4～8	口縁内外面にくすんだ丹彩。
	土師器 高 坏	脚欠く	13	6.6+	4.1 基部	口縁外面ヨコナデ。外面および内面鑑ミガキを施し、内面光沢がある。脚はナデ状の鑑ケズリを施す。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	床面	
	土師器 甕	上半 1/4	(27)	17.5+	(33)	口縁内外面ヨコナデ。頸部外面に鑑圧痕を有す。胴外面上半が鑑ナデ、中位がナデ状の鑑ケズリ。内面上半が鑑ナデ、中位が鑑ケズリを施す。	細砂粒含	明 褐 色	良	ほぼ床面 +0～15	
	土師器 甕	上半	18	13.3+	21.3	口縁内外面ヨコナデで外面に輪積痕を残す。胴外面鑑ケズリ。内面上半が鑑ナデ、中位が鑑ケズリを施す。	細砂粒含 赤色粒子	明茶褐色	良	ほぼ床面 +0～6	
	土師器 甕	上半	17.5	6.4+		頸部が直立ぎみに立つ。口縁内外面ヨコナデで頸部に輪積痕を残す。胴外面鑑ケズリ、内面鑑ナデを施す。	細砂粒含 赤色粒子	明茶褐色	良	ほぼ床面 +0～5	
	土師器 甕	下半		21.5+	32.2	胴外面ナデ状の鑑ケズリ、内面丁寧な鑑ナデを施す。	微砂粒含	明赤褐色	良	ほぼ床面 +0～10	
					8.5						

住居 番号	種 器 番号	種 別	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
44	5	土師器 甕	下半		11+	20	6	微砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土中 +26	
	6	土師器 甕	上半	18.3	18+	22.3	口縁内外面強いヨコナデで口唇部は薄く仕上げる。胴外面 匱ケズリ、内面匱ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	良	ほぼ床面 +8	
	7	土師器 短頸壺	1/3	(10)	10.5	(12)	器表面風化し、整形痕不鮮明、内面匱ナデ。	細砂粒含	暗黒褐色	普通	覆土中 +30	
	8	土師器 短頸壺	上半 3/4	8.5	6.8+		口縁内外面丁寧な強いヨコナデ。胴外面ケズリ状の匱ナデ、 内面丁寧な匱ナデを施す。	微砂粒含	明 褐 色	良	床面	外面と口縁内面 に丹彩。
	9	須恵器 蓋 坏	口縁一部	(16)		—	天井部外面に自然釉かかる。口唇はつまみ上げ、内面直下 に稜線を作り、シャープな仕上がりである。胎土中に石英 粒を含む。	砂粒多含	灰 色	普通	ほぼ床面 +5	
	10	須恵器 蓋 坏	口縁一部	(14)	3.4+	—	内外面凹凸の少ない丁寧な作りで、天井部外面は回転匱ケ ズリで自然釉かかる。天井部と口縁の境に鋭い稜線を作り シャープな仕上がりである。	微砂粒含	淡黄灰色	良好	覆土中	
	11	須恵器 身 坏	部分欠く 1/4			(15)	内外面凹凸を残す作りで、底体部外面回転匱ケズリで自然 釉かかる。	砂粒多含	暗 灰 色	普通	ほぼ床面 +5	
	12	土師器 坏	底部欠く 1/4	(15)	3.7+	—	内面と口縁外面丁寧なヨコナデ。底体部外面ケズリ状の匱 ナデで部分的にミガキ。	密	暗 褐 色	良好	覆土中 +30	
	13	土師器 坏	3/4	12.9	4	—	口縁内外面ヨコナデ。底体部外面匱ナデ、内面ミガキ状の 匱ナデを施す。	微砂粒含	明 褐 色	不良	覆土中 +35	内面と口縁外面 の丹彩。
	14	土師器 坏	3/4	13.8	4.4	—	口縁内外面ヨコナデ。底体部外面ナデ状の匱ケズリ、内面 部分的にミガキを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	普通	覆土中 +25	内面と口縁外面 の丹彩。
	15	土師器 模散坏	1/3	(17)	5.4	(18.7) 稜	口唇をつまみ上げ内面直下に稜線を作りだす。口縁内外面 および内面は丁寧なヨコナデ。底体部外面丁寧な匱ナデ。 内面部分的にミガキを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	良	覆土中 +35	内面と口縁外面 の黒色処理。
	16	土師器 坏	3/4	13.9	4.4	—	口縁内外面ヨコナデ。底体部外面ナデ状の匱ケズリ、内面 荒いミガキを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	不良	覆土中 +22	
	17	土師器 坏	3/4	14.6	4.5	—	口縁内外面丁寧なヨコナデ。底体部外面ナデ状の匱ケズリ、 内面丁寧なミガキを施す。	細砂粒含	淡 褐 色	良	覆土中 +28	
45	18	土師器 高 坏	部分		10.2+	3.4 基部	器表面風化し、整形痕不鮮明。坏内外面匱ナデ、胴ナデ状 の匱ケズリを施す。	微砂粒含	明 褐 色	不良	覆土中 +50	内外面の丹彩。
	1	土師器 甕	上半 1/3	(23.5)	21+	(20.5) 胴	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面丁寧な匱ケズリ、内面 丁寧な匱ナデを施し、全体に器肉が薄い。	細砂粒含	明 褐 色	良	覆土中 +10	
	2	土師器 甕	上半 2/3	21	25.2	18.7 胴	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面匱ケズリ、内面丁寧な 匱ナデを施す。	砂 粒 含	淡 褐 色	不良	覆土中 +10	

住居 番号	種 器 番号	別 種 器	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
45	3	土師器 甕	底部欠く 1/3	(19)	24.5+	(18) 胴	口縁内外面丁寧なヨコナデで口唇部は肉厚となる。胴外面 匱ケズリ、内面丁寧な匱ナデを施す。	砂 粒 含	淡茶褐色	普通	覆土中	
	4	土師器 甕	上半	17.4	11.8+	19.8 胴	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面鋭い匱ケズリ、内面匱 ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	覆土中 +11	
	5	土師器 甕	1/3	(13)	15.6	14.1 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面丁寧な匱ケズリ、内面丁寧な 匱ナデを施す。	砂 粒 含	暗 褐 色	普通	覆土中 +11	
	6	土師器 甕	一部欠く	11.8	13.5	12.4 胴	口縁内外面強いヨコナデ。胴外面匱ケズリ、内面匱ナデを 施す。	砂 粒 含	暗茶褐色	普通	ほぼ床面 +6	
	7	土師器 甕	1/2	23.5	30.7	26.2 胴	口縁内外面ヨコナデでやや肉厚となる。胴外面匱ケズリ、 内面丁寧な匱ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	不良	覆土中 +10	
	8	土師器 甕	口縁欠く 1/2		30+	29 胴	胴外面ナデ状の匱ケズリ、内面丁寧な匱ナデを施す。	細砂粒含	明 褐 色	普通	覆土中 +10	
	9	土師器 甕	下半 1/2		14.8+	11.5	器表面風化し整形痕不鮮明。胴外面ナデ状の匱ケズリ、内 面匱ナデを施す。	細砂粒含	明赤褐色	不良	覆土中	
	10	土師器 鉢	部分欠く	18.1	11.3	8.1	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面荒い匱ケズリで凹凸を 残す、内面光沢のある丁寧な匱ミガキを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	普通	ほぼ床面 +8	
	11	灰釉陶器 長頸瓶	部分		29+	(18.5)	頸部基部から胴上端にかけて僅かに釉の痕跡を見る。頸部接合は2段構成に よる。内外面のロクロ整形は、やや凹凸を残し、胴下端は回転匱ケズリ。口台 は鋭い角状を呈し、底部には縦な回転匱ケズリを施す。焼きは乾いた仕上がり。	微砂粒含	白 灰 色	良	ほぼ床面 +4~16	
	12	灰釉陶器 蓋	接合完形	16.2	3.8	—	扁平な断面三角形の高さ0.9cmの摘みを有する。天井部 外面は回転匱ケズリ。体部内外面凹凸を残すロクロ整形。 口縁内外面は丁寧な整形。	微砂粒含	淡 灰 色	普通	床面	
46	13	土師器 坏	一部欠く	14.2	3.7	—	口縁外面ヨコナデ。底外部外面ケズリ状の匱ナデ、内面匱 ミガキを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	不良	ほぼ床面 +8	
	14	土師器 坏	一部欠く	14.1	5.1	14.4	口縁内外面強いヨコナデで外面直下に稜線を作る。体部外 面は輪轆み痕を明瞭に残す雑な匱ナデ。内面雑なナデ。底 部に木の葉痕を有する。	細砂粒含	淡 褐 色	普通	床面	
	15	石製品 紡錘車	完形	—	—	—	断面鈍い台形で稜線は丸みを有す。側面に擦痕ある。石質 は硬質の滑石である。				ほぼ床面 +4	
	1	土師器 甕	上半 1/3	(16)	8+	(15.5)	口縁内外面ヨコナデ。胴外面匱ケズリ、内面匱ナデを施す。	細砂粒含	暗黒茶褐 色	普通	覆土中 +31	
	2	須恵器 坏 身	3/4	11.6	4.9	14 稜	口縁内外面丁寧なロクロ成形で肉厚となる。稜は鋭い。底 部外面に雑な回転匱ケズリ、内面凹凸を残す雑なロクロ整 形を施す。	砂 粒 含	暗青灰色	良	床面	
	3	土師器 碗形坏	1/3	(11.7)	4.8	(12.1)	口縁内外面強いヨコナデ。底外部外面ミガキ状の丁寧な匱 ナデ、内面匱ナデを施す。	細砂粒含	淡暗褐色	普通	覆土中 +11	

住居 番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径	底 径					
46	土師器 碗形坏	一部欠く	13	5.5	13.3	5	口縁内外面丁寧なヨコナデ。体部外面ミガキ状の丁寧な筒ナデ、内面筒ナデ。底部は鋭いケズリを施し、平底となる。	微砂粒多 含	良	ほぼ床面 +8	
	土師器 鉢	上半 1/2	21.9	7.9+	—	—	口縁内外丁寧なヨコナデで内面中位にまでおよぶ。体部外面は筒ケズリ、内面丁寧な筒ナデを施す。	細砂粒含	良好	ほぼ床面 +9	内面全体丹彩。
	土師器 鉢	完形	15.3	7.7	—	6.9	口縁内外面に強いヨコナデ。体部外面は筒ケズリ、内面雑な筒ナデ。	微砂粒含	普通	床面	
	土師器 ミニチュ ア土器	口唇欠く		3.6+	4.2	3.4	手づくね土器。	細砂粒含	普通	覆土中 +20	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 高 坏	部分欠く	14.5	10.9	3.7 基部	10.2	坏部口縁外面および内面ヨコナデ、外面ケズリ状の筒ナデ。脚はナデ状の筒ケズリで端部はヨコナデを施す。	密	普通	床面	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 高 坏	一部欠く	14.7	11.4	3.1 基部	7.1	坏部口縁外面および内面ヨコナデ、外面ケズリ状の筒ナデ。脚はケズリ状の筒ナデで端部はヨコナデを施す。	密	良	ほぼ床面 +4	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 高 坏	坏部 2/3	12.3	3.4+	3.4 基部		坏部口縁内外面ヨコナデ、外面ケズリ状の筒ナデ、内面ナデで部分的にミガキを施す。	微砂粒含	良	ほぼ床面 +7	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 高 坏	脚と坏の 一部		7.4+	3.3 基部	9.4	坏外面ケズリ状の筒ナデ。脚はナデ状の筒ケズリで端部はヨコナデ。	微砂粒含	普通	覆土中 +12	
	土師器 高 坏	脚		5.2+	2.9 基部	8.8	脚はケズリ状の筒ナデで端部はヨコナデ。	細砂粒含	良	ほぼ床面 +8	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 高 坏	脚		4.9+	2.8 基部	9.8	脚はケズリ状の筒ナデで端部はヨコナデを施す。	微砂粒含	良	覆土中 +13	器表面全体に丹彩を施す。
47	土師器 高 坏	脚		6.2+	3.2 基部		脚はケズリ状の筒ナデを施す。	密	普通	ほぼ床面 +4	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 高 坏	脚		4.8+	2.7 基部	8.7	脚はケズリ状の強い筒ナデを施す。	細砂粒含	良	覆土中 +23	器表面全体に丹彩を施す。
	土師器 甗	上半 1/3	(20)	21.8+	(20.5)		口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴外面筒ケズリ、内面丁寧な筒ナデを施す。	砂 粒 含	普通	ほぼ床面 +8	
	土師器 甗	上半 1/4	(20)	22+	(22)		口縁内外面ヨコナデで口唇部やや肉厚。胴外面雑な筒ケズリ、内面丁寧な筒ナデを施す。	細砂粒含	普通	カマド右 袖	
	須恵器 坏 蓋	部分	(12.6)	4.9	—	—	天井部外面回転筒ケズリ。口縁内外面は丁寧なクロ整形で口唇内面直下に浅い沈線を有する。外面体部と口縁の境に浅い沈線を配し区画する。胎土中に白色砂粒含。	微砂粒含	良	貯蔵穴内	天井部外面に焼成前の緑刻「井」を刻む。
	須恵器 坏 蓋	1/2	12.7	4.2	—	—	天井部外面回転筒ケズリ。口縁外面および内面は丁寧なクロ整形。外面体部と口縁の境に浅い沈線を配し区画する。胎土中に白色砂粒多含。	微砂粒多 含	良	ほぼ床面 +3~30	

住居 番号	番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
47	5	須恵器 短頸壺	1/2	8.2	7.3	11.7	口縁内外面および内面丁寧なロクロ整形で、口縁部は肉薄となる。胴部から底部外面には丁寧な回転鑄ケズリを施す。	微 密	淡白灰色	良好	覆土中 +15~37	
	6	土師器 坏	部分欠く 1/2	(12.5)	4.3	13.4 稜	口縁内面ヨコナデ、外面ミガキ。底外部外面はナデ状のミガキ。内面は部分的に光沢のある磨きを施す。	密	暗黒褐色	良	貯蔵穴内	
	7	土師器 模倣坏	1/2	12	3.9	12.9 稜	口縁外面荒いミガキ、内面ヨコナデ。底外部外面ケズリの鑄ナデ、内面難なミガキを施す。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土中 +12	
	8	土師器 坏	1/3	(14)	3.8	—	口縁外面ヨコナデ。底外部外面と内面に難な鑄ミガキを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	不良	覆土中 +22	底外部外面に焼成後の線刻「×」を刻む。
	9	土師器 鉢	一部欠く	11.9	7.5	12.8	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ状の鑄ナデ。底外部鑄ナデ。内面光沢のある鑄ミガキを施す。胎土中に赤色粒を含む。	微砂粒含	明 褐 色	良好	覆土中 +15	
	10	銅製品 耳 環	完形	—	—	—	径2.84×2.66cm・厚さ0.56cm・重量12.6g				床面	
	1	土師器 模倣坏	1/2	(14)	4.6	(15)	口縁内外面鑄ミガキ。底外部外面ケズリ状の鑄ナデ、内面部分的に光沢のある鑄ミガキを施す。	密	淡 褐 色	良	床面	
	1	土師器 皿	完形	13.7	2	5	ロクロ土師器。口縁内外面および内面に凹凸の少ない丁寧なロクロ整形。底部と体部下端に丁寧な回転鑄ケズリを施す。	微砂粒含	暗淡褐色	良	カマド燃 焼部	
	1	土師器 甕	部分欠く	14.7	14.1	14.9 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面鑄ケズリ、内面鑄ナデを施す。	砂 粒 含	暗 褐 色	普通	覆土中 +20	
	2	土師器 鉢	底部欠く 1/4	(11)	8.6+	(12.6) 胴	口縁内外面ヨコナデ。胴外面ミガキ状の鑄ナデ、内面ナデ状の鑄ミガキを施す。	密	淡 褐 色	良	覆土中 +18	
51	3	土師器 鉢	部分欠く 2/3	(10)	9.1	(12) 胴	外面口縁から胴中位まで丁寧な鑄ミガキ、胴下半はミガキ状の鑄ナデ。内面口縁は光沢のある鑄ミガキ、胴はやや難な鑄ミガキを施す。	密	淡赤褐色	良	覆土中 +17	
	4	土師器 模倣坏	1/3	(12.8)	4.2	(14) 稜	口縁外面ヨコナデで部分的にミガキ。底外部外面ナデ状の鑄ケズリ。内面鑄ミガキを施す。	微砂粒含	淡茶褐色	普通	覆土中	
	5	土師器 模倣坏	口縁欠く 1/2		2.9+	(15.5) 稜	底外部外面丁寧な鑄ケズリ、内面丁寧なナデを施す。胎土中に少量の赤色粒含。	微砂粒含	明 褐 色	良好	覆土中 +17~40	外面稜下端から口縁に黒色処理？
	6	土師器 坏	1/3	(13)	3.7	(13.8) 稜	口縁内外面丁寧なヨコナデ。底外部外面鑄ケズリ、内面ナデで部分的に鑄ミガキを施す。	微砂粒含	淡濃茶褐色	良	覆土中 +30	
	7	土師器 坏	完形	12.6	3.2	—	口縁外面丁寧な鑄ミガキ。底外部外面鑄ケズリ後荒い鑄ミガキ。内面は荒い鑄ミガキを施す。	細砂粒含	淡赤褐色	普通	覆土中 +25	
	8	土師器 坏	一部欠く	14.1	3.6	—	口縁外面強いヨコナデ。底外部外面荒い鑄ケズリ後難な鑄ミガキ。内面鑄ミガキを施す。	砂 粒 含	明 褐 色	普通	覆土中 +30	

住居 番号	番号	種 器 別	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径・底 径						
51	9	土師器 坏	接合完形	14.5	3.7	—	口縁内外面および内面に篋ミガキ。底外部外面ケズリ状の篋ナデを施す。	細砂粒含	赤 褐 色	不良	覆土中 +29	
	10	土師器 坏	3/4	16.1	5.9	—	口縁内外面強く丁寧なヨコナデ。底外部外面丁寧な篋ケズリ。内面光沢のある丁寧な篋ミガキを施す。	微砂粒含	淡黒褐色	良	覆土中 +25	
	11	土師器 高坏	脚欠く	12.8	7.3+	3.7 基部	口縁外面および内面丁寧な篋ミガキ、外面篋ケズリを施す。	微砂粒含	淡 褐 色	良	覆土中 +20	
	12	土師器 高坏	脚欠く	15	4.5	4.3 基部	口縁内外面強く丁寧なヨコナデ。底外部外面篋ケズリ、内面篋ミガキを施す。	微砂粒含	淡 褐 色	良	床面カマ ド左袖	
53	1	土師器 坏	接合完形	12.2	3.8	5.2	ロクロ土師器。内外面ロクロ整形。体部下端および底部に手持ち篋ケズリを施す。	細砂粒多 含	淡 褐 色	良	ほぼ床面	
	2	土師器 坏	下半 1/2		2.6+	6	ロクロ土師器。内外面ロクロ整形。底部回転糸切りを施す。	密	淡赤褐色	良	かまど燃 焼部	
54	1	灰釉陶器 高台付碗	底部		2.8+	7.5	内外面ロクロ成形。底部に回転糸切り痕あり。口台は断面鈍角な三角形。体部上端に僅かに釉の痕跡を残す。	微砂粒含	淡 灰 色	良	覆土中	
55	1	土師器 模倣坏	1/4	(16.8)	6.8+	(19)	底外部外下半の器表面が荒れて成形不鮮明な他は全体に光沢のある強い篋ミガキを施す。	微砂粒含	黒 色	普通	床面	口縁外面および 内面黒色処理。
	2	土製品 有孔土器					径4.6×4.3土師器甕の破片。焼成後の両側穿孔による。周縁は荒く打ち欠いたまま整形を施さない。	微砂粒含	淡茶褐色	普通	覆土中	
56	1	土師器 甕	下端欠く 1/5	(26)	28.2		口縁内外面ヨコナデ。胴外面荒い篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	砂粒多含	明 褐 色	不良	床面	
57	1	須恵器 蓋 坏	1/4	(15)	3.6	—	天井部外面回転篋ケズリ。口縁外面および内面はロクロ整形で内面天井部に凹凸を残す。口唇外面直下に細かな刻みを有する。外面体部に浅い沈線を配する。胎土中に白色砂粒含。	砂 粒 含	淡青灰色	普通	覆土中 +23	
	2	土師器 模倣坏	一部欠く	13.1	3.7	(14) 稜	口縁内外面光沢のある篋ミガキ。底外部外面雑な篋ケズリ、内面篋ミガキを施す。	密	淡 褐 色	普通	ほぼ床面 +5	
	3	土師器 坏	1/2	14.4	3.4	—	口縁内外面および内面荒い篋ミガキ。底外部外面ケズリ状の篋ナデを施す。胎土中に赤色粒を含む。	密	淡 褐 色	良	ほぼ床面 +6	
	4	土師器 坏	2/3	12.7	3.8	—	口縁外面ヨコナデ。内面および底外部外面光沢のある篋ミガキを施す。	密	明 褐 色	良	床面	
58	1	土師器 甕	2/3	14.2	26.5	18	器表面風化し整形痕不鮮明。口縁内外面ヨコナデ。胴外面凹凸を残す篋ケズリ、内面雑な篋ナデを施す。	砂粒多含	暗黒茶褐 色	不良	カマド焚 口	
	2	土師器 甕	下半欠く 1/3	17.6	21.3+	18	器表面荒れる。口縁内外面ヨコナデ。胴外面やや凹凸を残す篋ケズリ、内面雑な篋ナデを施す。	砂粒多含	褐 色	不良	カマド左 袖	

住居 番号	番号	種 別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
58	3	土師器 甗	2/3	25	25.1	—	9	器形やや歪む。口縁内外面ヨココナデ。胴外面ケズリ状の篋ナデ、内面丁寧な篋ナデを施す。	微砂粒含	明淡褐色	普通	カマド右 袖
	4	土師器 坏	3/4	13	4.2	—	—	口縁内外面強いヨココナデで口唇直下に太く浅い沈線を有する。底体外面篋ナデ、内面やや光沢のある篋ミガキを施し、口縁と底体部の境に突出した稜線を作る。	細砂粒含	暗茶褐色	普通	床面 内外面黒色処理。
59	1	土師器 坏	一部	(14)	3.5+	—	—	口縁内外面ヨココナデ。体部内外面雑な篋ナデを施す。	微砂粒多 含	暗 褐 色	普通	覆土中
	2	石製品 紡錘車	一部欠く	—	—	—	—	紡錘車形土製品。径3×2.95cmとほぼ円形で、穿孔は焼成前である。	微砂粒質	淡赤褐色	良好	覆土中 丹彩の可能性あり
60	1	土師器 甗	上半1/4	(18)	12.7+	(19.5)	—	器表面風化し整形痕不鮮明。口縁内外面ヨココナデ。胴外面雑な篋ケズリ、内面ナデを施す。	砂粒多含	暗淡赤褐 色	普通	床面
	2	土師器 坏	一部	(14)	2.8+	—	—	口縁内外面および内面光沢のある篋ミガキ施すも口縁外面直下に輪積み痕を残す。底体外面は丁寧なミガキ状の篋ナデを施す。	密	淡 褐 色	良	カマド覆 土中
61	1	土師器 甗	上半1/3	(21)	10.8+	(20) 胴	—	口縁内外面ヨココナデ。胴外面丁寧な篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	雲母粒含	淡暗褐色	良	覆土中 +24
	2	須恵器 甗 片	一部	—	—	—	—	外面斜行する平行タタキ目。内面ケズリ状の篋ナデ後良く研磨されている。	黒色粒多 含	淡 灰 色	良好	覆土中 +17
62	3	土師器 坏	1/2	13	4	—	5	ロクロ土師器。内外面丁寧なロクロ整形。底部回転糸切りを施す。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土中 +19
	4	土師器 坏	1/2	12.6	3.9	—	5.2	ロクロ土師器。内外面やや雑なロクロ整形。体部下端および底部周縁に手持ち篋ケズリ、底部に回転糸切りを施す。	微砂粒含	淡赤褐色	普通	カマド燃 焼部
63	5	土師器 坏	口 台	—	—	—	8.3	ロクロ土師器。鋭いロクロ整形、底部に回転糸切りを施す。	微砂粒質	明 褐 色	良好	覆土中 +19
	1	須恵器 甗	上半1/4	(27)	17+	—	—	口縁内外面丁寧なヨココナデ。胴外面縦方向の平行タタキ目で下半に横方位の沈線3条を配し区画する。還元炎焼成不完全で土師器質。	白色粒含	淡赤茶褐 色	普通	カマド燃 焼部
63	2	土師器 甗	底部	—	—	—	—	外面および底部鋭い篋ケズリ、内面篋ナデ。	細砂粒含	暗茶褐色	良	覆土中
	1	土師器 甗	上半 1/2	17.7	19.6 +	18.3 胴	—	口縁内外面ヨココナデ。胴外面雑な篋ケズリ、内面篋ナデを施す。	砂 粒 含	暗黒褐色	普通	床面
63	2	土師器 甗	1/2	(12.5)	11.7	13.1 胴	6.8	口縁内外面ヨココナデで口唇部肉厚きみとなる。胴外面ケズリ状の篋ナデ、内面丁寧な篋ナデを施す。胎土中に赤色粒含む。	密	明淡褐色	良	床面
	3	土師器 坏	一部欠く	14.3	4.3	—	—	口縁外面および内面丁寧なヨココナデ。底体外面ケズリ状の丁寧な篋ナデを施す。多面に少量の煤の付着あり。	密	暗淡褐色	良	床面 灯明器？

住居 番号	種 器 別	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径						
64	土師器 甕	上半 1/2	19.6	15.6+	19.4 胴	器表面風化し整形痕不鮮明。口縁内外面ヨコナデ。胴外面 縦な匱ケズリ、内面匱ナデを施す。	砂 粒 含	暗 褐 色	不良	床面	
	土師器 壺	底部欠く	10.5	15.2+	17.4 胴	器表面風化し整形痕不鮮明。内面色調暗灰色、外面明橙色 を呈する。	密	明 橙 色	不良	覆土中	
	土師器 模倣坏	1/3	(13)	4.1	(14.2) 稜	口縁内外面ヨコナデ、内面部分的にミガキ。底体外外面匱 ケズリを施す。	細砂粒含	淡乳褐色	良		
	土師器 鉢	1/3	(10)	5.7+	(11) 胴	口縁内外面ヨコナデ。底体外外面ケズリ状の匱ナデ、内面 ヨコナデと荒いミガキを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	不良	ほぼ床面 +7	
	土師器 鉢	1/3	(10)	5.3	(10.6) 胴	口縁外面ヨコナデ。底体外外面ケズリ状の匱ナデ、内面匱 ミガキを施す。	細砂粒含	暗 褐 色	不良	ほぼ床面 +7	内面黒色処理。
65	土師器 甕	上半 1/2	(15.5)	6.7+	(13) 胴	口縁内外面および胴ヨコナデ。胴外面匱ケズリ後部分的に 匱ナデを施す。	細砂粒含	赤 褐 色	普通	ほぼ床面 +7	
	土師器 坏	1/3	(13)	4.7	—	口縁内外面ヨコナデ。内面底部匱ミガキ。底体外外面匱ケ ズリ。	細砂粒含	淡茶褐色	普通	覆土中 +12	
	土師器 鉢	1/3	(18)	8.7	—	器表面風化し整形痕不鮮明。口縁内外面ヨコナデ。内面匱 ナデ?外面色調淡紫褐色、内面黒褐色。	細砂粒含	淡紫褐色	不良	ほぼ床面 +7	
	土師器 高 坏	脚の一部		6.7+	4.3 基部	脚はケズリ状の丁寧な匱ナデを施す。	密	淡 褐 色	普通	覆土中 +10	器表面丹彩。
68	土師器 甕	上半 1/3	21.3	11.8+		器表面風化し整形痕不鮮明。口縁内外面ヨコナデ。胴外面 匱ケズリを施す。	砂粒多含	淡 褐 色	不良	カマド燃 焼部	
	土師器 模倣坏	底部欠く 1/3	(11.5)	3+	(13) 稜	口縁内外面および内面光沢のある匱ミガキ。底体外外面匱 ナデを施す。	密	暗黒褐色	良	カマド覆 土中	外面黒色処理。
70	土師器 高台付坏	部分欠く	14.7	6.6	—	ロクロ土師器。内外面やや凹凸を残すロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	良	ピット内	
71	土師器 坏		12.6	4.5	7.3	ロクロ土師器。口縁内外面ロクロ整形。底部に回転糸切り を施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	床面	
72	土師器 坏	1/4	15.0	4.6	—	内外面光沢のある匱ミガキを施す。	微 蜜	暗 褐 色	良好	貯蔵穴	

土師器窯跡出土遺物観察表

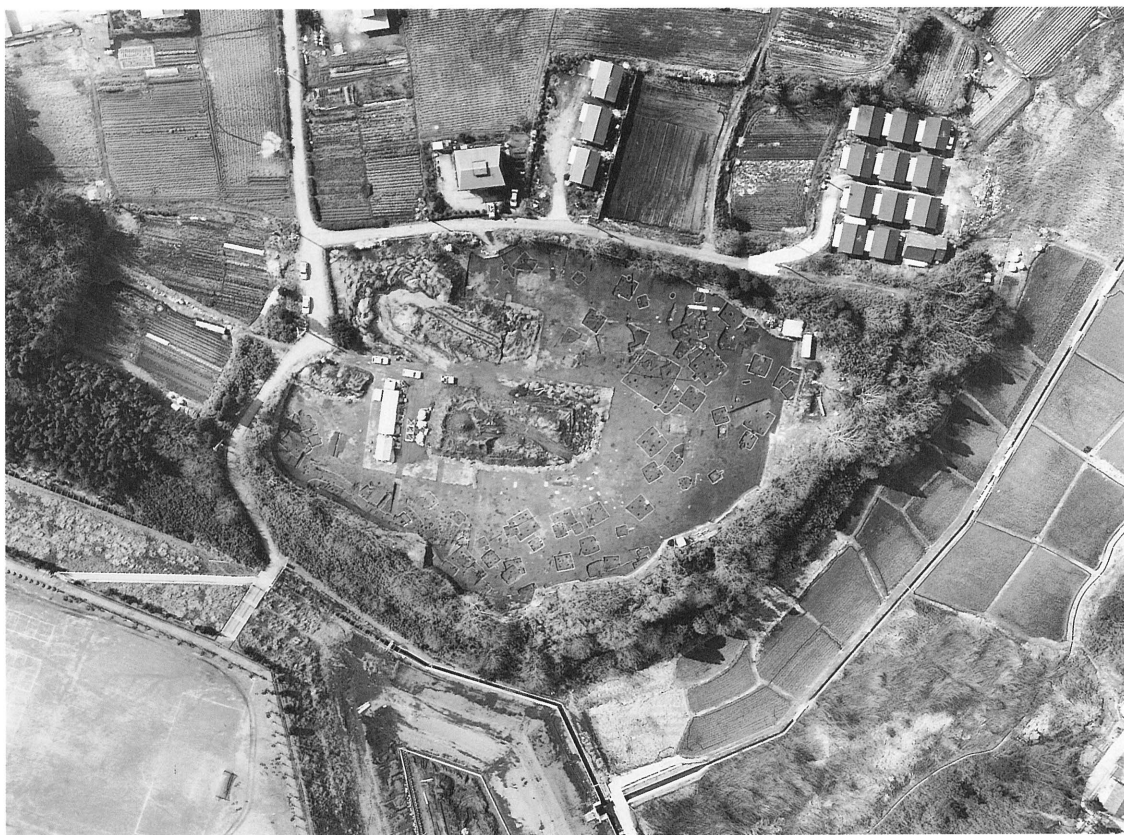
住居 番号	種別 器 種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出土位置	備 考
			口 径	器 高	最大径						
1 号 土 師 器 窯 跡	土師器 環	1/3	(12)	3.5	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形、底部に回転糸切りを 施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+10	
	土師器 環	一部欠く	11.3	3.6		ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形、体外面にロクロ整形 による凹凸を残す。底部に回転糸切り。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+8	
	土師器 環	1/2	11.5	3.6	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形、底部に回転糸切りを 施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+6	
	土師器 環	口縁一部	(12)	3.3+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+10	
	土師器 環	口縁 1/3	(12)	3.1+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+10	黒斑あり。
	土師器 環	口縁一部	(13)	4.3+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+16	
	土師器 環	底部	—	—	5.0	ロクロ土師器。底部に回転糸切りを施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+8	
	土師器 環	底部	—	—	5.4	ロクロ土師器。底部に回転糸切りを施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+12	
	土師器 環	底部	—	—	5.7	ロクロ土師器。底部に回転糸切りを施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	窯底+7	
	土師器 高台付環	部分	—	3.3+	5.9	ロクロ土師器。器肉が厚く、手慣れたロクロ整形であるが やや雑な作り。	微砂粒含	赤 褐 色	普通	窯底+10	
1 号 土 師 器 窯 跡	土師器 環	口縁一部	(13)	3.2+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ窯底	
	土師器 環	口縁一部	(12)	3.4+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ窯底	
	土師器 環	口縁一部	(13)	3.3+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形、体外面にロクロ整形 による凹凸を残す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ窯底	
	土師器 環	口縁一部	(14)	4.8+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形で口縁部直下に凹を残 す。	微砂粒含	淡 褐 色	普通	ほぼ窯底	
	土師器 環	底部	—	—	4.8	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形ながらやや雑な作り。	細砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ窯底	

住居 番号	番号	種別 器種	遺物度	法 量			器 形 お よ び 成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	出 土 位 置	備 考
				口 径	器 高	最大径						
78 号 遺 構	6	土師器 環	口縁一部	—	—	5.2	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形ながらやや雑な作り。	細砂粒含	明 褐 色	普通	ほぼ窯底	黒斑あり。
	1	土師器 環	完形	12.9	4.6	5.5	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形ながら器形歪む。体部下端に手持ち廻ケズリ、底部回転糸切を施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	覆土	
	2	土師器 高台付環	部分	(12)	3.4+	—	ロクロ土師器。手慣れた鋭いロクロ整形。内面丁寧な鋭磨きを施す。	微砂粒含	明 褐 色	良好	覆土	内面黒色処理。 外面黒斑あり。
	3	土師器 環	底部欠く 1/3	13	4.0+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形ながらやや雑な作り。内面鋭磨きを施す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	覆土	内面黒色処理。 外面黒斑あり。 口台付環？
	4	土師器 環	口縁一部	(14)	5.5+	—	手慣れたロクロ整形で、内面口唇部まで丁寧な鋭磨き、体部外面縦の廻ケズリを施す。平な口唇部の中央に沈線を有する。	微砂粒含	淡 褐 色	良好	覆土	内面黒色処理。 外面黒斑あり。
	5	土師器 高台壺？	底部 1/2	—	5.2+	17.0	口台部端はコの字状に摘まみ出し丁寧仕上げであるが、全体に雑な作り。	細砂粒含	赤 褐 色	普通	覆土焼上 直上	2次的な加熱を うけ部位により 色調が異なる。
	6	土師器 環	底部	—	2.1+	6.4	ロクロ土師器。手慣れた鋭いロクロ整形。内面丁寧な鋭磨き、底部に回転糸切り跡を残す。	微砂粒含	明 褐 色	普通	覆土	内面黒色処理。
	7	土師器 高台付環	底部	—	4.5+	8.5	ロクロ土師器。手慣れた鋭いロクロ整形。	微砂粒含	明 褐 色	普通	良好	
	8	土師器 高台付環	底部欠く 部分	(15.5)	6.3+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形ながら器形歪み雑な作り。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土	外面黒斑あり。
	9	緑釉陶器 合子蓋？	口縁一部	(11)	2.1+	—	口唇外面直下に沈線、肩部に細い鋭状工具により装飾を施し、丸状の透かしを穿つ。	微 蜜	淡 緑 色	良好	覆土上層	胎土色調は白灰 色で須恵質。
	10	緑釉陶器 合子蓋？	一部	—	—	—	細い鋭状工具により装飾を施し、水滴形の透かしを穿つ。	微 蜜	淡黄緑色	普通	覆土上層	胎土色調は薄い 白乳色
	11	緑釉陶器 高台付碗	底部一部	—	2.2+	(9)	内面雑な鋭磨き、外面ナデ、全体に肉厚。口台張り付けによる。	微 蜜	淡濃緑色	普通	覆土上層	胎土色調は暗灰 色で須恵質。
83 号 遺 構	12	緑釉陶器 合子	口縁一部	(12)	3.1+	(13)	受け口の肩部直下に沈線を有し、肩端部は鋭い。外面は丁寧な鋭磨き、内面ヨコナデを施す。	微 蜜	淡 緑 色	良好	覆土上層	胎土色調は白灰 色で須恵質。
	1	土師器 環	体下半 3/4	—	3.1+	5.7	ロクロ土師器。底部回転糸切を施す。	微砂粒含	褐 色	普通	覆土	
	2	土師器 環	体下半の 一部	—	2.0+	5.2	ロクロ土師器。体部下端および底部周縁に手持ち廻ケズリを施し、中央に回転糸切り痕を残す。	砂 粒 含	褐 色	良好	覆土	
	3	土師器 環	底部欠く 1/5	(25)	5.0+	—	ロクロ土師器。手慣れたロクロ整形。	微砂粒含	暗 褐 色	普通	覆土	

写真図版



遺跡周辺の航空写真（昭和36年撮影）

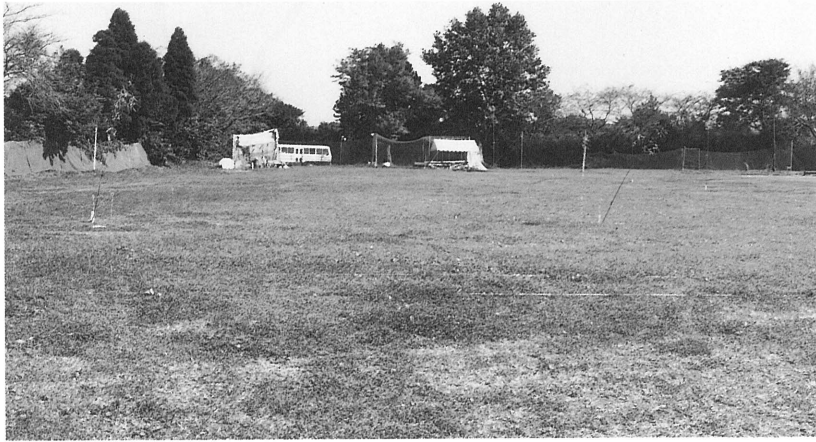


遺跡遠景（真上から見た郡本大宮遺跡）



遺跡遠景（北方上空より見た郡本大宮遺跡）

図版3



調査前の遺跡近景



確認調査風景



確認調査風景

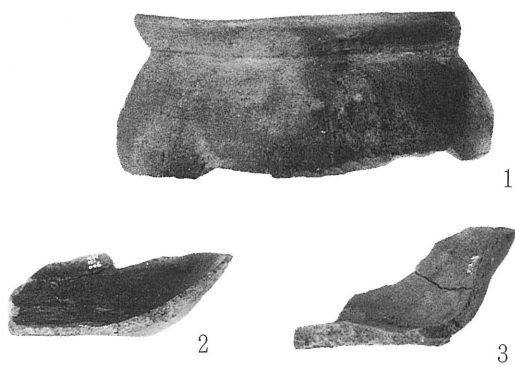


確認調査遺構検出状況

1 号住居跡



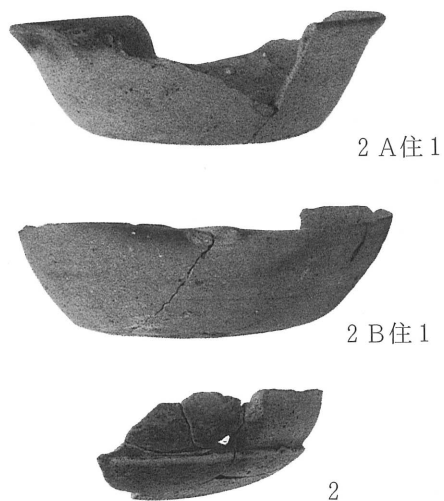
(南から)



2 A・2 B号住居跡



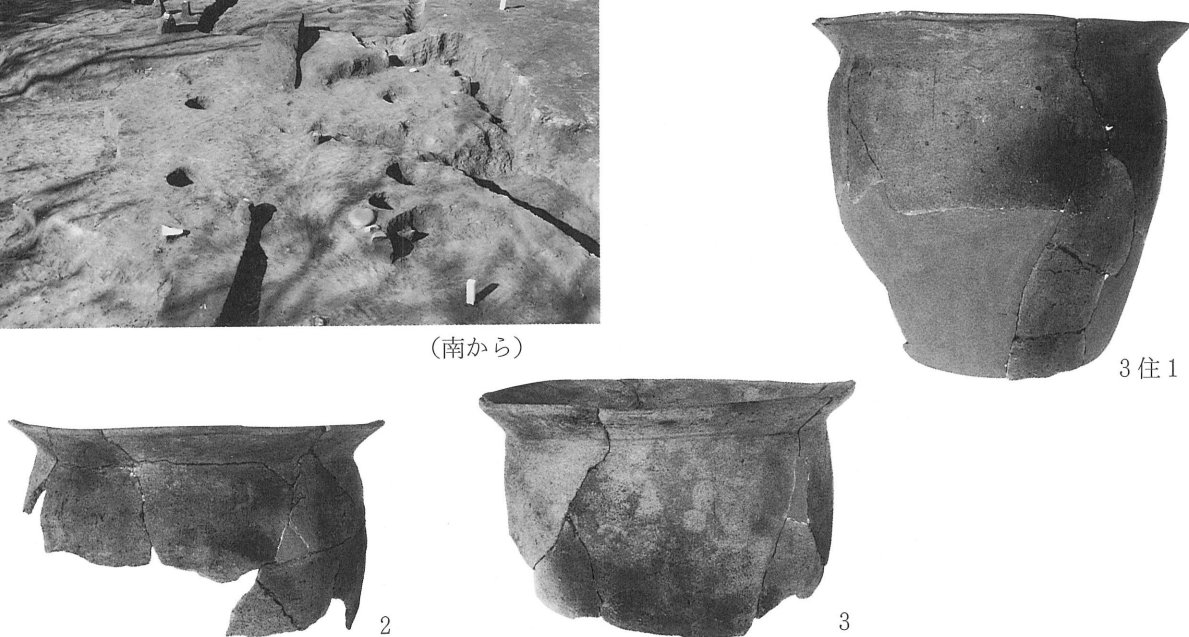
(南から)

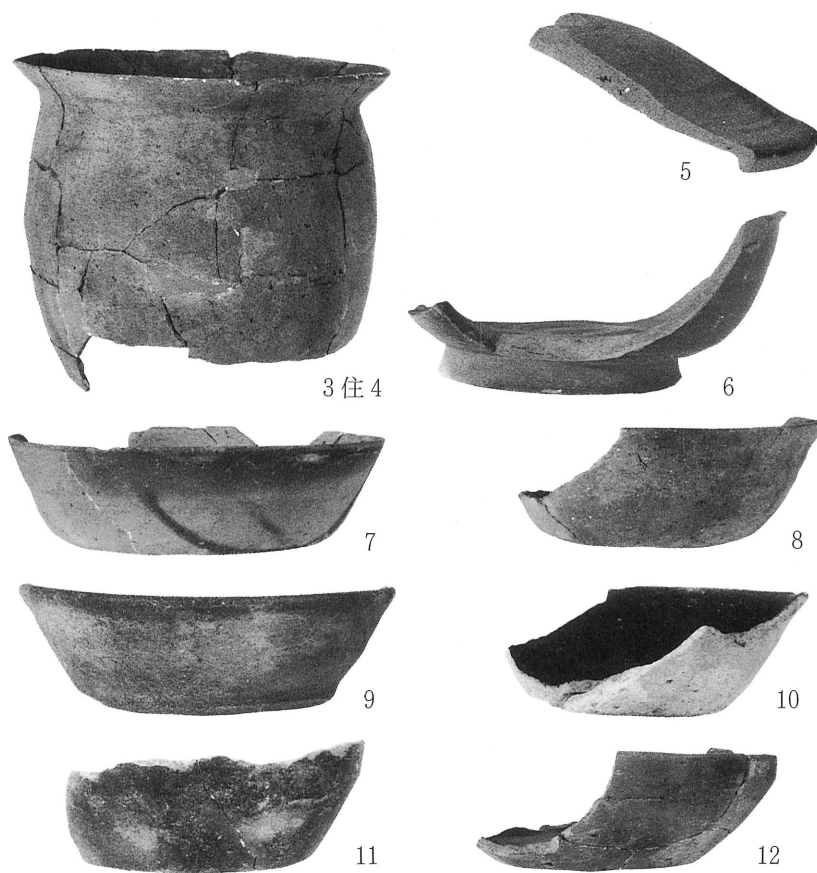


3 号住居跡



(南から)





3 住 4

5

6

7

8

9

10

11

12



3 号住遺物出土状況



13

4 号住居跡



1～5 号住居跡（東から）

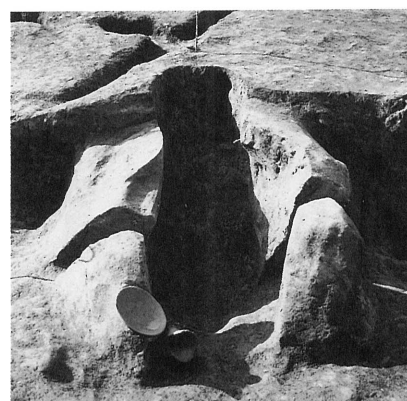


4 住 1

2



3



4 号住カマド



4 住 4



5



6



7



5 A 1



2



3

6 号住居跡



(西から)

7 号住居跡



(南から)



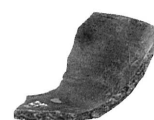
C 6 ・ D 6 区斜面遺構検出状況



7 住 1



2

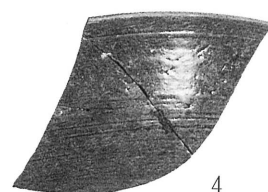


3

8 号住居跡



(南東から)



4



5



1



2



3

9 号住居跡



(北から)

D 5 ・ E 6 区遺構検出状況



(南から)

10号住居跡



(東南から)



10号住居跡埋没状況

(北から)



1



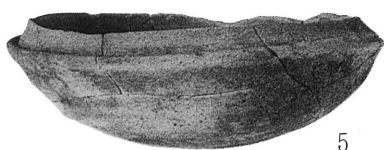
3



2



4



5



6

11号住居跡



(西から)



1



2



3



4



5



6

12号住居跡



(西から)

13号住居跡



(南西から)



13住1

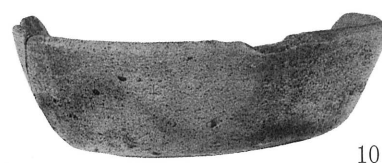
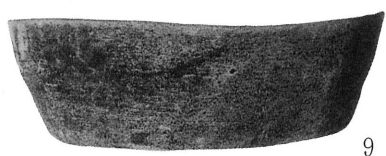
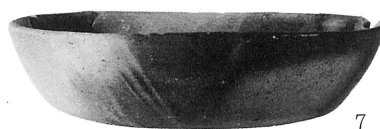
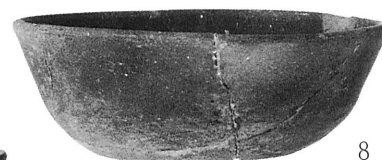
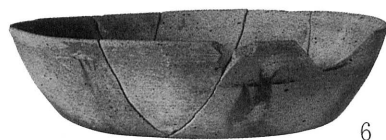
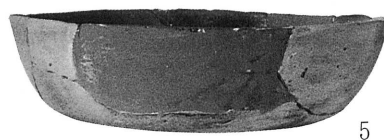
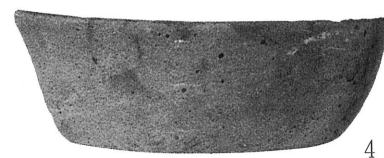
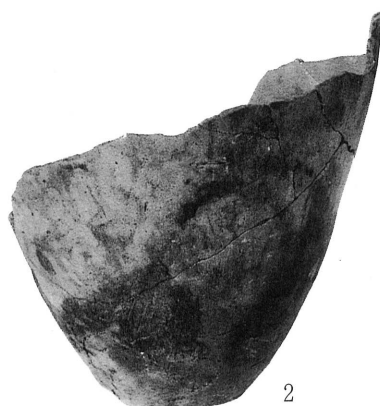
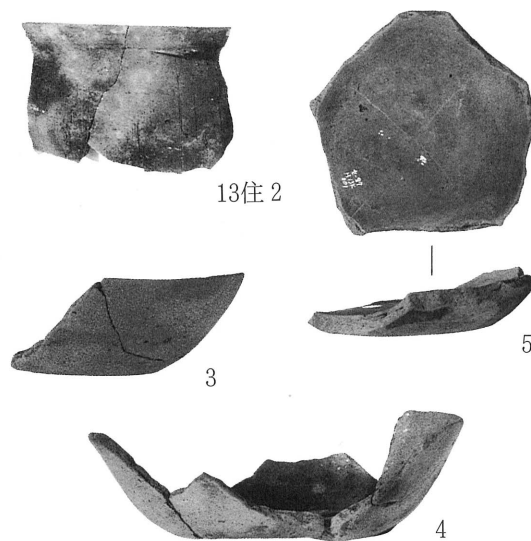
13号住居跡カマド



14号住居跡



(南から)





14号住居跡遺物出土状況（東から）

15・16号住居跡



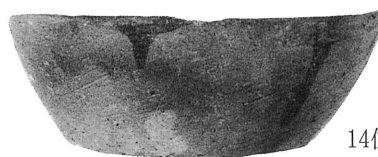
2



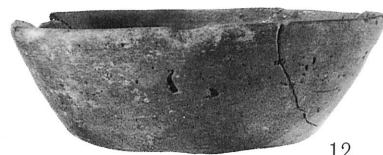
3



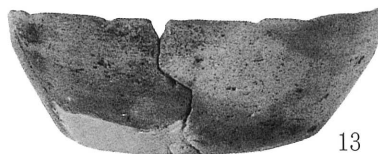
17号住居跡
（東から）



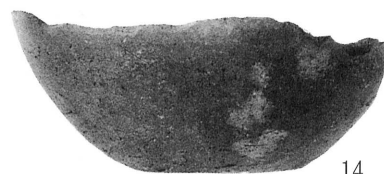
14住11



12



13



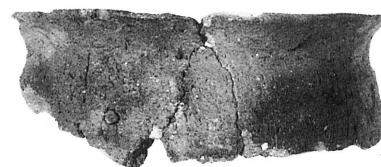
14



15住1



4

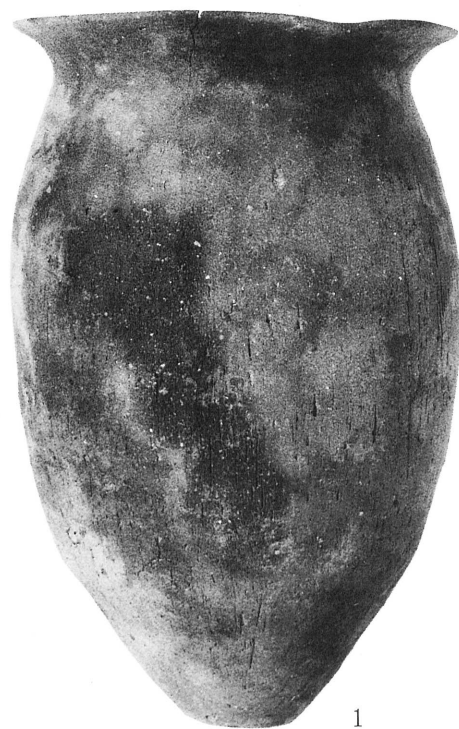


17住1

18・19号住居跡



18号住居跡カマド



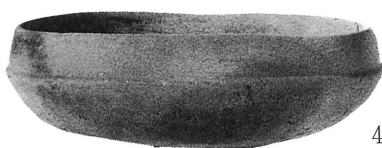
1



2



3



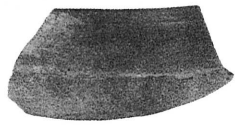
4



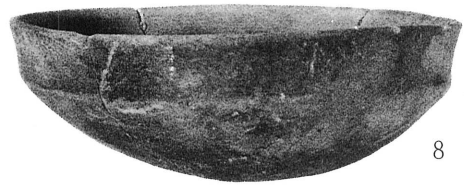
5



18住6



7



8



9



10



11



19住1

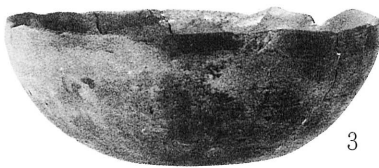
20号住居跡



(南東から)



20住1



3



4



5



6



2



20号住居跡カマド

21・22号住居跡



22号住居跡カマド

(西から)



21住 1



2



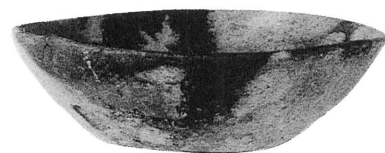
3



22住 1



2



3

23号住居跡

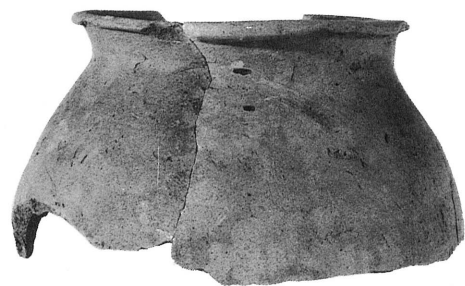


(西から)

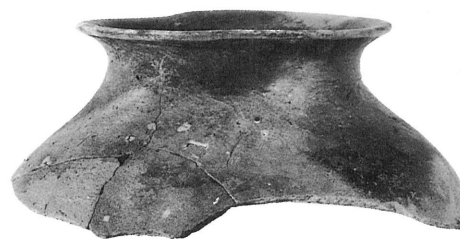
23号住居遺物出土状況



1



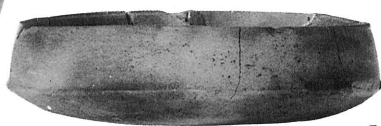
2



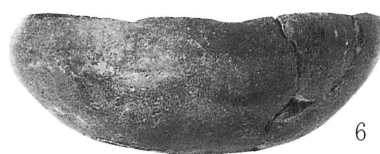
3



4



5



6



7



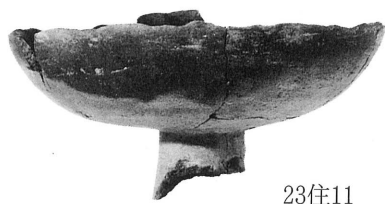
10



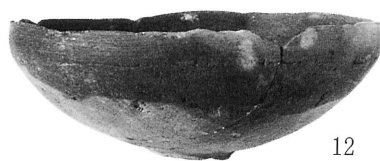
8



9



23住11



12



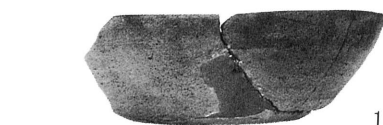
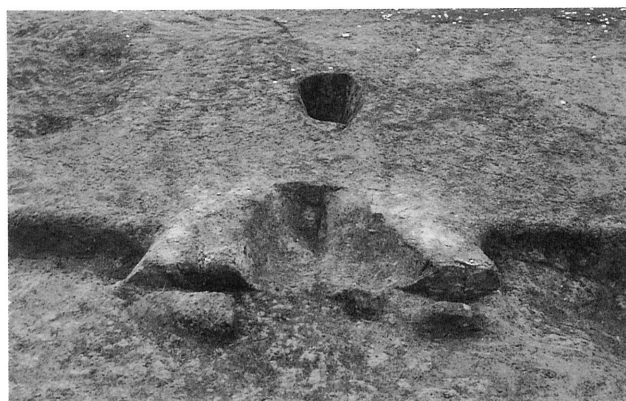
13

24号住居跡

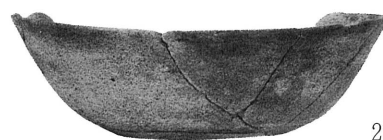


(南から)

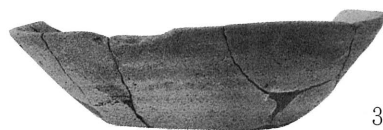
24号住居跡カマド



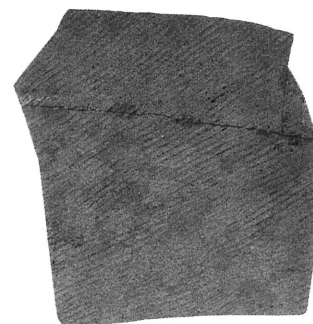
1



2



3



4

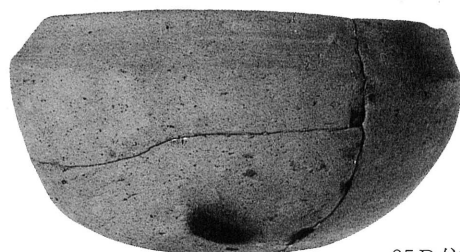
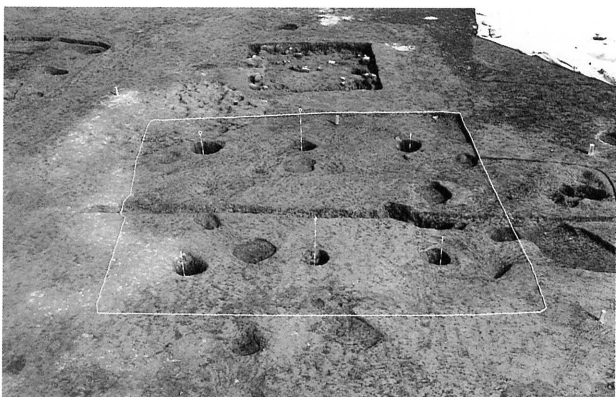
東側調査区
D 4 ・ E 4 遺構検出状況





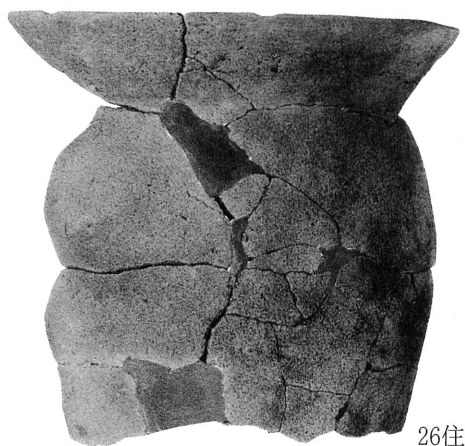
25 A 号住居跡
(東から)

25 B 号住居跡 (西から)



25 B 住 1

26号住居跡



26住 1

26号住居跡カマド (南から)





27号住居跡

28号住居跡

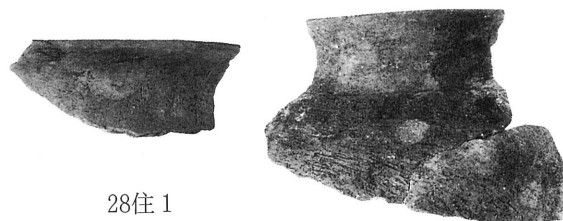


(南から)

29号住居跡



(南から)



28住 1

2



29住 1



3

4

2

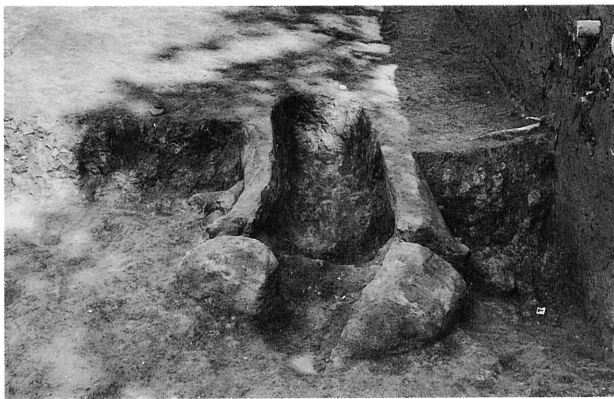


30号住居跡

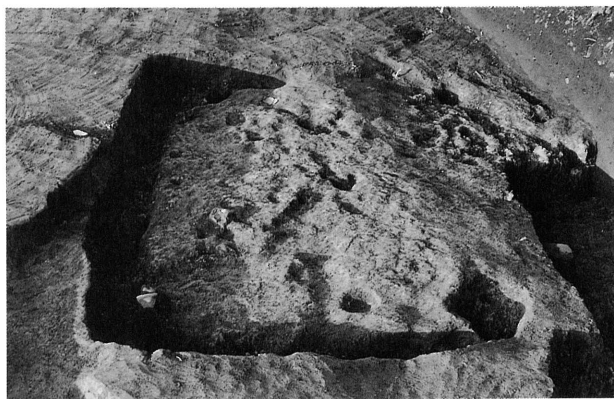


(西から)

30号住居跡カマド



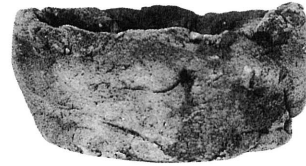
31号住居跡



(南から)



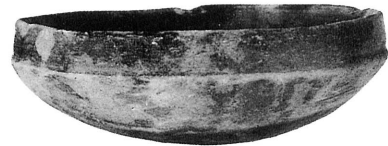
30住 1



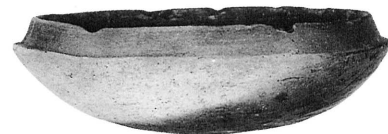
2



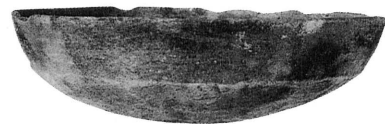
3



4



5



6



31住 1

32号住居跡



32号住居跡カマド

(南から)



33号住居跡



(南から)



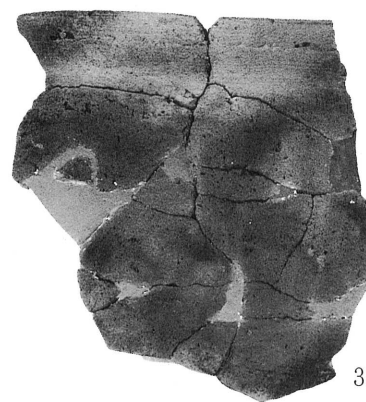
33住1



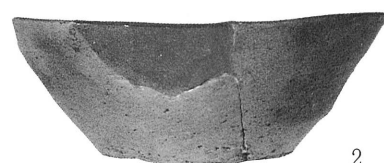
2



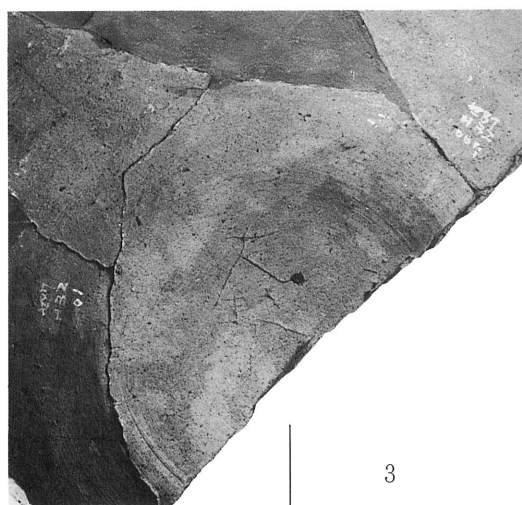
3



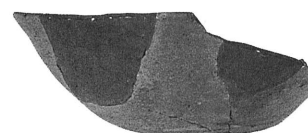
32住1



2



3

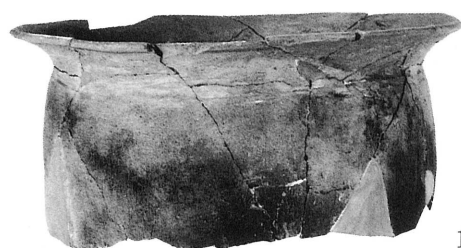


34号住居跡



(南から)

34号住居跡カマド



1



2



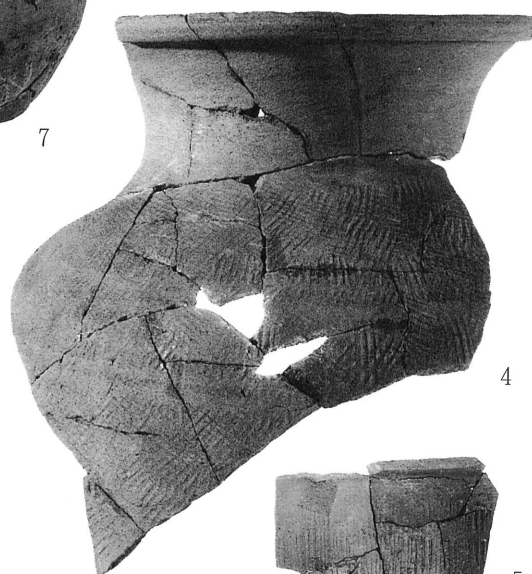
3



6



7

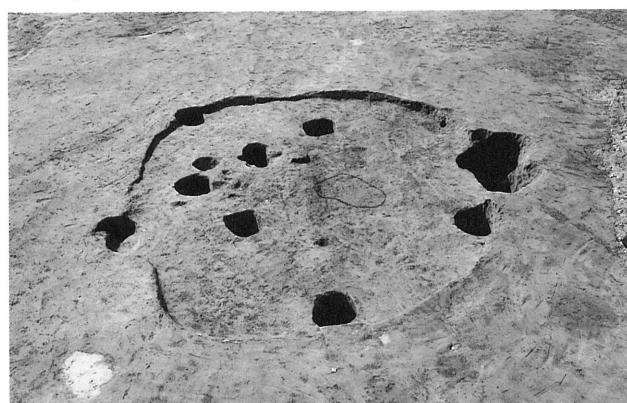


4

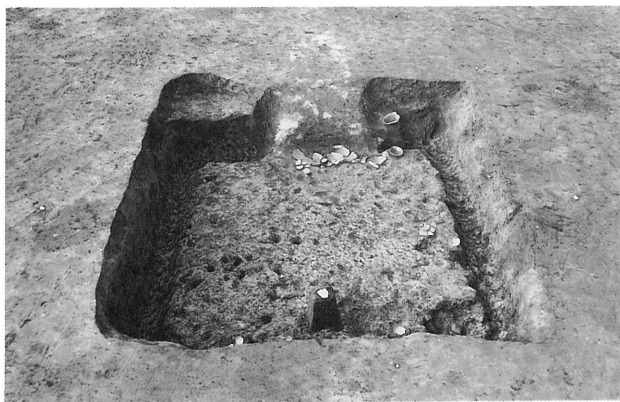


5

35号住居跡



36号住居跡



36号住居跡カマド

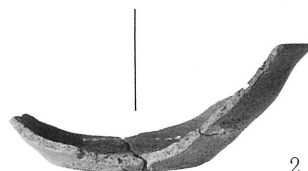
(南から)



1

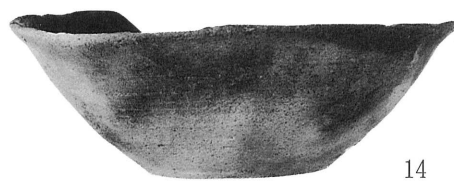
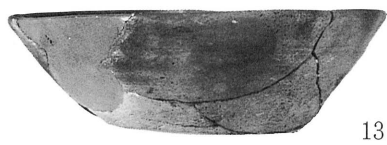
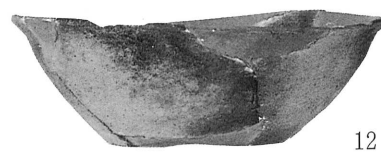
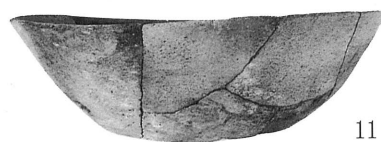
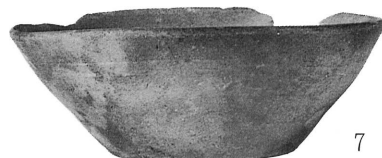
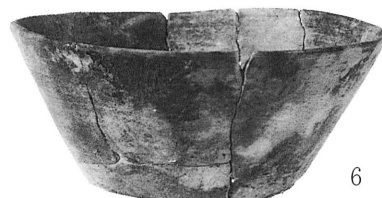
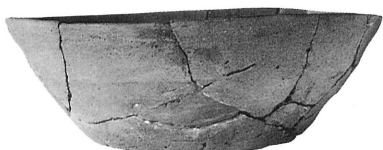
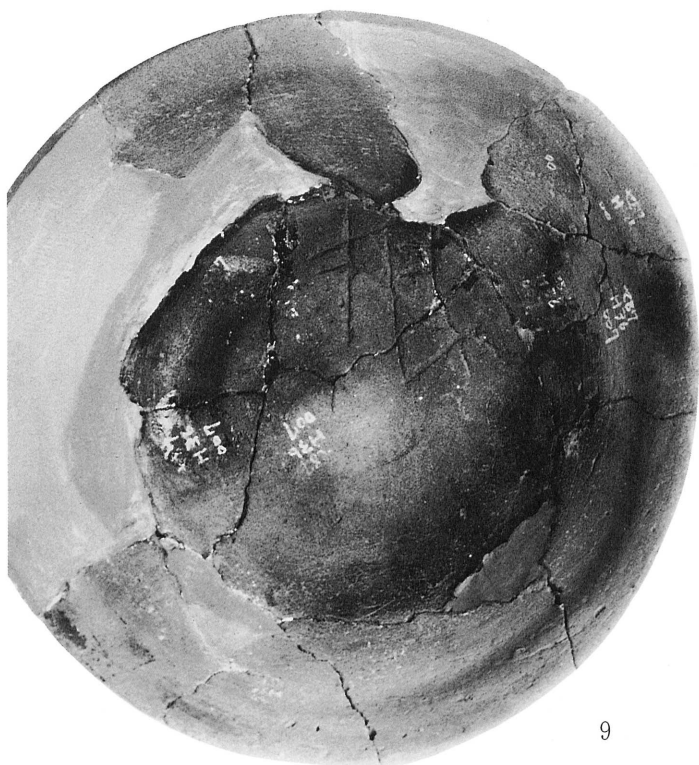
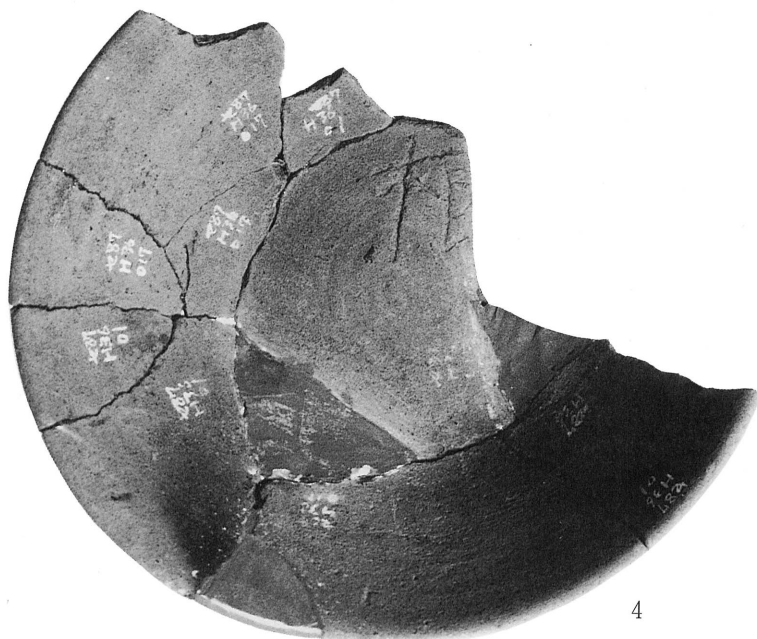


3



2

36号住居跡



37・38・39号住居跡

(南から)



37住 1



38住 1



39住



1



2

40号住居跡 (左下)



(北から)



40A住 1

41号住居跡



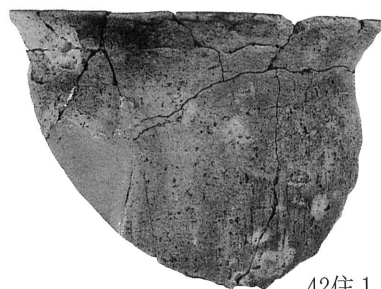
(南東から)



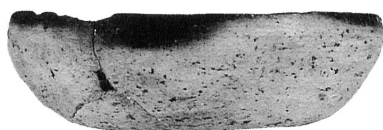
41住 1

42号住居跡

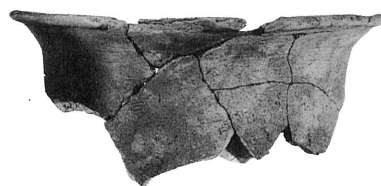
(南から)



42住 1



3



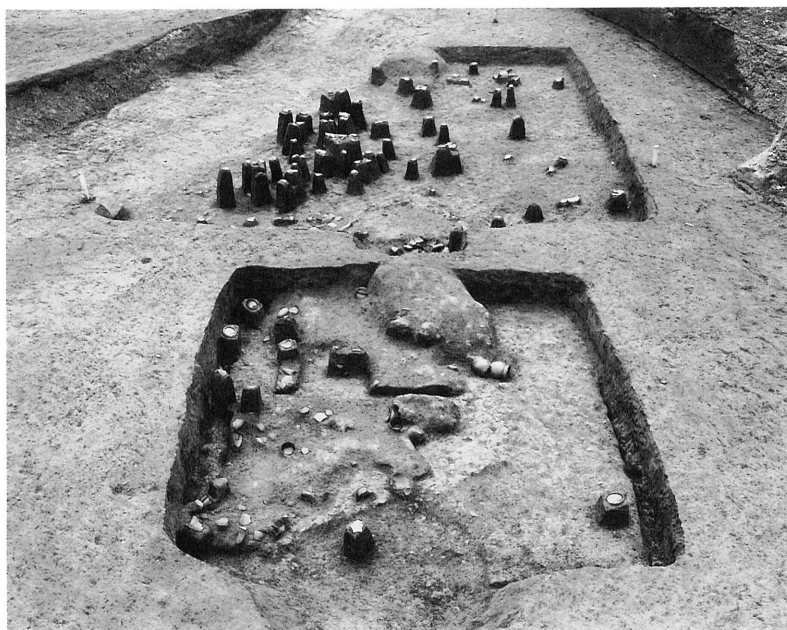
2

遺跡近景
中央41号住居跡



43・44号住居跡

(南東から)



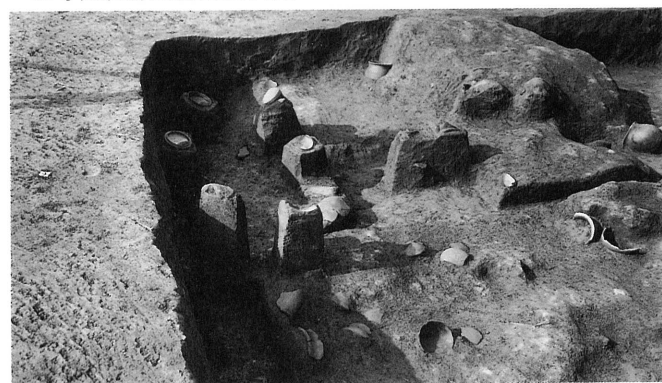
43住 1



43号住居跡遺物出土状況

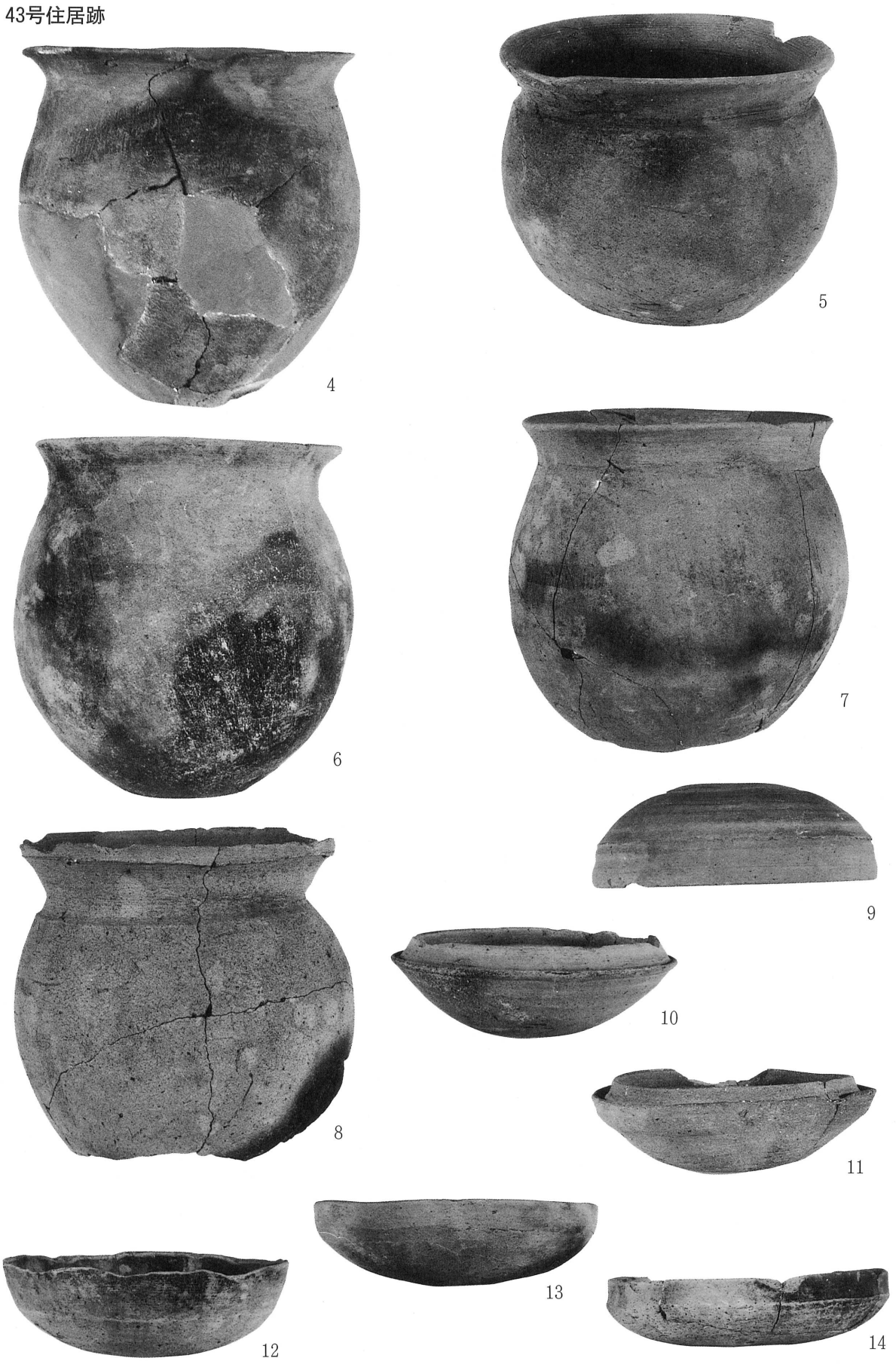


2



3

43号住居跡





43住15



16



19



17



18

44号住居跡

(南東から)



44住 1

(西南から)



2



3

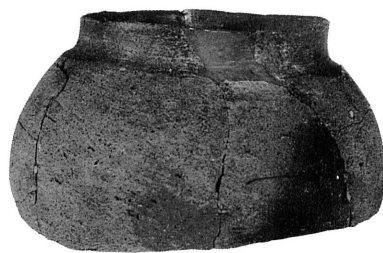


4

44号住居跡



5



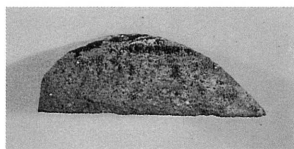
7



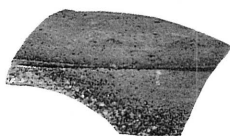
6



8



9



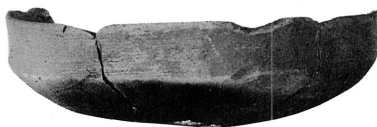
10



11



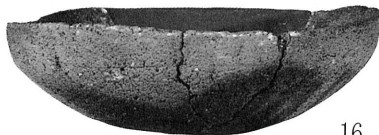
12



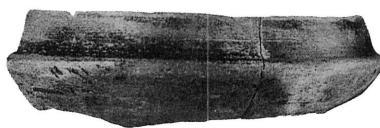
13



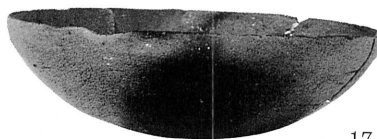
14



16



15



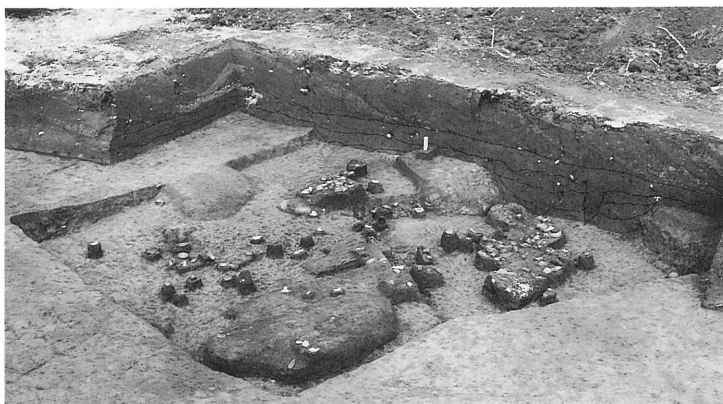
17



18

45・46号住居跡

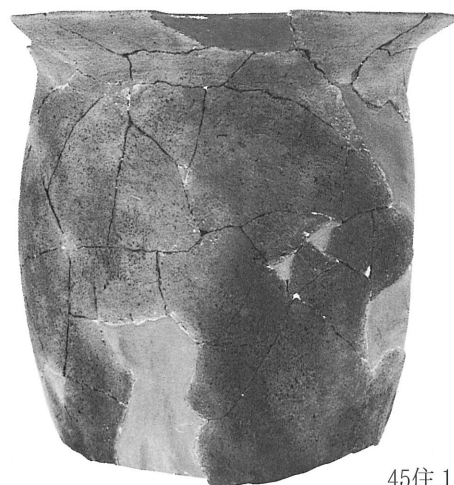
(南から)



45号住居跡
遺物出土状況



46号住居跡
遺物出土状況



45住 1

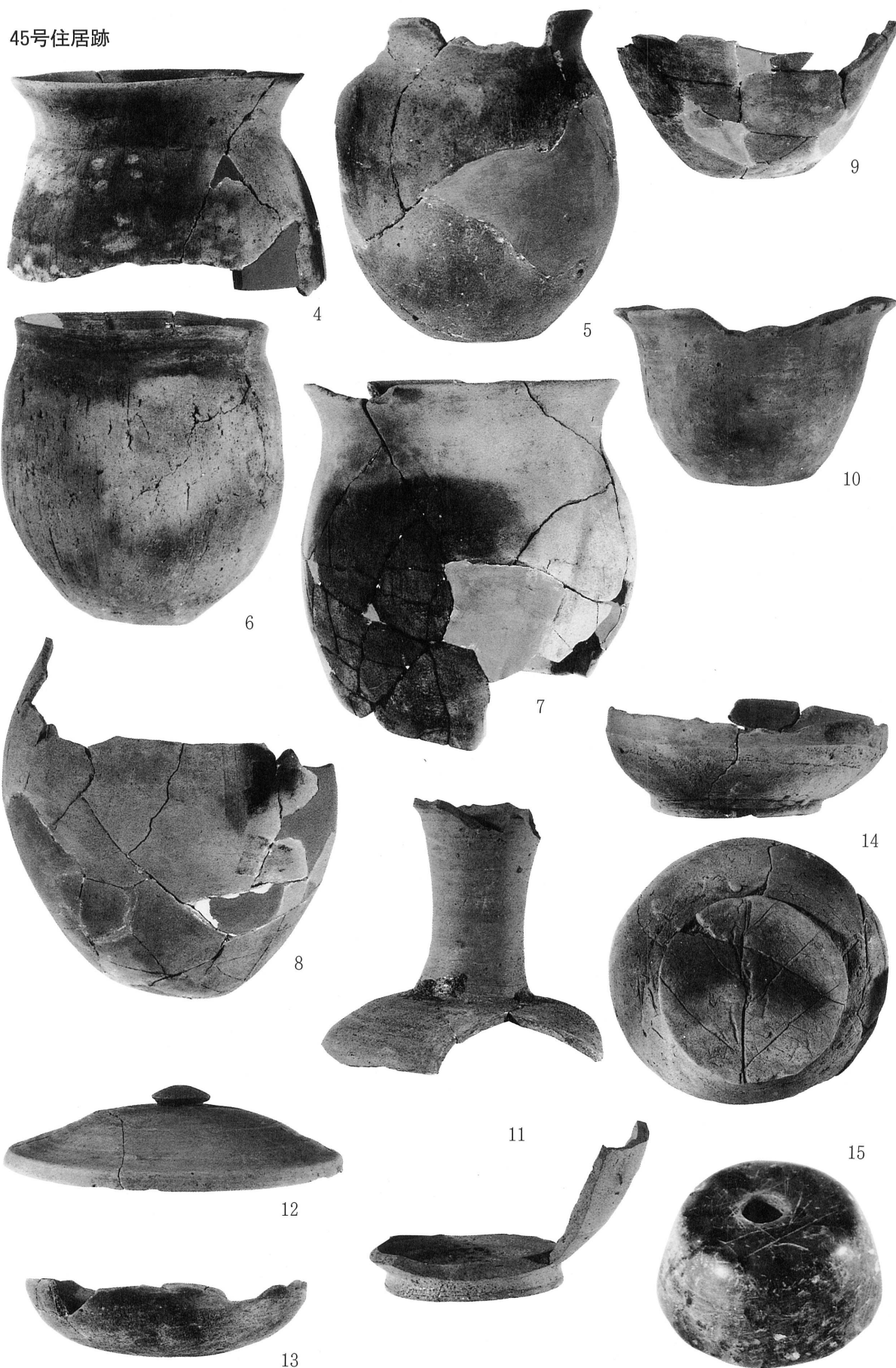


2

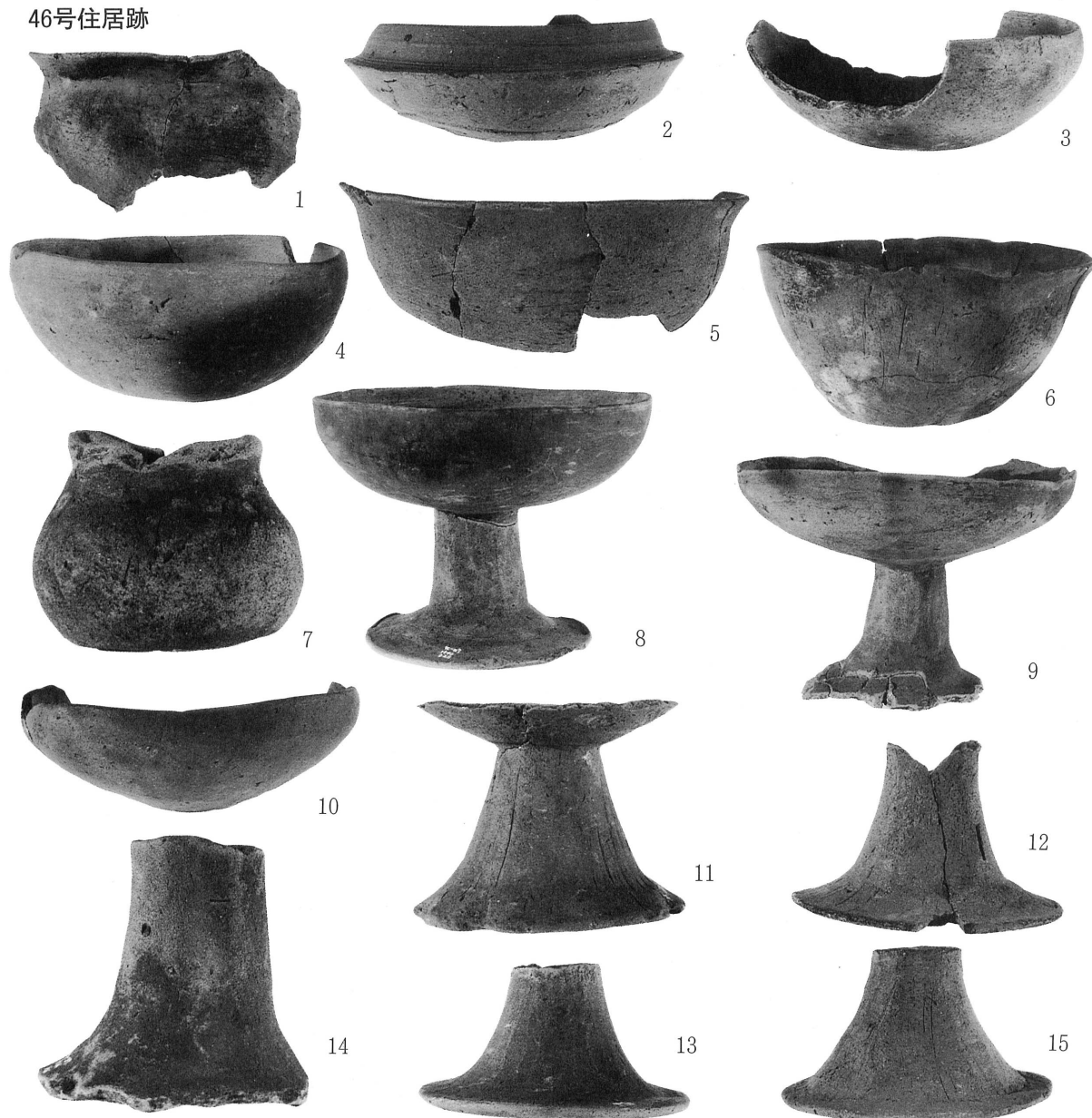


3

45号住居跡



46号住居跡



調査風景
C1区

中央
47号住居跡

47号住居跡

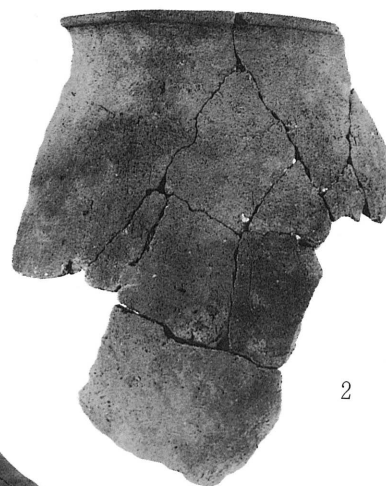


47号住居跡カマド

(南東から)



1



2



3



5



6



7



8



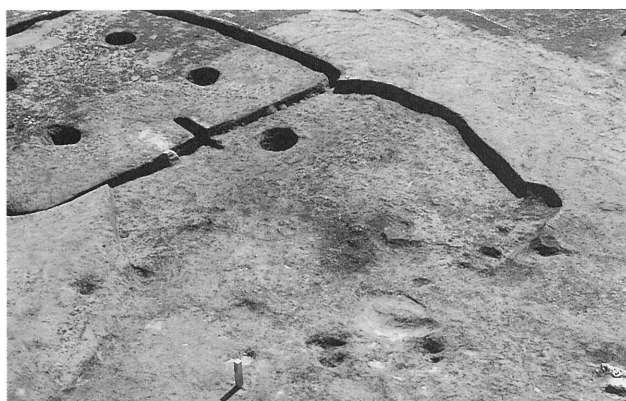
4



9



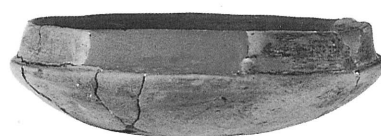
10



48号住居跡
(北から)



49号住居跡 (南東から)



49住1



50住1



50号住居跡 (南から)

北側調査区遺構検出状況



中央手前
42号住居跡

(北から)

51号住居跡



遺物出土状況

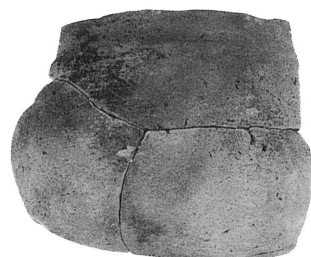
(南東から)



カマド



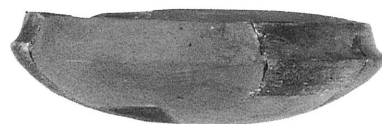
1



2



3



4



5



6



7



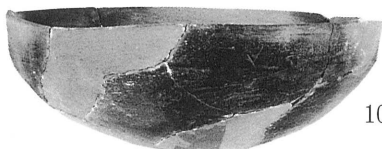
8



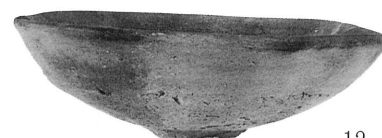
9



11



10



12



52号住居跡
(東から)

53・54・55号住居跡



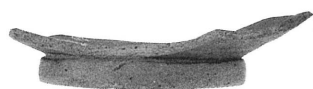
(東から)



53住1



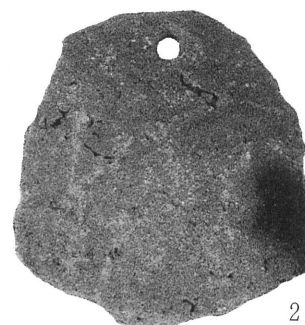
2



54住1



55住1



2



東側調査区

(北から)

56号住居跡

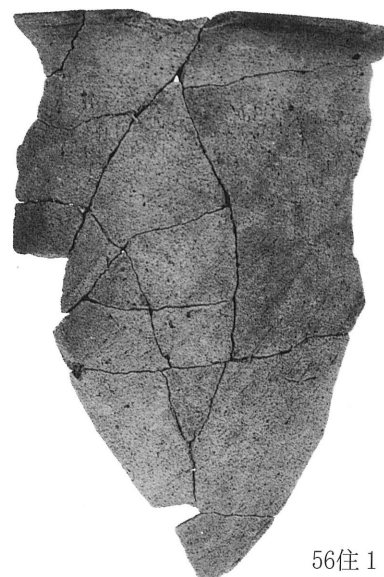


(南東から)

57号住居跡



(南東から)



56住 1



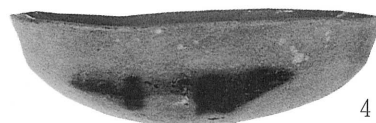
57住 1



2



3



4



調査風景

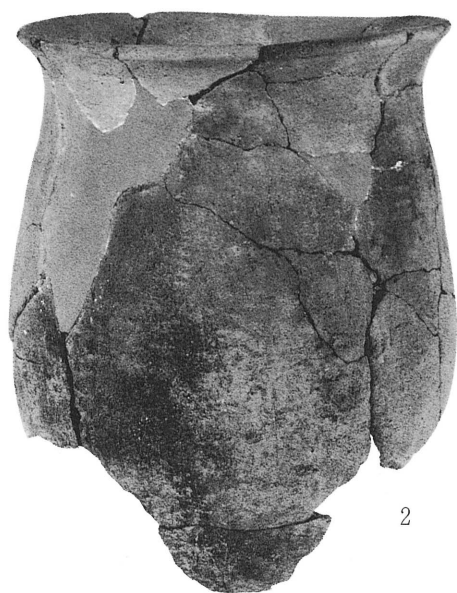
58号住居跡



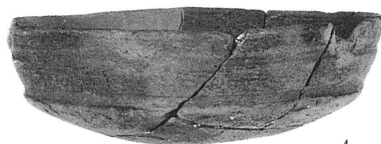
(南東から)



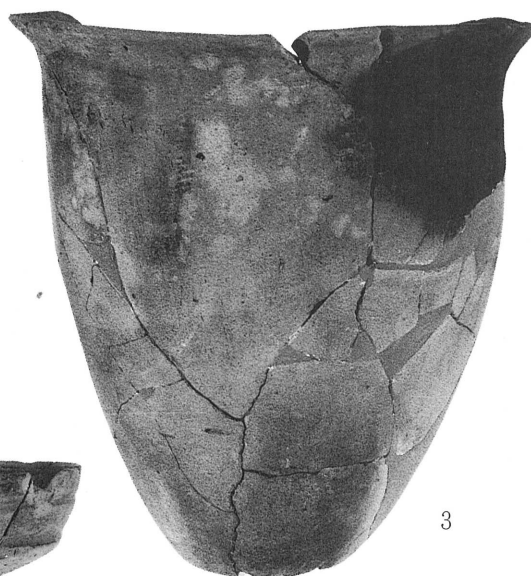
58住 1



2



4



3

59号住居跡



(南東から)



59住 1



2

北側調査区



中央
60号住居跡

(南から)

60号住居跡



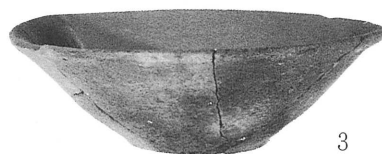
(南東から)



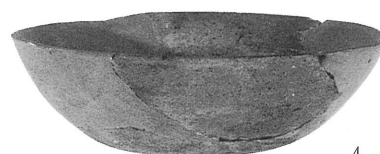
60住 1



2



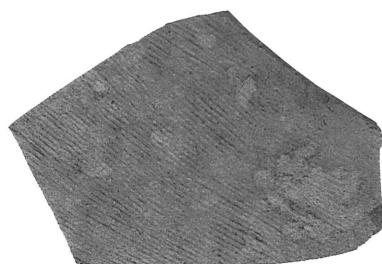
3



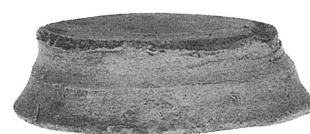
4



61住 1



2

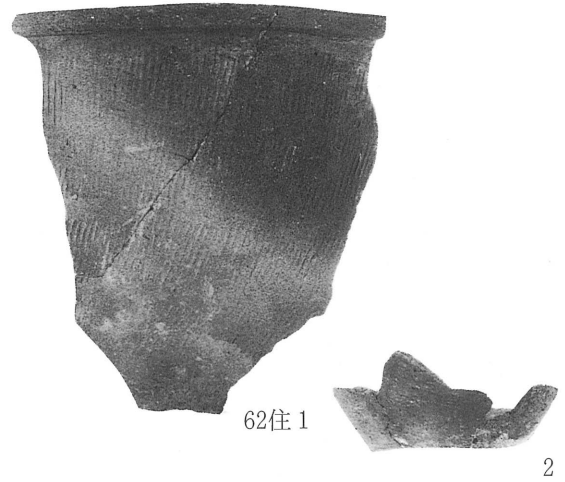


5

62号住居跡



(南から)



62住 1

2

63号住居跡

(南東から)



63住 1



2



3



西側調査区

中央
64号住居跡



64住 1



2



3



4



5

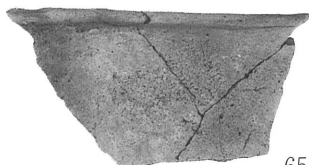
65号住居跡



(東南から)



3



65住 1



2



4



66号住居跡

(東南から)

67・68号住居跡

(東から)



68住 1



2

69号住居跡

(南から)



70号住居跡

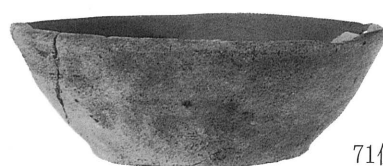
(南東から)



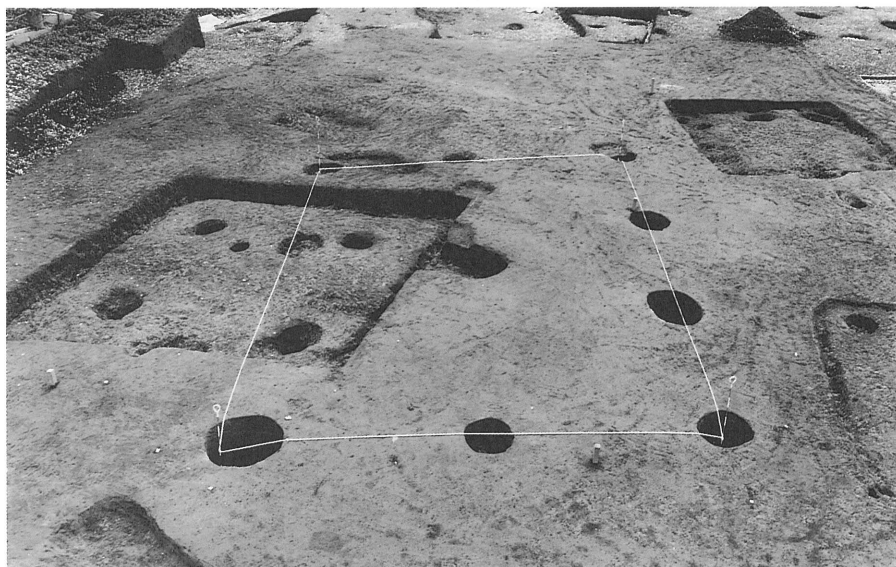
70住 1

71号住居跡

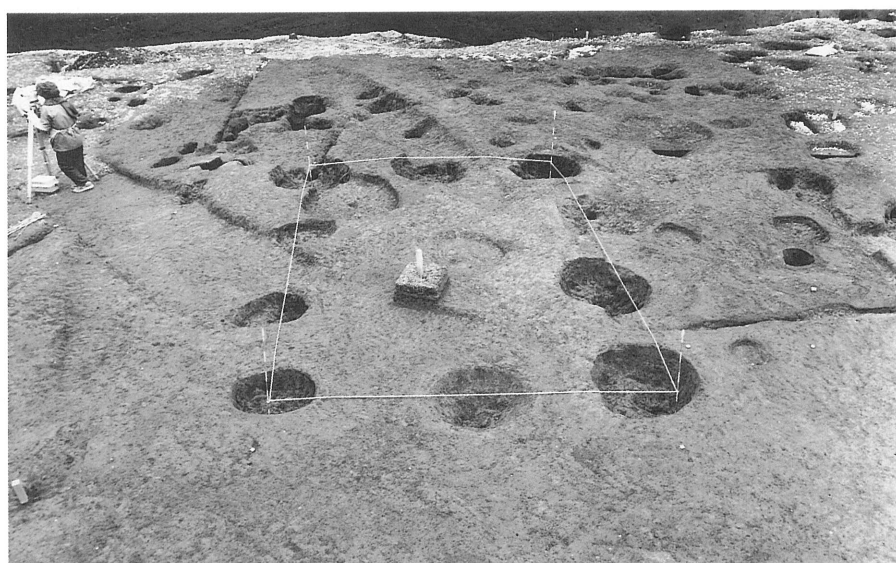
(東から)



71住 1



1号掘立柱遺構
(建物跡)

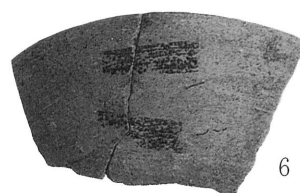
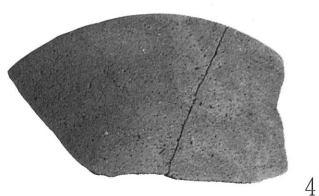
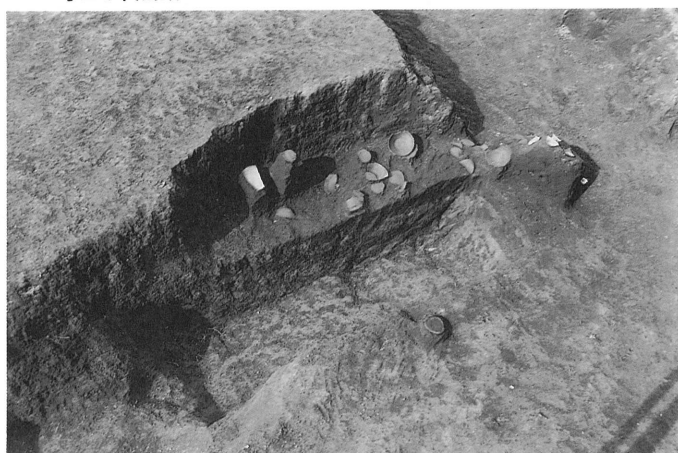


2号掘立柱遺構
(建物跡)

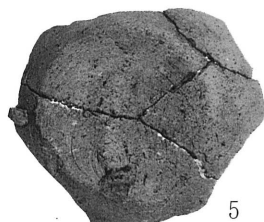
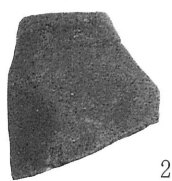
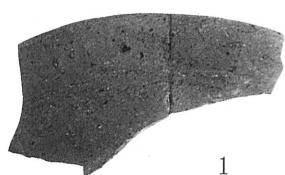


3号掘立柱遺構
(柱列遺構)

1号土師窯跡



2号土師窯跡



78号遺構



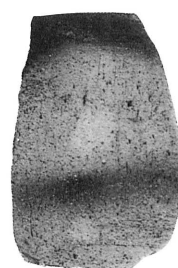
1



2



3



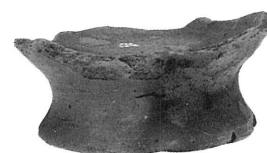
4



5



6



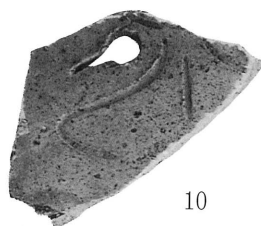
7



8



9



10



11



12

79号遺構



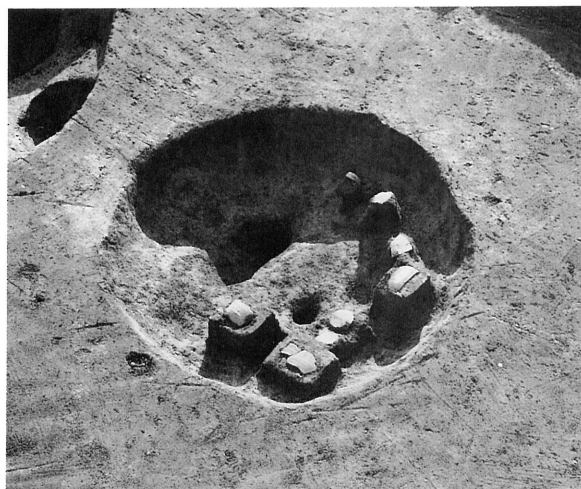
81号遺構



80号遺構



83号遺構



82号遺構



財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第41集

こおりもとおおみや いせき
市原市郡本大宮遺跡

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月26日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

Tel 0436 (41) 7300

東横不動産株式会社

印刷 三陽工業株式会社